

十餘年の長きに及び其學大に成り其名益天下に轟き諸侯禮を厚うして之を聘せんとする者踵を接するに及べりされども剛立は曾て應せず吾敢て我が君を棄てんと心の心にあらず今他に仕ふれば是れ舊君を棄つるなりとて祿の厚薄を問はず固く辭して動かざりき寛政九年幕府大に曆政を修むるに及び之を招かんず剛立已に高く且つ出仕を肯ぜざるを以て高弟高橋左衛門五郎兵衛を召す二人江戸に至り曆政を改修するに及び其の精確詳密從來の天官と全く日を同うして語るべからず幕府之に驚き剛立が學の大なるを知り物を賜りて之を賞す剛立又醫學に深く當時あらゆる醫書に於て包羅せざるものなかりき常に語りて曰く之を人に試みて其功を得れども其理を得ざるは吾の未だ明かならざるなり又其の理を得れども其功を得ざるは是れ眞に理を得たるにあらず亦吾の未だ明かならざるなり斯事あれば必ず斯理あり吾將に深く語り明かに其理を究めんとすされども星曆を修めんとするの念更に急なりしかば遂に専ら醫學のみを攻むるに及ばず晩年星學の略成るに及び大に論著する所あらんとす病に罹り其志を果さず寛政十一年年六十六にして終に没す清船曾て西洋曆書二種を載せて來る其說珍奇學者傳へて寶とす之を剛立が發明する所に比するに符節を合するか如し(近世書誌)

**アサダ ジヤウザム** 淺田上山は江戸の書家なり名は寛字は子裕一の號は大陸山人六兵衛と稱す書を細井廣澤に學んで之を能くす法帖、墨妙問記、京極帖、醒眠帖等あり(墨定便覽、續諸家人物誌)

**アサダ タケシ** 麻田狹は通稱公輔初め周布政之助と稱す其先は石見の人後長門に居る公輔生れて父兄尋て没す、唯母に頼り幼より史乘を好みや、群兒と異なり長するに及て自ら計るに身を立て親を顯はすは書をよむに如ずと選はれて國學都講となる二十六にして檢使となり超遷して政務使とな

アサダ ジヤウザム

アサダノ

り國事に參與す周布の名や、著はる嘉永癸丑墨人來船せしより天下多事朝威沈淪して物情騷然たり公輔慨然嘆して曰く朝權の移るや久し而して征夷府もまた柄を失ひ外夷の毒日一日より甚し堂々たる神州安くんぞ胡虜腥膻の俗たらざるを保せむや然れども大義明かならざれば朝權復せず外夷攘はざれば國難立たず吾儕皇土に生れ暖飽爲すことなくむば罪これより大なるはなしと之を以て藩疾に説く其後非伊安藤二氏の變あり藩疾また奮然當世に志あり公輔時に江戸にあり事を論じて合はず事を用ふる者中てられて歸國す幾ばくなくして疾また東す公輔退及して再び前議を執て反覆辯論す疾其説を可とし機務に參せしむ疾世子と力を天朝幕府の間に竭し公輔は閑老及び土越の間に出入し規畫甚だ力む是時高杉東行久坂義助等幕議の因循決せざるを憤り密かに横濱の外館に火せむと謀る其事や、泄る土州疾これを長の世子に報ず世子袂を攘て起ち單騎これを追ふ公輔時に會飲す世子出ると聞て亦馬に策つて至り東行等を見て罵て曰休めよ爲すこと勿れ容堂公の如きもまた摸稜なるかなと土人大に怒る公輔曰疾朝廷の望を負ひ新に幕議に參す而して曠日因循今日の舉の如きもたむに激成する所なりこれ摸稜に非ずして何ぞや土人大呼して曰可否もとより論せず臣にして君の辱めらるゝに遇ふたゞ死あるのみと事急なり東行等回護して強て馬にのす公輔は罵てやまざ東行刀を揮て斫らむとす馬逸して中らず遂に邸にかへる土人來て偶刺せむと請ふ世子慰撫してこれを遣り親から老疾に詣て其罪を謝す疾曰く以て念となす勿れ益二藩の好みを成さむと又使を遣り公輔の嚴譴なからむことを請ふ故を以て公輔死を免れ職を視はれ家を子に傳ふ既にして公別にこれを祿し姓名を改めて京畿の間に居らしむ麻田の名隠然として起る爾後天下の事日に急なり馬關の役あり尋てまた長藩禁門の成を解分るゝに至り七卿長州に遷る重臣故老等各々危疑を懷く

公輔天を仰て嘆し時勢の漸く去ることを知り絶食數日遂に意見を上疏して自刃す時に年四十三といふ(麻田散傳)

**アサダ ソウハク** 淺田宗伯は漢家の名醫なり信州筑摩郡栗村の人因て栗園と號す初名は直民後惟常と改む其先は源頼光朝臣に出づ筑摩郡淺田の莊に住するを以て淺田と名乘れり祖父、父共に醫術に通じ文筆亦妙なり宗伯幼時は到て壯健なりしも極めて魯鈍にして四書考經左傳文選を習ふに一向に通曉する所なく師は大に之を卑みたり年十五にして徂徠集を讀みて大に困苦す戰國策を讀むに至りても史記列傳を參照し評註を見てやう／＼會得せり然も志氣凡童に異なる所あり暇には神官野乘を讀んで古の豪傑を希へり而して祖母は常に傍にあつて其立志を責めたりと云ふ後高遠藩に遊び醫術を修め亦京都に入り師に就て専ら傷寒論を研究し刻苦研磨の末江戸に出で、茲に初めて開業せしに三年一人の宗伯の名を知る者なし時に人の紹介に仍て幕府の醫官本康宗圓に謁し是れより其紹介によつて他の諸名家に附し漸く業行はるゝに到れり斯りし間に在郷の父危篤の報あり到れば已に後、一日宗伯痛恨已む能はざりしが大に名を立て家風を興して之に酬ひんと親戚を人に托して單身江戸に還り晝夜勉勵せり當時宗伯惟へらく今や學と術とは二途に分れ何れも他に疎にして以て病を托するに足らずと即ち脈法私言、傷寒辨要、雜病辨要等を著しし病理治法合一の論をなし門人大に増加せり亦惟へらく醫道を壞る者は洋醫に若くはなしと原醫警醫記事等を著して西洋説を辨駁せり是より十餘年姓名次第に盛に諸侯より招聘屢なるも辭して就かず安政五年將軍昭徳公に謁して徴士となり後佛國公使の病を治して幕府より白銀の賜あり佛帝より時計羶羯等を贈られたり慶應二年昭徳公の病を診して脚氣衝心とし江戸に還つて天璋院初め大奥の侍醫となり三十人俸米二百俵を受け法眼に叙せられたり幕府傾頽に方り和宮及天璋院の命に依り熾仁親王に謁し江戸鎮撫を請ひ周旋甚だ務めたり宗

アサダ ソウハク

アサダノ

伯身醫を業とするも有爲の氣多く幕府の末路には川路左衛門、水野筑後、小栗上野介、黒川近江、井上信濃等と交を結び執政と時事を談じて口角沫を飛ばす事も屢々なりし其他藤森天山、林鶴梁、佐田介石、羽倉外記等と交り篤し明治四年執政の職を辭し牛込に隱居せしに來て治を請ふ者多く清國公使朝鮮公使等常に來て診を求む明治十二年皇太子誕生の節宗伯は尙藥として常に宮中に伺候し年俸千圓絹四匹を賜ひ從六位に叙せられ是れより常に宮中に伺候せり十六年滋宮増宮兩親王醫藥の効なく薨去す宗伯自ら責て骸骨を乞ひしに許されず即ち其職にある十年明治二十一年五月東宮侍醫の職を辭し終身年金千圓を賜ひ且從五位に昇叙せられたり宗伯老て愈々健爾來ます／＼漢醫家の泰斗として老後の勉強怠りなし明治二十七年四月十六日終に逝けり年八十一宗伯常に論語を以て道德の標準とし傷寒論を以て醫術の玉條金科とし常に同人に此兩者を讀ましめたり又詩文を能くし漢文殊に勁健なり著はす所上に擧げたる外我國の醫傳缺けたるを補はんが爲めに著はせる名醫傳、先哲醫話、杏林風人等あり常に髮を結び駕籠に乗て往來す

**アサダ ヤウシユム** 麻田陽春は百濟國朝鮮王准也の後なり神龜中正八位上に叙せられ姓麻田連を賜ふ寶字元年藥方と爲る天平十一年正六位上に叙し石見守に任し外從五位下に進む陽春は萬葉作者の一に列し和歌を善くするを以て世に知らる(萬葉集作者履歷)

**アサダノ** 阿佐殿は後龜山帝の中宮なり誰の女なるを詳にせず宮に入り女御と爲る阿佐殿と稱す建徳二年九月紅葉一枝を嘉喜門院に獻す門院和歌を作り之を謝して曰く「君がはや秋のみやみに移るべきほどを紅葉の色にこそ知れ」後龜山帝代りて之に和して曰く「散らでなほ千年の秋も色そへよはこやの山のみねの紅葉」と後龜山帝位に即き中宮と爲す(大日本史)

アサノイチ ムラク

アサノイチ 朝野鹿取は和の人、正六位上忍海連

兄を平三郎と曰ふ漁を以て業と爲す朝都目旨し兄と居を同す母年七十を過ぎ既に老衰す朝都母に事へ毎日蚤に起き必ず安否を問ひ盥嗽漿を進め且其嫂に謀り珍を調し以て母に薦む已に撤すれば之を洗淨し敢て嫂を煩はさず母性酒を嗜む朝都日に之を買ひ以て朝夕に供し或は母を扶けて沐浴せしめ其寢に就くに當ては先つ席を奉じ暑には涼室に席し寒には温衣を着せしめ常に地神經を誦し以て生計を營み出づれば必ず告げ事畢れば即ち歸り未だ嘗て外に一宿せず毎に人に謂て曰く兒幼より眼を患ひ醫療百効なく遂に明を失ふ父母の幼勞常人に百倍す其恩登に忘る可けむやと兄の外に在るや必ず母の側に侍し嫂と奉養怠らず終始一日の如し領主之を養し爲めに米を賜ふ實に元文五年二月なり(管人傳)

アサノ ウツカヒ 朝野魚養は醫道に通ず本氏は忍海連

連延長七年播磨大津に任せられ尋て典藥頭を兼ぬ十年請ひて姓を朝野宿禰と改む宿禰は乃ち其の祖先の稱、朝野は其の居る所の地なり(皇國名醫傳)

アサノ カトリ 朝野鹿取は和の人、正六位上忍海連

鷹取の子叔父朝野宿禰道長に子とし養る延曆中請て連の姓を復す敢て鷹取の姓を遺置して宿禰と爲す鹿取少にして大學に遊び頗る漢史に涉り兼て漢音に通ず始め音生に試みられ相摸博士に補せらる後登科して文章生と爲る尋て遣唐准録事と爲り式部少録左大史左近衛少將を歴て弘仁中藏人に補せらる藩邸の侍講を以て從五位下に叙せられ左衛門佐と爲り尋て喪に遭ひて官を解く服未だ關らざるに起て近江介と爲る數年にして右近衛少將に遷り内藏頭に轉じ正五位下に進み兵部中務民部大輔を歴藏入頭に補せられ左中辨に遷る天長中從四位上を授けられ太宰大貳に除せらる上表して之を辭す許さず赴任

アサノ ナガアキラ

するに及んで帝紫宸殿に御して宴饌し文人を召して詩を賦し雅樂寮に樂を奏せしめ御製及び御服を賜はる十年參議に任せらる承和中左大辨を兼ね藤原愛發に代りて民部卿と爲る上表して之を辭す許さず數年にして越中守を兼ね從三位に叙せられ并びに其の男女十九人に朝臣の姓を賜ふ十年薨す年七十鹿取才藝多く性亦謹慎事に臨みて明なり吏幹を以て稱せらる(大日本史)

アサノ セイコ 淺野西湖は江戸の畫人なり名は晁敬

西湖は其の號又桂齋白毫の號あり(畫定體覽)

アサノ セイサ 淺野井左は大坂の俳人なり井左は其の

號一に世外庵又探薇堂の號あり弘化中の人其俳歌に曰く「菜

鳥や花さくまての幾手入れ(俳諧海内人名錄)

アサノ タカカツ 淺野高勝は初めの名は道世後ち高勝

に改たむ通稱は助左衛門又孫左衛門始め明智光秀に仕ふ光秀の織田信長を弑するや事倉卒に起る高勝適て福地山城に留守して之を知らず後ち高勝竊に瀧川一益の臣堀田武助に投ず武助は其の妹夫なり豊臣秀吉高勝の賊謀に參らざるを以て故さらけ赦して其の罪を問はず時に大津の城主淺野長政高勝の智謀あるを聞て之を招き其の子長滿丸を屬して曰く願くば卿其れ隊兒を輔け以て吾か業を興せと是に於て高勝長滿丸に近侍し誠を竭くして之に事ふ長滿丸も亦阿爺を以て呼ぶ長滿丸は幸長の小字なり時に甫めて八歳天正十八年秀吉東北條氏政を伐つ幸長父長政と俱に其軍に従ふ高勝も亦從ふ經る所の城邑皆下る獨り岩槻城固く守て下らざ長政攻めて之を抜き幸長を遣して忍城を攻めしむ幸長奮戰して遂に之を陥る此役や幸長高勝が軍功あるを以て姓を賜ひて之を賞す、朝鮮の役に幸長加藤清正等と蔚山に陣す明の大軍來り撃つ我が軍敗れて機陽に退く清正幸長に謂て曰く兵を勸して戦ひ且つ退かんと幸長曰く請ふ之を老臣高勝に謀らんと乃ち之を召す高勝至る清正に謂て曰く君侯往年朝鮮王子を虜にす英武の絶倫なるは鮮

アサノボウ ムラク

人の識る所なり獨り寡君子は年少にして未だ嘗て一の戰勳なし今日明韓の大軍と鋒を交ゆ是れ信に死を致して君父に報するの秋なり然れども君侯已に寡世子を携へて東に歸る臣又た之を奈何んともす可らず抑、鮮人已に我主家の定章を識る臣願くば此を得て陽に寡世子と稱して死せん然らざれば何の面目ありてか寡君に見えんと清正歎じて曰く吾甚だ卿に愧づと高勝曰く將帥の勇怯は死と不死とに在らず顧ふに事宜如何に在るのみ隊伍を整へ精銳を蓄へ以て彼此の形勢を察するは是れ君侯今日の任なり死は其の所に非ずと清正益々歎服す幸長の甲斐に封せらる、や高勝が累年の勳を賞して秩八千石を賜ひ又高勝及淺野右近等を召して感狀各一通を賜ふ高勝之を受讀して涕泣已まず幸長憫つて曰く感狀猶ほ汝の意に滿たざるや高勝曰く大臣は國家と休戚を同する片言一行の美必らず喋々嘆賞せず小臣は則ち否らず幸ね恩を貪ほり賞を思ふ故に微勳報せず勞賞せざれば則ち怨憤四出す而して人君土地財賄の給し難きあり是に於て平感狀あり一言の褒以て千石の祿に代ふ是れ固と人主小臣の心を慰むるの術に出で、大臣を待つ所以の道に非ざるなり今我公之を高勝に施す是れ其の流涕大息せざる能はざる所以なりと幸長曰く我過てり々々、關原の役に諸將岐阜城を攻む幸長亦將に岐阜に赴て諸軍之之を合擊せんとす高勝曰く瑞龍寺城は近地に在て且つ他將未だ圍まざる恐らくは彼れ備なからん其の虛に乗じて之を襲はば殲す可し其の衆と功を立つるは獨り功を奏するに孰れと幸長曰く善しと高勝自ら鼓を鳴らして進み暫くにして城陥る亂平いで後一日徳川家康外藩老臣を駿城に召す本多正信命を傳て曰く豊公遺言して吾主侯をして其の世子秀頼を輔けて天下の政を治めしむ其の大公正なる他人の敢て喙を容る、所にあらざれば然れども曩きに石田三成流言して我公將に孺子に利ならざる之を危ぶめんとす一旦誅に伏して忠義昭然海内皆な我が公の偉徳に服せり若し他日汝等の主我公に猜疑ある三成の如き

アサノ ナガアキラ

者あらば速に之を訴へよと言畢て即ち誓紙を徹す高勝獨り肯んぜずして曰く是れ臣等をして其主に背くを教ゆる耳縱令幕府死を賜ふとも臣敢て命を奉ぜず不幸にして寡君天人の歸する所を知らず安りに干戈を動かして敢て幕府に抗せん欲せば二三臣と誠を盡して諫争せん用ひざれば則ち一比干たらん耳豈に復た主の罪を訴ふるに忍びん乎と家康障を隔て、之を聽きて曰く高勝の言是なりと其の議遂に罷む慶長十八年高勝病んで京師に没す年七十六幸長痛惜す(事實文編)

アサノ チヤウソ 淺野長祚は徳川幕府の麾下なり字は胤卿、一に池香、又蔭潭、又梅堂と號す長祚は其の名、赤穂侯の支派にして三千五百石を領す從五位中務少輔に任せらる性詩文を好み書畫を愛す前後関する所幾千軸なるを知らず書を粟本翠庵に學ぶ後梅村山田の書を慕ひ大に上進す京都在勤の時に當りて禁裏御造營係を勤む依て御營誌と名づくる圖入の書五冊を綴りて朝廷に獻す明治十三年二月十七日没す年六十五私に證して文莊と曰ふ著す所歎芳閣書畫銘心録あり(扶桑耆人傳)

アサノ ナガアキラ 淺野長晟は小字は岩松幸長の弟なり幼より秀吉に給事す秀吉家康と基を固む毎に側侍す時寒ければ則ち基子を温めて之を進む家康其伶俐を嘉みし常に其人となりを稱す慶長二年食祿三千石を賜ふ三年從五位下に叙し右兵衛佐と稱す年弱冠にして小姓部隊長と爲る十五年大坂より京師に至る家康備中の田二萬四千石を賜ふ十八年幸長卒し子なし長晟嘗て任子たり大坂に成長す群臣避嫌し季弟長重を請ふ家康曰く長幼の序紊る可からず十月長晟を駿府に召し封を襲しむ衆悅服す改て但馬守と稱す十九年命を受けて東府の石壁を修む土地深泥底に材木を藉く修築半ば成り垣壁崩壞衆危懼す弟長重曰く是奉行の過なり請ふ命して腹を割き以て謝せしめんと長晟聽さずして曰く我左衛門佐をして奉行たらしむ石の崩る、唯一人の罪に非ず咎先づ我に歸して渠に及ぶなり苟も身を免れ無辜を殺戮せんと欲する我忍びざる所長重慍

大日本人名辭書 (八三)

服す九月大坂亂を作す長晟國に就く十月兵を率ひ住吉に到り
進て今宮に陣す蜂須賀至鎮と膏議し請ひて穢多崎を振く又舟
を以て葦島に渡り西より之を襲はんと欲す城兵自ら船塢を
燒き皆部中に入る長晟の兵船塢に入り首を斬る千餘級十一月
吉野熊野の賊徒長晟師を出すの隙を狙ひ土寇を誘き將に新宮
城を攻んとす淺野右近の家入戸田六左衛門市巷の賈子を收め
土寇二千餘將に新宮川を渉らんとす之を撃つ土寇散す又高
野の土寇蜂起す長晟兵を分遣し撃て之を平ぐ東西和成るに及
び長晟國に還り悉く餘賊を誅し之を平ぐ元和元年四月大坂吉
村兵左衛門を遣し來て長晟の臣淺野右近左衛門佐龜田高緒に
謂て曰く但州管て右府と親好あり若し舊義を存せば則ち金法
馬三を但州に各一法馬を三老に送らん且隸騎三千麾下に列せ
しめん三人胥議し使者を辭し遣歸す大野治長又書を寄せて曰
く冀はくは來り援けよ事若し成らば則ち紀和二州を以て長晟
を封し攝泉河を左衛門佐右近高緒三人に割んど又議して長晟
を以て關す長晟計を三人に問ふ高緒曰く不可なり乃辭す板倉勝重
徹を馳せ師を促すに會す長晟乃旅を整へ出て信達に次す前鋒
既に佐野市場に至る是地大野治長の采邑嘗て金幣を熊野土寇
に贖與し長晟の出兵を俟ち和歌山を襲ふ土寇日高松原に群聚
し砦を鹿瀬越城に構ふ治長の士小艇に乘り廻て佐野に到り土
寇を起し將に長晟の陣營を襲んとす會へ寇約を變し竊に之を
左衛門佐に告ぐ乃ち治長の士を執へ斬戮す土寇散す或は報
す大野治房の兵三萬將に紀伊を侵さんとする左衛門佐及右近
高緒等軍議す左衛門佐謂ふ敵を斯に壊ん高緒謂ふ退て樫井に
戰ん議果さず右近之を論し人を馳て計を長晟に問ふ長晟曰く
軍事は大隅に託す高緒泣下り退きて安松に屯す右近及淺野
日向等之に従ふ左衛門佐及淺野大炊助等退きて樫井に陣
して埃つ塙直次先鋒と爲り岡部則綱之に次き二十九日味夷貝
塚に餐す直次騎三百を率めて前む高緒自ら安松街を燒き斥候
を出す斥候敵に蟻通社前に相遇歸り報す旅を整ふと左衛門

アサノ ナガシゲ

アサノ ナガノリ

大日本人名辭書 (九三)

之と謀るべし然後施行する亦難きこと無き也何を以て辭する
ことを爲んと義央官齒の高きを以て諸高家の上に居る天使至
る毎に未だ嘗て其間に趨陪せざらんばあらざる自ら其能に矜
り人に驕る事を共にする者其指授を利し多く賄賂を行ひ之を
誘く長矩人とな爲り強硬に屈下せず以爲く己に義央と同じく
公事を執る私に阿諛を爲すべからざる未だ嘗て請謁問遣以て
其歡を取らざ故を以て甚相善からず他日長矩義央に謂て曰く
公廷僕の不肖を以てせざる禮を典らしむ願くは卿以て僕に誨る
あれ義央曰く僕と雖も又禮を請ふべざるなり且つ事をなすの
間他人に仰き難し卿宜く以て自ら處する有べしと長矩心深く
怨む十四日命あり白書院に於て親しく答詔の禮を行ふ期に先
ち諸老及ひ臣僚譜代侯伯皆朝服して之に趨く元日の儀の如し
長矩等廟廊の下に集り爲めに事を議す義央に問て曰く勅使至
る吾輩何くにか加之を迎へん階下に迎ふる宜しと爲すや否や義
央曰く此等淺近の事卿尙知らず今期に迫り急に議す乃ち衆の
爲に堂はるゝ無らんやと元妃藤夫人内使を遣り恩を天朝に謝
するに會す先づ梶川與三兵衛をして行禮畢るを候し還り報せ
しむ與三長矩に謂て曰く幕下行禮畢らば請ふ僕に告げよ長矩
曰く諸義央傍に在り與三に謂て曰く卿議する所何事ぞ僕當に
與かり聞くべし然らずんば恐くは便宜を失はん長矩其己を少
どするを知り色動く乃黙して起つ義央衆に言て曰く鄙野の子
屢に禮に曠し亦司賓の選を辱しめざるんや長矩之を聞き憤怒
に勝へず乃ち反て義央を呼ひ一喝刀を揮ひ烏帽子を撃つ顔に
中り血流る義央眩惑與に抗するに意なし手を掲げ面を擁して
俯す長矩復た撃つ脊に中つ將に再び刃せんとする三後より長
矩を抱き止む與三臂力あり長矩脫するを得ず關久和趨り進み
て刀を奪ふ長矩切齒忿懣大友義孝品川伊氏義央を扶けて起つ
殿中鼎沸す將軍綱吉之を聞き大に怒り命して長矩を囚へ田村
邦顯の邸に幽す戸田忠真を以て長矩に代ふ是に於て議決せず
以て天使に問て曰く血穢あり禮を行ふ之を如何せん權中納言

アサノ ナガシゲ

アサノ ナガノリ

保春對て曰く席を更へば則何を忌まん乃命し更ふるに黑書院
を以て頃くありて綱吉黒書院に出て禮を行ひ畢り勅使を遣り
西に還らしむ是の日將軍老中土屋政直を召して曰く今日天使
に禮接するを以て人臣に在ては最も當に戒懼して静を禁すべ
し而して長矩率意鬪鬪血を殿階に喋む私怨を以て公法を滅す
其れ死を賜へと政直乃ち大目附莊田安利を遣し田村氏の邸に
到り長矩をして辭を受け自殺せしむ是日命じて長矩の邸宅を
收む十五日長矩の弟長廣を私第に幽す遂に諸老に命し議して
赤穂城色を收め氏定をして赤穂遺臣に諭し城色を致さしむ十
九日命して悉く長矩府下の別第を收め只本所の宅を以て長廣
に昇て居しむ長廣初め播磨の田三千石を領し幕府に仕ふ是日
命して其邑を收む後實七年特に安房の田五百石を賜ひ其
祀を存すと云ふ長矩時年三十五法名吹毛元利冷光院と號す
長矩加藤泰經と相善し長矩義央と事を共にするに遂ひ泰經長
矩に謂て曰く去年僕義央と日光に赴き山廟の事を司る其人驕
傲人を枝害するを好む僕之と死せんと欲すると數回願ふに公
事の重き私怨の故を以て之を毀るは不忠なりと是を以て敢て
せず今卿日に之と會す彼れ卿を待つ必ず無禮ならん願くは卿
國家の爲に之を忍べ長矩曰く忠告を辱らす敢て教を受けさら
んや然も事固に忍ぶ可からざる者あり亦豫め諸し難きのみ
と果して其言の如し長矩の夫人は同族長治の女なり賢行あり
長矩怨を報するの日に其の將に出んとするや夫人其の辭色平日
に異なるを見て之を戸内に送りて曰く幸に眞入慶を營中に終
へ歸り來て妾を見よ是の日長矩果て還らず弟長廣郎に走り變
を告ぐ夫人逆ひて仇人の誰たるや且死生の如何を問はしむ長
廣曰く未だ知らず老中命あり長廣をして邸に造り衆の騷擾を
禁せしむ是を以て來ると夫人曰く死し之が弟たる者仇人の存
亡を知らず唯曰く我聞老の爲に來て騷擾を禁すと此れ何の謂
そやと卒に絶て見ず左右をして冗雜の具を收めしめ訖て曰く
我が爲に小刀を取り來れ侍女小刀を取りて進む夫人曰く汝急

に我誓を断せよ侍女曰く夫人土州君の家に至り髪を截る未だ  
晩からざるなりと而も聽かず乃ち之を断つ長澄人をしりて之を  
迎へしむるに速ひ出て轎に就く夫人初め變を聞くより舉措  
安靜にして平日に殊ならず輿に就くの後より哀慟勝へず殆ど  
傍人を動す長澄の家に至り一室に閑居し敢て他人を見ず之を  
久うして出てす

アサノ ナガハル 淺野長治は長晟の子なり母賤きを以  
ての故に庶子と爲る從五位下に叙し因幡守と稱す額て三次城  
に封せらる采邑五萬石長治儉に居り約を守り奢侈を省き古風  
を尙ふ嘗て謂ふ凡そ一朝幸を得れば君と爲り臣と爲り公侯  
城主家老と爲る同僚の武弁不幸にして陪臣と爲る者騎を下り  
匍匐す我が意蓋ありと曾孫長經に傳ふ蚤く死し嗣無くして絶  
ゆ弟長寛邑五萬石を頒ち侯爵に列す未だ幾ならず亦天子法に  
因て采邑を宗家に還附し家絶ゆ

アサノ ナガマサ 淺野長政は尾張の人也姓源氏小字は  
長吉實は安井重繼の子、長勝子なし長政を乞て嗣と爲し養女  
を以て之に妻はし改て彌兵衛と稱す信長の命に因り秀吉に屬  
し山陰山陽の戦に従て功あり長政の妻は秀吉の室高臺夫人の  
妹なり長政親姻の故を以て内外機密預り聞かざる無し人と爲  
り剛直にして道を守る君父と雖も不義あれば則ち之を正し仇  
讐と雖も倫序に協へば則ち之を稱揚す天正十一年秀吉に賤  
嶽に從ひ大津坂本二城を賜ひ食邑二萬三百石を食み京師の諸  
事を掌る十二年師に尾州に從ひ軍中の機務隊伍の節制長政盡  
く預れり十三年長政列して五奉行と爲る是歳經て紀泉を伐ち  
兵を遣し四國を伐ち之を平ぐ十四年關白秀吉徳川家康と成を  
行ふ長政使价と爲り濱松に赴き南明夫人を送る而して家康京  
師に朝す長政命を受けて迎ひ享す十五年秀吉西海を征伐する  
や長政龍造寺家と大隅を略す肥後主無し兎賊群起す長政命  
を受けて赴き制法を定め郡邑を鎮す佐々成政守護たり荒暴に  
して民を虐し土寇亂を作す秀吉怒り成政及び國人を召し擄敷

アサノ ナガハル

アサノ ナガマサ

す長政詰正し成政罪に伏す長政後ち肥後に往き郡縣を撫綏す  
十五年八月長政若狹に封せられ十六年從五位下に叙し彈正少  
弼に任す十八年正月秀吉京師を發し駿河に抵り將に府城に入  
らんとす石田三成間を請ひて曰く臣之を道路に聞か徳川氏敵  
と謀を通すと恐らくは變あらんと秀吉善を挽き還回す長政諫  
て曰く邪説信するに足らずと家康伊奈熊藏をして舟梁を富士  
川に架せしむ三成復た之れを懇ふ長政衆に先ちて濟り人を遣  
し之を報す秀吉沼津城に入る家康師を帥ひて箱根山に上る三  
成又之を阻む長政力争す四月長政三成大谷吉隆等と北條氏勝  
を以て嚮導と爲し本多忠勝を監軍と爲し湯本營を發し上野に  
入り轉戦長驅眞田信尹をして遠山直景に説かしめて之を降し  
江戸城を取る守將遠山景政小田原に在り酒井忠次萬西碓氷東  
金諸寨を拔て之に會し兵を併せて岩槻城を圍む城主北條氏房  
小田原に在り伊達與兵衛等留後して牙城を守る妹尾兼延片岡  
正則次郭を保つ長政の子幸長忠勝の子忠政及び鳥井元忠等兵  
一萬二千を以て四面合圍す長政命して火を街口に縱つ敵出て  
て禦き戰ふ幸長時年十五忠政十六先登して前門車橋の上に  
薄る忠政兼延と戦ひ之を獲し卒力戰、死傷する者多し遂に次  
郭を拔く長政諸部を督し牙城に薄る守將笠を掲げ降を乞ふ長  
政城に入り捷を行營に報す又命を受けて忍城を攻む是より先三  
成佐竹守宮の兵を率めて之を攻むる旬餘下す能はず而して  
長政赴き攻む城中長政に懇り降を乞ふ長政之を三成に議す三  
成己が功の果さざるを愧ぢ欺きて曰く城中已に内應する者あ  
り預め明日を期し諸部合せ攻めんと長政之を信し兵を率て行  
田口に逼る三成等の諸隊敢て期に合せず敵卒り擄殺し死傷者  
數百人和議乃ち破る秀吉命して加越の師を助け鉢形を攻めし  
む長政等隸戰功微なるを以て肯んせす時に兵を進め房より二  
總に入り兵を分ち轉鬪月餘城皆を得る前後合せて六十二秀吉  
其の功を嘉みし罷るに筋度に違ふを以てす津輕三郡亂る南部  
信直之を伐ちて克たらず中納言秀次師を率て赴き援ふ長政軍に

從ひ鳥屋碓城に抵り郡縣を點檢し租税を定め松田太郎左衛門  
をして水澤を守り溝口外記に江刺を守り淺野重吉に鳥屋碓城  
を守らしめ九月西に歸る甲信二州を檢知して駿府に往く未だ  
幾ばくならず萬西大崎土寇蜂起し水澤を振き岩井の黨悉く成  
兵を殲し太郎外記の首を鼻し佐沼城に蟻附し和賀稗貫賊亦群  
起す初め萬西大崎人累世土著す秀吉の放逐する所となり群合  
胥議して謂ふ我輩祿邑秀吉に封せらるゝに非ず罪を運參に託  
し籍没せらるる酬ひざるべからず代官目代を攻め屠り征討使を  
受るに如かず禦戦力竭きは則ち死せんのみと群寇嘯合噴罵邑里  
を侵掠す重吉特に鳥屋碓城を守る和賀義忠等敵を馳せ黨を樹  
て土寇二千を併せ十月鳥屋碓城に蟻附す重吉防禦力戰日を歴  
土寇倍々加はる南部信直急を聞き自ら五百餘騎を率ひて應援  
し土寇の後路を断つ重吉機に臨み城を出て力撃す信直の前鋒  
八戸直榮撃て賊を卻く賊猶ほ八森に屯す信直城に入り重吉に  
諭し城を棄てしめ携て三戸に歸る長政駿府に在り亂を聞き馳  
て東府に到り家康に見え淺野重長を名主の陣に遣し尋て發し  
二本松に抵る十九年正月長政二本松に在り浦生氏郷來り會す  
長政其の手を執て曰く伊達正宗賊勢を援く滋蔓すれば則ち変  
除し易からず請ふ速に發せよ氏郷乃ち師を發す既にして正宗  
家康が旗を岩槻に出すを聞て懼る潛に來り長政を見陳謝し族  
盛重成實二人を送り質と爲す長政之を氏郷名生の營に送り具  
狀して家康に報す家康東府に還る是夏九戸政實亂を作し通亡  
を招集し郡邑を侵略し士民を虜捕す秀吉中納言秀次をして師  
を督せしめ氏郷及び堀尾吉晴等前鋒たり長政軍監たり衆を督  
し九戸城を攻む長政吉晴後門より入り逐撃し橋上に戰ふ是の  
夜政實竊に來り請ふ幼主に南部本領を賜はしめは城を致さん  
長政許諾す明日賊徒弭散し諸將營に就く長政乃ち政實を擄へ  
會津に赴んと欲す秀次聞て長政命を待たず之を宥赦するを謹  
む命して政實を中途に誅せしめ秀次凱旋す長政從て京師に歸  
り政實に約するが如く南部氏の後を立しむ時に秀吉更に金貨

アサノ ナガハル

アサノ ナガマサ

を造る長政の家人僞金を造り連坐將に罪に陥らんとす家康之  
を憐み弔に來り其の故を審問し爲めに長政の罪なきを應に辨  
明す長政深く家康を徳とし親睦日に渥し文祿元年征明の軍起  
る長政兵を那古耶に遣はす二年六月秀吉長政及び黒田如水に  
書を齎し朝鮮に往しむ其書に曰く諸將晉州城を攻むと雖も城  
主牧司拒戦して未だ陥らざ故に今長政如水を遣し軍監と爲す  
急に城を拔き牧司を誅し宜く捷を報すべしと二人書を増田長  
盛石田三成大谷吉隆に寄せ以て韓に渡るを告ぐ長盛等先づ宇  
喜多秀家の營に會議す二人往て秀家に見え旨を告て我營に歸  
る長盛等人をして長程航海の勞を慰せしむ二人甚を圍み之を  
聞かざるが如し頃くありて長政三成吉隆を引退去す二人  
人猶未だ識らず奮に黒白子を取めて後相謂て曰く三監來れり  
や左右曰く來れども既に去れり乃ち遽に驚き馳せて之を逐ふ  
使者三反すれども聽かず且詰りて曰く其吾儕に逢ふと甚聲の  
丁々然と孰れか要と爲すと遂に去る是に於て二人已むを得ず  
秀吉の命を諸將に傳て還る三成等深く憤り二人の圍基に溺る  
るを嫉む讒侮屢々譖問を構ふ人と語る毎に必ず説て之を誹謗  
す二人慚恨す長政の子幸長如水の子長政俱に深く之を悲り三  
成等を見る冠髻の如し秀吉薨して後ち三奉行の姦を家康に懇  
ふ關原の役首として東に屬す本此に起ると云ふ征韓日久し明  
軍數十萬韓を救ふ我師糧食匱乏會々沈惟敬和平を議するも事  
未だ整はず在韓の諸將屢々書を報し援を乞ふ秀吉之を憂ひ日  
夜諸將を行營に會して群議す一日秀吉家康及び利家氏郷長政  
と議し謂て曰く將卒皆郷里の情を懐き鋒矢銳ならず或は明軍  
の夥多を懼る孤甚だ異域に愧つ故に孤親ら海に航し明軍を殲  
屠し而して震旦に入り以て威武を照耀せんと欲す我邦を以て左  
家康に託し孤十萬を督し中軍と爲り利家氏郷各十萬を以て左  
右翼と爲り韓地を蹂躪し明國に跋扈し大明皇帝と稱す亦愉快  
ならざや利家氏郷曰く人生朝露の如し我武を異邦に照耀する

書 辭 名 人 本 日 大

は嘗て庶幾する所なりと惟り家康絶然として曰く余弱少より弓を挽き戦を執り武を以て業と爲す方今諸將海に航し武を殊域に振ふ特り吾れ空虚を守り何をか爲ん吾年微なりと雖も衆に先ちて海を渡らんと秀吉色を變して曰く卿命に違ふかど家康應へず秀吉益々怒り事將に破裂せんとす長政進みて曰く亞相の議論是なり諺に曰く龍人を食ひ人亦龍を食ふ方今畿西南海侯伯多く韓に渡る殿下如し航せば則東北將士亦多く從はん我邦虛耗外夷隙を窺ひ冠賊間に乗せば亞相雄偉と雖も之を奈何ともする能はず壞るれば則ち責め一人に歸す宜べなり航海を欲すと謂ふや殿下機斷甚だ往時と異なる是必ず妖狐の詭にして昨日の殿下に非ずと秀吉震怒髮髮冠を衝く親ら劔を撫して曰く呼彈正何ぞ言の逆戻なる妖狐の謂得て聞くへきなり若し明かに對へずんば汝の敵首を刎ん長政泰然として曰く我儕戮を被る以て患と爲すに足らず頻年兵革屢々起り之に加るに無名の師を發し醜夷を征伐し士卒罷困百姓困苦今我か四海の内敢て命を拒む者無し冀くは民と樂を同し歛を薄くし賦を省かば天下安寧ならん然るに今殿下如し海に航せば則寇賊群起せん亞相縱ひ八臂六翼と雖も鎮する能はず故に先驅たらんと謂ふなり殿下勝算皆之に反す是妖狐に誑せらるるに非ずや秀吉奮起將に長政を斬らんんとす利家氏郷長政を目して退き去らしむ長政前みて曰く臣老たり命を各まづ家康曰く彈正去れよ徳永壽昌有馬則頼強て長政を牽き退く長政命を待て自殺せんと欲す出ざる數日會と薩人梅北宮内左衛門黨を樹て反し冠賊群起肥後を侵掠し熊本城を襲ふ秀吉大に駭き人の家康に馳せ長政を召し謂て曰く肥後賊起ると汝か子幸長をして往て伐しめんと長政命を拜し林羅す幸長及ひ本多忠勝即ち發す賊首誅に伐す乃ち長政を肥後に遣り郡邑を鎮撫せしむ是年長政を甲斐に轉封し二十萬四千石を食しむ慶長三年秋秀吉疾篤し長政及三成を召し後事を屬して曰く証明諸將未だ凱旋せず孤如し起ずんば即ち我十萬の師をして他邦の鬼たらしめん

アサノ ニフカ

アサノ ユキナガ

孤最も之を憐む汝等深く喪を秘し往て海に航し衆を收めて還るへしと幾もなく秀吉薨す遺命して喪を秘す九月長政三成と那古耶に赴く會と報あり島津義弘明軍と戦ひ大に之に克ち明兵畏怖して去り我師日ならずして還ると是を以て諸將を那古耶に待ち構ひ迎へて各をして國に就かしむ三成長盛等屢々亂を作すと謀る長政父子窮に策を決し家康に屬す三成等家康を謀んと欲する數回謀漏れ果さず或は長政を疑ひ之を家康に請す長政自ら安んぜず封を子幸長に致んと請ふ家康之を許す長政武藏府中に還り潜居す秀忠屢々使者を賜ひ訪問す慶長庚子の亂關ヶ原幸長小山の行營に從ふ又諸將と西し軍功を建つ家康書を長政に賜ひて曰く卿嘗て馳に遇ひ幽居す孤其の罪なきを諱る方今中納言秀忠山道より西上す卿亦宜く之に會すへしと長政大に悦ひ師に從ふ慶長十年長政妻孥を携て東府に往く秀忠親愛他に異なり十一月眞壁及ひ愛知の田一萬石を賜ひ老休田と爲す十五年四月卒す年六十五長政毎に家康に侍し相對して甚を圍む其交手に臨み我を遣れ動もすれば争て君臣の禮を失ふ然れども家康亦咎めずして其の意に任せ親昵せらるる此の如し長政卒するに及ひ家康基を廢す世之を絶撃に比すと云ふ野史諸士略傳、本朝武林傳

アサノ ニフカ 淺野入我は俳人なり上州甘樂郡の人、入我は其の號一に雲洞と號す勇右衛門と稱す弘化中の其人其俳歌に曰く吹せたき津には來す春嵐俳諧海内人名錄

アサノ ヤスヰ 淺野屋古権は奥州仙台の俳人なり古権は其の號一に清靜庵と號す理平と稱す弘化年中頃の人其の俳歌に曰く鳥の入る雲に見ゆるやひるの月俳諧海内人名錄

アサノ ユキナガ 淺野幸長小字は長滿長政の子なり幼より秀吉に近侍す天正十七年四月從五位下に叙し左京大夫に

書 辭 名 人 本 日 大

任す十八年五月父長政諸部を率ひ岩槻城を攻む幸長及ひ本多忠政衆に趨き前門に先登し敵を橋上に戦ふ城中勢機ひ長政に憑り降を乞ふ文祿二年九月薩人梅北某黨を起し肥後を侵掠し熊本城を襲ふ幸長秀吉の命を受け本多忠勝と赴き伐つ途に於て賊平らぐと聞き罷り歸る是の年兵を率ひ韓に渡る伊達正宗を嘉獎し許可す乃ち諸將と釜山浦に會す幸長西生浦に築て之に據り加藤清正と寨を侵奪し俘獲尤も多し初め幸長の書佐井川藤介罪を得て亡命す三成潜に之を謀す關白秀長の變藤介擲して幸長秀次に通する手書を作る三成長盛と謀り之を謀殺す兵を發し幸長の邸を圍み以て命を竝つ前田利家冤狀を探知し爲めに其姦を發す秀吉藤介を逮捕し之を鞠し乃ち幸長を宥し之に藤介を予ふ幸長之を磔殺す衆皆三成を怨む而して三成寵遇益渥し慶長二年再び韓に渡り西生浦を守る加藤清正機陽に在り犬牙相持し韓將李元翼を退撃し進みて忠清道に至る是秋秀吉証明の功成らざるを怒り屢々諸將を督促し胥議して曰く韓嶺多年城寨を築き能く拒守し攻れば則人を傷け入れは則路を杜ぐ故に疑議日久し更に促命を承け猶豫すべからず十二月宇喜多秀家師を督し順天より王城に入り毛利秀元將帥と爲り黒田長政幸長等之に副たり經廻し還りて彦陽に宿し將に蔚山に入らんとす是時明將楊鶴麻貴三協兵を率ひ慶州に赴き將に蔚山を攻んとす蔚山の南に高山あり清正の兵之を守る麻貴高策吳惟忠を彦陽梁山に遣り蔚山と釜山の來往の路を阻す幸長及ひ太田一吉穴戸元續彦陽に屯し舜山を去る數十里巨川あり斥候を河岸に置く高策吳惟忠の兵掩撃皆之を殺す幸長聞て怒て曰く吾儕設令蔚山に入ると雖も斥候の死盡くるを見虜に逢はずして歸らば則怯懦の嘲を免れむ乃ち駒を進め戦んと欲す元續一吉制止して曰く幸長の言武と雖も寡を以て衆に敵す恐らくは利あらず幸長勇氣奮銳聽かずして曰く虜に逢はざれば則歸らば則怯を揮て進む一吉元續之に次ぐ虜と相値ふ虜我寡

アサノ ニフカ

アサノ ユキナガ

單を察し重圍して斬る幸長、一吉元續と奮撃利あらず且つ關ひ且つ走ると三里ばかり幸長數創を被り標破裂す殆ど蔚山に達せんとし虜勢益振ふ幸長將に死せんとす巨龜田高緒死戦して虜酋を獲て途少しく排く會と加藤清正兵衛兵を率めて之を城に邀ふ幸長東面を守り一吉西面を守り元續及ひ加藤與左衛門父子北面を守り戒嚴備禦す清正西生浦に在り急を聞て曰く幸長をして死せしめは我れ何の顔ありて歸朝せんや即ち輕刺を馳せ夜蔚山に入る明日李如梅楊登山衆を率ひて來り攻め羅郭を破り壁際に入り銃を縱つ二十七日防禦屈勢し城中飲を絶ち糧を斷ち憔悴困す小早川秀秋警を聞き釜山浦を發し是日丸山に至り後援をして會せしむ明日岡本越後守を遣り和議を講す陰に將帥を擒にせんと欲し預め正月三日を以て會期と爲す城中食盡き羶馬の肉を裂き箭鏃に貫き燔て以て食と爲す慶長三年正月二日夜已に關にして越後來り告ぐ明將欺計ありと三日疾を以て會盟を辭す虜將忿り鼓鐘して隊を進め壁に逼る我が兵屈せず六日秀秋加藤嘉明等諸將と大に明虜を撃ち首を得る萬三千餘級虜遂に解き去る秀秋命して西生浦の兵を駐め蔚山を守らしめ幸長西生浦に歸り軍士を慰勞す庚子の秋家康に小山に從ふ上國軍起るに及ひ諸將と先づ發す八月池田輝政と新加納を濟り岐阜の兵と戦ひ首十餘級を獲次日幸長瑞龍寺の寨を攻む三成の臣柏原彦右衛門及ひ河瀬左馬助等千餘兵を以て寨を守り岐阜の聲援を爲す幸長及一柳直盛兵を督し之を攻む敵銃を繼て備禦し士卒爲に傷く幸長屢々奮撃す龜田高緒又衆を進め四面齊しく進み城門に薄る杉浦源之丞と闘ひ之を獲左馬助逃走し寨陥る千餘人を斬る關原の戦池田輝政と命を受け南宮山を壓す十一月封を紀伊に轉し三十七萬石を食む次年改めて紀伊守と稱し從四位下に叙す慶長十八年八月廿五日卒す年卅八幸長藤原惺窩と孟子を講し憂患に生して安樂に死すると云ふを聞き終て曰嘗て我れ石治部と隙あり治部世に在るの日自勵み人の爲に誹謗を被らず躬亦健固なり今治部已

アサバ シユメ

に滅び且つ恩遇を被り島津佐竹と相親み氣緩み心寛なり而して病痾を生ず賢哲の言趣ひざるなり(野史)

アサバ シユメ 淺羽主馬は中島流の砲術家なり中島長守に學ぶ次子等之助業を嗣ぎ寛政九年幕府の御先手與力となる(武術流祖録)

アサハラ スケロク 麻原助六は毛利元就の臣なり尼子勝久毛利の族小早川隆景に其の城を圍まれ糧盡きたるを以て死戦を決せんとす突出して圍を衝く横道兵庫之助五月早苗之助等善く戦ふ毛利の臣中井善左衛門元盛二人と闘ひ將に危し助六來り援て横道五月と闘ひ遂に二人を殺す

アサハラ オモヨリ 淺原爲頼は朝小笠原氏の支族なり八郎と稱す甲斐の人、容貌魁偉力あり善く勁弓を挽く無頼にして産業を事とせず毎に徒衆を諸國に招結して群盜を爲す民間頗る之に苦しむ朝廷所在に救して之を捕しむ獲ず正應三年春爲頼潛に京師に至り夜其二子と甲を擡き騎して禁中に入り女孺に就て問ふて曰く主上何處に臥す給て曰寢殿に御すと又問ふ寢殿は何處ぞと曰く南殿の隅と爲頼之に在り乃ち孺急に入内し長姫に因て變を告ぐ時帝實は中宮に在り乃ち婦人の服を着て春日殿に幸す宮人或は寶器を携へて帝に從ひ或は皇太子を抱て常盤井殿に避く爲頼已に寢殿に入る中宮衛士景政格闘して創を被る二條京極の兵五十餘人外より入り關を排て進む爲頼自ら死れざるを知り二子と俱に紫宸殿に至り腹を割て死す三屍を併て六波羅に送る時其射る所の箭を檢するに太政大臣爲頼の六字を鏤す又其佩刀は即ち前參議藤原實盛の家に藏する寶刀鈴鹿と名くるものなり實盛父子因て坐して收繫せらる初め伏見帝の登祚するや龜山上皇後睦娥帝遺詔の意に稱はざるを以て之を懼る故に當時相傳ふ爲頼の宮闕を犯すは上皇の囑託に出るなりと權大納言藤原公衡後深草帝を奉じて上皇を六波羅に遷さんことを請ふ聽かず因て伏見帝の詔を矯めて咎を上皇に歸す是に於て上皇誓書を作て

北條時宗に賜ひ以て自ら洗雪す事是に由て解くを得たり(大日本史)

アサバ マサノリ 淺羽昌儀は傳四郎と稱す父を三右衛門と云ふ幕下御書物奉行なり義公其系譜の學に詳かなることを聞き佐々宗淳に命じて屢々尋ね問はしむ中村良直傳記に曰く三右衛門を案作する淺羽氏に始るあり人なり又兵家茶話曰諸家の系昌儀其庶長子なるを招かせられ來り仕ふ近代諸士傳畧御役人帳等を撰呈す其子孫今に至つて衰へず諸家系圖等多く家藏せり(書傳得聞)

アサハラ ナイシンワウ 朝原内親王は平城帝の妃なり延暦元年伊勢の齋宮と爲る十五年罷めて京師に歸る三品に叙す十七年田二百五十町を賜ふ後二品に進む宮に入る寵なし弘仁三年罷む八年薨す年三十九嵯峨帝使を遣し喪事を監護す(大日本史)

アサハラ フカノ 朝原岡栂は官醫なり山城葛城の人、承和三年遣唐醫師となる(龜山名醫傳前篇)

アサヒナ ヤスズミ 朝比奈泰澄は後北條氏の世臣なり通稱は與兵衛、泰榮の子、小田原亡て北條氏規の子氏盛河内狭山に封せらる、や泰澄父子並に執政たり人以其業とす狭山

アサヒナ ヲカノ 朝原岡栂は官醫なり山城葛城の人、承和三年遣唐醫師となる(龜山名醫傳前篇)

アサヒナ ヤスズミ 朝比奈泰澄は後北條氏の世臣なり通稱は與兵衛、泰榮の子、小田原亡て北條氏規の子氏盛河内狭山に封せらる、や泰澄父子並に執政たり人以其業とす狭山

アサヒノカタ

草創に屬し官吏未だ全備せず父子嬉村に住し邑里の政を兼治す嬉村は即ち右衛門の采邑なり泰澄性忠貞上を奉じて禮あり下を撫して惠あり元和三年卒す年三十九其の病革なる時封内の民哀んで狂するが如し泰澄世に在る時暇あれば田獵を好む其の最も愛する所の鷹犬泰澄の葬後に忽ち墓前に抵て死す人以其驚異す即ち墓前に瘞す今に到て鷹塚大塚並に存せり(事實文書)

アサヒナ ヤダラウ 朝比奈彌太郎は劍客なり寛永九年武術上覽の時年八十五才初鹿鹿右衛門と相打つ共に老て益々矍鑠たり終に木刀を捨て、相撲つ觀者之を壯とす大久保忠輔判して曰ふ敢て勝負を決する勿れと乃ち止む

アサヒナ ヨシナガ 朝比奈可長は駿河國の人なり其の先は堤中納言兼輔卿より出つ平兵衛某可長を生む元の名は半左衛門のち丹左衛門と改む始めて土佐國主藤原忠豊に仕へ采地二百石を領す可長天資純強捷多力好むて兵技を學び百家に通習し最も柔術に長す初めこれを水野自適齋に學べ既に其道を盡くせり後ち小栗正信に學ぶこと兩年竟に家傳深秘を受けたり正信は希世の達人にして武家衆技の粹を抜き柔術一派の源を立つ門人三千心傳の妙を得る者は可長等一二人のみ明暦三年武江大火あり可長邦君に陪侍時に車馬路を塞ぐ可長奮擧して人を除け手から車牛を抛つ此に依て君危難を免る繼て豊昌に仕ふ嘗て言ふ路を行く可長一人側らに在れば則ち百千の副士の扈從するが若しと勇烈忠貞人に信せらる、こと此の如し其餘軍功の聞見に顯はる、者勝けて記す可からず應變神速は世の知る所也藝の妙に至ては則ち古今に獨歩すといふも亦可なり天和二年壬戌十一月十日病歿す行年五十八眞如寺山に葬る(事實文書)

アサヒナ ヨシヒデ 朝夷義秀は鎌倉の元老和田義盛の三男安房國朝夷郡に生長す故に稱して朝夷三郎と曰ふ勇武多力無雙と稱せらる將軍頼家嘗て小坪濱に遊ぶ義秀の善く

酒々を開き召して其技を觀る義秀游泳數回忽ち没して見えず少くして狎狸巨大の三鰐魚を挾み出つ人々其猛勇に愕く建保元年父義盛北條氏の積惡を忿り之を除かん欲し兵を擧ぐ義時備れて府中に奔り實朝を挾み令を諸將に傳ふ義盛幕府に逼る義秀直に進み南大門を排破して入る力戦最も激し向ふ所人馬塵粉す北條朝時を傷つけ足利義氏を退ひ又馬首を廻らして幕府を指し武田信光に若宮小路に遇ふ義秀刃を接へんとす信光子信忠年十三馳至りて父を蔽ひ義秀に抗す義秀心其孝義を愛し見棄て馳す小物資政續て進み直に斬仆さる凡そ其餘に罹る者命を殞さる莫し既にして義盛以下兄弟宗族敗歸す義秀五百の殘兵を將て安房に走る其終る所を知らず或云高麗に赴むくと世俗稱す義秀は勇女鞍繪の生む所と是れ誤なり(大日本史、家雜言行錄)

アサヒノカタ 朝日の方は徳川家康の室なり一に駿河御前と稱す秀吉の異父妹初め秀吉微なる時早く父を喪ひ其母再び織田信秀の同朋筑阿彌に嫁し秀長及ひ夫人を生む夫人生れて容貌端麗既にして佐治日向守に嫁す小牧の敗秀吉使を遣はして和を請ふ家康聽かず使屢々反る秀吉沈吟累日未だ其謀を得ず中夜猝かに興きて曰く吾之を得たり聞く徳川氏未だ其室あらずと我妹を以て之に配せは彼れ惡んぞ來らざらん尙し猶從はされ吾か大政所の一行為煩はさんのみと堀尾吉晴生駒正俊曰く公妹何くにか在る秀吉曰く佐治日向に妻はす者なり渠れ未だ子あらず佐治人となり智慮多し若し曉すに國家の大計を以てせば必ず命を聽かんと明日吉晴正俊をして意を致さしむ佐治か曰く天下の安危の係る所君命何ぞ能く逃れん吾死を以て之を濟さんと乃ち自から腹を刺して死す是に於て秀吉使を遣はし酒井忠次に因り意を致す忠次も亦爲めに固請す家康曰く我秀吉と宿怨なし彼れ婚を以て和を乞ふに至る我豈に敢て拒まんや其使反命す秀吉又淺野長政をして固く誓約せしむ家康か曰く夫人出ると樹子を易るとなけん成を行ふの後も長

アサバ シユメ

アサヒノカタ

磨を以て質となすと云ふ吾不幸にして蚤世するも尺土寸壤  
 移割なけん長政を採り秀吉の裁書を上る其の言ふ所皆符す  
 長政馳騁之を報す秀吉喜ひ手書を以て之を謝す家康天野康景  
 をして幣を納れしむ秀吉曰く康景何爲る者ぞ吾未だ嘗て其名  
 を聞かず徳川に長臣井伊本多頼原あるに非ずや何ぞ微なる者  
 をして禮を行はしむるやと頼原曰く事成らざれば則ち信  
 家康はす將に之を絶たんとす使の曰く事成らざれば則ち信  
 雄何の面目あつて秀吉を見んや頼原曰く強いて信雄の爲に長臣  
 一人を遣はせと家康已むとを得す本多忠勝を以て使に充つ秀  
 吉忠勝康景を待すると甚た厚し寶刀を賜ひ之を勞らふ終に長  
 政等をして旭姫を護送せしむ從ふ所の妾媵百五十餘人衣裳皆  
 鮮麗なり天正十四年五月禮成り信康を以て之を子とし散樂を  
 設け観覧すると三日頼原康政をして之を報せしむ秀吉喜ひ親  
 から旅亭に至り之を謝す遂に其母を質とし家康を見んとを求  
 む是に於て行を命ず發するに臨みて曰く吾縦ひ不幸にして京  
 師に死するも夫人の與かり知る所にあらずは必ず之を害す  
 るなかれと其後三年秀吉の母病あり家康及ひ夫人京師に如き  
 之を省す夫人も亦病み聚樂に留り年を踰えて遂に起たず天正  
 十八年正月十四日薨す年四十八時に秀吉方に小田原を征す秘  
 して喪を發せず小田原平ぐに及び歸りて駿府に次し偶聞けり  
 夫人嘗て瑞龍寺に詣り佛を拜して追想に堪へず因て寺領を寄  
 せ以て其冥福を修めむと京師東福寺に葬り南明院と號す又寺  
 領を寄せんと欲す主僧辭して曰く嘗て有する所の寺田兵の奪  
 ふ所となる今田を賜ふも亦之を失はんとを恐る如かじ貨を得  
 んにはと即ち黃金千兩を賜ふ久しきを經て其金亦皆散失す正  
 徳中新井君美京師に使し夫人の遺像の南明院にありて祀奠あ  
 るなきを觀還て文昭公に言ふ其言を聞き之を憫然れども  
 先世の遺失を明かにするを欲せず以爲らく家康百年遠忌近き  
 に在り將に其時を待て並に之を擧行せんと而して疾に遇ひ起  
 たず遺言して供料五十石を南明院に寄す(將軍外傳)

アサノミヤ

アサリ ヨシトホ

**アサノミヤ** 淺宮は徳川家綱の室なり名は顯子伏見貞清  
 親王の女明暦三年七月降嫁す貞靜にして婦徳あり寛文中一漢  
 あり長大にして貌醜し單衣索帯寢宮の下にあり帳を褰けて内  
 を窺ふ左右の侍驚き亂走す妃徐ろに起ち衛士を召して之を縛  
 して曰く城門嚴重安んに入るとを得す意ふに其物に驅られ  
 既に心志を喪ひ禁を犯すを知らざるならんと有司門に馳すれ  
 は妃の言の如し而して門者罪を免るゝを得たり延寶四年乳癌  
 を患ふ醫曰く糸を以て脈に掛く其詳を得ず親から見されは不可  
 なりと家綱之を許す妃曰く吾聞く乳癌治し難しと假令治すへ  
 きも一死を以ての故に而かも節を變ずるを欲せずと遂に治せ  
 す八月薨す年三十八東叡山に葬る高麗院月洞圓心と號す明年  
 從一位を贈る(靈龜記)

**アサミ** ケイサイ 淺見綱齋は平安の儒者なり名は安正  
 近江高島の人なり後ち家を京師に徙す初め醫を業とし高島順  
 貞と稱す後ち改めて淺見氏と爲す安正人として爲り峭直にして夙  
 とに大志あり家本と豪富家産を破りて以て一時の豪傑に交は  
 る山崎闇齋を見るに及び欣然として心服し遂に業を改めて  
 儒と爲り清苦篤志す時に略血を患ひて連日癒えず闇齋猶ほ苦  
 學せしむ榎元貞曰く病勢此くの如し姑らく業を廢するも不可  
 なきしむ可けんや佐藤直方安正に謂て曰く吾曹翁の怒情を興  
 習はしむ可けんや佐藤直方安正に謂て曰く吾曹翁の怒情を興  
 も之之を知る然れども當今の世を捨てて其れ誰をか師とせ  
 んと安正頗る武事を好み常に騎馬擊劍し一長刀に赤心報國の  
 四字を篆鏤し之を帶ぶ初め父、安正の學を好むを以て別に家  
 を成さしめんと欲し叔子を以て其家を繼がしむ其性不斷にし  
 て家益々衰へ繼母を養ふこと能はず大公安正に倚頼す安正毎  
 夜往て經紀看護し且に達して還り乃ち學生に教授す炎暑嚴寒  
 年一日の如し路人往々其の面を識り擧て其の孝を稱す而して  
 安正貧窶尤も甚だし茅屋蓬戶藜藿服はす隆冬或は一布袍恬然

として其の操を易へざる者數十年王侯貴人安正の風を聞て見  
 んと欲する者多し太上天皇も亦之を召見す固辭して出でず嘗  
 て云ふ予の斯學に於ける特り先師の遺徳を拾ふ耳耕獲の功あ  
 るに非ざるなり然れども出處の一事に至るとは古人と雖ども自  
 ら愧ぢざるなりと直方曰く古人の出處を論ずる出處には則ち  
 出で處るには則ち處る子は未だ嘗て出でず何ぞ之を自負する  
 ことを爲ん安正嚴然として色を正して曰く仕ふ可くして仕へ  
 仕ふ可らずして仕へざるを孰れか出處に非ざると安正師弟の  
 間甚だ嚴峻門人講筵に侍する猶ほ臣下の君前に在るが如し席  
 上講義を録する者筆硯墨楮皆豫め備へ安正既に席に就けば硯  
 に注ぎ墨を磨るを許さず一坐肅然として屏氣聽聞し一章一節  
 を終はる毎に聽者皆拜す嘗て近思錄の萬世の爲めに太平を  
 開くの章を講じて曰く吾れ今日諸生の爲めに書を講ずるも亦  
 是れ萬世の爲に太平を開くなりと時に闇齋敬義内外を講じて  
 身は内たり天下國家は外たりと説あり安正以て不可と爲し遂  
 に其の說を辯駁す闇齋又神道學を唱ふ安正諫争す是に於て師  
 門を絶せり直方親喪未だ除かざるに出で、仕ふ安正之を面折  
 し是より復た相接せず門人三宅緝明水府に仕ふ安正曰く其の  
 志、道を行ふに非ずと書を以て之を絶つ然れども晩年に先師  
 に背くを悔い香を炷き稽首して罪を其靈に謝すと云ふ年六十  
 正徳元年十月歿す重次郎と稱し望補軒と號す(事實文苑)

アサノミヤ

アサリ ヨシトホ

**アサミ トシヅカ** 淺見俊孝は京極高峯の臣なり對馬守  
 と稱し髪を削りて春向軒と號し尾上城に居る淺井亮政亦高峯  
 の臣なり而して主君を蔑如し威を江北に振ふ春向之を見て悲  
 憤に堪へず永正十四年十一月六角定頼に謂て曰く高峯亮政と  
 君臣たり故に姑く意を枉ぐ請ふ速に亮政を討てと定頼之を諾  
 す十五年二月春向病む自ら其の起ざるを知り二子に告げて曰  
 く余の歳既に華甲に躋れり壽に不足なし但た亮政をして赤族  
 に至らしめざるを恨むのみ汝等能く我君を扶戴し力を盡せて  
 我武を辱かしむることなかれと言ひ畢りて瞑す高峯其の計を  
 聞き歎して曰く春向の死は我家の衰兆なりと江北の諸豪亦皆  
 之を惜しむ子某對馬守と稱す(野史)

**アサヤマ** イチヂンサイ 淺山一傳齋は劍客なり身の  
 丈六尺(イバチヨス井ケン傳を見よ)

**アサヤマ** イリムアム 朝山意林菴は平安の儒者なり  
 名は素心字は藤丸、意林菴と號す初め五山の長老に學ぶ朝鮮  
 使節李文長至る乃ち就て説を受く寛永中大納言忠長に從て駿  
 河に往き居ること三年致仕して歸る後ち又時々西海に遊ぶ承  
 應二年後光明帝辟して易經を講せしむ朝儀、三位に至らざる  
 ものは殿上に昇るを得ず而るに素心は優禮を蒙り處士を以て  
 を着く寵遇優渥多く書器の賜あり三年帝崩す乃ち塵外に靜處  
 して悠然自適す後ち諸侯交々徵せども終に出でず寛文四年九  
 月疾を以て歿す年七十六素心詩文傳らず惟た小瀬甫菴の太閤  
 記現に存するのみ一説に曰く素心は本と豐臣秀頼に仕ふ故  
 に小瀬甫菴が太閤記を纂修するに當り其の手を假るもの多し  
 素心其跋文を作るは皆私かに故主に報ゆる所なりと(先哲叢談)

**アサリ** マサヨシ 淺利政吉は字は金助蒲生家に事ふ常  
 に圖書を好み寢食を忘る工に土岐土佐の風格を具へ岩樹も亦  
 趣きあり(頼本朝書史)

**アサリ** ヨシトホ 淺利義遠は甲斐源氏にして安田冠者

義清の子、義定の弟、與市と稱す壇浦の戦ひに和田義盛射て...

アサ井 カイロウ 浅井海樓は京師の儒者なり名は置良...

アサ井 サウシユム 浅井草春字は白一舊名は將成山城...

世に公にす醫書を板刻するは此を以て權輿とす(皇國名醫傳前篇)

アサ井 トナム 浅井圖南は醫なり又書を善くす名は惟寅...

是に於て龍興敵に内通せし者ありと爲し岐阜に退く長政勝つ...

アサ井 ナガマサ 浅井長政は江州小谷の城主なり久政...

アサ井 ナガマサ 浅井長政は江州小谷の城主なり久政の子、幼名猿夜叉、後新九郎と改む...

アサ井 カサロウ

アサ井 ナガマサ

アサ井 カサロウ

アサ井 ナガマサ

アサ井 シトク 浅井士徳名は奉政箱左衛門と稱す享保...

アサ井 スケマサ 浅井亮政は江州小谷の城主なり姓は...

アサ井 ソウズ井 阿佐井宗瑞は和泉の醫なり文科に...



年決せず是れ武事に依るなり然れども親戚の好あり請ふ城を出で、盟約せば宜く家國を保たんと長政死を矢ひ應ぜず夫人及び三女を送り歸へす信長再三長政を諭す長政曰く久政無事ならば我亦諾せんと信長陽りて久政未だ死せずと告く長政從者數名と將に信長の營に到らんとして城を出づ適々久政の死を聞き悔い且怒りて自殺す年廿九、法名大英宗清、養源院と號す寶永九年九月大納言正二位を贈る二男三女あり二子皆殺さる長女茶々後秀吉の側室となり淀君と稱す二女京極高次に嫁す三女阿江與徳川秀忠に配し家光及び忠長を生む(野史、常山紀談)

**アサ井 ヒサマサ** 淺井久政は江州小谷の城主にして亮政の次男なり初め新九郎と稱し後ち下野守に改む天文十五年襲き立つ軍事を憂へず符を好み諫を拒み諷を信し老臣を疎んず兵力衰ふ弘治二年久政益々懶惰、士民心を反く大橋秀元切に諫め怒を避けず久政諷を信し召て之を殺んとす秀元書を長政に遺して自殺す長政嘗て六角氏と戦ひ克たず谷を老將に歸す赤尾清綱答て曰く兵を用ふるは鷹を放つか如し主將の指揮如何にあり臣等老幼と雖も筋力未だ衰へず先君若しあらば復た老耄と雖も能く功あらんと久政言窮す三年三月久政鷹を境上に放つ諸將長政を大谷に入れ久政に告て曰く君將たるのみに非ず臣等長政を立つ君早く老せよと久政怒る然れども拒む能はず十月長政の母之を和解し久政を別邸に置く天正元年秀吉小谷の通路を斷つ久政子政元政春と皆自殺す年五十法名兵藏良峻、甲堅院と號す(野史)

**アサ井 フウス井** 淺井風睡は俳人なり利右衛門と稱す伊賀上野の人(俳林小傳)

**アサ井 マサミチ** 淺井正路は惟寅の男、書を能くして上總介大舍人たり(名家全書)

**アサ井 モトアキ** 淺井元秋は徳川幕臣七平元久の子なり初め八郎左衛門と稱し又彦五郎織部と改め後に隼人といふ

アサ井 ヒサマサ

アシカ、ギセウ

**アサヲカ ヘイベエ** 淺岡平兵衛は吉田流の射術家に於て石堂如成の弟子なり尾州清洲の人、忠吉に仕ふ慶長十一年正月十九日始めて蓮華王院に射る(武術流祖錄)

**アサヲ デンゴラウ** 淺尾元五郎は京師の俳優なり享保中の人、久菊と共に一時に名あり元五郎は立役なり

**アシカ、イヘナガ** 足利家長は越前守高經の長子、孫次郎と稱す從五位下に叙せられ陸奥守と爲る延元二年中納言源顯家を鎌倉杉本に遷へ撃ち克たずして死す(大日本史)

**アシカ、ウヂツ子** 足利氏經は高經の次子なり民部少輔、左京大夫と爲る正平七年筑紫探題と爲りて豊後に抵る菊地武光來り攻む氏經子松王丸をして少貳頼尙等七千人を率ひ逸へて長者原に戦はしむ敗れて還る氏經退きて高崎城を保つ又武光の爲に圍まる歳餘にして解けず氏經脱走して京に還り剃髮して僧と爲る之を知らず初め氏經の任に赴くや兵庫に觸し毎船妓を載す識者其の必らず敗れんことを知ると云ふ(大日本史)

**アシカ、ウヂミツ** 足利氏滿は鎌倉管領なり父基氏薨するに及んで氏滿襲て管領と爲る年甫めて九歳明年正平二年一揆河越城に據る氏滿執事上杉憲顯を率て攻めて之を滅す宇都宮又亂る撃て之を平ぐ頃ありて新田義宗脇屋義治並びに起て南朝の興復を圖る氏滿上杉憲將上杉能憲等を遣し兵に將として之を攻めしむ義宗敗死し義治出羽に走る建徳元年義宗等の餘黨武藏上野の間に勃起す氏滿上杉朝房及び畠山基國を遣し攻めて之を走らす文中二年後圓融院左馬頭を授け從五位下に叙す天授五年土岐康行兵を起して足利氏滿に呼く義滿兵を氏滿に徵す氏滿上杉憲方を遣はして之に赴かしむ康行降ると聞て還る是時義滿頗る政事に怠り稍や人心を失ふ會々義滿將に土岐頼康を誅せんとして兵を諸國に徵す氏滿上杉憲方を遣し兵に將として之に赴かしむ是に於て氏滿機に乗じて驀て義滿に代らんと欲す上杉憲春苦諫して自殺す氏滿乃ち止む明

アサ井 ヒサマサ

アシカ、ギセウ

致仕して恣睡と號す甲州流の兵學を太地寄治に學び奥旨を得たり伊達綱村俸米百人口を與へ公義使となす累進して大番頭となり評定役をかね旗奉行となり尋て若老となる祿を増賜すること二次并せて千石に至る大石良雄細井廣澤と刎頸の交をなす良雄の義舉に際し廣澤と共に竊かに相助る所あり良雄その徳に感じ愛する所の刀一口を贈る今尙その支家に存すといふ享保十年三月九日を以て歿す年八十一綱村別墅を郷六に築き郷六御殿と稱し寺を茂々崎に創し兩足山大年寺といふみな元秋をして地を相せしむ名は圓圃佛刹に過ぎずといへども居然として長蛇の勢を存す蓋し築城の法を以てこれを經始するといふ(仙臺史傳)

**アサ井 リムアム** 淺井琳菴は園部侯の儒員なり名は重遠、琳菴は其號、萬右衛門と稱す近江の人、山崎闇齋の門人、園部侯に仕へて義解説、武要鈔を著す(櫻語家人物誌)

**アサ井 レウイ** 淺井了意は著作家なり京都の人字は子石、靜齋、如曇子、松雲、又瓢水子と號す戲著を善くす東海道名所記本朝女鑑日本廿四孝太平記首事等世に行はる寶永六年九月廿七日歿す年七十(戲曲小説通志、名人忌辰錄)

**アサ井 井カウ** 淺井惟亨は京師の御醫なり從五位長門守と稱す字は子元、南阜と稱す傍ら女雅を學んで能くす(墨定傳)

**アサヲ** 淺尾は毒婦なり加州侯の妾貞の方の老女なり貞及び大槻傳藏の惡計に與し露はれて獄に繋がる(オホツキデマザウの傳を見よ) 訊問甚だ嚴なるも白さず或は曰く蛇を以て槽に盛り淺尾を之に投ずと未だ信すべからず寶曆六年四月十日舌を咬て死す或は曰く竹鐸の刑に處せらるると

**アサヲカ ハウシヨ** 淺岡芳所は河越侯の儒員なり名は冀之、字は子善、芳所は其の號、喜藏と稱す武州の人、學を河口靜齋に受く或は云ふ室鳩巢に受くと後ち河越侯に仕ふ芳所經說等の著あり明和中に歿す(諸家人物誌、墨定傳)

年左兵衛督と爲り從四位下に進む小山義政兵を起す宇都宮基綱往て撃つ克たずして死す氏滿乃ち上杉憲方を遣して義政を攻めしむ義政僧服を被て罪を請ふ氏滿之を赦す弘和二年義政又兵を起す氏滿親ら撃て之を斬る元中三年義政の子若丸將として之を攻む若丸戰敗ぶれて陸奥に走る氏滿上杉憲孝を遣し追ひて之を殺す氏滿兵を進めて白川に至る則義亦た敗れて自殺す乃ち引て還る四年小山五郎男體城に據る上杉朝宗を遣はして之を撃つ明年朝宗攻めて之を拔き小山氏を滅す八年山名氏清亂を作す明年春氏滿將に義滿を援けんすと氏清已に平ぐと聞て止む義滿陸奥出羽を以て遙に氏滿に授く進んで從三位に叙せらる應永五年薨す年四十二一作四十四法名道全、永安寺と號す氏滿酒を嗜んで雨ふる毎に必らず内外臣僚を會し款曲を盡くす嘗て酔ひて侍者に語りて曰く天子も人なり將軍も人なり我も亦人なり我に事ふる者も亦人なり而して上人は下人の疾苦を知るに如かず上下位を易ふれば則ち治し難からずと子滿兼、滿直、滿隆、滿貞、滿秀、女一人あり(大日本史)

**アシカ、エイリウ** 足利永隆は義滿の第七子にして一周喜と名づく永隆相國寺に入りて僧と爲り虎山と號す或は立山と稱し聯輝院と號す(野史)

**アシカ、ギカク** 足利義覺は義政の第二子なり義覺三寶院に入りて僧と爲り權僧正に任せらると云ふ

**アシカ、ギシヤウ** 足利義承は義滿の第八子なり梶井に入りて僧と爲る後ち大僧正と爲り天台座主に補せられ三后に准す應仁元年寂す(野史)

**アシカ、ギセウ** 足利義照或は義昭又義有には將軍義滿の第六子にして義教の異母弟なり義照大度あり僧となりて大覺寺宇智院に居り又仁和寺西院に住す大僧正に任し三后に准せらる將軍義繼立て驕暴人を諷し稍々衆望に背く義照以て好機となし小倉王子に説て曰く方今將軍新に立て暴戻人意に畔く

王子若し有爲の志あらは臣爲めに力を盡して四民の愁苦を救はん且之を聞く此頃畿甸の宮方及び一色氏の一族怨を幕府に構へ又結城の兵起りてより東國の亂る、甚し此時に當り王子若し令旨を九州の將士に下し之を招諭せば大業坐して成るべしと王子大に悦び乃ち書を菊地、大村の徒に寄す義照則ち病と稱して髪を蓄ふ既にして事頗る洩れ義教大に驚き義照を索むる甚た急なり嘉吉元年三月義照逃れて薩摩に至る十三日農民群起して義照を合圍す義照格闘して死す時に年三十七なり或は曰ふ義照通れて日向福島院に在り島津忠國人を遣はし之を圍み遂に義照を殺す(野史)

アシカ、シゲウヂ 足利成氏は持氏の第四子にして鎌倉五代の管領なり小字永壽永享十一年管領持氏執事上杉憲實と隙を生し戦ひ破れて自殺するや二兄春王、安王は通れて日光に奔る永壽は信濃に遣はれて母黨大井持光に依る既にして春王、安王使を結城氏朝に遣はして曰く請ふ子の力を假り上杉氏を撃ちて以て父の仇を復さんと氏朝其の將士を會して曰く吾れ佐公の恩眷を被り而して其の死を救ふ能はず今兩郎君我れに託するに大事を以てす是れ武人の榮なり吾れ力を出し生死之を以てせざる可けんや乃ち其子光久をして二孤を迎致せしむ因て大に宗族を聚め結城古河の二城を修め兵を分て之を守り持氏の遺臣一色野田大井吉見の諸族并び起て之に應ず事京師に聞す將軍義教諸將と發し結城を圍む氏朝數、上杉氏の軍と戦ひ之を破る然れども義教大に諸道の軍を遣はして上杉氏を援くるを以て戦ひ利あらず結城古河の二城遂に陥る氏朝父子戦死し二孤又上杉氏の兵に獲られて死す時に嘉吉元年四月なり獨り永壽通れて大井氏の許に在り上杉氏之を知らず既にして憲實其の結城を攻めたるを悔ゆ愧ぢて髪を削る又其の二子を以て僧と爲し自ら西奔して晦匿す猶一子伊豆に在り是を龍稱と爲す持氏亡びしより關東靖からず長尾昌賢建議して持氏の胤子を立てて以て衆心を慰藉せんと欲す乃ち永壽を案

アシカ、シゲウヂ

アシカ、タカウヂ

貞氏を生み貞氏亦た北條氏を娶りて尊氏を生む尊氏元應元年從五位下に叙し治部大輔に任ぜらる元弘元年後醍醐帝兵を起して北條高時を討つ尊氏適、父の喪に遭ふ高時強て之を起し往て笠置赤坂を攻めしむ尊氏運勉之に赴き城陥りて還る帝船上に在るに及び高時又尊氏をして名越高家と軍を總べて西に嚮はしむ尊氏會、疾あり高時屢々之を促す尊氏怒りて謂ふ往日憂服の中に在るに彼れ之を恤まらず反りて起して役に赴かしむ今ま病みて是の如し然るに又復た逼る人を虐ぐると一に何ぞ此に至ると始めて歸順の志あり初め大父家貞貞氏源氏の胃胤を以て北條の爲めに裁制せらるゝを忿り毎に之を滅せんとするの計あり而して終に果さず尊氏豊に乘じて先人の志を濟さんと欲す即ち疾を力めて起ち將に族を擧て西に行んとす高時の老臣長崎圓喜之を聞て高時に謂ひて曰く足利氏は源氏の宗なり今行くに屬を擧げて自ら隨ふ其の意測り難し何ぞ誓書を作り妻子を留めて質と爲さしめざると高時乃ち尊氏に誓書を徴す尊氏之を弟直義に謀る直義曰く要盟は神の亨けざる所、今大義を擧げて無道を誅せんと欲す小節何ぞ顧るに足らん幼息は竊かに衛るに家士を以てし嫂氏は之を相州赤橋相模尊氏に納に附せば以て憂と爲すに足らじと尊氏之を然りとしして誓書を高時に遺る高時大に悦び尊氏に贈るに義家建る所の白旗を以てし副ふるに鞍馬鎧刀を以てして曰く此の旗は君家累世の重器にして二位禰尼の我が家に傳ふる者、今以て君に遺ると尊氏心竊かに自ら喜ぶ直義及び吉良上杉仁木細川今川荒川の諸族と兵三千を率ゐて鎌倉を發し名越高家に先ちて京師に到る翌日間に海老名季行を船上の行在に遣はして歸順を乞ふ詔して賊を平らぐるの日賞は其の請ひに依らんと報ず、高家腫に至る其の謀を知らず時に源忠顯、赤松則村、六波羅を攻む北條仲時、時益之を禦ぐ高家尊氏と期を刻して往て忠顯等を攻む高家矢に中りて死す尊氏兵を引て大原野に到り飲を張りて之を久らす傍に古刹あり勝持寺と名づく大に喜びて曰く

アシカ、シゲウヂ

アシカ、タカウヂ

我將に勝ちて之を持たんとす高家敗死すと聞き乃ち轉じて丹波篠村に至り旗を八幡の廟側の柳樹に建て始めて義を唱ふ本國の人久下時重兵を率て先づ至る其の旗號に一番の字を書き尊氏執事高師直を召して之を問ふ師直對て曰く昔右大將殿義を杉山に起すや彼の祖重光諸將に先ちて至る右大將之に謂ひて曰く我若し志を得ば其れ汝を以て賞首と爲ん自ら一番の字を書して之に賜ふ因て以て旗に銘す尊氏喜びて曰く是れ我が家興隆の兆なりと是より降附する者相踵て二萬人を得乃率て京に入る發するに臨みて廟に禱り薦むるに隻矢を以てす直義以下將士各々之に倣ふ須臾にして矢を積て丘を爲す行降兵を收めて又三萬人を得大江山を過ぐる比ひに鳩あり旗上に翔る尊氏以て瑞と爲し命じて其の之く所に隨ふて行軍せしむ神祇官の故趾に至りて止る因て此に陣す北條仲時、時益兵二萬を發して來り拒ぐ尊氏與に戦ひて之を卻ぞく遂に則村忠顯と兵を合して六波羅を圍む仲時等光嚴帝を奉じて東に奔る途に皆敗死す六波羅平らぐ尊氏功を以て鎮守府將軍と爲り進みて從四位下に叙し左兵衛督に任じ内昇殿を聽さる尋で從三位に叙せられ武藏守を兼ね詔して今の名に更へしむ尊氏は則ち帝の偏諱、賜ひて以て之を寵す建武元年恢復の功を追論して尊氏を第一と爲し武藏常陸下總守護と爲す正三位に叙せられ參議に拜せらる時に天下始めて定まり政治家に歸す朝臣方に依復に頼て遠かに國郡兵馬の制を革めて一に古に還さんと欲し大に武士を抑排す是に由りて衆憤々として怨み天下の權復た將門に出でんことを思ふ率ね多く望を尊氏に屬す尊氏固と大志あり常に時勢を睨視して以て宿謀を濟さんとを圖る直義之が計書を爲す征夷大將軍護良親王は才武にして器畧あり深く尊氏の所爲を惡み屢々之を除かんとを請ふ帝聽かず護良密かに兵を徵して之を圖る尊氏乃ち帝の寵姫藤原氏に憑りて護良の謀反を告げ其の反書を上る帝之を信じて鎌倉に放ち尊氏の家士に付して護送せしむ是に於て姦計滋々甚はだし二

年北條時行亂を作して鎌倉を攻む直義戦ひて利あらず人を遣して護良親王を執ひ成良親王を奉じて西に走る時行の兵勢日に熾なり尊氏自ら討んと請ふ詔して之を許す又九征夷將軍に任じて東國を管領せんことを請ふ朝廷聽かず更に征夷將軍に任ず尊氏大に怒り辭せずして發す是に於て武士職を失ひて朝家を怨望する者一時に奮起して景從軍軍矢矟に到り直義と合して前北條時行兵を遣して橋本に拒ぐ尊氏擊ちて之を卻け轉戦して相模川に到り又大に之を破る時行の兵遂に逃潰す尊氏進みて鎌倉に入る帝遙かに從二位を授く又源具光を遣して勞を宣し且其の師を班へさんとを促がす尊氏詔を奉せんと欲す直義固く執りて可かず尊氏之に従ふ乃ち源賴朝の舊趾に依りて府治を開置し自ら征夷將軍東國管領と署して有功を擢賞し降附を撫納す武士大に喜ぶ北條氏の黨與と雖も心を傾けて争ひ歸す時に新田義貞も亦源氏の胃宗族望尊氏と相對して俱に中興の勳臣たり尊氏固く異圖あり毎に其の功を害して意深く之を忌む是に至りて謂へらく此時に乘じて義貞を除けば則ち其の勢以て朝廷を制するに足らんと又帝の己を助けて以て義貞を討たしめんことを欲し上書して其の罪狀を列し新田氏地邑の東國に在る者を奪ひて悉く部下に分配す直義又密に書を四方に移して兵士を招集す是に於て郡國黨を樹て類を分ち親信舊故目を灰だてて相視る其の志朝廷に在る者は關左を委て西上し意を尊氏に通ずる者は關下を辭して東に赴く來往續紛道路織るが如し公卿屢々尊氏の反狀を奏す帝僧惠鎮をして鎌倉に往きて旨を諭し且つ其の情狀を察せしむ未だ行かざるに細川和氏尊氏の書を以て至る意は義貞を討つる旨を賜はらんと云ふにあり義貞も亦上書して尊氏の反狀を告ぐ南海西海も亦尊氏兵を促がすの書を上る乃ち詔して尊氏在身の官爵を削り義貞を遣して尊氏親王を奉じて尊氏を討たしむ東海東山並び進む直義諸將と戎裝して尊氏に見え兵を發して迎へ拒がんと請ふ尊氏默然たること良久して徐ろに直義等に謂

アシカヤ タカウヂ

ひて曰く今體を被むるは正に親王を執ふと兵を拒くとを以ての故なり二者皆我が爲す所に非ず陳情控訴して其の疑ひを解かん或は聽かれざれば便ち當に難髮遺世して以て自ら罪なきを明らかにせんのみ卿等善く身の圖を爲せ我敢て弓を彎て王師に向はざるなりと言未だ畢らざるに色を作して起つ直義等相見て錯愕す諸將私に直義と謀り兵を發して往て拒ぐ利あらず直義繼て發して手越河原に戦ひて大に敗る官軍退ひて伊豆府に抵る尊氏諸將兵を發すると聞て身に反名を受けんことを惡み軍事を以て直義に付して建長寺に通入り誓を截りて僧と爲らんと欲す左右の諫めに因りて止む直義等自ら軍を喪ひて還る則ち府門皆閉づ扉を叩く之を久うして須賀公能出で迎へ具に尊氏の狀を言ふ上杉重能直義と謀りて諸道に下す繪旨の文を偽作して云ふ參議足利尊氏左馬頭足利直義肆まゝに武威に矜りて朝廷を輕蔑す爰に六師に命じて往て反臣を征せしむ尊氏兄弟身を桑門に投じ陸を山林に遷ると雖も所在窮討して嚴に捉擄を加へ以て朝憲を正して通逃せしむる勿れ手越の戰に獲持して建長寺に至り尊氏に視せしめて同く是れ手越の戰に獲持せざらん願くは門戸の計を思へと尊氏奮然として起ちて曰く死生汝と俱にせん乃ち道服を脱し錦直垂を着て出づ軍士大に喜ぶ衆皆誓を絶ち以て尊氏に同じ官軍をして辨識するを得ざらしむ逃亡の士卒之を聞きて争ひ還る一日間に三十萬と號す直義先づ發して箱根山に向ふ尊氏別に嶮道より直に竹下に出づ足利高經等先鋒と爲りて尊氏親王の前軍を擊ちて之を却り脇屋義助更に進みて奮戦す會々大友貞載、鹽谷高貞來降す因て與に夾み攻めて大に之を敗る義助西に走る箱根の官軍之を聞て夜潰ゆ義貞諒をして留りて鎌倉を守らしめ自ら直義と官軍を尾して西上す延元元年正月近江に至り攻めて伊岐州城を拔く官軍要衝に屯據して橋を撤し水柵を施す尊氏諸軍を分遣して勢多芋洗を攻めしめ親ら軍を帥て大渡に向ひ義

貞と河を隔て陣す進み攻むる毎に溺死する者數千人會々細川定禪四國の兵を招集して赤松範資と俱に進みて山崎を攻め撃ちて脇屋義助の軍を走らし長驅して京師に入る義貞及び諸路の官軍皆潰走し乘輿を奉じて延曆寺を保つ定禪等火を放ちて宮闕を火く尊氏等軍を總べて京師に入り藤原公賢の第に居る園城寺延曆寺と素と相惡む尊氏書を園城寺に贈りて僧徒を招誘す僧徒悦び從ふ尊氏乃ち細川定禪等を遣し園城寺に據りて以て行在に逼らしむ既にして義貞顯家定禪を攻めて大に之を敗る尊氏塵の揚がるを望んで曰く園城寺敗る當に急に救を遣るべしと自ら三條河原に出で將士を部分す義貞亡ぐるを追ひて已に京師に入り分ちて東山の麓に陣し潛かに兵をして裝ふて園城寺の敗卒の爲ねして混じて麾下に入らしむ尊氏之を覺らざり亦大に陣を布きて以て俟つ既にして尊氏義貞と戰ふこと數十合義貞遺す所の兵俄かに左右に起る麾下動動して遂に大に敗れて西に走る官軍勝に乗じて急に躡す桂川に至る比ひ尊氏管むこと甚だし將に自殺せんとし適々日暮に會ふ追兵引て還る僅かに免るゝとを得たり即夜定禪襲ひて義貞を破りて之を走らす尊氏復た京師に入る居ること數日官軍道を分ちて來攻む尊氏拒で大に敗る義貞路を分ち之を追暮に抵りて官軍引去る尊氏又京師に入る明日楠正成間を遣して言ふ義貞等戦ひて桂川に死す尊氏之を信じ其の衆の奔逸するを過めんと欲し分ちて兵を諸路に遣す麾下單弱なり官軍疊を伺ひ火を縱ちて急に攻む尊氏大敗し丹波に走る敗卒兵庫に聚り將に尊氏を迎へて再び京師を攻めんとすと聞て乃ち往て之に會す赤松則村入りて摩耶山を保たんと請ふ諸將或は曰ふ將軍一日城に入らば諸軍望を失し官軍勝に乗せん從ふ可らずと尊氏乃ち止む適々顯家義貞兵を率て來攻む直義豊島河原に拒ぎ戰ふ利あらず明日大友貞宗等戰艦を率て來援く直義之を率て湊川に戦ふ又敗る既にして尊氏兵を進めて瀬川に至る細川和氏等貞宗等を率て義貞と戦ふ克たず則村尊氏に説きて曰く宜

アシカヤ タカウヂ

く西に行き九國の兵に頼りて再び京師を取るべしと貞宗も亦言ふ我船三百餘艘以て西行の資と爲すべしと尊氏之に従ひ倉皇として海に泛ぶ士卒舟を争ひて相排擠す溺死する者二千人許り鎗馬悉く委棄す播磨室津に至り軍を駐めて謀議す或ひは曰く官軍必ず將に我を躡んとす請ふ諸將を分遣して國郡に據り以て之に備へんと尊氏曰く善し乃ち佐竹義教を東國に仁木順章を丹波に、細川和氏、細川定禪を讃岐に、上杉憲顯を石見に、今川範國を備中に、桃井小早川氏を安藝に、大内弘世を周防に、厚東宗西を長門に、石橋和義を備前に、遣還し赤松則村を播磨に留め並びに機を伺ひて同じく舉げしむ尊氏直義と僅に見卒五百人を率て赤間關に至る少武頼尙選兵五百を率て來會す筑前蘆屋に至る宗像大宮司宗像政頼迎へて館せしめ資くるに鎧馬を以てす是に由りて軍を擧げて稍々安んず菊池武敏兵數萬を以て來り攻む諸將尊氏直義並ひ進んことを勸む尊氏曰く我九國に至りて始めて敵と交戦す而して我二人齊く進んで小蹊跡あらば全軍皆殺せん如かず留りて軍後に在り先鋒をして恃む所あらしめんには若し利あらざれば徐かに麾下を率て之に赴くも未だ晚からざるなり先づ直義をして往て拒がしむ大に多々良濱に戦ふ直義の兵士鎧仗具はらざり徒歩して赴き戦ふ衆必死せんことを懷ふ一以て百に當らざるなし武敏敗走す直義追ひて博多に至る武敏返戦す銳甚はだし尊氏乃ち兵を壓て前み大に武敏を敗る松浦神田氏尊氏の軍を望んで以爲く數萬至ると旗を偃せて來降す武敏走りて肥後に還り菊池城を保つ一色頼行等をして攻めて之を抜かしむ武敏逃匿す九國風を望みて降附す時に美作備中の土豪一時蜂起して悉く尊氏に應ず帝新田義貞に詔して西討せしむ義貞大軍を將て白旗城を圍み兵を分ちて奈義能仙菩提寺三石城を攻めしむ尊氏太宰府に留りて月を踰ゆ衆或は謂ふ勢に乗じて京師に入らん或は謂ふ秋熟を待んと議未だ決せず會々赤松則村其の子を遣して速に京師に向はんことを勸む石橋和義の使も亦急を告ぐ尊

氏乃ち一色頼行仁木義長を留めて九國を守らしめ急に太宰府を發して長門に抵り守護厚東宗西に命じて悉く其の舟を發せしむ嚴島に到るに及びて禱祀すること三日初め尊氏の京師を陥るゝや後伏見帝の胃胤を奉じて帝と爲さんと謀る而して諸皇子皆從ひて延曆寺に幸して果さず敗れて兵庫に奔るに及び赤松則村も亦以て言を爲す時に熊野別當道有從ひて軍に在り素と藤原資名と相識る尊氏道有に謂ひて曰く吾軍の屢々敗るは王師に抗するを以てなり吾將に光嚴帝の院宣を請ひ兩帝をして國を争はしめんとす乃ち道有を遣し資名に因て之を請はしむ是に至りて三寶院の僧俊賢光嚴帝の書を齎らして至る尊氏悦びて曰く我が事濟ると乃ち日章錦旗を製す是に於て四國西國の兵士大に來集して軍益々振ふ尊氏少貳頼尙の議に従ひ舟師七千隻を率ゐ直義歩騎二十萬に將として水陸並ひ進む直義進みて福山城を陥る義貞白旗等の圍を解き退て兵庫に屯す尊氏直義進みて兵庫に抵る錦旗日に曜き鉦鼓地に震ふ脇屋義助經島に、楠正成淡川に、義貞和田崎に陣し、細川定禪の兵二百餘人先づ義助と戦ひて悉く歿す定禪更に舟師を率ゐて岸に傍ひて耕邊濱に向ふ義貞義助營を空うして舟を逐ひて東す尊氏の兵一時に船を下りて和田崎に登る直義既に攻めて正成淡川に克つ乃ち俱に軍を合して義貞と大に生田森に戦ひて之を敗る義貞走りて京師に還り駕を奉じて延曆寺に幸し法皇光嚴院を促がして行在に詣らしむ光嚴院病に託して往かず尊氏進みて男山に陣し法皇光嚴院を迎へ之を奉じて東寺に據る公卿稍々來集す尊氏吉良石塔滿川島山氏をして東坂本に由り仁木細川今川荒川氏をして無動寺に由り高、南部、嚴松桃井氏をして西坂本に由り延曆寺を攻めしむ官軍拒ぎ戦ひて之を破る諸軍大に潰れ自ら相陥藉して死する者千許官軍勝に乗じて來り攻む尊氏弱卒を出して之を誘ふ官軍退ひて京師に入る乃ち大に兵を出し街衢を塞礙して縱橫攻撃す官軍又東西夾みて東寺を攻めんと謀る尊氏其計を探知し乃ち軍を分ちて三と

アシカマ タカウヂ

爲し一を東山七條河原に一を船岡の麓に一を遊軍と爲して西八條に陣せしむ官軍果して大舉して火を縱ちて來り攻む諸軍合撃して大に之を敗る時に帝延曆寺に詔し興福寺に牒して官軍を援けしむ興福寺之に應ず是に於て近畿の兵多く起ちて官軍に屬し水陸の糧道を絶つ尊氏の軍大に困しむ始め猶鐵馬を賣りて食に供す久くして給する能はず乃ち四出して食物を劫掠し衣服を褫奪す京師の居民兵燹に累經して既に資業を失ふに復た殘暴に遇ふ往々出て乞丐し飢て路上に臥す公卿と雖も亦飢渴漂泊を免かれず喪亂の慘極まれり官軍復た兵を出して來り攻めんとす尊氏細川定禪等を遣して撃ちて之を走らす義貞又諸軍と約して日を刻し尊氏を攻む火を擧ぐるを號と爲す會々白河の民家火を失す藤原隆資之を望みて直に進み東寺南門を攻む高師直進へ撃ちて破らる隆資勝に乗じて急に譙樓に薄まる時に兵皆外に出で、在る者は只だ老弱のみ驚怖して爲す所を知らず而して尊氏經を誦して少しも怖るゝ色なし會々土岐頼直變を聞て馳せ至り大に羅城門外に戦ふ師直も亦尊氏俱に奮撃して之を卻く俄かにして義貞徑より東寺に門を出でて戦はんとす上杉重能固く諫めて之を止む土岐頼直等義貞の後に出で、之を圍むこと數重義貞圍を突て脱し去る尊氏義貞院を位に復せんと欲す衆謂らく此の主は往時北條高時之爲めを立てられ曾て年を踰えずして海内覆亂し北條氏滅ぶ之を立つるは不祥なりと遂に弟の豊仁親王を奉じて帝と爲す是を光明帝と爲し號を建武と爲す民間之が爲めに語りて曰く君王は多福なり未だ親ら一戦だもせずして將軍賜ふに王位を以てす是より南北朝の戦となる興福寺南軍の援を爲す尊氏邑を與へて之を誘ふ是に於て叛きて尊氏に黨す乃ち足利高經を遣し兵を以て北陸道を扼せしめ小笠原貞宗をして甲斐信濃の兵を率て近江野路に屯せしめ南軍の糧道を梗がしむ南軍内糧食に乏しく外攻伐に利なし勢ひ孤に援ひ絶えて窘飢益々甚だし

尊氏密かに使を遣し僧忠圓に頼りて偽りて降を乞ふ帝之を許す尊氏大に悦び曰く誰か謂ふ君王は敵明なりと已に吾が計中に陥りたりと又た書を從親の諸將に貽りて之を招慰す是の冬義貞皇太子を奉じて北、越前に奔り車駕京に還る尊氏直義をして奉迎せしめ遂に帝を華山院に幽し悉く駕に從ふ公卿の官職を奪ひ將士を拘繫し三神器を新主に傳へんことを請ふ帝乃ち偽器を授く又帝の詔を矯めて足利高經仁木頼章等を遣し義貞を金崎城に攻めしむ何ばくもなくして帝夜に乗じて吉野に幸す京師騷擾し諸將馳せ至る尊氏曰く頃者帝華山院に在り諸將をして警衛せしむ固く煩勞なり然れども若し先代に倣ひて帝を海島に遷すは敢て安んぜざる所あり我れ甚だ之を憂ふ今帝の自から出づる安んぞ福に非ざるを知らん但、其の所在に就て漸く之が謀を爲さん耳是に於て衆始めて安んず是の歳光明院尊氏を拜して權大納言と爲す二年足利高經高崎城を陥れ皇太子を執へて京師に送る尊氏之を幽す義貞桐山城に入り北國を經略して兵勢又振ふ尊氏高經に命じて之を攻めしむ冬源顯家等鎌倉を攻む義詮敗走す三年土岐頼遠等顯家と青野原に戦ひて大敗す尊氏大に驚き高師泰師冬等の諸將を遣して之を援けしむ頼遠等顯家を尾して黒地に至り前後夾み撃つ顯家を伊勢に轉ず師泰退ひて雲津川に戦ひて克たず顯家奈良に入る桃井直常兄弟を遣して之を撃たしむ又克たず時に義貞越前府城を援く高經大に敗れ走りて足羽を保つ高經の皇太子を執ふるや誘ひて義貞義助の所在を問ふ太子給いて曰く皆自殺す故を以て杣山の攻めを緩うす是に至りて尊氏始て給かれたるを知り直義と謀りて藥を進めて皇太子及び成良親王を殺す源顯家屢々兵を和泉に出し弟顯信をして男山に據らしむ尊氏高師直を遣して之を攻めしむ既にして顯家敗死し男山陥る高經義貞と相持して之を久らす義貞矢に中りて死す是に於て諸國の官軍勢日に盛り將士相率て來降す光明院尊氏に正二位を授け征夷大將軍に拜す四年高經新田義助と越前に戦ひて敗

アシカマ タカウヂ

らる尊氏、高師治及土岐頼遠等をして之を援けしむ既にして城陥る是の歳後醍醐帝崩じ後村上帝登祚す興國六年見高徳備前に萩野朝忠丹波に起る尊氏山名時氏を遣して之を攻めしむ朝忠降る正平二年楠正行兵を攝津に出し以て京師を伺ふ細川顯氏等を遣して之を拒がしむ屢々敗らる復た高師直等を遣す明年春師直等正行と四條畷に戦ふ正行敗死す師直等進みて吉野に逼る帝出て賀名生に幸す師直行宮に火して還る是歳光明院位を興仁に讓る是を崇光院と爲す四年直義上杉重能昌山直宗と謀りて高師直を殺さんとす事漏る師直怒りて將に直義を攻めんとす諸將多く之に應ず尊氏大に驚き使を直義に遣して曰く師直兄弟奢驕悖、復た君臣の禮なし變測る可らず宜く急に來りて安危を共にすべしと直義即ち出で之れに赴く從兵途に亡げて宗成信近在る者僅に千人に過ぎず明日師直師泰兵を率ゐて來圍む尊氏怒りて須賀清秀を遣して師直を讓む師直對へて曰く臣他志なし止だ讒臣を執へんと欲する耳と軍を麾て進む尊氏益怒りて將に出で戦はんとす直義固く諫めて其の請ふ所を許さしむ尊氏之に従ふ師直圍を解て退く尊氏乃ち直義を罷め義詮を召して京師に入りて軍政を掌らしめ重能直宗を越前に流す師直逼りて之を殺さしむ又直冬を忌みて之を殺さんとす直冬逃れて肥後に到る五年三角某直冬に應じて兵を石見に起す尊氏師直師泰を遣して之を攻めしむ時に土岐頼明尊氏に美濃に反す尊氏師直を召還し義詮と共に撃ちて之を平らげしむ直冬勢ひ稍々強大冬尊氏師直等を率て往て撃つ即夜直義潛かに出亡す師直留りて之を索めんと請ふ尊氏聽かずして發す適々直義歸順すと聞て途より還る六年春直義男山に桃井直常延曆寺に據り將に義詮を京師に攻めんとす義詮京を棄て、走る直常京師に入る尊氏義詮に西郊に遇ふ軍を分ちて直常を攻めて之を走らす尊氏京師に入る是夜多く直義に降る明日尊氏師直と西に走りて書寫山に至る師泰三角の圍を解きて至る直義石塔頼房をして來り攻めしむ尊氏親ら兵に將とし

て之を撃つ利あらず直義又高田國清等をして頼房を援けしむ... 尊氏逆へて御影濱に戦ひて大に敗る狼狽して松岡城に入り夜... 其の餘皆亡げ去ると尊氏歎じて曰く我事去れり乃ち甲を解...

時に東北の諸國既に多く直義に属して僅に招て兵三千を得進... みて薩摩山に屯す宇都宮氏綱兵を下野に起して之が聲援を爲... 房に十萬を遣して尊氏を薩摩山に圍ましむ桃井直常氏綱を招...

アシカマ タカウツ

アシカマ タカウツ

備へしむ冬時冬時氏等並に進みて丹波に到る尊氏京師の兵寡... 佐寺を保つ十年春直冬等京師に入る仁木義長土岐頼康佐々木... 氏頼等兵を率て尊氏に武佐寺に會し乃ち義詮と日を刻して東...

爲り宮門殿舎悉く皆蕩然し饑疫相踵き盜賊縱横する者枕籍... 尊氏平生畫を好む地蔵を信して毎に其の像を畫く又間々觀... ずの像を作る筆法緻密にして職工の畫に齊し宅間榮賀を師と...

アシカマ タカウツ

アシカマ タカウツ

む尊氏利を失す高經土岐頼遠等と官軍を竹下に破り遂に進んで京師を陥る延元元年尊氏再び軍を率ゐて延慶寺に逼る高經

アシカマ タカツネ

アシカマ タマフネ

道に義貞に遇ふ弓手をして楯を蔽ふて射さしむ義貞の頼に中る義貞自刎す越中の人民家重國探りて其の首を津中に求

護を罷め多田莊を削る又事を以て其女婿赤松則祐の邑一所を奪ふ高氏積みて平なる能はず乃ち則祐と高經を除んことを謀

アシカマ タカツネ

アシカマ タマフネ

を器とし爲めに叔父直義に言ふ直義乃ち召見て之を試み命じ其の家に居らしめ數々尊氏に請ふ尊氏未だ之を許さず適

直冬を以て總追捕使と爲し承久已前の故事に遵ひて守護以下の事を裁決せしむ九年詔して山名時氏と京師を復さしむ足利高經桃井直常並びに北國兵を以て來屬す直冬進で丹波に到る聲勢大に熾んたり尊氏京師を棄て、遁る明年直冬入て東寺に據る尊氏諸將と來り戰ふこと月餘直冬兵食日に乏し乃ち退て男山を保つ見兵五萬餘近畿の兵集るを竣ちて更に尊氏と戰はんと謀る群議決せず乃ち八幡宮に祈る悪言不吉なり諸將之を聞て奔散す直冬遂に石見に還る十七年山名時氏山陰山陽を倚て之に應じ宮内を屯し僧をして信兼に説かしむ信兼聽かず子氏信をして宮内を攻めしむ直冬敗走す直冬戰ひて屢々利あらず乃ち引て還る應永七年石見に卒す法名は道昭、慈恩寺と號す子冬氏兵衛佐と爲り備後に居る世呼んで中國武衛と曰ふ(大日本史)

護其後に在りて患を爲さんことを慮り淵邊義博に命じて還て之を戕はしめ走て駿河手越驛に至る敵兵遮ぎり撃つ直義窘迫して戰死せんと欲す義博等苦戰して死す直義脱れ去る會々工藤春倫兵一百を率て來援ふ乃ち進みて尊氏の軍に矢矧に遇ふ兵合して五萬俱に還りて時行を討ち之を走らす帝尊氏に詔して軍を班さしむ尊氏詔を奉せんと欲す直義固く之を止めて曰く公は蓋世に功あり而して諸公卿及び新田義貞等多く之を妬みて屢々異計あり今幸に虎口を脱して萬全の地に據るを得何んぞ復た往て禍機を踏まん哉と尊氏之に従ふ直義乃ち書を諸道の將士に移して之を招く帝怒て詔を下して尊氏直義を討たしむ尊氏親王及び新田義貞東海東山二道より進む直義變を聞て拒き戰はんとを請ふ尊氏肯んぜず直義上杉憲房等の言を用ひ乃ち佐々木高氏をして先づ發せしむ尊氏言ふ王師を拒ぐは己が意に非ずと軍事を以て一に直義に付す直義進んで官軍と手越に戰ひ大に敗れて還る尊氏已に遁れて建長寺に入る直義之を思ひて上杉重能の計を用ひ偽りて尊氏を討つと論旨を作り持して尊氏に視せしむ尊氏乃ち出づ軍氣大に振ふ語は尊氏の傳に見ゆ直義進みて新田義貞と箱根に戰ふ利あらず既に尊氏大に尊氏親王を竹下に破る義貞の軍從ひて潰ゆ直義等後を踵て進む延元元年京師を陥る車駕延曆寺に幸す尊氏官軍と京師に戰ひて大に敗れて兵庫に走る新田義貞等追ひて豊島河原に至る直義返戰して敗る會々大友貞宗等舟師を帥て來り附く直義其の軍を置して湊川に戰ひ又敗る遂に尊氏と筑紫に走る菊地武敏兵を發して來り攻む直義兵五萬を以て進みて武敏と多兵濱に戰ふ會々北風沙を揚げ石を走らして白日昏暝武敏の軍士腹して進むを得ず直義上風より兵を縱ちて之に乗じ追ひて博多に至る武敏兵を返して決戰す勢ひ甚だ鋭く周防長門に赴て徐に再舉を圖れと因て衣袖を截ち之を遺り訣と爲す士卒皆奮勵殊死して戰ふ尊氏來救ふ遂に大に武敏を

アシカマ タマヨシ

破る直義追撃して太宰府に至る降附甚だ多し乃ち再び京師を犯さんことを謀す尊氏海路より兵庫に抵り直義陸路より進みて福山城を圍む中將大井田水軍を以て敗走す是に於て新田義貞楠正成と兵庫を守る尊氏水軍を以て義貞に當り直義陸軍を統べて正成と湊川に戰ふ利あらず直義の馬傷て危急なり藥師寺公義己が馬を以て直義に授け歩闘して數人を斬る尊氏直義の走るを視て兵を分ちて之を救ふ正成力戰して死す直義乃ち尊氏の軍と合し義貞を撃て大に之を敗る尊氏豊仁を立て、帝と爲す是を光明帝とす三年直義左兵衛佐征夷副將軍となる時に武人傲猪無禮にして多く法令を奉せず土岐頼遠光嚴院の駕を射る直義大に怒り之を六條河原に斬る二階堂行春坐して讚岐に流さる是に由て武人震悚し驕横稍々熄む直義人として爲り強忍發指而して人の己を議せんことを畏れ外恭順を示して内深刻尊氏の志を得るは多く直義の力なり與國六年光明院從三位を授く直義執政數年威權赫奕として一時に薰灼す其の吉凶慶弔は上光明院より下公卿士庶に至るまで贈遺訪問其の門に輻輳す當時尊氏と並び稱して兩御所と曰ふ直義初め子なし尊氏の庶長子直冬を養ひて子と爲す後ち子を生む時に之を鍾愛す時に直義僧疎石を崇信す疎石其の徒妙結を薦む妙結慧照にして容止あり直義深く之を敬信して爲めに寺を堀河に建て、此に居らしむ高師直師泰之を惡みて屢々陵辱を加ふ妙結大に之を憾む因て竊かに直義に説いて師直師泰を誅せんことを謀る直義其の言を納る乃ち直冬を以て中國の探題と爲し外に居て援を爲さしめんと欲す正平十四年粟飯原清胤等と謀て事に託して高師直を召し兵一百餘を簡みて戸外に匿す師直已に至る清胤遽に圖を改め師直に目して變を示す師直覺て逸去し兵を聚めて自ら備ふ師泰兵を將て外に在り變を聞て馳せ還る直義憂懼し使を途に遣して師泰を諭して曰く師直は才智庸劣にして理務に任へず更に卿を以て之に代らしめんと欲す師泰拒て聽かず兵を勅して扞衛す是に於て人心洶々として都下騷擾す尊氏直

アシカマ タマヨシ

義を召す直義尊氏の營に至る從士多く亡ぐ師直等兵五萬を以て之を圍む尊氏怒りて親ら出で戰はんと欲す直義之を止めて曰く何ぞ將軍舉措の輕きや彼れ獲んと欲する所の者は止だ直義及び山直宗上杉重能のみ宜しく姑らく其の請ふ所を許して以て急を濟ふべしと尊氏乃ち直義の政務を罷り重能直宗を越前に流す師直乃ち師を退く尋で逼て重能直宗を殺さしむ又た中國の將士をして直冬を攻めしむ直冬肥後に走る直義屏居して聊んぜず竟に髪を剃り慧源と號し復た用ふるなきの意を示す明年直冬兵を鎮西に起す師直尊氏に勸めて親ら往て之を攻めしめ且つ直義を殺さんことを請ふ直義夜奈良に走り侍原好專に依る好專師直の書を得ると聞き復た大和に走り越智伊賀守に依る越智供侍すること甚だ驚く郷邑の兵を發して保守す時に大和河内和泉紀伊の將士多く南軍に屬す直義已に師直の爲めに逼まられて南軍の内に入り又王師の來襲はんことを懼れ上書して降を請ふ藤原實世其の降に因て之を誅せんと請ふ源親房藤原師基等と議して謂ふ直義降れば則ち尊氏自ら平がんと帝之に従ひて其の降を納る直義又た武家管領に任ぜられんことを請ふ朝議未だ允さず會々石塔頼房山國清等兵を率て來り附く直義の軍勢稍々振ふ乃復た觀應の年號を用ひ守護地頭私署して遂に絶ちて復た歸欵の事を言はず六年直義兵を男山に觀す桃井直常北國兵を將て進みて延曆寺に據る時に尊氏西のかた直冬を撃ち義詮を留めて留守せしむ義詮京師を棄て、走る直常京師に入る尊氏の旅軍直常を撃ちて之を走らす其の夜尊氏の部兵多く畔て直義に降る尊氏遂に播磨に走る直義石塔頼房をして往て攻めしむ頼房進みて光明寺に陣す尊氏兵を率ひて之を圍む頼房援を請ふ直義山國清上杉義依等をして赴き援けしめ大に尊氏を御影濱に破る尊氏走りて松岡城に入る饜庭氏直潜かに國清の營に抵て和を議す國清曰く三條殿の意も亦此くの如しと和議已に成る高師直師泰懼れて髪を剃り出て、降る途に殺さる尊氏京師に還る直義往て





る正長元年春義持薨じて而して嗣なし持氏將軍たらんとを希ふ而して室町の臣等亦た心を寄するものあり故に義教神託に因りて還俗して將軍となるに及びて俾ひずして曰く吾輩に還俗將軍に屈せんやと時に小笠原政康村上頼清と信濃に戦ふ政康は將軍義教の師なり故に頼清救を持氏に請ふ持氏之を援はんと欲す憲基の子憲實執事たり之を諫めて曰く彼我が管國にあらざるなり且我頼清を援へは將軍必ず政康を援はん是れ天下の争を開く也と持氏憲實の権力を憚りて勉めて之に従ふ一色直兼上杉憲直等持氏に籠あり因て憲實を問す持氏終に憲直は憲實を誅せんと欲する也鎌倉騷擾し兵士大に山内に集る持氏懼れ自ら山内に往いて面り憲實に諭し罪を憲直に歸して之を逐ふ事稍々釋く十年持氏其子賢王を冠す禮を鶴岡に行ふと遠祖義家の故事の如くせん欲す憲實又た争ひて曰く室町に冠し將軍の偏諱を受くるは禮也と持氏曰く還俗將軍何ぞ吾子に冠するに足らんやと前前に冠す諸將入りて之を賀す獨り憲實病と稱して入りて賀せず持氏怒り兵を發して憲實を攻めんと欲す憲實乃ち上野に奔り平井の城に據る持氏自ら將として之を討つ將軍義教天子に請ひて持氏を討するの詔を下し之に副ふるに教書を以てす關東の將士皆持氏に叛く持氏窮蹙して遂に髪を削りて降を乞ふ憲實之を永安寺に徙し兵を置きて之を監す憲直直兼をして自殺せしめ關東の將士と連署して將軍義教に持氏の死を宥さんとを請ふ使者十餘反義教竟に聽かず十一年憲實義教の命を以て兵を遣はして諸軍をして永安寺を圍ましむ持氏火を繼ちて自殺す(野史)

十四年正月持仲軍敗れて滿隆、滿直及び上杉氏憲等皆雪下に自殺す(野史) アシカ、モトウチ 足利基氏は關東管領なり幼名は龜若丸、尊氏の四子、正平四年尊氏基氏を以て關東管領と爲し鎌倉に居らしむ時に尙ほ幼なり上杉憲顯及び高師冬を以て執事と爲し之を輔けしむ足利直義の南朝に歸順するや憲顯遙かに之に應じて上野に奔る師冬基氏を奉じて之を攻む兵僅かに五百皆往くを欲せず道に基氏を劫やかして歸らしむ師冬甲斐に走り遂に殺さる既にして尊氏直義を執へて鎌倉に至る基氏營救甚だ至る尊氏聽かず基氏之を憂ひて出で、安房に走る尊氏人を遣して之を召し還へす崇光帝左馬頭を授け左兵衛督に遷す七年尊氏親ら出で、新田義興同義宗脇屋義治を金井原に拒ぐ既にして義興義治來り攻む衆未だ甲を脱せず基氏拒んで開て南宗繼を遣し兵に將として之を撃たしむ敵兵を見ずして還る俄にして義興義治來り攻む衆未だ甲を脱せず基氏拒んで大に敗れ尊氏の石濱營に奔る尊氏義宗と戦ひて之を破る義興等鎌倉を棄て、河村城を保つ尊氏基氏襲ひて之を走らす明年尊氏京師に還る島山國清を留めて基氏の執事と爲す尊氏薨するに及びて義興乘じて復た鎌倉を攻めんと謀る基氏之を思ひて國清をして義興を誘殺せしめ親ら入間河に至りて大に兵威を耀かす東土帖然たり時に兄義詮新に將軍職を襲ぐ衆皆以爲らく基氏久しく關東に在りて兵柄を握る必らず義詮の爲めに疑忌せられんと島山國清因て兵を發し吉野を攻めて以て其の嫌を避けんと請ふ基氏之を然りとし大に東國の兵を擧げて之に屬す國清京師に至りて以て義詮に請ふ義詮之を悦び俱に攻めて行在を陥れて還る國清軍中に在りて私に還る者千餘人を罰し其の俸邑を收む衆基氏に詣りて怨訴すること甚だ急なり殆んど將に亂を作さんとす基氏乃ち人を遣し國清を數めて曰く卿前日の役は吉野を攻むるを名として實は仁木義長を殺さんと圖るなり今復た擡まゝに軍士の食邑を沒して其の

アシカ、モトウチ

アシカ、ヨシアキ

冤憤を結ぶ豈に兵端を激成して國家を亂すにあらざるや卿罪惡已に稔る宜しく疾く罷め去るべし瀟湘不決を爲して坐ながら誅戮を取らぬ勿れと國清乃ち伊豆に奔りて修禪寺に據る基氏兵三百餘を發して之を撃つ反りて爲めに敗らる更に新田義一を遣し兵に將として往て之を攻めしめ親ら出で、箱根に軍す國清降を乞ふ乃ち兵を引て還る是の時上杉憲顯信濃に匿居す基氏罪を宥めて之を招き芳賀禪可に代て越後守護爲らんとを命じ遂に徵して復た執事と爲す禪可兵を出して之を上野板鼻に遷さる基氏大に怒りて親ら兵に將とし將に禪可を宇都宮に攻んとし禪可の子高貞高家に武藏若林野に遇ひて交戦す基氏驍捷多力、善く大刀を揮て戦ふこと數刻刀毀缺して鐔の如し遂に高家を斬り退て兵を慰愛將木戸毎氏闕死すと聞き大に哭して曰く彼毎に我と死生を同くせんことを約す彼今已に死す我豈に前言を食むに忍びん耶乃ち刀を提げて進み衆皆奮ひて從ふ戦ひ益々銳し基氏馬傷て斃る敵兵之を望み争ひ進んで之を圍む基氏刀を揮て斬殺す大高重成馳至りて而たり其の勇を贊し馬を以て基氏に授く基氏喜で曰く昔源平の戦に後藤守長は主君の馬に乗りて遁る卿の所爲は彼と相反す卿の姓は大剛剛高相と呼ぶと亦可ならず乎と、巖松直國基氏に勸めて己と甲を易へしむ敵兵直國を以て基氏となし鏡ひて之に趨く會日暮る敵兵引き退く基氏追撃して大に之を敗り進みて將に宇都宮氏綱を攻めんとす會々氏綱軍に至りて陳謝し且つ告ぐるに禪可已に罪懼れて亡去せるを以てす基氏乃ち鎌倉に還る是役や高貞の子八郎を獲基氏其の幼弱なるを憐んで之を放還す人其の寛裕を稱す是歳安藤九郎等二十餘人罪あり之を府内に誅す初め諸將功を恃んで驕戻動もすれば多く異圖を企つ是に至て震懾せざる莫し二十二年基氏薨す年二十八法名同所、瑞泉寺と號す初め尊氏直義と議して曰く義詮は負荷に堪へず恐らくは吾業を墜さん然れども關東諸國をして叛かざらしめば則ち天下を失ふに至らず吾當に一子をして關東を鎮せしむ可

アシカ、モトウチ

アシカ、ヨシアキ

し乃ち基氏をして東國を鎮せしむ尊氏薨するに及びて東國の將士多く義詮に憾あり往々基氏に勸めて之を圖らしむ基氏峻拒納れず能く其の職を修めて義詮をして東顧の憂なからしむ計京師に至るに及びて皆哀惜す(大日本史) アシカ、ヨシアキ 足利義明は政氏の第三子成氏の孫なり初め僧となりて雪下院と號す後ち還俗して左兵衛督と稱す義明其の父兄と睦しからざるを以て去りて陸奥に漂泊す此時上總の守護武田三豊人厚胤榮と戦ひて勝たず三豊則ち義明を奉して盟主とす義明人となり勇猛剛毅にして度量あり二總房三州の士人來歸するもの頗る多く武威稍々震ふ是に於て邊境の順はさるものを略し永正十四年十月兵を二總に發して小弓城を攻め遂に厚胤榮及び高城越前守父子を滅し尋て三上城を拔く明年居を小弓に徙す乃ち鷹言して曰く我れ古河を廢して八州の管領たるに己に近きにありと天文八年八月古河に薄りて將に晴氏を廢せんとす晴氏救を北條氏綱に乞ふ十月七日是の年月に就て諸説一定せず或は此の年十月と曰ふ説あり又天文九年義明里十月と云ふものあり又他の一説にては天文六年十月五日なりと云へり見義堯と房總二州の兵を率めて氏綱と大に鴻臺に戦ふ義明敗死す土人後ち義明の靈を崇めて社容神と稱すと云ふ或は云く義明走りて小弓城を保つ北條氏綱來りて之れを攻む義明拒き戦ふて之に死すと又一説に義明天文十五年軍潰えて虜に就き小田原に於て殺さると法名を道哲空善と曰ひ八正院と號す(本朝武功正傳) アシカ、ヨシアキ 足利義昭は足利十五代の將軍也將軍義晴の子にして將軍義輝の弟なり天文六年を以て生る南都一乘院に入て僧となり覺慶と云ふ永祿八年三好松永の黨將軍義輝を弑し又覺慶を幽せんとす細川藤孝覺慶を奉して近江に奔る髪を蓄へ名を義秋と改む初め佐々木義賢に依り復歸を謀る國亂るを以て果さず十年朝倉義景に依る元服して名を義昭と改む義昭數々征伐の師を義景に促す義景言を左右にして應せず時に織田信長新に美濃に移り壯武勇敢比なしと聞き往

て之に頼らんと欲し人をして之を籠せしむ臨の節に之に遇ふ吉孰れか大ならんと即ち意を決して使を遣し託するに討賊の事を以てす信長悦之を迎ふ即ち兵を率て西し義昭を師に迎て京師に入る賊風を望て遁逃す是に於て義昭從四位下に叙す義昭恐れて遁逃せんとす細川藤孝諫むるに依て止む幾もなくして信長師を率て京師に入る賊悉く逃る信長羽柴秀吉を留めて去る義昭權大納言に任し從三位に叙す元龜元年賊又起る義昭信長と共に之を討つ朝倉義景佐々木義賢賊に應ず是に於て義昭信長と師を班へす尋て信長書を以て義昭の道に悖り將器に堪へざるを責め十七事を諫む義昭憚り初て嫌隙を生ず天正元年武田晴信に使を遣し來み擊つ信長を滅さんとを約す細川藤孝諫むれども聽かず信長之を聞て謝し且つ盟をなさんとを請ふ許さず信長遂に二條の第を圍む義昭拒ぐと能はず成して義昭又信長を討んとを謀る信長又兵を率て二條の第を圍む義昭窮窘して死を減せんを求む信長之を河内に逐ふ詔して義昭の官爵を削る漂泊炭餘困蹙日々甚し天正三年備後後往き毛利元就に依り薙髮して昌山と號す後ち又京師に歸り慶長二年大阪に薨す歳六十一靈陽院と稱す足利氏是に至て亡ぶ

條時行新田義興と兵を合せて來攻む諸將議して安房上總に走りて其の銳を避んとす義詮曰く我は關東管領たり豈に畏避縮して外侮を甘受することを得んや今日死を決して一戰す幸にして脱するを得ば則ち退て安房上總に次し敵の西上するを退躡し以て宇治勢多に至り家大人と夾みて之を攻むべしと時年八歳諸將歎服す乃ち路を分ち出で、拒ぐ利あらず義詮を奉じて逃れ走る三年顯家進で京師に向ふ義復た鎌倉に入る諸將顯家を尾して西上す顯家遂に戰歿す果して其の料る所の如し興國五年光明帝就て義詮に右馬頭を授く正平元年從四位下に進む四年京に至り叔父直義に代りて軍政を掌どる、直義南朝に歸順す五年秋義詮高師直と土岐頼朝を美濃に擊ち之を虜にして還る崇光帝功を賞して參議に任じ左近衛中將を兼ねしむ明年春直義南軍に將として進みて男山に據る時信長庶長子直冬を筑紫に擊つ京師兵寡く又叛降する者相繼ぎ留る者僅かに五百に滿たず是に於て細川仁木等義詮に西して尊氏の兵と合せんことを勸む義詮之に従ひ與に京師を棄て、西に奔る會、尊氏變を聞き筑紫より引き還り義詮桂川に遇ふ復た與に京師に入る明日尊氏又西に走る義詮及び仁木頼章、同義長丹波石籠寺に留り險に據て藥を設く萩野、波波伯部、久下、長澤氏等相繼いで來集まる兵勢稍々振ふ何ばくもなくして尊氏直義と構和して京師に還り義詮を召して還らしむ頃之に歸順し義詮に命じて崇光帝及び太弟直仁を廢し正平の號を奉ぜしむ七年春沙金三千兩馬十四疋を以て行在に獻じ鞍馬金帛を後宮百僚に贈る各々差あり閏二月帝男山に幸して大に兵備を嚴にす義詮慧鑪をして奏せしめて曰く聞くが如くんば和田補の諸將戒嚴すと臣既に洗滌を蒙りて上下和親す備ふる所は何事たるを審びらかにせざと詔して曰く天下未だ安んぜず非常の事戒めざる可らず卿其疑ふ勿れと義詮之を信じて備を設けず既にして南軍道を分て奄ち至る細川顯氏細川頼春逆へ戰ひ

アシカマ ヨシアキ

て大に敗らる義詮從者一百五十人と東に走る光嚴光明崇光三主及び直仁親王南軍の爲めに獲らる義詮勢多に至る官軍已に橋を燒て進む能はず兵に水を善くする者あり游で前岸に至り舟を挈て來る因て衆を濟し畢る乃ち命じ舟を沈めしめて笑て曰く今ま始めて生を得たりと進みて武佐寺に至る土岐頼康等部する所を率て之に趣く義詮騎三萬を率て漸く進で東寺に至る南軍退て男山に陣す細川顯氏等至る義詮聲勢大に振ふ因て顯氏等の諸將をして東條路を塞いで以て男山の糧餉を絶たしむ進戰連りに捷つ義詮乃ち諸將の兵を合して期を刻し並に進みて大に官軍を破ぶり遂に男山に逼る帝園を衝て賀名生に還る義詮諸將の兵を督して之を退ひ大納言藤原隆隆等三百餘人を獲秋義詮光嚴帝の子彌仁を奉じて帝と稱す是後光嚴帝と爲す八年夏山名時氏官軍と俱に來り攻む兵勢甚だ銳とし諸將之を近江に避けんことを請ふ義詮聽かず後光嚴帝を東阪本に移し諸將を率て神樂岡に陣して之を拒ぐ利あらず明日後光嚴帝を奉じて東に走る南軍遮て眞野浦に擊つ義詮遂に垂井に走り南軍京師を守る秋義詮東山北陸東海三道の兵を率て進んで京師に逼る時氏等戰はずして走る義詮京師に入り尊氏鎌倉より還る義詮出で鏡驛に迎へ乃ち後光嚴帝を奉じて京師に入り尋で西播磨に赴き斑鳩驛に屯し以て時氏に備ふ九年冬直冬時氏と兵を進めて丹波に至る尊氏近江に走る十年春直冬等入つて京師に據る是時方て四國西國の兵士大に斑鳩驛に集る義詮因て尊氏と夾みて京師を攻めんと謀る乃ち赤松則祐等を率て神南に至り時氏等と戰ひて敗らる時氏の子師義直に義詮の陣を衝く則祐等殊死して戰ひ更に大に之を取尊氏進みて直冬を攻めて之を走らす十一年從三位に叙せらる十三年尊氏薨す義詮嗣ぎて立つ後光嚴帝征夷大將軍を授く筑紫探題一色直氏菊池武光と戰ひ敗れて京師に還る武光兵威甚だ熾なり義詮其の變に乗じて來り攻めんとを懼れ細川繁氏を遣して九國を鎮撫せしむ繁氏途に病で死す十四年武藏守を兼ね細川清氏

アシカマ ヨシアキ

を以て執事と爲す是の時義詮の弟基氏鎌倉に居て關東を管領し頗ぶる士心を得義詮稍々之を忌む基氏懼れて兵を發し吉野を攻めて以て自ら效さんことを請ひ畠山國清を遣し兵を率て京師に至らしむ義詮乃ち國清諸將兵を率ひ出で尼崎に屯す明年春國清等南軍と戰ひて敗る義詮畠山義興等を遣して之を援はしむ官軍敗走す義詮諸軍を引て還る秋和田正忠補正儀渡邊橋を絶ちて將に譽田城を攻めんとす義詮驚愕して出づる所を知らず畠山國清細川清氏等と兵を引て天王寺に赴く南軍戰はずして退く國清等因て返して仁木義長を攻めんと謀り事京師に傳播す義長乃ち義詮を幽し兵を勸して衛守し令を下して以て國清を誅せんことを請ふ義詮已むを得ずして之に従ふ而して密かに佐々木高氏と脱去せんことを謀る會々義長義詮に侍す義詮病發すと稱し脱去せんことを謀る會々義長義詮にの衣を蒙り親近三人を率ひて帳内に臥す義長出づ義詮乃ち婦人の馬を得て疾く馳せて西山に至る將士之を聞て四散す翌日義長殘兵を率て東に走り遂に吉野に到り降る國清等天王寺より還る官軍又出づ是に於て大和河内和泉紀伊の間の諸城皆南軍に屬す京師騷擾す國清答己れに歸せんことを恐れて奔て鎌倉に還る十六年秋細川清氏佐々木高氏と相惡し義詮高氏趣ゆるに其の反迹あるを以てし義詮と謀りて之を誅せんとして一日清氏將に佛寺を修せんとして夜天龍寺に適く從士頗る平生より多し義詮聞て謀洩れたりとなし懼れて新熊野に走り後光嚴帝を迎へ橋を斷ち自ら守る清氏驚き還り人を使はして罪を請ふ答へず清氏懼れて若狹に走る義詮斯波氏頼等を遣して之を擊たしむ清氏敗れて吉野に降る冬清氏南軍を帥ひ大舉して來り討つ細川氏春等官軍に屬する者多し義詮佐々木高秀を忍常寺に今川貞世を山崎に吉真満貞等を大渡に遣はして之を禦がしめ別將士を發して淀島羽伏見竹田を守らしむ高秀南軍を望んで營を閉ちて出でず貞世も亦逃る他軍皆圖志なし是に於て義詮又後光嚴帝を奉じて近江に走り武佐寺に居る南軍京師に

入て義詮の第を焼く既にして土岐頼康等の諸將南軍と戦ひて... 義詮の子、母は源頼朝の従母姉妹なり頼朝兵を起すに及で義兼山名義範等と往て之に屬す壽永三年源範賴に従ひ筑紫に赴て平氏を討つ發するに臨で頼朝從軍の將士を饗し義兼に馬を賜ふ文治五年頼朝に従ひて藤原泰衡を撃つ其黨熊野別當某を虜にす尋で遠江守と爲る明年泰衡の故將大河兼任兵を起す頼朝義兼及び小山宗政等に命じて陸奥に赴て之を撃たしむ粟原一迫に戦ひて之を取る兼任退て衣川を阻て陣す義兼等直ちに渡りて接戦す敵兵敗走して又多宇末井山に據て壘を築く義兼等急に圍みて之を攻む殺獲甚だ多し兼任敗死す義兼從四位下上總介に任ぜらる後東大寺に於て薙髮して義兼と法名す兼て書を能くす下野足利饒阿寺の開山の像は其の畫く所なり義兼長け八尺餘臂力人に過く而して資性循良なり頼朝其の忠貞を嘉みし北條時政に命じて子婿と爲しめ親待を加ふ正治元年三月八日卒す子義純、義助、義胤あり(大日本史、頼朝朝高史)

して栗山に抵る日既に暮る義氏潛に三浦泰村と進で宇治に抵り大に橋上に戦ふ軍利あらず夜半義氏使を遣して泰時に報して曰く戦は本と曉を待たんと欲す然れ共麾下の壯士志し先登に在り故に夜を冒して進む死傷甚だ多しと泰時急に宇治に赴て之を救ふ利あらず遂に令を下して戦を罷む翌日壯士將に河を渡らんとす時に雨後にして水大に漲ざる没溺する者算なし義氏筏に乗じて渡る是に於て尾藤某民屋を撤して筏と爲す諸將相繼で進む官軍大に敗らる元仁元年功を以て邑を美作新野等の地に食む武藏陸奥守を歴て左馬頭に至り正四位下に進む仁治中髪を削りて名を正義と更む三浦泰村の亂に功あり故に上總權介平秀胤の食邑を并せ食す建長六年卒す年六十六(大日本史)

アシカ、ヨシウヂ

アシカ、ヨシカ子

義康の子、母は源頼朝の従母姉妹なり頼朝兵を起すに及で義兼山名義範等と往て之に屬す壽永三年源範賴に従ひ筑紫に赴て平氏を討つ發するに臨で頼朝從軍の將士を饗し義兼に馬を賜ふ文治五年頼朝に従ひて藤原泰衡を撃つ其黨熊野別當某を虜にす尋で遠江守と爲る明年泰衡の故將大河兼任兵を起す頼朝義兼及び小山宗政等に命じて陸奥に赴て之を撃たしむ粟原一迫に戦ひて之を取る兼任退て衣川を阻て陣す義兼等直ちに渡りて接戦す敵兵敗走して又多宇末井山に據て壘を築く義兼等急に圍みて之を攻む殺獲甚だ多し兼任敗死す義兼從四位下上總介に任ぜらる後東大寺に於て薙髮して義兼と法名す兼て書を能くす下野足利饒阿寺の開山の像は其の畫く所なり義兼長け八尺餘臂力人に過く而して資性循良なり頼朝其の忠貞を嘉みし北條時政に命じて子婿と爲しめ親待を加ふ正治元年三月八日卒す子義純、義助、義胤あり(大日本史、頼朝朝高史)

兵衛督政知の子なり文明十一年生る父政知殺に遇ふ義通甫て十三左右扶て今川氏親に依らしむ氏親義通を京師に送り細川政元を託す政元請て天龍寺の喝食となす明應二年政元義植を廢して義通を立つ從五位下に叙し名を義高と改む三年正五位下に叙し左馬頭に任し尋で征夷大將軍に拜す政務巨細となす皆政元に決す文龜元年從四位下に叙し參議に任し勅筆名を義澄と賜ふ政元死し其子澄元管領となる五年義植大内義興と大舉して京師に入るに當て義澄之を避て近江に奔る尋で官職を罷らる六年義植入を遣して搜索す義澄逃れ匿る八年義澄男を産み赤松義村に託す復た一男子を生み澄元に託す尋で嶽山に薨す年三十二法住院と號す太政大臣を贈る

アシカ、ヨシウヂ

アシカ、ヨシカ子

アシカマ ヨシツグ 足利義嗣は將軍義滿の第二子なり其の母義滿に寵あるを以て義嗣を鍾愛すること嫡子義持に越ゆ而して義滿私に義持を廢して義嗣を立てんとするの意あり應永十五年二月義嗣昇殿を聽され三月左馬頭に任せられ正五位下に叙せらる尋て從四位下に進み左近衛中將となる四月元服し參議に任せられ從三位に陞る十六年閏三月加賀權守を兼ぬ七月權中納言に遷る明年春正三位に昇る十八年夏從二位に進み十一月權大納言に轉す二十一年正月正二位に叙せらる二十二年父義滿已に薨す且義持の意に忤ふを以て守護職を罷めらる是に於て義嗣潛に佐々木及び六角氏に憑らんを謀りして六角氏肯せず明年十月義持命して義嗣を捕へしむ義嗣削髮して道純と號し世事に意なきを示めり而して密かに篡立の心を懷く會々上杉禰宗義隆を圖る義嗣遂に之に應じ逃匿して謀を通す終に義持の爲に捕へられ二十五年正月廿四日に殺さる時に年二十五、法名は道純、圓修院と號す後從一位を贈る義嗣二子あり梵修及び清欽と云ふ僧僧となる一説に曰く義嗣の子嗣俊と云ひ右兵衛佐と稱す(野史)

アシカマ ヨシヒサ 足利義尚は足利九代の將軍なり初將軍義隆の子にして小字を龜王丸と云ふ永正八年生る父義隆携て播磨に如き赤松義村に依託して薨す十七年細川澄元龜王丸を奉じて兵を起し京師に入る細川高國佐々木高頼京師を攻るに及て澄元龜王丸を奉じて又播磨に奔る幾もなくして澄元卒し將軍義隆亦高國を避て淡路に出奔す是に於て高國龜王丸を迎て嗣かしむ從五位下に叙し名を義晴と賜ふ尋て征夷大將軍に拜す時に大永元年なり二年從四位下に叙し參議に任す享祿元年三好長基京師を犯す義晴高國と近江に奔る三年朝廷使を賜ひて從三位權大納言に任す高國死して細川晴元に依り又京師に入る頃年三好黨及び無頼の兇徒京畿の間に横行し幕府用度給せず資糧乏きを告ぐ天文十二年波爾杜瓦爾國の商船大隅の國種子島に漂着す島主時義之に就て砲術を傳習す島統此時に始る次年耶蘇教徒薩摩に到る十五年晴元反して高頼と京師を犯す義晴坂本に避く尋て職を子義隆に讓て老す十六年亂を避て白川に城て居る晴元高頼東西入寇し火を縱て侵奪す城兵固く守る晴元乃ち僞て成をなし其備の怠るを窺て急之を攻む義晴城を焚き山を踰て東し坂本に遁る晴元從て之を攻む義晴和を請ひ又京師に還る時に十七年也此時に當て三好松永細川の徒各々兵を分て相攻撃し專恣驕横にして幕府の命令一も施す所なし侯伯士庶人相共に怨望す義晴日夜憂悶遂に病をなす十九年薨す歲四十四萬松院と稱し左大臣從一位を贈る(野史)

アシカマ ヨシツグ

アシカマ ヨシヒサ

大亂となる義輝餘暇好んで花鳥を畫く甚はだ絶筆のものあり(野史、皇國名鑑拾遺) アシカマ ヨシナガ 足利義長は義教の第五子なり左馬頭に任せられ小松谷と號す後ち罪ありて隱岐國に配流せらる(野史) アシカマ ヨシノリ 足利義教は足利六代の將軍なり初の名を義宣と云ふ義滿の子應永九年生る十年青蓮院に入り薙髮して義圓と號す大僧正に任し天台座主となる義持病篤きに及て管領諸將と副を議すれども決せず乃ち石清水の社に詣て八幡の神廟に卜して義圓を得遂に之を迎ふ義持薨して義圓喪主となり頭を襲て諸將を見る尋て還俗して名を義宣と改む從五位下に叙し左馬頭に任す永享元年征夷大將軍に拜し權大納言に任す義宣を改めて義教となす十年足利持氏を伐つ初め義教の立つや持氏統を繼ぐの志あり果さず故に密に叛を謀る執事上杉憲實苦諫するも聽かず憲實遂に幕府に訴ふ義教大に兵を募り鎌倉を攻む持氏敗走し憲實に依て成を請ふ後寺に入り自殺す十二年持氏の遺子春王安王結城氏朝に依り兵を擧ぐ義教兵を遣し之を討つ嘉吉元年氏朝及び春王安王を殺す義教人となり傲慢にして諸將を輕んず居常赤松滿祐の人となりを忌み其の短矮なるを嘲り之を呼ひて三尺入道と云ふ滿祐嘗て宴に侍し詠て曰く驅短侮るなかれ三國の主と義教又滿祐の營を出るを窺ひ狼及養狗を出して之を嚇す滿祐悲て之を斫る義教之を銜む滿祐の妹義教に侍し旨に忤て殺さる滿祐悲恨す義教又滿祐の三州の守護を奪て雙臣貞村に與へんとす滿祐遂に意を決し密に伏を設て義教を招て曰く池中の鳧雛を産むと義教期を約して到る酒酣にして鶴詞の舞曲を奏す半は了る頃廳馬逸すと云て門を閉つ義教駭く教康及び姪滿康左右より進み義教の手を執て曰く今日の事公の自ら取る所なりと僕安積某後より之を刺す義教時に歲四十八此日義教鶴詞の半は終るに當て弑に遇ふ故に幕府鶴詞の舞曲を禁すと云ふ法名道詮顯山普

終る處を知らず(野史) アシカマ ヨシテル 足利義輝は足利十三代の將軍なり大將軍義晴の長子本の名を義藤と云ふ天文五年生る小字を菊童と云ふ十五年從五位下に叙し尋て正五位下左馬頭に任す父義晴に從て坂本に居る日吉の神主樹下成保の宅に元服して從四位下に叙し征夷大將軍に拜す父義晴に從て白川城に據る城陷り坂本に奔り又京師に入る諸國の守護地頭に命して四十丁を一里と定め塚を築かしむ十八年亂を避て坂本に奔る二十一年細川氏綱三好長慶と成を行ひて京師に歸る初め長慶氏綱を以て主となし細川晴元と諍戦す幕府の威令行はれず義藤坂本に遁る長慶使を遣し義藤に謂て曰く巨素より上を凌ぐの意なし只晴元に恨みあり若し晴元をして禿髮せしめは臣が望足れり晴元即ち髪を削て出亡す義藤京師に入る時に幕府あれども無きが如く三好長慶及家人松永久秀等義藤を遣うす義藤又晴元を懷ひ密に召して之を謀す晴元亦漸く其の黨與を集む長慶之を知り大に怒り兵を引て京師に入る義藤晴元と近江に遁れ名を義輝と改む時に年二十二弘治元年明使を發して我か西陲の姦民彼の邊境を犯すを訴ふ義輝應諭して之を遣す四年上杉輝虎義輝に請て曰く巨願くは毛利元就と東西京師に入り姦邪を勤せんと義輝之を元就に謀る元就應せず八年久秀が權を専らにし己れを廢して義榮を立てんとするを聽き第を修め溝を深うして不虞に備ふ然れども門牆未だ成らず久秀其の子久通及び三好長隆等と兵を率ひ石清水に詣ると偽り急に二條の第を圍む義輝人をして敵を窺はしむ一兵進て曰く君の陰謀已に發覺す三好の代官松永彈正來り攻むと時に宿直の士多からず畠山一色の徒防禦奮戦し賊輒く進まず或は將軍を奉して奔らんと云へども四門已に塞がる是に於て衆殊死して戦ふ義輝も亦自ら眉尖刀を揮て奮闘し數々賊兵を卻け火を營第に放ち殿殿に入て自殺す時に歲三十光源院と稱し左大臣を贈る義輝資性昏愚幕府の威權愈々振はす豪傑四方に蜂起して遂に天下の

アシカマ ヨシツグ

アシカマ ヨシヒサ

西陣に入る義政遂に義熙を立つ文明五年正五位下に叙し征夷大將軍に拜す時に義熙尙幼なり義政事を執る義熙亦西陣にあり主となる恰も三主將あるが如し七年正四位下參議に任す義熙文學を好み和歌を善くす又射御を試み書法を習ふ九年累進正三位に叙す此年勝元持豐前後死亡し列侯各々京師を去り國に就く義熙美濃に如く京師始て静かなり然れども上下困乏有司議し借貸を返辨すると禁す奸邪の徒之れに依て掠奪を専らにす又相伴衆供申次走衆を置く長享元年佐々木高賴國を以て命を拒む義熙親ら兵を帥て之を征す陣にあるの日軍議の間あれは則ち命して孝經及び春秋左氏傳を講せしめ自ら誓て曰く此行や若し賊を平けずんば又京師に還らずと名を義尙と改む幾もなくして陣中に薨す歳二十五常徳院と號し太政大臣を贈る義尙天性温良父義政の驕侈に懲りて自ら徳を修め惠を布く甫て十一歳文學を好み和歌を嗜み弓馬を練り書を學び或は和漢の講書を開く成童政事を聽き十六歳樵談治要を撰ましむ在陣の日と雖も余力あれば講學を開く文武兼備足利十五世未た之に超ゆる者あるを開かず惜いかな世を早うす(野史)

所なりと云ふ(野史) アシカマ ヨシヒロ 足利義熙(アシカマヨシヒサ)を龜王丸と曰ふ母を清雲夫人と稱す永正六年京師に生まる夫人狂疾あり色衰ふるに及びて義冬奉して淡路に行き志築浦に居る細川氏の族之れを迎へて阿波名東郡平島に館せしめ左馬頭と稱す(野史) 天正元年十月八日卒す年六十五法名を中山と稱す(野史) アシカマ ヨシマサ 足利義政は足利八代の將軍なり本の名を義成と云ひ大將軍義教の二男なり永享八年生る小字を三寅と云ふ嘉吉三年從五位下に叙し名を義成と賜ふ寶徳元年征夷大將軍に拜し從四位下參議に任す二年從二位に進み權大納言に超任す享徳二年從一位に進み名を義政と改め淳和并學兩院の別當源氏長者となる三年京師亂る初め畠山持國子なし政長を養て子となす後義就を生み政長を逐ひ細川勝元山名持豐政長を援て遂に持國の第を火き義就を逐ひ政長を立つ義政持豐の專横を怒る勝元爲めに歎訴し僅に釋く持豐但馬に退く康正元年持豐兵を率めて京師に入り赤松氏を襲ふ武日々に盛なり義政如何とす則は足利亦亂れ兵結て解けず寛正元年累進左大臣に至る持豐勝元赤松氏を右けるを憤り存りに之れと權を争ふの計を廻す大亂の芽階茲に始る五年諸士の品級を議定す曰く大名曰く國持外様曰く外様衆曰く伴衆曰く部屋衆曰く申次等は是に始る義政職にあると已に久し煩る倦懶の意あり故に弟義尋の淨土寺に在るを召し還俗せしめて以て天下を讓らんとす義尋許すれども聞かず義政乃ち他日子を産ば直に之を桑門に棄てんとを約す是に於て義尋髮を長うして名を義視と改む勝元之が執事たり義政の夫人男を生む竊に持豐に依り之を立て義視を廢せんとを謀る應仁元年持豐義就を援て政長と戰ふ政長敗走し持豐益々專横なり勝元政長を援けざるを耻ぢ又持豐を惡み之を滅さんとを圖る即ち大に其

アシカマ ヨシヒサ

アシカマ ヨシマ

族黨を募る持豐之を開き亦兵を集め互に京師に抗衡す勝元東にあり持豐西にあり義政威望日々に衰へ之を制すると能はず令を下して曰く接戰するものは皆孤の敵なりと其意二人をして和睦せしめむとを望む然れども二人肯せず勝元幕府に入る義政征旗を授く是に於て東西兵を交へ關戰數回互に勝敗あり勝元義政が己れを右けざるを慮り主上及び上皇を奉迎す月夜戰鬪兵火四に起り京師大半兵燹に罹る大小館舎三萬餘神社佛閣悉く灰燼となり僅に鳳閣を遺すのみ上皇室町花亭に崩す義政悲泣薨履を着て鳳御し上皇を葬る此の時に當て公卿百官逃匿離散し寶貨文書焚亡するもの勝て計る可らず文明五年持豐勝元相尋て卒す然れども餘黨猶連結幕府の命令一も施す所なし之を應仁の亂と云ふ義政職を子義尙に讓る十五年東求堂を東山に造り鑱刻するに金銀を以てす時人之を銀閣と稱し北山の金閣に比す義政之に移り茶宴を設け古器丹青を玩弄す數奇の盛なる此時を第一とす近江の人熊谷某嘗て書を作て義政の驕侈を諷む義政怒て曰く其言は可なり其人は非なり彼輩焉ぞ我を諷むるとを得んやと延徳二年薨す年五十六慈照院と稱す太政大臣を贈る義政詩歌を善くす又圖書を藝阿彌に學んで終に妙手に至る此の時眞能眞相周文宗旦等の諸子輩出して丹青の技一時に盛んなり(野史扶桑略人傳)

毎に事に隨ひて開導す匡益する所多し嘗て罪人あり義滿其家を毀たんと欲す義將曰く古へ罪人の第は毀たざると曰く何を以て之を知る對へて曰く昔平康賴流所より召し還され歌を咏じて曰く「ふるさとののきのいたまに。こけむして。おもひしほどは。もらぬつきかな」と是を以て之を觀るに古の處罪は其の家を毀たざるならんと義滿之を納る、官左衛門佐治部大輔に至り昇殿を聽るされ越前越中能登信濃佐渡若狹等の守護と爲り剃髮して名を道將と改め雪溪と號す世に勘解由小路と稱す十五年義滿薨す救して大上法皇の位を贈らる義將以爲らく人臣の贈位法皇に至る者は古より未だ之れあらざると遂に義持に勸めて之を辭せしむ十七年卒す法華寺と稱す子あり義重(六日本史) アシカマ ヨシミ 足利義視本名は義躬將軍義教の四子なり永享十一年正月を以て生る僧となり義尋と名く將軍義政は其兄なり職にあると既に久し大に職務に倦み義尋をして之を嗣かしめんと欲す義尋之を辭す義政曰く他日我若し兄を擧るも則ち直に僧となすべしと義尋遂に髮を蓄へ名を改め今出川の館に入る細川勝元其執事たり累進して權大納言に任し從二位に進む既にして義政職を授くるの意なし夫人男を擧ぐ義尙と稱す山名持豐に依て之を立て以て義視を廢せんとを希ふ終に應仁の亂階を爲す語は義政の傳に詳かなり應仁元年義視京師にあるを厭ひ間行して坂本に如く夫人藤原氏亦た難を避けて此に在り相見て大に喜び偕に伊勢に赴き國司北畠教具に依る義視勝地を歴遊して和歌を詠して與を遣り京師を想像し以て兵革を憂ふ二年義政勝元等と共に書を致して京師に還らしむ既にして流言あり勝元義視を立て將に義政を廢せんとすと義政疑懼し潜に親ら持豐の陣に投せんとす勝元聞きて大に驚き義視をして雨を冒して敵山に登らしむ持豐喜ひて之を迎へ斯波義廉の第に置きて幕府に擬す其黨與臣と稱す是に於て夫人藤原氏其男義材を武田信賢に托す義政請ひて義視の官

アシカマ ヨシヒサ

アシカマ ヨシマ

爵を削る應仁の亂既に止み義親美濃に如く將軍義倫死するに及び義政嗣なきを歎し遂に義親と和結し招きて京師に入れ義材を養ひて嗣となす義親髪を剃りて道存と號す詔して三后に准す延徳三年正月七日薨す歳五十三道號久山大智院と稱す二月詔して太政大臣一位を贈る(野史)

たしむ會々足利氏滿將に亂を作さんとして謀稍々漏る義滿遠かに南行の諸將を召し還して京師に備へしむ氏滿悔いて和を乞ふ事遂に寝む夏義滿細川頼之の權あるを忌み積んで嫌隙を成し兵を集めて自ら備ふ適々義滿意解く乃ち寝む斯波義將を以て管領と爲す六年春從一位に叙せらる弘和元年内大臣に任ぜられ明年春左大臣兼藏人所別當と爲り牛車を聽るされ院執事と爲る山名氏清擊つ南軍を破る是に於て悉く河内和泉紀伊を取る行在所を吉野に保つ夏後醍醐帝位を皇太子に傳ふ是を後小松天皇と爲す三年淳和獎學兩院別當源氏長者と爲る是より先き久我氏世々源氏長者たり是に至り始めて足利氏に屬す尋で三宮に准せらる冬後小松帝室町第に幸す足利氏世々禪教を崇む義滿に至りて益々熾んたり始めて僧録司を置き鹿苑院實隆寺を造る是歲又相國寺を造り諸國の守護をして役を助けしむ規制宏麗當時比なし後七層塔を寺内に造くる元中元年右近衛大將を辭す四年春後小松帝元服を加ふ義滿理髮す五年夏左大臣を辭す秋新田氏の族二人を京師に獲て之を斬る六年春安藝に如き嚴島祠に詣り躬ら筑紫に如て風俗を巡察せんと欲し細川頼之をして船を備へて嚴島に到らしめ進で周防の嚴屋に泊す時に大に風ふくこと連日舟漂ふて居く所を得ず義滿特に小舟に乗じて夜田島浦に至り漁人の家に投ず翌日頼之を會して輒に東に還る七年春兵を遣して土岐康行を美濃に擊つ康行降を請ふ乃ち之を釋す是の歲山名氏清及び滿幸を遣はして山名時熙同氏之を擊つは其の義滿の命を拒むを以てなり氏清訓責を加へ之をして自ら新たならしめんと請ふ義滿聽かず氏清等遂に往き攻めて之を走らす八年春斯波義將の管領を罷む夏細川頼元を以て管領と爲す細川頼之を召還して輔政の如くならしむ是より先き山名時熙同氏之を召還して輔政の如くならしむ是より先き山名氏清、同滿幸聞て怒る冬遂に兵を擧げて京師に嚮ふ上下騷擾す義滿使を遣して氏清の兄義理に諭して之を止めしむ義理聽かず義滿諸將の向背

アシカヤ ヨシミツ

アシカヤ ヨシモチ

を察せんと欲し夜召して古山滿藤の宅に至りて軍事を議せしむ兼或は曰く國家須らく無事を要すべし彼若し訴ふる所あらば爲めに善く之を聽くべしと義滿曰く彼は天下を圖る更らに何の訴ふる所かあらん倘し之を釋さば後必らず復た反せん時に及んで誅するに如かずと明日義滿一色詮範の策を用いて詮範の堀川第に陣す細川頼之頼元等を分遣して内野神祇等の處に陣せしむ明日山名氏清の先鋒大宮に至る大内義弘與に戦ひて之を敗ぶる敵の大軍續で進むと聞て馳せ還て救ひを請ふ義滿赤松義則をして之を助けしむ細川頼之等山名滿幸と戦ひて利あらず義滿乃ち麾下を率て赴き救ひ擊つ之を走らす氏清又兵を率て大宮に入る兵勢甚だ銳し義滿一色詮範を遣して義弘を援けしむ戦酣に及んで乃ち親ら麾下を督し鼓譟して進む敵兵義滿の旗を望みて大に潰れ走る詮範遂に氏清を獲て之を斬り其の首を獻ず義滿指して曰く天誅容れず卿等逆を謀る者の運命如何を視よと後法會を内野に設けて事に死する者を弔し併せて氏清を祭る聞者歎異す明年功を論じ賞を行ひて其の管する所の十國を分配す尋で大内義弘を遣して山名義理を紀伊に攻む義理城を棄て、遁る山名滿幸も亦逃れ走る三月細川頼之死す義滿素服親ら喪を送くる山名の族既に滅びて後或は強便して命を拒む者なし冬大内義弘をして和を吉野に請せしむ後龜山帝之を許す乃ち京師に幸し三神器を後小松帝に傳ふ尊氏光明院を奉立してより世を易へること五十五有七年を歴て是に至りて南北混一す是の歳の冬復た左大臣に任ぜらる明徳四年秋兵仗を賜ふ尋で左大臣を辭し征夷大將軍を辭す是歲細川頼元を罷め斯波義將を以て管領と爲す應永元年冬太政大臣に拜せらる天下稱して公方と曰ふ二年太政大臣を辭し髪を剃りて天山道義と號す又道有と曰ふ三年秋延暦寺に往く儀御幸に擬す四年大内義弘を筑紫に遣して少貳菊池千葉大村等を擧げて之を平らぐ此の年義滿三層閣を北山に作る其の柱戸廂壁悉く塗るに金泥を以てす時人之を金閣と名く

アシカヤ ヨシミツ

アシカヤ ヨシモチ

義滿移りて之に居り翫娛敢て入朝せず有司文書を抱て來りて呈呈す六年大内義弘叛して和泉堺浦に據る土岐詮直尾張に京極某近江に山名時清丹波に起て皆之に應ず義滿使を遣して之を招き又僧中津をして往て義弘を諭さしむ從はず義滿曰く彼兵を擧がす三十餘年皆我が力なり山名氏清の如きも我既に之を滅ぼす義弘強なりと雖も一旦我に叛むかば何ぞ能く爲んぞ乃ち親ら軍を勇山に出し山名斯波細川を遣し兵三萬に將として攻めて之に克ち義弘を斬り詮直を擊つ餘黨悉く潰ゆ時に足利滿兼義弘と謀を協せ東西並び擧げて京師を攻めんと欲し出で、武藏の國府に陣し義滿の爲めに應援すと宣言す七年義滿兼に授づくるに足利莊を以てす滿兼乃ち兵を罷む八年是より先き義滿僧祖阿商人肥富を明國に遣して好を通ず女中年中明主三たび僧を受て自ら傲り彼を稱して皇帝陛下と稱する竟に異域の封爵を受て來りて彼を稱して皇帝陛下と稱するに至る(明主)と稱す(明主)と稱す(明主)と稱す十五年帝義滿の北山別墅に幸す義滿幼子義嗣を携へて出で迎ふ義嗣關白藤原經嗣の上に班す五月薨す年五十一鹿苑院と稱す詔して號太上皇を贈る義持辭して受けず初め尊氏義詮の治を爲す寛にして下を裁めず諸の功臣驕恣にして動もすれば輒ち叛亂す義滿職を襲ひて軍政を修飾し紀綱大に振ふ山名大内の二族相ひ續て誅滅して偏疆の徒悉く屏息す然共中歲驕倣政令意に任し行不法多し諸將亦怨を懷く尊氏の時凡そ事を行ふ源賴朝の制に沿用す義滿に至りて其の法益々備はると云ふ平生書事を好み墨書を能くす子義持、義嗣、義教、僧周喜、義承、義昭、法尊、持圓、尊滿(法尊以下のあり(大日本史野史扶桑書人傳))

と雖も足利氏聽かず遂に天皇を立つ此に於て大和紀伊陸奥の南軍所在皆起る義持約するに他日南帝の皇子をして踐祚せしめんとを以て南軍稍々解け去る二十五年義持弟義嗣を殺す是より先き義滿義嗣を愛し竊に廢立を謀る義滿薨じて後義持義嗣と協はず義嗣密に不軌を圖る義持怒て之を執へ相國寺に幽す是に至て遂に之を殺す二十七年成敗式條を定む三十年職を子義量に譲て薨す三十二年義量薨じ義持又た政を聽く義持嘗て赤松持貞を愛し赤松滿祐の領地を割て持貞に與ふ滿祐却て反す諸將素より持貞を憎む故に赴て滿祐を伐つものなし病篤し管領諸將と議し義持の弟義圓を青蓮院より迎て其職を繼がしむ義持尋で薨す歳四十三太政大臣を贈り勝定院と稱す義持の職にあるや國家無事なり故に屢々攝家諸門跡及び諸公卿の第に遊ぶ世俗之れを御成りと云ふ(野史)

に得れば則ち喜で以て父母に薦む城主松平氏其至孝を稱し黄金を褒賜す固く辭し遂に封して家に藏む(野史)

アシカ、ヨシヤス

アシナ、モリシゲ

アシナ、モリウチ 蘆名盛氏は奥州黒川の城主より盛舜の子初め平四郎と稱す永祿元年從五位下に叙し修理大夫に任せらる蘆名氏未だ叙爵せし者あらず盛氏始て叙任を得たり盛氏智勇あり累世武を布き威勢稍々張る山東長沼首として款を送るに及んで二本松、四本松、須賀川、泉、三春、津川、山内皆信を通す相馬盛胤冠子たり結城義親女婿たり伊達晴宗婚を乞ふ盛氏子盛興か爲に晴宗の女を娶る是の時當りて仙道抗衡外患を顧みず唯た奢侈を事とす是に於て盛氏萬西、大崎、稗貫を取んと欲して好を足利義氏に結び威武益々振ふ數々兵を出して佐竹義重と戦ひ又北條氏康と戦ふ互に勝敗あり天正七年入道して止齋竹殿と號し岩崎に閑居す八年六月卒す歳六十、法名宗關瑞雲院と號す盛氏壯年の時夢想に感する句あり曰く「わするなよむそちにかけてちぎりしを」と盛氏之に廢て曰く「そのゆくす」をたのむことのは」と子盛興字平四郎、天正二年七月父に先て卒す年二十九、次子某愚頑繼ぐべからず二階堂盛義の子盛隆を養ひて嗣となす(野史)

を預り聞く諸老に次く三人驕泰、群下和せず猪苗代盛國異圖を懷き伊達正宗に應せんす蘆名平三郎横田氏勝河原田盛次遠藤四郎兵衛等亦皆正宗に通す天正十七年四月正宗來りて相馬に次し新地駒峯の二城を奪す是に於て盛國意を決して之に應ず正宗の老中片倉景綱伊達成實進んで摺上原に抵り地利を計り戦勝を議し近境を焚く是の時義廣須賀川に在り盛國叛きて正宗を封内に誘入ると聞き急に黒川に還り備へざるに乘國敵を猪苗代に迎へ入れ其の反形既に顯る彼の備へざるに乘し急に兵を發して之を屠戮せん高田盛隆諫て曰く伊達の兵鋭鋒精磨地勢に依て戦備を設く然るに君急遽事を發す恐くは不可ならん義廣色を作して曰く汝爾か云ふと雖彼焉そ地理を諳せん我師を發して之を撃たは一舉して陷るのみと盛隆切に其非策を諫め勸むるに使を遣はし和を講ずるの事を以てす義廣大に怒りて盛隆を及す又大細義長等屢々權を弄して賞罰私多し蘆名の四老佐瀬平田富田松本等屢々之れと權を争ふ而れ共義廣明斷する能はず故を以て四老恨んで正宗に通ず義廣敵摺上の近邑を焚くと聞き夜中黒川を發し摺上原に抵る正宗亦安子島を發し猪苗代にゆき五日黎明盛國を先鋒とし原田宗長、片倉景綱、伊達成實等之に次く義廣か兵富田將監を以て先鋒とし出湯、田澤、佐瀬、河内、河沼等之に次く激戦數刻義廣殆んど勝んとして終に大敗す義廣素より死戦を期す猶は進んで戦はんを欲す從者の切諫を以て漸く止む初め義廣の兵歩騎合せて一萬六千五百人或は敵に降り或は死傷し黒川の城に歸るに及んで從者僅に六人のみ是に於て門族重臣多く叛きて四面楚歌なり十日の夜義廣左右三十餘人と竊に常陸に逃る蘆名氏遂に亡ぶ義廣人となり豪邁にして能く士卒を指揮す進退度あり然ども壯年に於て暴を好み屢無謀の舉あり諫を拒み鄙賤を登庸す恣まゝに舊政を改めて人の憂苦を察せず是を以て宿臣多く離叛し卒に此に至る其後ち關白秀吉其の零落を憫れみ之に當州江戸橋を賜ふ(野史)

アシカ、ヨシヤス

アシナ、モリシゲ

アシナ モリタカ 蘆名盛隆は奥州黒川の城主なり左京亮と稱す實は二階堂盛義の子にして蘆名盛氏の妹の産む所なり盛氏の子盛興先ちて死す故に盛隆を養ひて嗣となす妻すに盛興の妾婦を以てす寡婦は伊達晴宗の季女にして二階堂盛義の次配の妹なり天正九年八月盛隆荒井萬五郎をして安土に往き駿馬三花蠟燭一千挺を右府信長に贈り始めて音信を通す信長爲に奏して盛隆を三浦介に補す盛隆又金上盛備を京師に遣り黄金三十兩を宮闕に奉ず救して盛備を遠江守に任す盛隆田村清顯伊達正宗等と屢々戦つて勝つ故を以て勇武に誇り諫を拒む初め蘆名氏に松本、平田、佐瀬、富田の四老あり世々治國兵馬の事を預り議す松本宗輔死す其の子を太郎と曰ふ盛隆立に及んで太郎年十六、容貌美麗、盛隆之を挑め共從はず太郎嘗て新國貞通の二男栗村下總と押れ暈す盛隆怒て下總を誅せんす下總太郎其の徒を聚め急に黒川城を襲ふ是の時盛隆羽黒に敗す變を聞て狼狽し東光寺に走る二人遂に城を奪ふ盛隆佐瀬以下兵二千人を遣て之を伐つ及はす故を以て盛隆益諸老の諫を拒み暴戻度なし天正十一年十月遂に大庭三左衛門爲め一盛隆の騎下に從て勇あり且丰姿美はし盛隆召て左右に給事せしめ寵愛特に甚たし後ち寵稍衰へ故を以て遂に此に及ぶ盛隆時に年二十四二女一男あり男字龜王丸生れて襁褓に在り秀吉命して後を襲がしむ早く夭す(野史)

アシナ モリタカ 蘆名盛高は奥州黒川の城主なり修理太夫と稱す盛隆の子、文明四年二月盛高兵を起して高田を伐て克たす其臣を誘ひて不意を襲ひ終に小俣宮内少輔を殺して其の城を拔く是年伊達氏宗の女を娶る十六年八月兵を率ゐて二階堂氏と戦ひ一族宿臣多く死す明應二年猪苗代氏の臣金曲伊賀反を謀る事覺はれて誅せらる四月富田淡路亂を作す三年五月盛高兵を率ゐて長井に出で二旬を経て事平く明應四年十一月松本備前伊藤民部謀反す事覺れ誅せらる七年六月松本右馬允叛く捕て之を殺す并に其黨松本豊前を誅す八月家臣の事に因て盛高子盛滋と隙あり家臣黨を分て父子に從ふ十月盛高盛滋と鹽川橋を隔て戦ひて之を破る永正三年盛高父子平く十四年十二月盛高卒す盛滋嗣ぐ初字三郎出羽判官と稱す永正十七年伊達植宗を援ひて兵を遣て最上義光と戦ふ十八年二月卒す子無し弟盛輝嗣ぐ(野史)

アシナ モリタカ

アシナ ダウマム

アシナ ジヤウベム 蘆の淨辨(ジャウベム)者なり小字は幸七郎後ち東民と稱す名は徳林、字は茂伸、一字は世輔、東山と號す父は卯左衛門徳芳奥州東山澁民村に住し四子を生む次郎は即ち東山なり東山幼にして穎悟好で稗史を讀む七歳にして僧定山に就き句讀を受く九歳にして僧素忠に從て經を受け旁ら醫術兵法に及ぶ實永庚寅東山甫めて十五歳仙臺に遊び富商久四郎を以て主と爲し處士吉田雷軒に從ふ雷軒其の才を愛し江戸に遊學せんことを勸む久四郎をして資を供せしむ祖父白榮聽かざして曰く汝仙臺に在り二十歳を待て西遊して可なり是に於て東山大島佐藤諸子に就て相切磋し又江志彦想に從て天文曆數を學ぶ十一月藩老田村圖書に見て學庸二書を講ず圖書遂に之を藩に薦め學資を賜ひて儒臣田邊整齋に就て學ばしむ享保丙申東山年方三十一白榮の言に從て京師に遊び淺井義齋の門人と爲る義齋歿して又三宅尙齋に學ぶ己亥白榮病あり即ち裝を治めて府に至る國侯命じて經を説かしむ事畢て家に歸へる幾ばくもなく白榮歿す辛丑擢んで、儒員と爲し侯に從て江戸に往く七月諫書を奉り以て大に時務を論ず侯嘗て書を其前に命じ親から墨を磨り紙を展べ以て東山に請ふ即ち筆を授て大書す字稍斜なり侯曰く斜なり宜く之を改め書すべし東山色を正して對て曰く臣の書は斜なりと雖も亦字たるを失はず國政直からざれば必ず政弊を失せん公何んぞ之を改めざる侍臣皆之が爲めに汗下す初め東山の京に在る桑名松臺と當世の人物を論じて謂ふ經術文章は當きに室鳩巢を以て第一と爲すべし是に於て謁を鳩巢に執り就て業を受く鳩巢も亦其才學を稱し託するに其子を以て

アシナ モリタカ

アシナ ダウマム

且つ曰く皇國律令の書は殘欠して存せず我れ嘗て漢土諸儒の論及び刑律を采蒐して一書と爲す今は老いたり能く爲すことなし子繼之を成せと東山因て以て自任す會々命あり念西侯以下の世紀を撰次す尋て其已前の事を撰し書成て之を上る乙卯東山國學を建てんことを請ふ免るさず是時鈴木八郎左衛門と云ふ者あり金二萬兩を出して經營の費に供せんと欲す東山爲めに復た之を請ふ聽かれず或ひと曰く田邊氏に就て之を請はし可ならんと因て其の言に從ふ亦報せず而して官別に費を給して之を建つ規模甚はだ小なり東山意不平疾と稱して出でず既にして出で、學に就く居ること一年有司と講席を争ひ遂に上疏して之を論ず因て罪を被て石母田長門の采邑宮崎に幽せらる後ち數歲命あつて筆硯に近づくことを許るさる乃ち刑律の書を著はさんと欲し使を諸方に通じ以て書を借らんことを請ふ允さる東山初め府に遊ぶや久し四楚辭一部を贈くる是に至て自ら歎じて曰く吾は即ち今日の屈原なり彼れ贈くる所蓋し亦讒を成すなり因て沈潜之を讀み疏注を作らんと欲す然れども竟に成らず會々藩の世子首服を加へ大赦を行ふ東山の族上書して赦されんことを請ふ書法例に違ふを以て納れず東山に女あり又上書して父に赦を賜はんことを請ふ亦納れず數年を閱て寶曆癸酉始て赦を賜ふ翌歲又府に赴て生徒に教授す是より先き刑律の書無刑錄十八卷を著す安永五年六月二日年八十一にして歿す東山幼より老に至るまで名を改むること數次嘗て書を鳩巢に寄す署名屢々變ず鳩巢嘆じて曰く彼は善く終る者に非ずと又京に在て一日櫻を嵐山に觀て歸へる尙齋曰く風日清美乃ち遊客雜沓する勿らんや東山曰く特り櫻を觀るのみ其他を知らずと尙齋人に謂て曰く彼は剛直人に過ぐ恐らくは自ら全うする能はざらんと後皆其言の如し(事實文編)

アジム 阿人は駿河島田の俳人なり雪中庵塾太の門人江原氏牡丹菴入道等の號あり家書雪の幸あり(俳諧人物傳)

アシヤ ダウマム 蘆屋道滿は陰陽家なり安部晴明の門



人、晴明(の傳參看)旅に在るに乘じ其の妻李花と通じ晴明の秘書金鳥玉兔集を寫したる途に晴明を殺すと云ふ...

東都に來り平洲の家に寓して平洲天門と均く中西漢淵に學ぶ雅量淹通を以て名あり門戸を開かずして歿す時に寶曆五年十月也...

六年勅を奉じて近古以來の和歌を撰進す文明五年削髮して榮雅と法名す(野史)...

稱す重範射を善くし錦織俊政と並びに勇敢を以て開ゆ後醍醐帝北條高時を討んとす重範俊政と密旨を奉じて此の事に預かる...

アサロ ヒロノリ

アセイ

アサロ ヒロノリ

アセイ

アソ コレズミ

アダチ カゲモリ

嗟歎す(元享傳書、東國高僧傳)
アソ コレズミ 阿蘇惟澄は惟國の第三子にして肥後の人なり...

ふ天授二年八月廿一日遂に戦死す(阿蘇系譜)
アソ コレトヨ 阿蘇惟豊は肥後の人にして阿蘇神社の大宮司なり...

アソ コレズミ

アダチ カゲモリ

母に擁せられて熊本城に入り佐々成政に憑る成政之を憐れみて城中に駐らしめ阿蘇氏の部下坂梨孫太郎及び西源兵衛を以て之に傳たらしむ...

織田信長と對抗し後淡路に歸り病死す清康或は云ふ冬康の猶子なり河内守と稱す由真城に住す天正八年池田之助來り...

アダチ クワクロ 安達郭露は奥州仙臺の俳人なり郭露は其の號、一に陸友庵の號あり與吉と稱す弘化中の人其俳歌に曰く「船あるす沙の光りや夏の月」(俳諧海内人名錄)

アダチ オミ 足立倫里は江戸の俳人なり倫里の男水軒と號す(俳林小傳)

アダチ クワクロ 安達郭露は奥州仙臺の俳人なり郭露は其の號、一に陸友庵の號あり與吉と稱す弘化中の人其俳歌に曰く「船あるす沙の光りや夏の月」(俳諧海内人名錄)

アダチ オミ 足立倫里は江戸の俳人なり倫里の男水軒と號す(俳林小傳)

アダチ クワクロ

アチノ オミ

アダチ クワクロ

アチノ オミ

アチヤウアム サウホ

なし食色を賜ふ(大日本史)
アチキ 阿直岐は百濟の人なり應神天皇十五年秋八月百濟王この人を遣し其馬二匹を買つる即輕坂の上の厩に養ひ阿直岐をして飼ふことを掌らしむ阿直岐またよく經典を讀めり太子菟道稚郎子これを師とし漢籍を學ぶ書紀に阿直岐者阿直岐史之始祖也と見えたり(日本紀)

アチヤウアム サウホ 蛙聽菴双甫「アリザハサウホ」

アツコ ナイシムワウ 篤子内親王は堀河帝の中宮なり後三條帝の第四女、陽明門院養ひて子と爲す治曆四年内親王と爲る延久元年三品に叙す五年賀茂齋宮と爲る後三條帝崩し職を罷む承暦三年三宮に准す陽明門院の封邑千戸を給す寛治五年帝納れて女御と爲し七年二月立て中宮と爲す關白師實を以て假父とす時に年三十四帝より長する十九歳長治元年堀河院に遷る嘉承二年薙髮して尼と爲る永久二年十月堀河院に崩す年五十五中宮篤く佛法を信し阿彌陀經を誦する四十餘年崩するに至るまで怠らず毎日法華經を供養し證菩提院を建つ(大日本史)

アツサ子 シムワウ 敦實親王は宇多天皇第八の皇子母は皇太后宮胤子内大臣藤原高藤の女一品式部卿六條宮と號す宇多源氏の元祖なり(系圖)

アツタ ダイグウジ スエカ子 熱田大宮司兼は參議藤原巨勢磨の十三子中納言貞嗣より六代從四位上大學頭實範の次子なり本名は季風三河國に住し四郎大夫と號す尾張國の目代に補す熱田大宮司の元祖たり康和三年十月七日赴任中に卒す年五十八(家譜)

アツタ ダイグウシ スエノリ 熱田大宮司兼は季兼の家嫡從四位下に補す熱田大宮司當流相續の初め也久壽二年十二月二日卒す年六十六季兼の女は下野守義朝の室にして右大將賴朝の母たるを以て此一族大に威權を得て子孫六波羅評定衆數人を出す(家譜)

アツミ ゴロウ

アヅチコウ 安土公「オタノブナガ」
アツノブ 淳信「カノシヨウリム」
アツノリ シムワウ 敦儀親王は三條天皇第二の皇子母は皇后宮城子寛弘八年十月五日式部卿親王に任す天喜二年七月廿一日薨す五十八歳(榮花物語)

アヅヒ イラツメ 安都屏娘子は太和中歌を善くするを以て知らる詠歌は載せて萬葉集に在り(萬葉集作者傳)

アヅマ クニダイフ 吾妻國太夫は絃家なり二代目常磐津文字大夫の門下にして始め大和太夫と稱し天明中兼太夫と更ため後師と絶して今の稱に改む遂に一家を成す後ち續く者なく一代にして絶ゆ(聲曲類集)

アヅマ スタミツ 吾妻助光は實朝の臣なり臂力あり且射を善くす嘗て罪を得て將に罰せられんとす兼其の射を賞して宥を求む實朝乃召して館上の蒼鷹を射せしむ助光射て之を落す矢鷹の身に中らず唯、羽を縫ふのみ實朝怪て之れを問ふ答て曰く身に當て血を流さは館屋を穢さん恐る故に斯くの如くするのみと遂に免さる(本朝武功正傳)

アツマロ 春満「カダノアツマロ」

アツミ カツヨシ 渥美勝吉は家康の臣なり源五郎と稱す姓は藤原氏天正三年長篠合戦の時十九歳首一を獲て疵を被る四年武田勝頼遠州横須賀城を搦んとして沖津を發す家康濱松より急に馬出總社山に陣す勝頼退く勝吉及び鷲山傳八郎淺井九左衛門柘植又十郎等之を逐ふ勝吉又十郎各首を得たり家康直に草羽織を脱きて之を賞す六年十月八日高天神の戦に康高首三を得たり其の一は即ち勝吉の獲る所なり後ち高天神城下旗賀屋に於て城中より脱出の敵一人の頭を得たり又下林屋に於て武田勝頼の兵一人夜半密かに城中に入らんとす勝吉之を殺して視るに頸に勝頼自判の文書をかけたり則ち之を家康に獻す褒として百俵を玉ふ七年九月十三日城兵三人出て甲

アチヤウアム サウホ

州に赴んとす勝吉鎗を把て之を追ふ敵之を見て退く途に一人を殺す甲州の兵城下中村に屯し城中を援はんとす因て通路に伏兵を設けて之を却けんとす勝吉命を奉して其の將となり自ら首一を得たり其の他首を取ると無數世に頸取源五郎と云ふ某年某月日死す子正勝其の後を繼ぐ(諸士略傳 本朝武功正傳)

アツミ ゴロウ

アツミ ゴロウ 安積五郎は慷慨家なり名は武貞本姓を飯田と曰ふ東海と號す江戸の人なり父を飯田忠藏と曰ふ下總銚子の入忠藏江戸に來り安積光角に就きて易學觀相を修め其の高弟たり天保七年光角死す因て其の業を嗣ぎ安積光徳と稱し後光角と改む居を日本橋榎物町の三島屋敷に卜し易學觀相を以て名あり五郎幼にして痘瘡を病み太だ危し父北辰に祈りて其命全きを得たり然れども遂に右眼を失ふ十一歳のころ父五郎を京橋の穀物商に託す五郎商業を習ふに意なし幾くもなすくして家に歸る是より父に從て書を讀み兼て易學觀相を學び稍長じて文才發達す又擊劍を以て易を學ぶ五郎政陽に就きて太るものあり尼崎藩の土藩命を以て易を學ぶ五郎政陽に就きて太平記綱目を借覽し是より深く楠公の人となりを景慕す嘗て父に隨て銚子に行く路を筑波山に取り山に登りて東海の渺茫たるを下瞰す因て東海と號す父常に五郎に謂て曰く賣卜者に學問なし少く學ば、假令論客の來て難詰するあるも毫も恐るゝに足らずと十五歳のころ幕府の醫官鹽田順庵に從ひ其學類に進む五郎の眉毛中斷す一日父順庵に謂て曰く眉毛の中斷する者は名を成さずと順庵曰く否示すに新井白石朝鮮人と筆談するの圖を以てす父白石の眉毛の中斷するを觀て大に悦ぶ蓋し眉毛の中斷する者名を成さざるものなきを以てなり後東條一堂に從ひ其の塾に在りて勵精研鑽し學力大に進む塾の西隣に千葉某あり擊劍を以て名あり五郎講學の餘就て劍を學び筋骨

を鍛練す五郎常に漢の王陵を稱譽し父は周勃を稱し仍て父の意に適はず父政陽に謂て曰く五郎の學問動もすれば傍道に馳す之を訓誨せんと欲す請ふ俱に一言を副へよと政陽諾す是に於て一日五郎を招き周勃の王陵に勝る所以を説き史記を引證して之を論す言辭懇到五郎服せず大に其の然らざるを辯じ互に論難す父怒て曰く兄の志斯の如くんば前途其れ憂ふべし今より後我子にあらずと遂に之を逐ふ五郎塾に歸り此の事を以て同學に告ぐ同學交々之を論す五郎大に悔ゆ時に政陽の來り訪ふあり五郎悔悟の情を陳べ之を介して父に謝し事解くを得たり既に於て塾頭たる者に害ありと此の事を以て塾を退かしむ家相に於て塾頭たる者に害ありと此の事を以て塾を退かしむ然れども五郎家に在らず或は塾に寓し或は學友の家に入る嘉永五年十二月五日父病を以て死す政陽購るに米二俵と金五兩を以てし兼て一時の糊口に資す五郎易を以て家を繼ぐの意なし易學觀相の書を擧て之を政陽に傳ふ政陽贈るに肥前忠廣の劍二尺二寸許なるもの一口を以てす五郎大に喜ぶ是れ曩に劍を購はんと欲するの意ありしを知るを以てなり五郎素と繼母と和せず父の死するを以て家を賣り其金を繼母に與へて之と別る後繼母再嫁す吉原の引手茶屋に大和屋久兵衛なる者あり安積氏の舊知なり五郎依て戸籍を大和屋に移す久兵衛の家花柳の中にあり頗る雜選す五郎講學に妨あるを以て常に此に居るを厭ひ或は去て他に寓し是より後常住を定めず五郎屢々政陽を訪ひ易學觀相の父が口授の漏れたるを傳へ且曰く今より後志の易學に篤き者あらば之をして安積の業を繼がしめよと仍て此の事を託す久兵衛の家に在るや毎に讀書に従事し夜に入り店を鎖せば劍を揮ひ體を練る衆婢恐怖す後木劍を購ひて之に代ゆ一日刀を拭ひ久兵衛の女に示して曰く是れ正宗の刀なり女曰く正宗の刀を有すれば發狂す宜く速に神に納むべしと五郎莞爾として之を鞘にす後江畑五郎と俱に下谷徒士町の組屋敷に塾を設けて漢學を授け塾頭となりて之を管理す其の

江畑と同名なるを以て自ら長五郎と稱す安政六年五郎清川八郎とて同く駿河臺の旗士某の家に寓す是年政陽を訪ひ閑話數刻將に歸らんとす曰く今より後久く音問を絶つべし必ず之を以て意を爲す勿れと慨然として長別の意あり政陽曰く漫遊歸期あり再會豈に有らざらんや敢て問ふ他事あるか五郎曰く方今幕府政を失ふ將に終に京師に事あらんとす是れ時に當て誰か幕府を佐くる者あらん然れども是れ素と秘事必ず漏洩すべからずと既に尊攘の志あり萬延元年庚申吉原災す久兵衛假宅を本所松井町等に營み自ら之を管し吉原の家を其女を居く五郎久兵衛の託を以て之が後見となる翌文久元年五月五郎將に上總に遊ばんとし久く厚誼を受くるを謝す女曰く一たび父に面して謝せよと仍て松井町の家を訪ひ久兵衛に謝して去る蓋し幕吏の蹤跡するを覺り清川八郎の於玉ヶ池の家を潜伏するが爲なり幾くもなく幕吏來りて搜索甚だ嚴なり五郎の書類等悉く沒收せられ久兵衛等數々糾訊を受け次第で事漸く解く後去りて京師に行き文久三年八月終に中山忠光の大和の義舉に會し兵を率て善く戦ひ創を蒙りて捕に就く元治元年二月十八日京師の獄に斬らる享年三十三五郎狀貌雄偉氣象豪邁痘痕あり右眼を失す漢籍に深く擊劍を能くし孫子に通じ謀を好む少にして補公の人となり幕ひ王室の式微を歎き夙に尊攘を唱ふ幕府の蹤跡を避け花柳の地に潜む數年毫も志を變ぜず終に國難に殉す後京都東山靈山に墳墓を修すと云ふ

アツミ、トモヨシ 敦康親王は一條天皇第一の皇子母は藤原道隆の女皇后宮の定子始め太宰帥となり後一品式部卿に任ず寛仁二年薨す(續通記)

玉鏡道草、伊加保紀行、齒黒辨、南朝編年録、國號傳、安坐傳、御鎮坐本紀重波草、正神邪神傳、猿樂傳、御鎮坐傳記日輪草、心御柱和訓傳、日少名宮傳坐死説、混沌傳考、三種神器傳來考、土金替古五行辨書、夷大黒記、庚申待傳、龍雷傳、天文曆道鈔畧、七夕考、古今三ヶ條大事録、和字傳來自抄、口訣誕生録、垂加翁神説、光海翁筆録和文集、(事實文書、續諸家人物志、鑒定便覽、書所一覽)

先き勝頼女を以て梅雪の子に嫁するを約し而して勝頼の族弟信豐亦其の子の爲に之を娶らんと欲し遂に釣閑勝資に賂ひて之を謀る是に於て二嬖勝頼に謂て曰く公の女は梅雪の子と本命協はず妻はす可らずと更に婚を信豐の子に約す梅雪之を聞き大に悲り且當時國勢日に盛まり將士月に離るゝを見遂に意を決して叛す是の役や出で、江尻を守り遂に家康の命を聞き潜かに之に謁見し其の邑下山に還り人を甲府に遣はして妻孥を取らざるや驚き且つ忿る而して信豐及び臣士梅雪の叛を聞き頼に報ずるや驚き且つ忿る而して信豐及び臣士梅雪の叛を聞ききて皆狼狽し遂に甲府を棄て、邑里に歸り三月梅雪家康の嚮導となりて駿河を伐ち竊かに甲府を窺ふ而して勝頼滅して後康に從ひて安土及び京師に往き又從ひて界浦に抵る會、信長の變至るに會して忽ち猜忌の念を生じて自ら安せず遂に別を告げて甲府に奔らむとし途に土寇の爲めに刺されて死す法名月山大龍寺と號す(或は龍泉寺)子信治字は勝千代尚幼きを以て下山に在り梅雪殺されて後駿河の食色を削られ僅かに河内の邑を領し十五年六月痘を病みて死し遂に絶つと云ふ(野史)

アツミ、トモヨシ

アツミ、トモヨシ

アチノコウヂ コレツナ

志と謀りて攘夷を決せんといふ一日従者二人を従へ猿か辻を過ぐ賊あり急に公知を刺す従者一人先づ北へ一人吉村右京刀を執りて待す後れて従ふ公知を呼ぶ右京趨り来る賊已に公知を刺す呼吸甚だ苦むものゝ如し右京刀を揮て賊を逐ひ公知を扶けて歸る幾くもなくして薨す時に歳三十

アチノコウヂ コレツナ

姉小路自綱は参議嗣頼の子也姓は藤原氏、本の名を光頼に傳へ、曰ひ永祿三年叙爵せられて左衛門佐に任せられ侍従と爲る永祿年中木曾義元と正濃に於て戦ひ義元軍敗れて自殺し自綱之に克つ天正三十年八月關白豊臣秀吉金森長近をして來り伐たしむ自綱敗れて之に死す子に卒す時に歳四十八にして法名を休安と號す

アチノコウヂ タカモト 姉小路高基は従三位内藏頭頼基の子なり姓は藤原氏宮内卿従三位を歴て参議に至る後ち正平十三年を以て薨す二子あり家綱、尹綱と曰ふ(野史)

アチノコウヂ タマツナ 姉小路尹綱方南條時義に傳へ、並に尹綱は参議高基の第二子也姓は藤原氏、本の名を頼時と曰ひ飛騨の國司と爲り左京大夫に任せらるるに於て、後ち龜山天皇の密旨を奉して竊かに兵を聚む足利義時京極高敏高頼に里○足利家譜をして之を撃たしむ尹綱乃ち向井、小島二城に據りて之を拒ぎ應永十八年九月城陥りて死す子あり昌家と曰ふ(野史)

アチノコウヂ ツボ子 姉小路局名はいよ本姓橋本氏若くして關東に下り本九大興に勤め居りしが文恭公の女和姫毛利家に嫁するるとき之に媵して小女龍とされり和姫逝去の後本九に歸り公薨して後は慎徳公の上臈年寄となり大いに權を弄し大興は勿論諸侯旗本の請託夥しく神樂坂下に町地面を賜ひ富み萬を以て數ふ公薨するに及び毛利家の槍屋敷に退隱し剃髮して勝光院といふ檜屋敷破却の時本所に逃れ進佐渡守方に養はれ居り明治十餘年同所に没したりといふ(香亭手稿)

アハタグチ ゼンホ

アチノコウヂ ツグヨリ 姉小路嗣頼は参議濟繼の第二子也本の名を真頼と稱す弘治四年飛騨守に任せられ四位下を経て従三位に進み今の名に改む永祿六年三月武家執奏に因りて参議に任せらる元龜三年薨す法名は雲山、三木又は古川國司と稱す子自綱繼ぐ(野史)

アチノコウヂ ナガタカ

姉小路長隆「フチハラナガタカ」

アチノコウヂ マサイヘ 姉小路昌家父は左京大夫尹綱、後龜山天皇の密旨を奉して飛騨に適き衆を聚めて其の國司と爲る足利義持兵を遣りて之を攻め殺す昌家立つて國司を襲ふ康正中参議に拜し正三位に叙せらる昌家志氣あり常に父の志を嗣かむと欲し遂げずして歿す子權中納言基綱孫参議正三位濟繼曾孫正五位下美濃權介濟俊相承け飛騨に在りといふ(續日本史)

アノ アクゼムジ

阿野悪禪師「ゼンヤウ」

アノ クラムジヤ

阿野冠者「ミナモトノトキモト」

アノ ジラウ

阿野次郎「ミナモトタカミツ」

アハタグチ シヤウウ 粟崎正羽は徳川幕府の醫官なり字は道仙字を以て稱す後ち道有と更む其の先色は肥後の粟崎に食む因て氏とす曾祖道喜生れて七歳乳母と仇を長崎に避く難之を索る急なり乳母道喜を番船に託し呂宋に走らしむ稍く長して瘍科を習ひて長崎に歸る其工を以て稱せらる祖正元少うして其の業を受く道喜年七十餘歳授くるに秘訣を以てす正元隨て之を集録し以て家に藏む子正家に至り其の術益々廣し正羽は即ち正家の子なり年甫て十三邑に創者あり治を益家に請ふ正家適々在らば正羽往て之を視る偽り告けて曰く君父醉へり即ち來る能はす余をして代り治せしむと其の家之を難しとす正羽可かざ瘡癩を療し鍼を下して縫ふこと十三將に以て畢らんとす正家方に至り其の爲す所を視頼る己の意と合す相率ゐ家に歸りて之を讓めて曰く堅子狡猾人を弄す悪むべし敢

て復た爲さば誓ひて汝を宥さずと心陰かに之を奇とす元祿の初め正羽吉田昌全村上自伯と同じく江戸に降されて皆友と爲る年僅に二十九皆侍醫に進む法眼に叙す(皇國名醫傳)

アハダ イラツメ 粟田娘子は寶字八年外従五位下を授けられ寶龜六年従五位下に叙せらる性和歌を嗜みて頗る其の蘊奥を究むは詠歌は載せて萬葉集其の他諸書に在り(萬葉集作者傳)

アハダ ウマカヒ 粟田馬養は聖武帝の時の人なり善く華言に通ず天平二年太政官奏して曰く諸蕃異域風俗同じからず若し語を譯することなければ互に意を通じ難し今の大學生は志ありと雖も家産究乏にして業を成すこと能はず請ふ聰慧なる者を擇みて資財を給せば必らず其の志す所を成さんと乃ち馬養及び播磨乙安陽侯眞身元眞等に詔し各々弟子二人を擇み以て華言を授けしめ冬の衣服及食料を給す(日本書紀傳)

アハダ カ子フツ 粟田兼房は嘗て和歌を嗜み未た秀逸を得ざるを以て嫌と爲す是故に平日柿本人麿の才貌を想慕す人麿は上世の歌人にして持統文武の朝に仕ふ或る時兼房夢に西阪下遊ひ落梅地に満ち林霞人を襲ふ傍らに一の老翁あり容姿不凡にして袍袴烏帽左手に紙を持ち右手に毫を執り尋思する所有るか如く未だ其誰れたるを知らず翁告けて曰く君久しく人麿を想ひ慕ふ故に邂逅を得たりと言畢つて見え兼房覺めて後甚た喜ひ畫工を雇ひ夢みる所の像を寫し數紙を換て乃ち成る既に裝潢して長く壁間に掛けて拜敬す後屢々佳句を得て神助有るが如し晚年以て白河帝に奉獻す帝悦て鳥羽の官庫に寶蓄すと云ふ(養華集)

アハダグチ カゲクニ 粟田口景國は鍛工久國の子也後鳥羽上皇の三四兩月の番鍛冶たり(玉石雜談)

アチノコウヂ コレツナ

アハダグチ クニイヘ 粟田口國家は鍛工なり國頼の子、彌九郎と稱す平治中大和城上郡珠市に住す(玉石雜談)

アハタグチ ゼンホ

アハタグチ クニミツ 粟田口國光は鎌倉の鍛工にして國綱の子なり幼年に父を亡ひ其の門人備前國宗に育はれ新藤五と稱す後長して名工となる正和元年六十三才にして没す(玉石雜談)

アハタグチ クニヨリ

粟田口國頼は粟田口鍛工の祖なり大和に住す姓は林、名は與康治中の人刀剣を鍛つに名あり

アハタグチ ゼンホ

粟田口善輔「一に善法は京師粟田口以て茶を烹る其の湯の沸騰する時便ち彷彿と松濤の聲、昔日高遠幽邃と高吟し馬蹄車夫の往來するものには必ず茶を施し談語以て樂とす又之を以て飯を炊く食喝くれば則ち市に出て、施を乞ふ人皆々其の人となりを知り喜びて金銀穀帛を與ふ其の得る所盡きざれば出でず關白秀吉嘗て手取釜の名を聞き茶博利休をして之を請求せしむ善輔勃然色を變して曰く吾れ貧寒にして長物なし苟くも之を公に獻せば何を以て茶を烹

アハダグチ タカミツ

ん抑々是の命あるは斯の器あるを以てなりと乃釜を取り石に投して碎く利休以て告く秀吉歎して曰く渠れは眞に道人なり其の茶鑪を請求するは予の過ちなりと乃ち上手の鑪工に命じて二個の手取釜を摸鑄せしめ其の一は善輔に與へて之を償ひ一は以て自ら之を藏むと云ふ(續近世時人傳)

アハダグチ タカミツ 粟田口隆光は土佐派の畫家なり民部と稱す土佐光顯の三男にして家を爲し洛東粟田口に住す故に世呼びて粟田口法眼と稱す畫法を父に學びて佛像人物花鳥を能くす應永年間の人なり(扶桑畫人傳、本朝畫史)

アハダグチ タマツナ 粟田口忠綱初代は大坂の鍛工なり播磨の人にして國綱の末葉也一の名は忠細近江大塚に任し又た其の守に任す本姓は淺井氏寛永中の人(本朝新刀一覽)

アハダグチ タマツナ 粟田口忠綱二世は大坂の鍛工なり萬太夫と稱し父に繼いで近江守と稱す一竿子の號あり寛永享保中の人(本朝新刀一覽、新刀辨)

アハダグチ ツツミツ 粟田口經光は土佐畫の名家なり隆光の子なり又粟田口法眼と號す畫法父に同くして活動あり設色の草花生るか如し應永晩年の人(扶桑畫人傳)

アハダグチ ニフダウ 粟田口入道「フヂハラサダマサ」

アハダグチ ノリクニ 粟田口則國は大和粟田口の鍛工なり藤右馬允と稱し藤林子と號す後鳥羽上皇の正月二月の番鍛治たり曆仁中の人國友の子なり二世則國は天福中の人

アハダグチ ホウヂム 粟田口法眼「フヂハラミツクニ」

アハダグチ ヒサクニ 粟田口久國は鍛工なり藤次郎又大隅權守と稱す國友の弟、建保四年没す年六十七後鳥羽天皇の閏月の番鍛治たり(玉石雜記)

アハダグチ ヨシミツ 粟田口吉光は建治中の鍛工なり國吉の弟子、藤四郎と稱す刀劍を鍛つに長ず足利義滿の藥

アイザハ セイシサイ

研通、結城氏に傳ふる所の蜘蛛丸は其に其作に係る(萬寶全書)

アハダ クワンバク 粟田關白「フヂハラミチカチ」

アハダ サダイジム 粟田左大臣「フヂハラアヒヒラ」

アハダ チヨダウ 粟田樗堂は伊豫松山の俳人なり二疊庵又息隠と號す初蘭芝と號す文化十一年八月廿一日没す(俳家發年表)

アハダ ツチマロ 粟田土滿は和學者にして遠江濱松の人なり江戸に出て加茂眞淵の門に入り古學を研究す翁歿後本居宣長の門に入り又古學を問ふ(學定傳)

アハダ ドノ 粟田殿「フヂハラミチカチ」

アハダ ノオト 粟田大臣「フヂハラアヒヒラ」

アハダ ベツダウ 粟田別當「フヂハラコレタカ」

アハダ マヒト 粟田眞人は天足國押人命の後なり眞人學を好みて文を能く進止容あり天武の朝小錦下直大肆に進む持統の朝筑紫太宰と爲る集人一百七十四人及び布、牛皮、鹿皮若干枚を獻ず賞して衣裳を賜ひ直大貳に進めらる文武の朝律令を撰むに與かる、民部尙書と爲る大寶元年遣唐執節使と爲り位號を改められ正四位下に叙し節刀を授けらる筑紫に至る比風浪悪くして發することを得ず遂に京師に歸る二年朝政に參議す尋で再び唐に赴き楚州に至る人あり來り問ひて曰く何れの國の使ぞと眞人白く我は日本國使なり此處は何れの州界ぞ曰く是れ大周の楚州鹽城縣なり眞人又問ふ嚮に大唐と稱す何に緣て號を改むる曰く永淳二年天皇崩じて皇太后祚に登り神聖皇帝と稱し國を大周と號す聞て海東に大倭國あり之を君子國と謂ふ人民豊樂に敦行禮義ありと今使人を見るに儀容閑雅風聞果して信なりと言畢て去る長安に至り武后に見て宴を麟德殿に賜ひ司膳卿を授けらる眞人進德冠を冠す頂に華鬘四披あり紫袍帛帶唐廷其の温雅を稱す慶雲元年復命して節刀を上り大倭の田二十町穀壹千斛を賜ふ二年中納言に拜し從三

アハダグチ タカミツ

位に進み和銅の初め太宰帥と爲り正三位に昇る養老三年薨す(大日本史)

アハダ ミチマロ 粟田道麻呂は醫人なり内藥祐と爲る實字三年姓朝臣を賜ひ參議、近衛員外中將兼勅旨員外大輔、式部大輔を歴て因幡守となる神護元年和氣王の事に坐して官を免せらる後幾もなくして飛騨員外介に任せらる其守某道麻呂と舊怨あり乃起ゆるに罪を以てし拘へて之を幽す道麻呂憂憤して死す(皇國名醫傳)

アハダ モロエ 粟田諸姉は淳仁帝の後宮なり初藤原仲麻呂の子眞從に適す眞從卒して寡居す帝諸王たりし時仲麻呂諸姉を以て之に妻はし私第に居く帝位に即く從五位下に敘す(大日本史)

アハダ ハイテイ 淡路廢帝「ユムニムテムラウ」

アハダ ヤ ソウクラ 淡路屋宗和は泉州堺の茶人なり茶法を武塾紹陽に學て能くせり(茶人系傳全集)

アハダ オトマ 阿波大臣「フヂハラノツチムチ」

アハダ ヒデモチ 粟野秀用「阿波」は陸奥の人なり初め藤八郎と稱す後喜右衛門と改む伊達政宗に仕へて徒士たり罪ありて死刑に擬せらる秀用之を聞き宵通れて京都に至り羽柴秀吉の威武日に熾んたるを聞き尾張に往き仕へて歩士隊に列す秀用性勇悍毎に軍に従ひ先驅夜譚の功業に超ゆ秀吉食邑一萬石を褒賜し以て中軍の前鋒とす政宗之を聞きて怒り人を遣して秀用を請ひ以て甘心せんとす秀吉曰く渠れ初め來りて孤に屬す其の由來を問ふに彼れ隱匿することなし今足下に罪あるとを知て孤之を扶持するは頗る禮に悖ると雖も彼れの意亦憫む可し始めより今に迄る功勞も亦寡からず孤爲めに宥を請ふと政宗強いて罷む秀用心を竭して仕へ屢々軍功を樹つ食邑を累加す伊豫柘木城邑十萬石を賜ひ木工頭に任す復三萬石を加へて秀次に屬す而て又二萬石を益封す文祿四年秀次秀吉に反して高野山に通る、や秀用坐して京師大雲院に入

アイザハ セイシサイ

り自殺す法名を大雄誓義と曰ふ(野史)

アハダ ノブカダ 粟屋信賢は毛利元就幕下の士なり文龜年中尼子經久大内義興と備前の三好郷に會戦す元就兵を遣り義興を援ふ信賢その遣中にあり苦戦の際大將福原貞俊章旗を敵に奪はる信賢射術に達す旗を奪ふものを射斃し首級を擧げ旗を取返し郎等に附與して通行かしめ自から敵中に入り數騎を斬りて遂に戦死す(翁皮録)

アハダ ヨシオミ 粟屋良臣は膳所の勤王家なり初の名は達道龍之助と稱す險賊を以て家を弟に譲り京師に出て長門の人岡村實齋に從學す文久三年實齋藩侯毛利慶親の國に幽せらるるを聞き弟子に訣して郷に歸り將に盡すあらんとす良臣共に俱にせんとを請ひ膳所に至り志を父彦右衛門に告げ師と共其に往き清水親知の家を寓す毛利侯延見して其の氣節を愛す後浪士復讐の令あるに會し侯及び親知の勸に従ひ郷に歸り學官に擢てらる直言を以て黜けらる元治元年六月幕兵浪士の三條の客舎を襲ひて殺捕する所となる良臣變を浪花の萩邸に報せんとして舟に乗して西下す途に實齋の東上に遇ひ事を告げて京に從ふ至れば則福原越後等兵を率て藩侯の冤を訴ふるに會す良臣大に喜び眞木保臣に請ふて之に従ひ進で鷹司の邸前に至る幕兵四もに逼り衆奮闘す良臣傷を被りて其の門外に斃る時に年二十四(愛國傳)

アハダ ロキウ 粟屋爐久は茶人なり通稱坂田源太郎初め古田織部正の弟子たり後織田貞置か門に入る(茶人系傳)

アヒコ ウヂヲ 阿比古氏雄は官醫なり仁和寺侍醫兼鍼博士たり(皇國名醫傳、本朝醫考)

アヒコ ナムサウ 安孫子南窓は羽州最上の俳人なり南窓は其の號一に翠谷庵の號あり久左衛門と稱す弘化中の人

アヒザハ セイシサイ 會澤正志齋は水戸藩の儒員なり名は安、字は伯民通稱は恒藏水戸藩の人なり幼より警敏にして學を好み彰考館寫字生と爲る初め留守に班し江戸より還

りて歩士に班し尋いで諸公子に侍讀し數年にして累進して進物番と爲り藤田幽谷歿するに及びて彰考館總裁と爲り尋いで病を以て職を辭し教授と爲る後ち擢んで郡奉行と爲り小性頭總教に轉す前後秩を増して二百五十石に至る幕府攘夷の令あり安新論五篇を著して哀公に獻ず哀公不豫繼嗣未だ定まらざらん心洵々たり安藤田東湖等と江戸に來りて建白する所あり已にして哀公薨し烈公封を襲ぐ公其の用可きを識り召し見て政事を咨詢し公國に就くに及びて屢々安の居を訪ふ公言路を開廣す讜直を容納す安が啓沃多きに居ると云ふ烈公致仕して國事一變す安亦た致仕して憩齋と稱し幾ばくもなく讜を得て幽屏すること四年江戸に還る時に幕府方に邊備を議し烈公を召して參畫せしむ公、安の忠懇を思ひ再び祿を賜ふ文久三年病を以て家に終ふ年八十二著はす所孝經考、中庸釋義、剛詩卷、典讀述義、讀論日札、讀書日札、讀易、讀周卷、正志齋雜錄、新論、迪釋編、伸復和言、學制畧說、退食閑話、洙泗教學解、及門遺範、下學通言、讀直毘靈一讀萬花、閑聖漫錄其他十數種あり(近世先哲叢談)

法を賀陽鐵舟に和歌を廣澤長好に學び共に稱譽せらる凡そ弓馬劍槍武夫の講する所は皆大意に通じ兼て筆尺八に通ず水戸侯其の名を聞て厚く之れを聘す蓋し森尙謙の薦に係ると云ふ(事實文編)

アヒダ ソザン

アフミ ツチナ

アフギヤ キトウ 扇屋几藤は三州吉田の俳人なり一に九花亭の號あり通稱彌兵衛と云ふ弘化中の人(俳諧海内人名錄)

アヒダ ソザン 會田素山は出羽秋田の俳人なり素山は其の號一に亮齋又柳陰の號あり多仁と稱す弘化中の人、其の句に曰く「こい取の聲に夜明てうめの花」(俳諧海内人名錄)

アヒダ ソザン

アフミ ツチナ



アフリノ オカチ

アフリノ カチ 近江於金は近江國海津の遊女なり其の頃東國の武士大番にて上京すとて日高く宿しけるが馬を湖に入れて冷せしに物に驚き墮放れて狂ひ走るに金女行逢しが驚きたる跡もなく高き足駄はきながら馬の差し細の端を踏まへければやすくと馬とまりけり人皆目を驚かす事限りなし其足駄砂に深く入て足頸まで埋まれば自ら云ふ妾を奈何なる男子と雖も五六人にては得たかへじと自稱せしと云ふ或は曰く佐伯氏兼に角瓶の法を教へし女近江の兼なりと

アベ サダタフ

判事を歴大學頭兼文章博士と爲り從四位下に進み延暦の初め因幡守を兼ね刑部卿と爲り四年卒す年六十四、三船人と爲り聰敏にして博く群書に涉り善く文を屬す名一時に高し嘗て勅を奉じて神武以來持統に至るまでの謚號を定む今ま稱する所は即ち是れなり或は曰ふ懷風藻は三船の作る所なりと(日本書紀)  
アフリノ キウシラウ 近江屋久四郎は狂言作者なり當時有名の作者輩出して村山又兵衛座に杉三安、都萬太夫に近松門左衛門、鹽屋九郎左衛門座に近江屋久四郎等の作者ありて名聲互に相ひ鳴る而れ共門左衛門の外は皆専ら作者を業とするものにあらずと云ふ(續遊笑)

アフリノ オカチ

アフリヤ ジャウイウ 油屋常祐は茶人なり茶法を紹興に學びて能くせり泉州堺の人嘗て青磁柑子口の花器を織田信長に献す世に名器の稱あり(茶人系傳全集)  
アフリヤ セウサ 油屋紹佐は茶人なり茶法を紹興に學びて能くせり泉州堺の人(茶人系傳全集)  
アフリヤ ソウミ 油屋宗味は茶人なり茶道を紹興に學びて能くせり泉州堺の人(茶人系傳全集)  
アベ イセノカミ 阿部伊勢守「アベマサヒロ」  
アベ イラツメ 阿部娘子は和銅寶龜間の人なり和歌に工なるを以て其の名あり詠歌は萬葉集其の他諸書に出づ(萬葉集作者履歷)  
アベ エヨ 阿倍兄雄は從五位上類蟲の孫、父を道守と曰ふ兄雄は延暦の末從五位下を授けられ少納言中衛少將を歴大同中從四位下に叙せられ大膳大夫兼近江守に遷り山陽道觀察使と爲り准參議石京大夫を拜し兼右兵衛督近衛中將を歴東山道觀察使と爲り正四位下に叙せられ畿内觀察使に遷りて官に卒す兄雄親直にして才文武に涉る其職に於て公廉の稱なり伊豫親王の廢せらるゝや帝方に震怒す群臣敢て諫むる者なし唯だ兄雄固く争ふ言聽れずと雖も時論之を偉とす(大日本史)  
アベ オキユキ 安倍興行は大納言安仁の子なり秀才に擧られて對策及第す貞觀中大内記勘解由次官を授られ從五位下に叙せられ遣太宰府推問密告使と爲る元慶中民部少輔を歴上野介に累遷す初清和帝の太皇太后の崩するに遭ふや喪服の期未だ決せず諸儒をして之を議せしむ興行も亦與る(大日本史)  
アベ オクミチ 安倍奥道は和歌を善くす秀歌は多く萬葉集に載す寶字六年從五位下に叙せられ若狹守に任ぜられ轉じて大和守と爲る八年三階を超えて正五位上に叙せられ攝津大夫と爲る神護元年勳六等を授けられ左兵衛督と爲る從四位下にせらるる景雲元年中務大輔と爲り三年又左兵衛督に遷る寶龜二年是より先き事に坐して解官せらるる是に至りて復た從四位

アベ サダタフ

位下に内藏頭に任ぜらるる三年但馬守に遷る(萬葉集作者履歷)  
アベ コオチ 阿部小祖父(小祖父)には宿奈麻呂と同祖なり和歌を善くするを以て知らる萬葉集中載する所多し累進して從五位下武藏守に至る(萬葉集作者履歷)  
アベ サダタフ 安倍貞任は頼時の長子なり厨川邑に居て厨川二郎と稱す容貌魁偉にして皮膚肥白なり長ク六尺餘にして腰圍七尺四寸父死するに及びて家に其の兵を領す天喜五年十一月源賴義來り攻むと聞き自ら精兵四千餘を帥ひ出で、河崎柵に據り迎へて鳥海に戦ふ時に大風雪官軍飢困す貞任精騎を縱つて之を衝き數百人を殺し更に驍騎二百餘を以て左右翼を張り來み撃ちて大に之を破る賴義僅に免る貞任の兵勢甚だ盛ん也人民を劫略す別に藤原經清をして兵數百を帥ひて衣川關を出で使を諸郡に遣し私符を用ひて官物を徵せしむ康平五年賴義清原武則等と兵を合して貞任の叔父僧良照の柵を攻む良照の軍潰ゆ弟宗任亦た戦ひて敗ぶらる之に久して官軍食に乏し貞任衆に謀りて曰く頃日敵軍食盡き四散して糧を求め營中の兵數千に過ぎずと我精兵を以て之を襲はし則ち之を破ぶらんこと必せりと九月精兵を率ゐ夜に乘じて之を襲ふ官軍備あり貞任大に敗れて營に還る官軍追攻し火を縱ちて之を燒く營中大に亂れ自ら相鬪撃して死傷甚だ多し退きて衣川を保つ明日官軍來り攻めて藤原業近の柵を燒く貞任火を望みて大に驚き又た退きて鳥海柵を保つ其の地西北は大澤にして二面は河を阻て岸の高きこと三丈餘柵上に鐵櫓を構へ墮中に刃を樹て鐵櫓を施して守備甚だ固し官軍又た之を圍む貞任矢石を發し沸湯を注ぎて拒守すること甚だ勉む婦女數十樓に登りて歌を唱へ以て官軍を激す賴義怒りて急に之を攻む貞任擊ちて數百人を殺す官軍屋を壞りて壘を填め火を放ちて之を燒く會々大風暴かになり樓櫓屋舎一時に焚蕩す賊兵大に潰亂す官軍圍を紓めて之を出し横撃殆ど盡くす貞任劍を揮ひ

て出で、戦ふ官軍鋒を擡めて之を刺す未だ死に至らず之を大...
アベ サダユキ 安倍貞行は大納言安仁の子なり仁壽中...
アベ サダヨシ 阿部定吉は參河の人、大藏太輔と稱す...

アベ サダユキ

アベ スクナマロ

清康起て之を觀る正豐刀を奉じて從ふ謬りて我が父殺され...
アベ シゲツグ 阿部重次は岩槻の城主なり正次の第二...
アベ スクナマロ 安倍沙彌麻呂は萬葉作者の一人...

千石を受けて岩槻城に居り尋ぎて老中となる十六年正月...
アベ シヤウウウ 阿部將翁は有名の本草家なり名は輝...
アベ スクナマロ 安倍沙彌麻呂は萬葉作者の一人...

アベ サダユキ

アベ スクナマロ

砂糖を取り米地佐を採りて蠟燭に代ゆるの類皆世に用あり...
アベ スクナマロ 阿部宿奈麻呂は比羅夫の子なり初...
アベ スクナマロ 阿部宿奈麻呂は比羅夫の子なり初...

アベ セイメイ 安倍晴明は有名の天文博士なり右大臣御主人の後、父は益材大膳大夫たり、晴明初め賀茂忠行及び其の子保憲に従ひて陰陽推算の術を學び職神を役使し天文を解し雜占を曉る奇中神の如し進みて從四位下に叙せられ天文博士、大膳大夫、左京大夫、播磨守を累歴す世傳へ言ふ華山帝の位を遷がれ夜潜かに宮を出づるや嬪妾と雖も之を知らず是夜晴明晝を庭中に避け仰で天象に變あるを見大に驚き走りて朝に造る帝果して在さず長徳中衛士あり左大臣藤原長道に告げて曰く其日家當に怪あるべしと期に至りて道長門を杜ぢ客を謝し唯、鎮守府將軍源賴光醫師丹波忠明僧正勸修及び晴明を招く會、大和瓜を獻す道長疑ひて食はず晴明曰く瓜中に毒ありと勸修咒を唱ふ其の瓜跳躍圓轉して止まらず忠明針を以て之を刺す瓜乃ち動かず賴光刀を抜きて瓜を研る中に小蛇あり針其の眼に中り刀其の頭を斷つ、道長の家に一犬を畜ふ出づる毎に必ず隨ふ一日將に法成寺に往かんすとす犬前を邁りて吠へ衣を銜みて之を牽く道長怪みて寺門に入らず晴明を召して之を問ふ晴明曰く相府を咒詛する者あり厥物を此に埋むと因て一所を指示し之を掘りて泥封の土器を得肉に一字を朱書するあり晴明曰く世此術を知る者なし必ず道滿法師の所爲ならんと乃ち紙を結びて鳥形を作り呪を誦じて之を投ず化して鷲と爲り飛び去る因て人を遣して其後に從はしむ萬里小路河原院側の民家に止まる衆其の主を執て來る果して道滿なり鞠問して實を得道滿を播磨に逐ふ又又園城寺の僧智興病んで將に死なんんとす其の徒晴明に病を祈らんとす晴明曰く師の病起らず我に秘符あり以て他人に移すべしと僧證空代り死せんと請ふ晴明符を書して祈る智興立どころに癒え證空忽ち病む嘗て陣座を經藏人某が鳥の爲めに穢さるゝを見て之に告げて曰く子に命は今夕に過ぎざると其人涕泣して救を求む晴明隨ひて其の家に至り通夜之を擁して誦咒す曉に及びて之を問へば則ち

ち服膺を致す自ら來りて實を吐き大に叫んで暴死す某卒に免ることを得たり晴明の妻職神を畏る故に之を一條反橋の側に置き事あれば則ち召して之を使ふ其の門戸守者なくして常に開闔す時に播磨の人智徳と云へる者あり亦た方術を能くす晴明を試んと欲し伴りて術を習ふ者の爲ねして其の家に造る二童子從ふ晴明以爲らく彼れ我術を試んと欲するなり二童子は蓋し職人なりと是に於て心念手印して密に二童子を匿し而して謂て曰く今日事あり請ふ他日を峻んと智徳去る少時にして復た來りて曰く我二童を失す意ふに卿の匿せしならん晴明笑ひて曰く我知らず智徳叩頭して己まらず晴明曰く子我を試みんと欲す而して我之を知らずと謂ふ邪何ぞ我を料るの淺きやと乃ち誦咒す二童忽ち出づ智徳歎服して曰く卿は神と謂ふべしと遂に之に師とし事ふ初め天徳中節刀災に罹る人其の制を知る者なし詔して晴明に問ふ晴明木槌を作り之を獻す著はす所金烏玉兔集一名神書占事密決一卷あり大日本史

アベ ソウケム 阿部棕軒は福山の領主也字は子純、棕軒と號す備中守侍從に任ぜらる性書を好み沈南蘋の畫法を愛して遂に其の妙所を得花卉鳥獸に巧なり其の傑作なるものに至りては南蘋に齊し設色多くして水墨少なし又詩文を能くし當時増山雪齋と名を齊す文政九年六月二十日卒す年五十三扶桑書人傳

アベ タカボシ 安倍高星は貞任の次子なり貞任の敗ぶる、や乳母之を抱きて津輕藤原に匿る後遂に其の地を領する大日本史

アベ タマアキ 阿部忠秋は徳川幕府の老職たり正吉本阿部家譜にの子にして初字を小平次と稱す忠秋年甫めて九歳徳川三代將軍家光に近侍して夙夜怠らず元和三年米廩を賜はり膳番となり九年扈從部番頭となり尋て從五位下に叙せられ豊後守と稱す寛永元年父の采邑六千石を襲ふ明年春邑四千石を加賜せられ併せて一萬石を領し累ねて食邑を賜はる九年冬少

アベ セイメイ

アベノ ナカマロ

老職となり番頭を兼ね十年春政事に參預し尋て老中に補せらる十一年秋從四位下に叙せられ十四年再び邑を加賜せられ下野の壬生城に居り合せて五萬石を領す十六年武藏の忍城に移り一萬石を加へらる或は云く是月一萬石正保四年復た一萬石を加賜す慶安三年四代將軍家綱の西城に徙るや忠秋命を受けて之に傳たり明年八月侍從に任ぜらる是冬十二月諸老會議す酒井忠勝曰く由井正雪等の餘黨を懲らさんが爲め悉く府下所在の浪客を放逐せんと忠秋曰く無辜の諸客を他邦に放つ恐くは仁政に非らずと井伊直孝亦た忠秋に同意し遂に放逐の議罷む明暦元年六月忠秋請ひて再び從父弟正能を以て嗣となす寛文三年春邑一萬石を加賜せられ八萬石を領す十一年夏職を辭す後ち延寶三年五月卒す時に年七十四なり法名を隆譽天朗空烟秀玄院と號す忠秋資性廉直敦厚能く人を愛し府下棄兒あるに遇へば則ち命して拾納せしめて曰く大都在棄兒あるは執政の恥なり之を收むるは亦職事を治むるなりと之れを邸第に撫育し其の鞠養する所數十人あり而して男子は給仕せしめ女子は皆な婚嫁せしむと云ふ正能繼ぐ野史、本朝武林傳

アベ タマサ 阿部忠政は徳川家康の家臣なり大久保忠次の子初字を四郎五郎と稱す後ち四郎兵衛と更たむ阿部正定嗣子なし忠政を養ひて子となす忠政武を好み射を善くす天文十四年年十四にして織田信秀の將某を射殺す以後諸所役射を以て敵を苦むると多し弘治元年蟹江城を攻めて杉浦大八郎五郎吉貞同八郎五郎勝吉大久保新八郎忠勝同平右六忠員同七郎右衛門忠世同次右衛門忠佐等と七本鎗の名譽を得又酒井忠次を援けて福釜を守るや會々尾人來り攻む忠政其の將柴田勝家を射て之を地に仆す尾人之を援けて去る其他勇戦多し後長子を喪ひ官を辭す家康に屢々之を召還す天正十二年五月没す本朝武功傳、野史

アベ ナカヨシ 安倍親良は儒醫なり盛親の子、保元應保の間侍醫兼能登權介たり皇國名醫傳

アベ セイメイ

アベノ ナカマロ

アベ チョウドウジ 安倍千代童子は貞任の長子、容色美にして驍勇、頗る祖父の風あり貞任敗ぶるゝに及んで柵を出で、戦ひ官軍に獲らる源賴義之を憫みて死を貰はんと欲す清原武則進み諫めて曰く將軍小仁を思ふて大害を遺す莫れと賴義其の言を然りとて之を斬る時に年十三大日本史

アベ ツギマロ 阿部繼麻呂は萬葉集作者の一人にして秀歌多し天平七年從五位下に叙せられ八年遣新羅大使と爲る萬葉集作者履歷

アベ トウリム 阿部董琳は江戸の畫家なり名は貫、字は董琳字を以て行はる善拙と號す通稱集太郎眞墨所一覽

アベ ナカマロ 阿倍仲麻呂麻呂は中務大輔船守の子なり性聰敏にして讀書を好む從八位上に叙せらる靈龜二年選まれて遣唐留學生と爲る時に年十六唐に往て留學し博識の名あり姓名を易へて朝衡と曰ふ玄宗帝左補闕を授け儀王の友と爲し古今集抄に曰く唐朝仲麻呂に性朝衡を朝衡と稱す仲麻呂は唐朝衡の字なり日本書紀に曰く仲麻呂の東歸を送るの詩あり李白集に秘書校書に遷し後秘書監に至り衛尉卿を兼ね勝實中遣唐大使藤原清河唐に至る玄宗仲麻呂をして之れに接せしむ清河の還るに及びて仲麻呂與に歸らんと欲す玄宗因て命じて使と爲す乃ち詩を賦して曰く街命將辭國、非才忝侍臣、天中戀、明主、海外憶、慈親、伏奏達金闕、驂驛去、玉津、蓬萊鄉路遠、若木故園隣、西望懷、恩日、東歸感、義辰、平生一寶劍、留贈、結交人、尙書右丞王維も詩并に序を爲りて行を送る包倍、趙驛等も皆贈るに詩を以てす既にして明州に至り唐人と別る仲麻呂月を望みるに悵然として和歌を詠じて曰く「あまのはらふりさけ見ればかすがなる三笠の山にいてし月かも」因て寫すに漢語を以てして之に示す衆皆感歎す海上風に遭ひて安南に漂泊す唐人以爲く仲麻呂溺死すと翰林供奉李白詩を作りて之を哭す仲麻呂清河と復唐に至る肅宗左散騎に擢て、常に安南都護に侍せしむ光祿大夫に至り御史中丞、北海郡開國公を兼ね邑三千戸を食む寶龜元年

正月唐に卒す年七十代宗瀋州大都督を贈る仲麻呂嘗て書を作  
りて新羅宿衛王子金隱居に憑て郷親に寄す新羅使金初正其の  
書を持して至る仲麻呂唐に在ると凡そ五十餘年身は榮ふと雖  
も歸思多し言卿國に及ぶ毎に未だ嘗て懐惻せずんばあらず實  
龜十年勅して曰く前の學生阿部朝臣仲麻呂唐に在て亡ぶ家口  
單乏にして葬祭闕くることあり其れ東總百匹白綿三百屯を賜  
へど承和三年因て遣唐使に命じて正二位を贈らる(大日本史)

夷等を會し大に饗して歸る又肅慎を伐ち生熊二、麗皮七十張  
を獲歸て之を獻す明年再び蝦夷を伐つ飽田、淳代、津輕三郡  
及び勝振蝦夷三百七十三人降虜三十五人を集め之に賜ふに  
船一艘と五色の綵帛を以てし以て其の土神を祭らしむ進み  
て肉入籠に至り郡領を置き遂に肅慎を伐ち四十九人を虜にし  
て歸る比羅夫及ひ道與國司に位各二階を賜ふ六年戰艦二百を  
率ゐて肅慎を伐つ陸奥の蝦夷を將て大河の側に到る渡島の蝦  
夷千餘河に向ひて營す蝦夷二人營を出て呼びて曰く肅慎の舟  
師多く來り將に我を殺さんとす願くは河を渡り相屬せんと比  
羅夫船を命じて之を召し賊の伏する所と其舟數を問ふに蝦  
夷其の處を指し且つ曰く舟二十餘艘と因て使を遣して賊を召  
す賊敢て來らず乃ち綵帛兵鐵を河畔に積みて之に餌す賊羽を  
繫で旗を爲し舟師來り近く既にして和を乞ふ比羅夫聽ず其の  
柵を攻む能登馬身龍賊の爲に殺さる比羅夫遂に賊を破り五十  
人を虜にす天智帝の時前將軍阿曇比羅夫と百濟を討て唐兵と  
華下後將軍たり尋で前將軍上毛野稚子等と新羅を討て唐兵と  
戦ひ利あらず百濟の諸將王師に隨て來投す比羅夫筑紫の大宰  
の帥より大錦上と爲る子あり宿奈麻呂と云ふ(大日本史)

アベ ナガユキ

アベ マサツグ

の後ち參河の人なり天文十六年正勝年甫めて八歳徳川家康に  
熱田に從ひ常に左右に侍し大小の争戦一として從はざるなし  
殊に武田勝頼と天龍川の戦に於て最も勇功を顯はしたり天正  
十三年旗隊長となり食邑を賜はる十四年從五位下に叙せられ  
伊豫守と稱す十八年豆州方原の地五千石を賜はる(本家譜)武  
後ち慶長五年四月卒す時に年六十歳子正次嗣ぐ(野史)本朝武功  
正傳)

大六を松平綱政の第に禁錮し并に死を賜ふと云ふ子正喬繼ぐ  
(野史)

アベ ナガユキ

アベ マサヒロ

終に其の請ふ所を得ずして去れり願るに當時太平已久しく武備惰廢すと雖も我が國威尙ほ能く海外に振ふを知るべし...

アベ マサユキ

アベ ヤスチカ

美作隱謀發せずして罷む正之源六と肥後より江戸に歸り悉に言上す元和二年十月江戸神田の堀を鑿り土手を築く正之其の工事を督す又日光宮殿造營材木水陸運遣の事を奉行す三年...

アベ マナホ 安倍眞直は儒醫なり衛門佐、大舍人助、相摸介を歴て少納言左近衛少將に累遷す勅を奉じて出雲廣貞等と醫方一百卷を撰集す大同三年五月書成りて奏進す名けて大同類聚方と曰ふ之を本邦方書の鼻祖とす(皇國名醫傳)

アベ

アベ

アベ モトサ子 安倍元眞は駿河今井氏の臣なり刑部大輔信眞の子にして大藏と稱し姓は滋野氏駿河の人なり父の後を繼ぎて今川氏に仕へ岡部正綱及び子信勝と氏眞の命を受け...

安何の廣かあらんと相顧みて其の狂躁を笑ふ未だ句を踏まざるに平清盛數千騎を率て福原より還り關白基房を流し廷臣數十人の官を削り意猶ほ足らず法皇を鳥羽殿に幽す適々巨融あり廻還して悲鳴し法皇に向ひて啼躍し去る法皇之を惡みて泰親に問ふ對て曰く三日の内當に慶あり後ち當に憂あるべしと法皇未だ之を信ぜず清盛の子重盛父の狼戾を思ひ諫争苦到して法皇を八條鳥丸に遷し防禁稍弛む意始めて安ず既にして以仁王兵を起す克たずして死す時人其の術に服す(大日本史)

安倍安仁は治部東人の孫、參議太宰大貳寬麻呂の子なり左京の人、身の長六尺三寸姿貌魁偉にして威重あり弘仁中山城大椽と爲り昇殿を聽さる中務民部少丞を歴て天長中近江權大椽に叙せらる藤原弟雄と深く相親善し弟雄委ぬるに政事を以てす安仁政を爲す嚴整、名朝廷に聞ゆ秩限未だ滿たざるに從五位下を授けられ信濃介に叙せらる事を視る三年境内肅然たり任滿るの年位一階を進め以て獎勵す、藏人頭に補せらる承和中兵部刑部大輔を歴太皇太后に嬖附し侍す太皇太后甚はだ信任し院の別當と爲す事大小なく安仁をして決せしむ是より先き院の事壅滯す安仁職に臨みて數月に平理す太皇太后深く之を嘉みし尋て治部大輔に遷る太皇太后嘗て從容として諸國の吏才を評論して曰く安仁信濃を治るの能に若くもの無しと廻ち牙笏玉帶金魚袋及び御衣一襲を賜ふ有識相賀して曰く是れ宰相の鴻漸也と從四位下に累進し參議兼刑部卿に拜せらる太皇太后に謂て曰く汝宜く早く要職に居るべし何ぞ久しく山院の事を待たんと七年左大辨を兼ね別當を停む自後院の事は理せず救して復た別當を兼ねしむ辨官の務晨を凌いで入衛す安仁公務を終るや常に嵯峨に詣る朝廷其の往還煩劇を恤みて大藏卿に轉す文德帝の儲宮に在るや春宮大夫たり兼下野守彈正大弼を歴て挾河内和泉田使長官兼右大辨と爲

アベ ヤスヒト

アマガサキ リヤ

り從三位に叙せられ中納言兼民部卿に任せらる春宮大夫は故の如し文德帝位に即て正三位を授けらる齊衡中陸奥出羽按察使を領し權大納言に任せらる安仁志尙謙虛にして公を視る家の如し子弟に謂て曰く諸國の調庸は多く封家に入りて官に納むる者は少なし食する所の邑身に於て餘りありと乃ち上表して大納言食する所の封を減じて中納言の封を給せらんことを請ふ帝之を嘉みして特に請ふ所を許るす尋て大納言と爲り右近衛大將を兼ね幾ばくもなくして大將を辭す表再び上る之を許す貞觀元年薨す年六十七安仁政治に練達し朝章に明かなり奏儀ある毎に應對滯はることなし會々假日に值へば子弟を教諭す入子あり貞行宗行清行興行最も名を知らる(大日本史)

アベ ヤスヒロ 阿部安麻呂は仲麻呂と同祖なり文武の慶雲二年從五位下に叙せらる靈龜二年遣唐大使と爲る己にして疾みて往く能はず(日本書紀)

アベ ヨシヒラ 安倍吉平は天文博士晴明の子なり能く家業を傳ふ長和五年擢んで從四位下に叙せらる當時之を榮とす主計頭陰陽博士に歷任す嘗て丹波雅忠と飲み杯を引きて滿を持す吉平曰く今當に地震して杯中の酒を覆へさんと言未だ竟らざるに地震す(大日本史)

アベ ヨシマサ 安倍吉昌は星學家なり晴明の子、但馬權頭、主稅助、陰陽頭、天文博士を歴長和四年勞を以て救して正五位下に叙す寛平中卒す(大日本史)

アベ ヨリトキ 安倍賴時初名は賴良、祖父忠頼、世々陸奥に居て俘囚の酋長たり父忠良陸奥大椽と爲る賴良安大夫と稱し父祖の業に藉りて勢益々大、陸奥に横行し人民を劫略す部落皆服し遂に六郡の豪帥と爲る賴良は即ち伊賀、加賀、江西、白河關に界し東、率土濱に抵る衣川の形勝其中央に當り險に據り關を設く名けて衣川關と曰ふ海陸を跨り有つ資産豐饒、貢賦を輸さず徭役を供せず國守制する能はず承永中守藤原登任兵數千人を發して之を討ち秋田城介平重成を以て先鋒と爲

し親ら後繼と爲る賴良諸部の俘囚を率ぬ進へて鬼切部に戦ひて大に之を取る事聞ゆ朝議源賴義を以て陸奥守鎮守府將軍と爲して之を討たしむ會々大赦あり賴良に自新を許るす賴良大に喜びて兵を罷め國司の嫌名を犯すを以て賴良賴義今の名即ち賴時に改む賴義任終へて事を鎮守府に視る賴時駿馬金寶を贈りて士卒に賜ふ賴義國府に歸る權守藤原說貞の子光貞元貞賴義に從ひて阿久利川に宿す人あり其の營を劫して人馬を殺傷す賴義光貞を召して問ふ宿昔人に怨みらるることなきか對へて曰く賴時の長子貞任嘗て我が妹を聘せんと欲す我れ其の門族を賤んで許るさず意ふに彼の所爲ならんと賴義令して貞任を收へしむ賴時怒りて曰く人の世に在る誰れか妻子を念はざる者あらん貞任不才と雖も我れ何ぞ其の死を坐視するに忍びん乎我か衆固より拒戦するに足る如かず關を閉ぢて其の來り攻むるを疎たんには遂に關を閉て復た反す賴義兵を勸して之を擊ち氣仙郡司金爲時をして往きて攻めしむ賴時弟僧眞照をして之を拒かしむ爲時大和ありと雖も後援なし一戦して退く賴時俘囚安倍富忠兵を起して官軍に屬すと聞き親ら往きて利害を説く衆二千人に過ぎず富忠伏を設けて迎へて之を嶮岨に撃つ交戦二日賴時飛矢に中り鳥海に還りて死す時に天喜五年なり子八子あり長は盲目にして井田と稱す次は貞任宗任、僧眞照、正任、重任、家任、則任なり(大日本史)

アベ レキサイ 阿部棟齋は江戸の本草家なり名は喜任字は亨、友之進と稱す一に巴菰園と號す明治三年十月廿日年六十六にして没す(續纂所一覽)

アホシムワフ 阿保親王は平城天皇の皇子なり母は宮人葛井藤子、王謙遜にして才文武をかね膂力あり又絃歌をよくす弘仁の變に太宰員外帥に貶せられ天長の初に召還されて三品に進めらる後伴健橘逸勢等を謀りし時王上書して變を大皇太后に奏し事平きて薨す朝廷其の功を賞して一品を贈る

アボシヤ ダウリム 綱千屋道琳は茶人なり武野紹鷗

アベ ヤスヒト

アマガサキ リヤ

に學びて茶道に巧みなり和泉堺の人(茶人系傳全集)

アマ ツ子ヨ 阿保常世は醫者なり昌泰中典藥頭となる(皇國名醫傳)

アマ 安萬は越田安萬と稱す天平勝寶頃の人天和藥師寺佛定石の臺に刻する佛像は此安萬の圖する所なり安方と云ふは誤れり

アマガサキ リヤ 尼崎リヤ女は勇女なり九龜藩弓組足輕尾崎幸右衛門の女、母某は姿色あり同組岩淵傳内之れを挑めども從はす一夜幸右衛門の外行を窺ひ復た來りて之に追命す時にリヤ女年甫て二歳翌年母亦病で歿すリヤ女叔母の家を養はれ十三歳に及んで初て其の實を聞き遂に復讐の意あり因て藩士村瀬藤馬に從ひて江戸に來り麾下の士永井源介と呼べる劍法指南の家に入りて炊婢となる暇あれば演武場を窺ひて試合を熟視す源介其の異常なるを怪しみ切に問ひて其の志を知り益々愛憐して刀法を鍊磨せしむ居ると二年論して多く主家を易へて仇を探らしむ凡そ十二年間に主家を易ふること七十所最後本庄なる幕臣阪部安兵衛に事へしに家に小泉文内と云へる者あり一夕酒氣に乗して幸右衛門を殺せし頭末を語り肌を露はして其刀痕を誇示すリヤ轟く心を押鎮め尙ほ陽に褒めて其の事を反復せしめ直に馳て源介に告ぐ源介躍喜し之を公廳に上告し又九龜藩に通す有司糾問して其の實を得因て文内を藩邸に縛送す乃ち邸中に塲を設け勝負を爲さしむ是の日リヤ肌を鎖衣を着下し白綿紗を抹額とし雙刀を帯び登場す村瀬藤馬之を輔く傳内罵りて曰く我が父を殺せし刀を以て汝をも刀下の鬼となし父の跡を追はしむへしと三尺餘の大太刀を打振り接戦數合リヤ透間を窺ひ横に拂ひし刀にて傳内の肋を割り二刀に面部を切りひるむところを得たりと踏込み肩先より乳下かけて切込み直に押伏せ首を掻き落すリヤ身に一

アマカス カゲモチ

創をも受けす且つ惶遽の氣色些も面に見えず諸人喝采の聲沸くか如くなりきと云ふ藩主其の孝烈苦節を偉とし士分格に擢て息女の側仕とせり(豪傑言行録)

アマカス カゲモチ 甘糟景持は近江守と稱す上杉謙信旗下第一の勇者なり川中島の戦に杉氏の軍大に敗る景持千五百人を領し後陣に在り毫も動かさず武田の兵以て輝虎となし之を襲ふ景持遂に奮闘す衆寡敵せず敗れて十三騎となり厚川を渡りて敗兵を集む僅かに三百人を得たり然れども之に次ずること三日の間退かず武田の兵其勇なるを感し以て輝虎の自ら殿するものとす又天正十年織田氏の兵と太田切に戦ひ手兵を率ゐて敵四百餘を得たりと云ふ(武功正傳)

アマギ ジチユウ 天木時中は京師の儒者なり通稱善六尾州須佐色の人父は重右衛門光玄、母は石黒氏、時中幼にして讀書を好み其の誦を成し義を曉とる常見に異なり二十二歳にして佐藤氏に武江に調し親炙十九ヶ月にして佐藤氏歿す時中爲めに心喪を服すること期年二十五歳にして尾に歸へり京に往來す既にして勢州長島山侯の招きに應じ留止する凡そ五年後ち京に下居す學徒數十人日々相講磨し家貧にして自ら炊く女兄あり寡す之を養ふに尤も友愛を盡くす時中人と爲り朴實にして華らず剛直にして堅を守り義の爲めに勇み過す聞くと喜び其の人に接する誠信にして親切極めて情を盡くす其の學に於ける日々に研精愛敬華々として倦まず殆んど寢食を忘る卒する前三日自ら其の起ざるを知り生徒を會して戒むるに程子臨絶の訓を以てす其の言少しも平日に異ならずと時に元文元年なり年四十(墓誌)

アマコ ツチヒサ 天國は日本刀劍師の祖なり文武帝の時大和國宇多郡に住す大寶中の人(富貴全書)

アマコ ツチヒサ

アマコ イラツメ 尼子娘は天武帝の宮人なり胸方徳善の女、天武帝の幸を得て高市皇子を生む(大日本史)

アマコ ツチヒサ 尼子勝久は誠久の第四子なり小字を助四郎と稱す尼子義久の毛利元就の爲めに亡はさる、や山中幸盛尼子氏の血統の者を立て、主と爲さんと欲す偏く之を索む義久の叔父僧と成る者あり獲て之を立つ是れ勝久なり其の他叔父諸兄多く殺さる時に勝久僅かに二歳京都の東福寺に居る人と爲り勇悍矯捷にして臂力衆に越ゆ潜かに武技を修めて復業を事とせず是に於て勝久山中幸盛、立原久綱等と勇かに恢復を圖る永祿十一年毛利元就老いて將に死せんとす元春、隆景の二將又出で、筑紫の軍に在り勝久此の機に乗じ群臣數百を糾合し相ひ率ゐて但馬に過り時に山名豊國海賊の船を募りて之に應じ國人亦多く來り屬す遂に進て雲州の弓濱に入り益々、檄を四方に傳へ兵を分ちて四出抄略す是に於て伯、石の國人響の如く相應して忽ち四千騎を得進て多賀重綱の高山山を攻て之を抜き以て勝久の據城と爲す而して兵を富田城下に進む城將天野隆重に説くに出で降る可きを以て隆重聽かず是時に方りて美作高田の前城主玉申昭則勝久に應じて今の城主牛尾久盛を攻む勝久屢々郡邑を侵奪して援を宇喜多直家に求む直家兵を出だして之を助け山陰大に亂る元龜二年正月毛

アマカス カゲモチ

利輝元及び元春、隆景等兵を率ゐて來り攻む勝久幸盛、久綱等と之を布辨に迎撃して克たず死傷甚だ多し二月日多邊中山牛尾等の諸寨悉く陥り部下の士或は走り或は降る而して敵兵來りて勝久に迫る是に於て勝久新山に奔るはより先き勝久の援を直家に乞ふや直家兵を出だして備中の諸城を抜き而れ共未だ幾くなくして元就の將穂井田元清之を復す八月勝久敵將元春が進みて新山を圍むと聞き去て籠岳に屯す元春追撃して新山壘を熾き進で籠岳を攻む勝久力微にして保つ能はず出でて香賀桂島に逃る會々鬼王就英船艦を率ゐて追尾するに遇ひ畏縮して爲す所を知らず遂に隠岐に奔る天正元年十二月幸盛久綱等勝久を擁して但馬に往き山名豊國に頼り以て復た雲州に入らんとを謀る二年正月勝久但州より因州に入り轉戦して數城を抜く三年二月豊國の客人森中通興中村春次等屢々豊國反覆して常なきを諫め勸めて毛利氏の兵と與に勝久に迫る是に於て勝久城を棄て、退て因州若櫻鬼城に據り兵を分ちて象市城を守る元春兵を發して象市を抜き牛尾元具をして鬼城を攻めしむ勝久乃ち爲す可らざるを知り衆を悉して但馬に走り遂に京師に入る六年正月勝久羽柴秀吉に因て雲州に入るを求む幸盛及び久綱等と相謀り尼子氏舊傳の松虫轡を其の主織田信長に獻して許可を得兵士二千を募り京師より播磨に往き秀吉の命を以て上月城を守る二月勝久糧食乏しく且つ備兵の將に出でんとするを聞き城を棄て、退く備兵復た入りて之を守ると後ち秀吉攻て之を抜き而して其の備作の衝路に當りて其の守り難きを憂ふ時に幸盛勝久を勸めて之を請ひ遂に其の諾を得たり是に於て勝久悉く遺臣を集めて之に據る四月毛利輝元元春隆景等に命し兵を率ゐて上月城を圍ましむ是に於て秀吉親ら出て、之を救ひ信長亦荒木村重瀧川一益明智光秀筒井順慶等に命し之を援けしむ而れ共諸軍輒々城に近く能はずして敗るゝもの多し元春隆景城に迫る益々急なり是に於て城中相議し罪を神西通兼に歸し使を元春隆景に遣はし請て曰く願

アマコ ツチヒサ

くは勝久及び兵士の死を救さば則ち城を擧て以て降らんと聽かれず是に於て勝久自殺し加藤經盛之れに殉死す久綱出で、江州に奔り幸盛降る城遂に陥る(續日本史、野史)

アマコ ツチヒサ 尼子國久は經久の第二子なり姓源氏紀伊守と稱す其の先は佐々木信綱より出づ天文九年國久始めて軍に臨み岩屋城を攻て深瀬隆兼と戦ふ是の年九月尼子晴久に屬して吉田に戦ふ時に吉田光倫因州に在り急を告て曰く武田常信南條隆宗山田重正本因州より伯州に入り邊境を掠奪す是に於て國久晴久に請ひ子族を率ゐて蘇州より轉して伯州に赴く武田常信鳥取を發し山名豊弘南條隆宗等と伯者の高野山に陣す國久乃ち光倫等と會し與に戦ふ子豊久死す國久屈せざ進みて高野山精塚を攻め終に常信を獲て歸る是より國久の子族繁衍し威武兼ね備はり擊つ所必ず破る世に之を稱して新宮黨と呼ぶ國久勢を頼み漸く驕る是に於て晴久之を悦びず偶々人あり曰く國久頃日毛利元就に通ずと晴久危懼措く能はず天文二十三年十一月を以て國久を殺す子あり誠久、豊久、數久、又四郎、與四郎と曰ふ(野史)

アマコ ツチヒサ 尼子下野は尼子晴久の族なり素と深慮あり軍に臨み必勝の勢ひにあらざれば妄りに戦はず故に人皆之を嘲て尼子比丘尼と曰ふ晴久陶高房毛利元就と戦を挑むに及て高房進みて晴久の本營を撃つ下野敵陣の強勢を察し揚言して曰く此の戦我輩死せざれば則ち大將晴久恐らくは免れざらん我れ先登を爲して之に死す可し平生勇を恃で我を以て比丘尼と稱する者其の言を食まざれば則ち繼で至れと諸隊共に進て其部長深野氏宮川氏を斬る時に元就の家士中原氏矢を放て下野に中て馬より落ちて死す(事實文編)

アマコ ツチヒサ 蟹子言滿は和學者なり本姓は寺町名は三知新柳亭と號す又百菴と稱す蟹子言滿は其別號なり江戸の人

アマコ ツチヒサ 尼子經久は出雲の人なり六世の祖檢

非違使鹽谷高貞讒を以て死す遺孤歳甫めて三歳一尼あり潜に藏めて之を育す既長じて其の尼を徳とす遂に尼子を以て氏と爲す祖刑部大輔持久父刑部少輔清定并に出雲守護たり經久少にして倜儻氣節を尙び世々富田を鎮す鹽谷掃部に奪はれ出で山中入道及び賀麻黨に憑る文明十八年歳旦兵を起して急に富田城を襲ひ掃部助を獲て復び城に入る是より威武漸く張り國人三澤三刀掛赤穴等の豪族來屬し遂に一州に守たり永正七年六月兵を起し安藝を侵掠して鏡山を取り又備後に入て豊里城を拔く十五年八月阿與入道宗的を攻めて其の城を拔く時に子政久戰死す又大内義興と兵を構へて相抗衛す毛利興元吉川興經等經久に黨して大内氏を拒ぐ大永元年將軍足利義晴命を經久に下だして大内氏と成きを行はしむ二年夏大内義興安藝を尙へ郡邑多く之れに屬す是に於て又和議破れ三年六月經久兵を率て北池田に陣し毛利元就龜井秀綱に命じ鏡山を攻めて之を拔く四年六月經久伯州より藝州に往て金山城の後援を爲し大内義隆と戰ひて克たず元就夜に乘じ義隆の陣を斫て終に之を走らす享祿元年義興兵を發して石見に入る經久防戰す天文元年八月子興久佐佐木元就を以て呼く經久赴き擊つ與久備後に奔り山内直通に依る九年毛利元就時大内氏に降る經久之を伐て戰利あらざ義隆陶隆房と云へるものをして元就を援けしむ經久終に敗蹟す是に於て經久大内氏と兵を交へ累年解けずと云ふ經久初め富田城七百貫の地を以て起り遂に雲隱、因、伯の四州を蠶食し天文十年十一月を以て卒す時に歳八十四齡して省心院と號す三子あり政久、國久、興久と曰ふ(野史)

アマコ トヨヒサ 尼子豐久は兵部大輔と稱す父は紀伊守國久なり共に尼子晴久に屬す天文九年の冬晴久武田山城守と伯者に戰ふ時に豊久從て大に射戰す遂に絶え槍を執て敵中に亂れ入り數十人を殺して卒に戰没す此時山城守は自殺し尼子勢勝利を得凱旋す(野史)

アマコ トヨヒサ

アマシヤウ

を養ひ再舉して來り伐つに如ず晴久聽かずして曰く今や接兵の至るを見て師を班さば人以此怯者とせん抑も運命は天に在り老耄の恒策用ふるに足らざる再言すと勿れと隆房、興盛、元就と謀を合し路を分ちて軍す周軍の裨將深野平左衛門間道より來り襲ふ晴久の軍は多く備前路に在りて之を知らず全く不意に乗せられしを以て全軍大に亂る隆元、元就亦間道より晴久の軍を衝き晴久の部下死傷甚だし義勝奮戰して死す十年正月元就復た兵を出して來り戰ふ晴久退て富田月山城に還る是に於て備藝石の國人多く反して款を義隆に送る十二年七月晴久兵を率て石州に入り佐波與連の城邑を侵す十三年修理大夫に任ぜらる七月晴久備後を尙へんと欲して安藝を奪し出で郷川に陣す(或は郷川を福原貞俊、三吉隆亮の爲に襲はれ死傷最も多く全軍遂に潰走す二十年陶隆房其の主大内義隆を弑し晴久使を足利幕府に遣はして逆臣を伐つを請ひ二十一年十二月晴久從五位下に叙せらる二十三年三月晴久師を率めて美作を伐ち進みて播磨に入り其の十七城を拔き土寇の起るに會ひて軍を旋へす是より晴久毛利、吉川の諸族と攻戰年を累ねて止まらずして武威漸く衰へ山陽山陰二道の豪族往々好を毛利氏に送りて款を通ず晴久部下の諸城降附相望み終に富田城孤立して轉漕給せず城中大に窘む時に晴久病で卒す永祿五年十二月歳四十九なり三子あり義久、倫久、秀久と云ふ(野史)

アマシヤウ 尼庄は盜賊なり大坂の商にして尼ヶ崎屋庄兵衛と云ふ人畧して尼庄と呼ぶ破産して賊となる富者の財を盗んで貧人を救ふ然も名を匿して深夜投入するを常とす身は綿服を着し鹿食を喰ひ節儉自ら居る曾て雪曉高麗橋より豪商加治久が土藏を望む中に屋上の雪早く消えたる者一棟あるを注視し必ず金庫なる事を知る其の夜此庫を破りて入り金を己が脚袴に納め之れを肩にかけて出づ時に雨正に霽る乃ち携ぶる所の傘を川中に投じて去る傘偶々止つて泥中に在り翌日加治久盜に罹るを訴ふ與力桑原八左衛門捜究して傘を得たり詰して尼庄と曰ふ然るに尼庄の平生質素にして行狀誠に正しく盜を爲すべき疑ひなし仍て頗る感ふ偶々尼庄娼妓某の親の爲に

アマコ トヨヒサ

アマシヤウ



アマシヤウジン

苦涯に在るを憐み金五十兩を其親に贈るの事聞す因て試に其金の出所を問糾するに終に自白せしを以て獄に投じ鼻首せらるる尼庄の生時其憐みを受けたる貧人頗る多し故を以て之に香花を供ふる者あり又追善を修するあり日夜死骸取捨場に香烟の絶ゆるとなし事文政の末に係る(難波奇談)

アマシヤウジン 尼將軍「マサコ」

アマツクモノミコト 天津久米命は天孫降臨の時天忍日命と共に前驅せる神なり久米の直等の祖たり(古事記)

アマテラスオホミカミ 天照大御神名は白日靈貴伊弉諾

する時左の目を洗伊弉諾尊の女なり父尊の命を受けて國の主と爲る弟素盞鳴尊憚りにして亂を好む大神の織殿に在るや斑馬の皮を剥きて之を其の中に投ず織女驚きて死す大神亦大に怖れ固く戸を閉ぢて出でず諸神議して天思兼命をして大神を出さんとを謀らしむ思兼命、天鈿女をして俳優をなさしむ百神之を觀て樂み且つ笑ひ喧嘩甚し大神大に恠み微に戸を開きて之を視ひ玉ひしかば手力雄神其手を執りて援け出し奉る是より六合の内再び天日を仰ぐを得たりと云ふ(古事記)

アマトヨカカラ イカシヒ タラシヒメノ スメラミコト

天豐財重日足姫天皇、クワウキョクテムラウ

アマトヨツヒメ 天豐津媛は懿德帝の后なり息石耳命の女懿德帝二年二月立て、皇后と爲す孝昭帝及び武石彦奇友背命を生む孝昭帝位に即き尊みて皇太后と曰ふ(大日本史)

アマヌマ コウアム 天沼恒庵は儒者なり名は爵、一字は樂善恒庵は其の號父は淨還性剛朴にして擊劍を能くし好みて人の難を救ふ是を以て家甚た貧し寛政癸亥を以て爵を江戸神田に生む爵初名は有美字は子濟生れて八歳藤華岡の門に入りて書法を傳へ又た經を三浦淳夫に受け詩を劉文耀に學ぶ年十八華岡の京師に遊學するに從ひ終南禪師に見ゆ禪師に名を教ふべしと爲し示すに詩文名稱の法を以てす爵早く書詩に名あり年二十一華岡其書を能くするを以て義子と爲し姓島氏を冒す蓋し島は華岡の本姓なり是年爵幕府に仕へて歩軍士と爲り頃之らくして進みて伍長と爲る然れども其人と爲り質にして廉靖にして達徹に栖々せざ一旦職を棄て、川越に歸へり其の墨池庵に居て徒を集めて學を講じ遂に本姓に復し裁して天民と爲す是より先き中上人伊勢より來て文字の游を爲すと聞き遂に上人に介し書を通じて近江蕉中大師に知らる其の後再び京師に遊びて大師に謁し戸祝して業大に進む恒庵文稿四卷あり大師之に序す爵年二十六にして母を喪ひ四十二にして父を喪ふ其辭職の明年華岡亦歿して後なし是に於て門人爵を其家に向へて書を開ひ經義を講ず從游日々に衆く遠近其學其行を稱せざるなし然れども恒庵平生食味を二つにせず妻の衣地を曳かず目に好色なく耳に樂聲なし恬淡寡欲其質見るべきなり寛政甲寅病で死す年五十二(墓誌)

アマノ アダヒ アハヂ 海直淡路は官醫なり天長の初外從五位下に叙せらる仁明帝太子たりし時胸痛を病みて痛み劇し嵯峨上皇之を聞き帝の侍臣を召して諭して曰く朕亦曾て此の病に罹る諸藥効なし終に金液丹と白石英とを服するに及び始めて痊を得たり但石藥峻猛にして庸醫多く之を用ることを恐る宜しく之を良工に詢ふべしと乃淡路を召す淡路の見上皇に同じ遂に其の方を進む刺痛直に止む(皇國名醫傳)

アマノ カタカゲ 天野賢景は義勇の士なり孫七郎と稱す參州岩戸村の人徳川廣忠に仕ふ是の時作間某廣瀬の城に據りて侵奪威を肆にす廣忠之を惡み賢景を遣はして之を刺さしむ賢景乃伴りて作間に仕ふ作間曾て其の勇を知り寵任益々厚し一夕賢景作間の寢室に入り傍人なきを見て之を斬り逃れ還て報す賢景厚く賞賜す時人天野を稱して作間斬と謂ふ作間後ち三句を経て死す一説に賢景廣忠の命を受け浪客と稱す假りに山名清三郎と號し擊劍を以て佐久間の家に入し親近の後之を刺すと云ふ(野史諸士傳)

アマノ クワツロ 天野葛蘆は江戸の和學者なり名は政

アマノ ノブカゲ

す蓋し島は華岡の本姓なり是年爵幕府に仕へて歩軍士と爲り頃之らくして進みて伍長と爲る然れども其人と爲り質にして廉靖にして達徹に栖々せざ一旦職を棄て、川越に歸へり其の墨池庵に居て徒を集めて學を講じ遂に本姓に復し裁して天民と爲す是より先き中上人伊勢より來て文字の游を爲すと聞き遂に上人に介し書を通じて近江蕉中大師に知らる其の後再び京師に遊びて大師に謁し戸祝して業大に進む恒庵文稿四卷あり大師之に序す爵年二十六にして母を喪ひ四十二にして父を喪ふ其辭職の明年華岡亦歿して後なし是に於て門人爵を其家に向へて書を開ひ經義を講ず從游日々に衆く遠近其學其行を稱せざるなし然れども恒庵平生食味を二つにせず妻の衣地を曳かず目に好色なく耳に樂聲なし恬淡寡欲其質見るべきなり寛政甲寅病で死す年五十二(墓誌)

アマノ アダヒ アハヂ 海直淡路は官醫なり天長の初外從五位下に叙せらる仁明帝太子たりし時胸痛を病みて痛み劇し嵯峨上皇之を聞き帝の侍臣を召して諭して曰く朕亦曾て此の病に罹る諸藥効なし終に金液丹と白石英とを服するに及び始めて痊を得たり但石藥峻猛にして庸醫多く之を用ることを恐る宜しく之を良工に詢ふべしと乃淡路を召す淡路の見上皇に同じ遂に其の方を進む刺痛直に止む(皇國名醫傳)

アマノ カタカゲ 天野賢景は義勇の士なり孫七郎と稱す參州岩戸村の人徳川廣忠に仕ふ是の時作間某廣瀬の城に據りて侵奪威を肆にす廣忠之を惡み賢景を遣はして之を刺さしむ賢景乃伴りて作間に仕ふ作間曾て其の勇を知り寵任益々厚し一夕賢景作間の寢室に入り傍人なきを見て之を斬り逃れ還て報す賢景厚く賞賜す時人天野を稱して作間斬と謂ふ作間後ち三句を経て死す一説に賢景廣忠の命を受け浪客と稱す假りに山名清三郎と號し擊劍を以て佐久間の家に入し親近の後之を刺すと云ふ(野史諸士傳)

アマシヤウジン

徳、字は其所、圖書と稱す(諸家著述目録)

アマノ セツサイ 天野拙齋は高崎侯の儒官なり名は道義理平と稱す拙齋は其の號伊豫の人其の先は農桑を以て業とす拙齋幼より學を好み京師に遊ひ山崎氏の學を奉り淺見綱齋佐藤直方と其の遺書を講習す學既に通す始めて江戸に來り講説して業とす時に年二十二元祿中河越侯諸名士を招致して文學の士邸内に幅濶す拙齋其の聘に應じ遂に儒官となる徳川將軍屢々侯邸に臨み文學の士をして歴史を講説せしむ拙齋河越侯に仕ふる數年侯之を以て其の婿高崎侯に經を授けしむ遂に之が臣となり祿四百石を食む甚た優遇せらる後ち意を得ずして辭し去り姓名を變し山中久右衛門と稱す意を仕途に絶ち窮巷に僻處し生徒に教授す享保十七年四月十二日歿す年七十一平生著作を好まず著はす所輔導小補、見訓集あるのみ(先哲叢談)

アマノ タウリム 天野桃隣「タイハクダウタウリム」

アマノ デムシチラウ 天野傳七郎は眞陰流の劍術の祖なり傳七郎と稱す水戸の藩士眞野文左衛門に從ひて愛州陰流の劍法を學びて妙旨を得兵學軍禮に達す後ち流名を改めて眞陰流と號す(武術流祖録)

アマノ トホカゲ 天野遠景姓は藤原木工助爲憲より出づ祖は景澄入江權守と稱し父景光藤内と稱す世々伊豆天野邑に居り因て氏とす遠景初め内舍人と爲り亦藤内と稱し尋で民部丞と爲る源頼朝兵を起すや遠景往きて之に屬し工藤茂光土肥實平等と俱に平兼隆を撃ちて功あり石橋の役に頼朝窘急す遠景諸將と力戦すると數合頼朝遂に脱することを得たり既にして伊東祐親將に參河に赴きて平氏に力を戮はさんとす遠景之を覺て祐親を生擒し黃瀬川に抵りて頼朝に會す壽永中頼朝源義仲をして子義高を送りて鎌倉に質たらしめんと欲し遠景

アマノ ノブカゲ

及び岡崎義實に命じ越後に往きて義仲に説かしむ遠景義仲に見えて利害を曲陳す義仲之に従ふ遂に義高を獲て還る三年頼朝一條忠頼を殺さんと殺し之を府に誘致して宴を張り酒を行ひ豫じめ工藤祐經に命じて之を斬らしむ期に臨みて祐經難色あり小山田有重之を察し其の二子を擁きて進みて將に之を撃たんとす頼朝又遠景に命じ追りて忠頼を殺さしむ忠頼の從士山村小太郎等刃を露はして衝突す守衛の兵士多く創を被むる小太郎將に遠景を撃たんとす遠景魚板を擲て之を仆す從者就いて之を斬る是の歳源頼朝に從ひて平氏を西海に撃ち功あり頼朝書を賜ひて之を嘉み尋で鎮西守護と爲る文治二年筑紫奉行と爲り又數所の地頭と爲る源義經西に奔るに及びて頼朝其の支黨の鬼界島に匿る者あらんを疑ひ三年宇都宮信房を鎮西に遣はし命じて遠景と俱に之を撃たしむ是より先き薩摩人阿多忠景罪を獲て島中に匿る筑後守平家貞に詔して之を討たしむ風濤險惡進む能はずして還る是に至りて遠景人を島に遣はし偵探せしむ具さに要領を得たり四年書を以て頼朝に報ず會々攝政兼實等之れを聞きて頼朝に諭して之を止めしむ頼朝乃ち止む已にして信房具に海路の曲折を圖して之を鎌倉に送くる頼朝之を覽て意決し遂に遠景信房に命じて之を攻めしむ島人降附す事竣へて鎌倉に歸へる祝髪して名を遠景と更たむ建仁二年比企能員北條氏を滅ぼさんと謀る北條時政遠景及ひ仁田忠常をして兵を發して之を襲はしむ遠景曰く一老を殺すに何ぞ兵を煩はすことを爲ん召して誅す可しと乃ち能員を召す遠景忠常甲を裏にし刀を執りて戸内に在り能員の至るを規ひて突出して之を斬る建永中遠景具に治承以降戰鬪の功を録して恩澤を希望す實朝省みず子政景六郎と稱し和泉肥後守たり(大日本史)

アマノ ノブカゲ 天野信景は博識の士なり小名は權三郎後ち宮内と稱す世々尾張藩に仕ふ父は信幸市尹と爲りて政績あり秩四百五十石に進めらる信景幼にして穎悟學を好む長

て寄合と爲り藩命を以て諸學士と國志を撰録す學文武を兼ぬ正徳五年鐵砲頭に進み享保八年病に罹り職を辭し十五年致仕し剃髮して信阿彌又は白華翁と號す十八年九月八日病みて歿す享年七十三信景博聞強記凡そ和漢の書籍に於て目を過ぐれば誦を成さざるはなし毎に一事を得れば必ず其の源委を究はめ博引旁證、底蘊を極盡し殊に國典に精し業を度會及び尾張氏に受け又梵典に通ず資性温厚和易にして物と戻らず其遊ばざるはなし知らざる者は以て野人僧侶と爲す著はす所の鹽尻は敗紙を以て冊を起し未だ嘗て手から之を淨書せず侍者に命じて纂録せしむ人借りて見る者あれば便ち舉げて之を付して秘惜せず今も傳ふる所は其十の一に及ばずと云ふ元和建靈以來文學の士大に世に著はれ其編述も亦汗牛充棟而して隨筆雜纂積みて千餘卷に至る者信景の鹽尻に若く者なし(讀海)

殺し民財を奪ふの舉あり五月十四日終に之を討つに決す鐵太郎之を憂ひ夜半隊に入て之を諭し解散せんとを勸む或は之に服する者ありと雖も素鳥合の兵にして命令の出る所なし左を説き右を諭すの交十五日曉官軍黒門口を襲ふ酒井宰輔近藤武雄等善く拒ぐ然れども鳥合の兵命令の出る處なし入郎谷中日を守ると雖も機を見て黒門口を援ふ而して谷中日亦官軍の襲ふ所となり前後敵を受け守ること能はず黒門口先づ敗る輪王寺宮三河島に走る堂塔悉く燒かる入郎敗兵數人と護國寺に議し諸所に分散す自ら諸知友の家を潜伏す機を見て殘兵と火を西城に放ち間に乘して總督宮を奪ひ之に而して徳川氏恢復の事を哀願せんと欲す七月十三日本所の砲匠炭屋文次郎の家を在り會へ告る者有り官兵を遣して之を捕ふ入郎方さ客と食し之を聞て急に起ち刀を抜き挺して屋に上り籠を飛び走る凡そ捷きと猿猴の如し兵捕ふる能はず皆銃を擡め之を亂射す九額に中りて顛す繩かに之を捕ふるを得たり獄に在ると數月十一月八日を以て病歿す年三十八小塚原の墓塚中に葬る越三年同志者私に墓石を其上に建て謚して顯彰院齋道と曰ふ八郎人と爲り短小豊肥にして眼光炯々人を射議論風發慷慨の氣眉目之間に溢る獄に在りて斃休録を著はし以て志を見はす配須賀氏男女各一人を擧ぐ男徳太郎松本を冒す女は家を承ぐ明治庚寅其の廿三回の忌辰に當り故舊其遺族と謀り箕輪圓通寺に改葬し更に碑を建つ(墓碑)

アマノ ハチラウ

アマノ ヤリヘ

アマノヒホコ 天日槍は新羅王の子なり垂仁帝の三年航して播磨穴栗邑に至る帝大友主、長尾市を遣して之を檢問す天日槍曰く僕は是れ新羅國王の子也日本に聖皇ありと聞き故に國を弟知古に譲りて歸化すと乃ち齋す所の寶物羽太玉、足高玉、鞠鹿々赤石玉、出石小刀、出石鏡、熊神籬、各一を獻す帝天日槍に詔して曰く播磨國の穴栗淡路島の出淺の二邑を汝に付與す宜しく之に居る可しと天日槍奏請すらく若し諸國を歴て以て其の地を擇ぶを得ば天恩優渥臣の幸之に過ぎずと帝之を聽す是に於て菟道川より北近江に入り吾名邑に居る幾もなくして去る更に若狹を歴て西但馬に至り住を定め出島の入太耳の女麻多鳥を娶りて但馬諸助を生む諸助但馬日槍杵を生み日槍杵清彦を生む清彦世々但馬に家す近世の説に據れば其歸化は神代の末にありしか如し(大日本史)

破り終に小平を殪す是に於て諱字を家康より賜はり今名に更たむ永祿八年二月家康の始めて奉行職を置くや康景高力清長及び本多重次と與に之に任せらる康景慎重にして明智なり民間之を歌ひて曰く佛高力鬼作左と偏なきは三郎兵と國政以て平らき家康の創業實に康景等の功多きに居ると云ふ姉川味方原及び天方の役督軍に従ひて功あり康景守中山の地二百貫を賜はり併せて三百貫を領す後又一千七百石を加賜せらる天正十一年又參遠二州の士二十四人及び伊賀人八十三名を賜はり之れを督して江尻城代と爲る此時に當りて松平康親石津城を守りて相人と並山中に戦ふ康景之を援け相人を撃ちて屢々之を破る十二年長嶽の戦又功あり十八年下總の田三千石を賜はる庚子の秋淨鑑公子信吉に従ひて東府城を守る慶長六年春康景駿河の興國寺城を賜はり邑一萬石を食む十二年三月九日康景部下の卒、竹木を盗むの賊を斬る本多正純之を處す康景其の偏頗を患り城邑を棄て、去る家康康景の奮勳にして且つ老いたるを念ひ尋ねて舊に復せんと欲す終に果さず十八年二月康景狩野に於て病死す時に年七十七、法名を宗恩と號す數子あり康景、康世、康由と曰ひ餘は皆女僧とな(野史)

アマノ ハチラウ

アマノ ヤリヘ

アマノ ヤリヘ

の制甚た奇なり是を以て敢て告ぐと其の人を探偵すれば則ち利兵衛なり乃捕へて之を糺す利兵衛言ふ是れ市中盜賊に備ふるが爲めのみ豈に他あらんやと其の制法の異なるを詰れば則曰く一武人其の制を創む余聊之に倣ふのみと時に大坂の鍛工之を傳聞し其の管て利兵衛の爲めに兵器を作るもの皆官に告く是に於て法廷に下され拷問甚た急なり加ふるに事妻子に及ぶ竟に鞠訊するに水火を以てす利兵衛身に完膚なく氣絶すると數次因て約するに明春自首するを以て容貌憔悴氣絶實恐あるもの如くならず故を以て官之を許す明年に至れば世間傳へ言ふ去年十二月四日赤穂の諸士警を吉良氏に報すと利兵衛乃ち自首して曰く我世々侯の恩顧を辱うし義、臣子に伴し眞雄等諸士大事を圖るに當りて我に屬するに兵器の事を以てす向に作る所は即ち彼の諸士の用ふるものなり今諸士既に復讐を果す我が事畢れり當に刑に就くへし嘗て事の洩るゝを恐れ又刑の及ぶを憫れみ故に始より妻孥に知らしめず仰ぎ願くは彼等の刑を宥るし利兵衛一人を罪せられんとを乞官其の義心に感し死を減して之を放ち家資悉く其の子利右衛門に賜ひ郷長を襲かしむ利兵衛京に入り郭北瑞光院に寓す院は淺野家と舊故あるを以てなり而して名姓を改め松永士齋と曰ふ壽を以て終ふ利兵衛嘗て赤穂に至る時暑月に際し藩吏公庫の什器を隠露す中に珍玩あり利兵衛眞雄に請ひて之を觀る己にして一玉盃を失ふ之を檢問するに利兵衛の外入るものなし衆皆利兵衛を疑ひて眞雄に告ぐ眞雄驚き利兵衛を召して曰く今日一玉盃を失ふ我子の竊まざるを知る然れども子の外入るものなし衆皆子を疑ふ將に之を如何せん利兵衛曰く余實に之を竊む死を逃る所なし請ふ速に刑に就かん時取りて把玩するに國侯に告ぐ侯袖より之を出たして曰く寡人取りて把玩するのみ利兵衛何ぞ知らんと是に於て群衆始て釋く眞雄其の甘んじて罪を引き死を愛まざるを見元祿事變の際遂に腹心を托すと云ふ利兵衛享保十二年正月歳六十六を以て死す(甘雨亭叢書)

アマベ ヲダチマロ

アマザイ マサヨシ

アマベ ヲダチマロ 海部男種麻呂は醫人也長門醫師に任せられ貞觀元年探銅師となる(島國名醫傳)

アマミダイ ニ御臺「マサコ」

アマミダイドコロ ニ御臺所「マサコ」

アマムチカツツノ スメラミコト 天宗高紹天皇「クワウニムテムノウ」

アマリ デムチヨウ 餘元澄は京師の人なり東庵と號し又た松岳と稱す人と爲り和易閑雅性孝悌に篤く人に接する必らず誠敬慈愛を以てす賢愚親疎となく皆其の欣歡を得少より學を好み博聞強記雜家小説浮屠老莊の書に至るまで通ぜざる所なく市井弁利の事を以て其志に滯さず恬然として和歌を詠じ唐詩を賦するを以て法橋の位を得尤も臨池に精しく筆を下すに法あり峨山月潭は文字禪を以て一世に名あるものなり嘗て詩に滿紙龍蛇追「晋妙」七言錦繡傲「唐眞」の句あり其人の爲めに歸伏せらるゝこと斯の如し嘗て臘月に尾張に往き歳旦歸らず既にして歸て欣然として其同志に語て曰く吾れ富士峰の雪を望まんぞ欲すること久し故に數日の寒を凌ぎ遠驥の間に行き目を極めて縱觀す我平生の願是に至りて達せり又嘗て蟬丸の遺跡を訪ひて慨然として古を慕ひ博く逢坂の和歌を探り輯めて一卷と爲し以て寄藏す其風流清適人にて及ぶ可らずと爲す浮屠の流を篤信し夙に深淵の元政に從ひて教を受け師贊の禮を執て甚だ謹しむ其の報徳の誠終身衰へず竊に岬山集を以て大藏函中に納るに至る元祿十三年病を以て死す年五十一(翁表)

アマリ ハルヨシ 甘利晴吉は初藤藏と稱す甘利備前守虎泰が子にして武田信玄旗下の士なり天文十九年信玄の信州に軍を出だして小笠原と松本に戦ふや信州の兵は剛強なるにより直に進みて信玄の旗下に突入す此の時藤藏は十七歳なりしが僅に手兵を率ゐて遂に之を撃破せり因て信玄大に其の功

を賞す後左衛門尉と稱す米倉丹後守の子彦次傷きて腹中に血を浸し將に死に瀕す人曰く之を治すには馬矢を水に和して飲ましむべしと即ち之を與ふ彦次怒て曰く我死すとも此耻つべきの事を爲さずと晴吉曰く卿が身若し活きて君に事へば忠なり何ぞ活くべきの道を捨てて死を求むるやと自ら馬矢の水を飲で彦次に薦む彦次感泣之を飲むて血を瀉し治するを得たり永祿七年小田原の役に卒す年三十一(翁表、本朝武功正傳)

アマミダ井ムノソウジヨウ 阿彌陀院僧正は聖兼と云ふ正應二年八月醍醐寺の座主となり阿彌陀院僧正と號す職に在ること二年

アマノハソム ハリガチ 綱の破損針金は伊勢屋勝助と云ふ江戸京橋の商人、狂歌を善くす、天明時代の人なり後靜庵と稱す

アマカイホウシ 安海法師は高僧なり天台の奥真に從ひて台教に精しく講論に善し常時其の右に出るものなし源信法師と云ふものあり二十七問を設けて大宋の知禮法師に寄問す海其の問項を見て曰く此等の義何ぞ遙問を勞せんと上中下の三答を作りて曰く料るに大宋の法師も必ず此を出でずと禮の答書至るに追ひて果して料る所の如し惜い哉海已に物故して在らず門弟子便ち禮の答及び海の釋義を持し海の墓前に詣り讀みて以て之を祭る(元亨釋書、東國高僧傳)

アマカウテムウ 安康天皇は第二十一代の帝なり名は穴穗允恭帝の第三子、母を忍坂大中姫と曰ふ允恭帝崩じ太子木梨輕皇子の殘虐にして民畔く帝代りて位に即す都を和州山邊郡石山に遷し穴穗宮に在り帝の叔父大草香皇子議に中り兵を起して敗死す帝其の妃中薔姫を納る其の子眉輪王も亦内にあり遂に之れが爲めに弑せらる位に在ること三年壽五十六菅原伏見の陵に葬る(大日本史)

アマカムテムウ 安閑天皇は第二十八代の帝なり名は勾大兄、繼體の太子、母を目子媛と曰ふ位に即て都を和州勾金

アマベ ヲダチマロ

アマザイ マサヨシ

橋宮に遷し位に在ると二年、十二月十七日崩す壽七十河内古市高屋の陵に葬る(大日本史)

アマカモム井ム 安嘉門院「クニコナイシムラウ」

アマキモム井ム 安喜門院「フヂハラアッコ」

アマグワム 安願は興福寺住職なり精勤懈らず時人呼びて安願菩薩と云ふ承和二年秋但州に赴く暴風俄に來り願が艇將に覆へらんとす願依然として怖れず心に觀自在尊を念ず時空中忽ち白雲起り願の頂上に當りて垂れ下る一缸怪しみ見る雲中に金色の大慈の像を現す長け六尺許り願及び衆人瞻仰嗟嘆す此に於て猛風即ち止みて怒濤自ら止み遂に岸に達するを得たり(元亨釋書、東國高僧傳)

アマケイ 安卿「タクキヤウ」

アマケイ 安慶「クワイグツダウ」

アマコクジ 安國寺「エケイ」

アマサイ 安齋「チカジマヂユム」

アマサイ 安齋「ヤマサキアムサイ」

アマサイ 安齋「イセテイヤウ」

アマザイ イツキ 安西一奇は出羽米澤の俳人なり一奇は其の號別に清閑齋の號あり精一郎と稱す弘化中の人其俳歌に曰く「月よりも涼しき日なり木賊やま(俳諧海内人名錄)」

アマザイ マサヨシ 安西政慶は勇士なり小字は大八後ち八左衛門と改む父名は某忠兵衛と稱す始め結城氏に越前に仕へ後ち岡部氏に美濃に事ぶ政慶越前に生れ父に大垣に從ふ幼より氣節あり十八年に於て父母に辭し諸州に經歷す寛永十四年肥前島原に耶蘇の黨蜂起す幕府諸侯に命じて之を討たしむ年を除えて賊勢滋々熾んたり時に政慶武江に轉客す島原に到り黒田忠之守の騎將内藤氏に付す二月二十七日諸將外城を撃破す賊退きて内城を保つ飛石鳥銃電の如し時に二士石壘を攀ちて塙壁に緣る一は朱甲を被むり一は玄甲を被むる朱甲

は政慶なり乃ち槍を箭眼に嵌して刺す賊薙刀を以て其の左臂を傷つく政慶其薙刀を奪ひて之を舍つ石、背を碎き銃、甲を貫ぬく二十八日内藤氏先登す政慶力戦して功あり當時人朱甲を稱せば即ち問はずして政慶たるを知る十七年會中將其勇名を聞きて之を召し遂に銃頭と爲す明暦元年病んで家に死す年四十二(墓誌)

安山は京都の俳人なり常春の門人氏は阿野鶴毛翁と號す元文三年七月三日歿す行年六十五(俳諧年表)

婦歸程を數へて供膳を儲け門に傍ひて路を伺ふ期を過ぎて至らず適々一僧過ぐ主婦問ひて曰く某容貌の二比丘熊野より途に及ぶまで相見ることありや對へて曰く其の沙門此を去ること恐らくは二日前ならんのみ婦聞て大に怒み乃ち室に入りて出でず傳へ言ふ主婦蛇と化して安珍を逐ふ安珍道成寺に入り衆に告げて救を乞ふ衆大鐘を下ろして安珍を鐘裏に納る已にして大蛇來りて鐘を蟠圍し尾を擧げて鐘を敲く火炎迸散す衆之を如何んともする能はず時を移して蛇去る寺衆鐘を倒して中を見るに安珍を見ず又た骨なし只だ灰塵のみと(元亨釋書、熊石十種)

安山は京都の俳人なり常春の門人氏は阿野鶴毛翁と號す元文三年七月三日歿す行年六十五(俳諧年表)

アマサウ シニヤウ

アマドウ サダマサ

アマサウ シニヤウ

アマドウ サダマサ

アマドウ サダミ

す氏眞其の忠を賞め感状を賜ふ氏眞懸川城を開きて相州小田原に往く從兵僅に十餘人定正猶其内に在り氏眞上洛の時定正其の意を知らざるを以て從はず北條常陸介氏照の家に入り屢と戦功あり後參州に歸り家康に謁し鳥居元忠に屬す十八年岩築城攻の時先登して敵を斬り猶進みて城下に至りて戦死す年四十三(近代諸士傳)

アマドウ サダミ 安藤定見は參河守といふ父は安藤八郎範澄と稱す丹波國關の城主柳本伊豫守か臣なり伊豫守是時範澄と名倉彦七郎二人をして領内出雲城に代監となし置しに應永年中の春郷土敷周防守山田越中守廣瀬丹後守等俄かに逆心を生し柳本か家臣奥又四郎に密議して大將となし不意に出雲城を襲ひ安藤名倉を擧取る是時定見は僅か五歳なりしを乳母竊かに提携して遁れ出て小口村の農舎に潜居して養育せり又四郎は難なく城を奪取して居住十三年を過しけるに定見幼稚といへども常に復讐を心懸け十八歳に及んで本城柳本に援兵を乞ひ近村の土民を雇へは民人大に悦び服従す因て即時に兵を擧げて出雲城を攻め一時に乘取り自身仇讎の又四郎と接戦し難なく是を伐取り其仇を復すといふ(豹皮傳)

アマドウ シゲナガ 安藤重長は勝藏と稱す慶長十四年始て徳川秀忠に仕へ大阪兩陣に從ふ夏陣に年十六敵の首級を得て從五位下に叙し伊賀守に任す後右京亮に改む此年上州板鼻に二千石を賜ふ七年父の家を繼ぎ五萬六千石餘を賜はる九年命を奉じて家光に仕ふ寛永元年西國の諸侯命を受けて大坂城の石壁を築く時其の勤勞を慰して衣服を賜ふ重長秋元但馬守泰朝と使として大坂に到り其事を沙汰して江戸に歸る二年御書院番頭となる十年上州物社一萬石を加へ賜ひ都合六萬六千石餘を領す十二年寺社奉行となる十四年奏者番となる明歴三年九月二十九日卒す年五十八子あり長は重信次は信保たり

アマドウ ジムゴザエモム 安藤甚五左衛門は駿州城主稻葉正能の老職なり明暦二年八月正能自殺す將軍家綱北條氏長を遣はして之を驗せしむ其の死人の殺すに似たり是に於て正能の族正則正能が家衆を召して之を推問す甚五左衛門衆に謂て曰く寡君近ごろ愛女を亡ひ憂鬱喪心して以て此に至ると言ひ畢りて涕泣す衆之を憫む太田資次正則に謂て曰く彼れの言信すへからず正能果して狂せば彼れ當に之を言に顯はさるべし現んや事疑似に涉るをや宜しく近臣を窮治して以て情偽を決すへし正則之を然りとし衆に問ひて曰く正能が近侍誰れか安藤と善きか衆松永喜内を以て對ふ乃ち捕へて訊鞠す服せず因て計を以て試問す果して甚五左衛門と私通し以て之を弑す家綱二人を執へ正則に賜ふ正則之を焚殺す(續々皇朝史)

アマドウ ジュニムトク

アマドウ ジュニムトク 安藤順徳は江戸の儒者なり名は忠芳安永十年正月二十八日没す今戸福壽院に葬る(江戸名家墓所一覽)

アマドウ セイヤム 安藤省菴は筑後柳川侯の儒臣なり名は守約字は魯猷一の字は子牧初の名は守正省菴は其の號世々柳川藩の儒官たり省菴人と爲り勇敢にして氣力あり寛永十四年江都に於て瘡を患て牀褥に在り時に鳥原の賊亂を作す乃疾を力め馬に騎り侯に從ひ西下して陣に臨む其志必死に在り時に年十六既にして聖賢の道に志し京師に遊びて業を松永尺五に受く日夜刻苦遂に精神衰耗死に垂んとすれども已ます友人之を諫む省菴曰く方正學云ふ人或は食はざるべし而して學ばざる可らず食はざるは死す死すれば已む、學はざるして生くれば禽獸に等し其の禽獸ならんより寧死するは可なり我學を爲して死すれば幸ひ之れより大なるはなしと學成りて還り毎に侯に侍りて經を講ず是の時當りて明人朱舜水亂を避けて長崎に來る人未其の學術の如何を知らず省菴一見して其の學徳を慕ひ遂に子弟の禮を執る舜水亦省菴を目して曰く實稟純料眞に吾か老友なりと舜水海外に流落し貧困依る所なし再び還らんと欲す省菴長崎奉行に懇求し多方之を留め自ら俸祿の半を割きて之を贈る省菴祿二百石而して其の實收は止た八十石なり家素より貧此に至りて益々窮す衣食する所は敝衣、粉飯、菜羹のみ其の稱して美食と稱するものは鰯魚數尾

アマドウ サダミ

アマドウ シュケイ 安東守經は筑後柳川侯の儒臣なり仕學齋と號す洞菴の子省菴の孫幼にして父を喪ひ京師に往きて業を伊藤東涯に受く學成りて歸り父の職を襲きて文學となる仕學齋文集を著はす(近世叢書)

アマドウ ジュニムトク

アマドウ セイヤム 安藤省菴は筑後柳川侯の儒臣なり名は守約字は魯猷一の字は子牧初の名は守正省菴は其の號世々柳川藩の儒官たり省菴人と爲り勇敢にして氣力あり寛永十四年江都に於て瘡を患て牀褥に在り時に鳥原の賊亂を作す乃疾を力め馬に騎り侯に從ひ西下して陣に臨む其志必死に在り時に年十六既にして聖賢の道に志し京師に遊びて業を松永尺五に受く日夜刻苦遂に精神衰耗死に垂んとすれども已ます友人之を諫む省菴曰く方正學云ふ人或は食はざるべし而して學ばざる可らず食はざるは死す死すれば已む、學はざるして生くれば禽獸に等し其の禽獸ならんより寧死するは可なり我學を爲して死すれば幸ひ之れより大なるはなしと學成りて還り毎に侯に侍りて經を講ず是の時當りて明人朱舜水亂を避けて長崎に來る人未其の學術の如何を知らず省菴一見して其の學徳を慕ひ遂に子弟の禮を執る舜水亦省菴を目して曰く實稟純料眞に吾か老友なりと舜水海外に流落し貧困依る所なし再び還らんと欲す省菴長崎奉行に懇求し多方之を留め自ら俸祿の半を割きて之を贈る省菴祿二百石而して其の實收は止た八十石なり家素より貧此に至りて益々窮す衣食する所は敝衣、粉飯、菜羹のみ其の稱して美食と稱するものは鰯魚數尾

アマドウ ジュニムトク

アマドウ セイヤム 安藤石友は豊後松岡の俳人なり石友は其の號、傳左衛門と稱す弘化中の人其の俳歌に曰く「漸と夜の明にけり秋のあめ」(俳歌海内人名錄)

アマドウ ジュニムトク

アマドウ タメアキ

の謔言を汝の如き使番は何の用をか之れなさんと治右衛門憤激に堪へず用を爲すか爲さるか今に其の戦状を上覽に供せんと言ひ了りて出づ果して此の山城方の兵七組秀忠の牙營を圍み眞田信仍の設けし地雷火迸發して陣營を焚き人馬を焦爛す東軍騷擾して甚は危ふし時に城兵木村主計素肌武者三十五人を聯合して秀忠に迫る柳生宗矩其の馬前に立ち七人を燈し猶ほ進んで死戦す治右衛門半途にありて其の急警を聞き兜を委ね鞭を揚げ直ちに主計と奮戦し互ひに重傷を負ふ治右衛門血眼中に入て昏盲すれども精神減せず亂撃して遂に主計を倒し秀忠の圍を解く秀忠慚謝し親から其の營に臨み藥を把て其の口に含ませ厚く之れを祝する治右衛門泣て其の特恩を拜し奄然として死す(義経言行録、本朝武功正傳)

アマドウ タメアキ 安藤爲章(アマダウテムザム)

アマドウ タメアキ 安藤定毅は茶道を能くせり治右衛門と稱す翼々庵又は鶯溪と號す笠原道桂の弟子なり(茶人系傳全集)

アマドウ テツマ 安藤鐵馬(或云鐵)は美作國魚田郡人なり勝勇にして任侠を好む年十八にして初めて學に志し水口藩豊田謙次を師とし與に京師に滯す文久癸亥年脱藩人吉田大次郎宮部鼎藏本山七郎等密かに京師に聚まり議して曰く當今天下の形勢燒眉の急に逼るなり而るに朝議姑息に流るは偏に君側に森あるに因るなり故に各々同心戮力して要路に逼り以て攘夷を促さんと日光宮の臣古高頼母を推して謀主とす已にして中川宮會津藩に事あらんとす鐵馬亦た此の舉に與る六月四日謀洩れ頼母縛に就き會桑の兵其黨の旅宿を圍む激徒遂戦して或は逃れ或は縛せらる獨鐵馬圍を潰して舍に歸り眠に就く明旦新選組の兵突入し強談暑を移せども鐵馬知らずと言ふ隊長乃ち將ひ去らんとし白刃を以て之を圍む鐵馬曰く我行かん請ふ朝餐を喫するを待てと徐々湯を煮て飯數碗を喫して出づ隊長全く欺かれて之れを縛せず相夾み行く河原町に及び

アマドウ テムザム

て鐵馬道傍に立ちて溺す盤護人の隙を窺ひ急に刀を拔て二人を斬り南を望み奔て長藩邸に至り門外に雷聲を發し我は天下の大正義士某なり今賊兵に追はるゝ急なり早く門を啓けと監門即ち之れに應じて納る夥兵退ひ入らんとすれども門閉鎖して入るを得ず幕吏乃ち鐵馬を指して賊魁とし廣く四方に物色す元治元年七月長入京のとき鐵馬眞木久坂の二隊長に屬し鷹司邸に據る幕軍前後より攻め入り長兵大敗す鐵馬敵六人を殺し左手松枝を撃けて飛丸を拂ひ右手巨刀を振り進んで重圍を衝く會々飛丸に中りて死す隊將以下相ひ率めて皆な死す(義経言行録)

アマドウ トウアム 安藤侗菴は筑後柳川侯の儒臣なり名は守直字は元簡、正之進と稱す省菴の子、侗菴文集を著す元祿十五年十二月廿九日歿す年三十六(近世叢語)

アマドウ トウヤ 安藤東野は江戸の儒者なり名は煥圖字は東壁、仁右衛門と稱す東野は其の號、元龍田氏、下野の人、父玄佐醫を以て黒羽侯に仕ふ東野は其の次子なり幼にして父を喪ひ遂に國を去りて江都に居り太宰春臺と偕に中野謙謙の門に學ぶ后ち安藤氏に養はる因て其の姓を冒す實永中儒を以て甲斐柳澤吉保に仕へ物徂徠に從ひて學ぶ詩文篤援兼て音律に通す又書に工なり將軍徳川綱吉公柳澤吉保の邸に至るや東野毎に旨を奉して經を講す因て金帛を賜はる正徳元年致仕して駒込白山に隱居す時に年二十九(或云三十九)然れども侯猶ほ優待を輸たすこと三年東野竟に之を辭す西臺侯本多忠統の賓師となりて慶祿を受く東野人となりて侯不群之に加ふるに刻苦淬勵天性に出づ故に其鴻文鉅藁既に藹苑に冠たり勉勵度に過ぎ卒に血を吐きて享保四年四月歿す年三十七今戶福壽院に葬る初め物徂徠の古文辭を倡ふるや世の學者舊聞に慣れ之を信するもの稀なり獨東野山縣周南と早く諸子に先ちて之に歸す而して東野最も肯綮を得徂徠の終に海内に木鐸たるは東野與りて力あり是を以て其の死するや徂徠特に之を惜め

アマドウ タメアキ

り浮屠大典は文詞に長す常に曰く護國の徒中文を善くするものは獨り東壁なりと東野弱冠の時一日歎して曰く大丈夫昇平に逢ふ介子博望復た爲す可けんや詩書欠たりと雖も猶庶幾すへしと乃ち意を文辭に潜む又象書の言に通ず遂に此に至ると云ふ著す所東野遺稿あり東野歿する後二十年刻始めて成る(先哲叢談、近世叢語、同體事實文編)

アマドウ ナホツ 安藤直次は三河の人なり姓は源氏鎮守府將軍頼信の玄孫安藤長基の後なり祖父家重太郎左衛門と稱し家康の父廣忠に仕ふ天文九年六月安祥に戰死す父基能木工助と稱し家康に仕へて旗奉行と爲る元龜三年冬味方原に戰死す二男子あり長は即直次なり次は重信、直次初字千福、彦四郎と稱し又彦兵衛と改む幼より家康に仕ふ年甫て十七姉川の戦に従ふ江人數十騎織田信長の中軍を阻撃す直次大久保忠鄰と馳せて之を撃ち首級を獲る又大居長嶺高明の諸役に從ひて屢々功あり慶長十年正月武藏近江の田二千三十石を加賜す尋て從五位下に叙す帯刀長と稱す又一萬石を加賜す本多正純成瀬正氏と共に政務を預り聞く大坂夏の役起るに及びて最も先きに軍に至る五月七日井伊直政藤堂高虎城兵と戦て敗走するや直次諸部を點檢して奮激突戦す家人來り告げて曰く子重能戰死すと直次曰く男兒當に戸を邊野に暴すべし何ぞ驚くに足らんやと猶先隊を勵まして與に敵を逐て重能の死處に到る家人重能の屍を如何すべきやと問ふ直次曰く狗に嚼はしむべきのみと軍終りて歎情悲慟すと云ふ元和三年桂川城を賜ひ一萬石を加ふ五年封を徙し田邊城を賜ひ節色三萬石を併せ與力の采邑を附屬し都て五萬五千石を領せしむ寛永十二年五月卒す歳七十二法名山宗賢藤岩院と號す願宣爲に山宗賢寺を和歌山に造る追慕登記するなり(諸士略傳)

アマドウ ナリカカ 安藤就高は美濃大垣の人なり平素心を民治に盡し租法財計に精し維新の初租稅助に任し尋て檢査頭に任す時に藩を廢し縣を置き全國租入の簿冊悉く大藏省

アマドウ テムザム

に漢の國其制を異にし藩其法を異にし猥碎租漏漫として統紀なし是に於て省議制を更めんと請ふ朝廷これを嘉納し遂に改租の令を發し全國の租額已に定まるまた歲計豫算決算および會計年度改正の法就高皆與て力あり明治元年二月始て會計官に任へ商法出納驛遞庶務監督諸司判事知事に累進して大藏少丞より大書記官に遷り會計檢査院副院長に陞り勳三等に叙し從四位に叙せらる偶々肺疾を得十九年一月十日家に歿す年五十七谷中壘城に葬る祭金千五百圓を賜ひ侍從を遣り特に白絹二匹を賜ふ蓋異數といふ戊辰の年奥羽未だ平定に屬せず國用多端なり因て紙幣を造り國用を助く時に人民疑を懷き價格低下す就高おもへらく紙幣流通の道はその價格を正すにあり貨格を正さむと欲せば行はる可らずと因て大阪に赴き豪商某々を招き曉諭再三盡力徴集し事また整頓す然る後始て貨幣と異ならざるを信し且其輕便なるを識り價格驟かに騰貴し海内通用せざるはなし二年正月紙幣通用事務の勞を賞し金若干圓を賜ふ少にして學を同藩水野陸沈に受け好て莊子を讀む晩に書を安田老山に學び自から夢梅と號す退食の餘暇道染みづから娛む考諱は利平妣は岩田氏幼字は利吉又利太郎と稱し後行藏と更む次子就一家を嗣く(碑文)

アマドウ テムザム 安藤年山は水戸藩の儒者なり名は爲章初は爲明初右平後新介と稱す朴翁の第二子丹波の人、少して兄素軒と俱に儒を學び旁ら國學を治む(道義公の門人、父の蔭を以て出て伏見宮に仕ふ後又水戸義公の召に應じて日本史、禮儀類典等の編輯に參預し祿三百石を食む義公僧契沖に萬葉集を註せしむるとき年山命を受け屢々浪花に至りて其の說を受く年山人と爲り節操あり家に嗣なし然れども他姓の人を養ふを欲せず曰く天命安んぜざるべからずと義公命じて其の祿を増す年山辭するに子なきを以てす故に享保元年十月身死して家亦絶ゆ年五十八著す所紫女七論、榮花物語考、年山紀聞、

安藤信正は幕府の老中なり對馬守と稱す字は君脩後君介と改む幼名欽之進晩に鶴翁といふ欽齋...

アマドウ ノブトキ

アマドウ レウヲウ

むを得ず其條款を斟酌して之が訂約を許したるに彼の書獨り其國名のみならず併せて獨乙聯邦の名を署したり此の時外國奉行掘利親通を引て自殺す而して信正百方辯論遂に使節を...

内藤志摩守の弟理三郎後を受く信正剛職に在るときと雖暇あれば和歌を詠む大字を書し時に或は書を作りて自樂しむ其の外人に接する常に強硬を主とし往々其の説を折く各國條約貨幣改鑄居留地制度等其の最心を盡す所なり初め函館奉行樺太の管轄し難きを慮り屢々之を委てんと欲す信正固く執て聽かず小笠原島南海中に在り邦人委て、顧みず而外人屢々寄航すと聞き文久元年水野筑後守を遣り始めて之を經營したり我が國南北洋中に於て未曾有の地を失はざりしは實に信正の力なり其の他軍艦購入の如き留學生派遣の如き皆信正在職の日にて其の基を成せり而して國家暗黒の時に際し冠履倒置賣國の賊と稱せらるゝに至る嗚呼宛なり(香亭手稿)

アマドウ ノブトキ

アマドウ レウヲウ

匠頭從五位上と成る年五十二上書して骸骨を乞ひ髪を剃りて朴翁と號す丹波千年山の麓小口村に歸り曾祖維新翁設くる所の抱琴園を脩め隱居俗を絶つ恒に陶淵明を慕ひ朝夕其の集を繕き手躬ら歸去來の圖を寫し野田雲竹をして其辭を書せしめ之を壁間に掲げて或は琴を鼓し或は笛を吹き或は茶を煮和歌を賦し或は禪を談し書畫を覽優游自適以て終る時に元祿十五年八月歳七十六前妻山田氏先ちて死す二男二女を生む男は兄を素軒弟を年山と曰ふ後妻湯川氏亦二男一女を生む(近世書誌、近世時人傳)

往き藤原盛富に學び建仁寺の邊に居り栖逸自甘んず伏見宮貞清召して從六位上に叙し右京亮に任ず然れども其の志に非るを以て竟に疾と稱して小口村に還る隱居禪を學び自了翁と號す寛永十四年歿す年六十一(近世叢書)

安藤維翁は風流の人なり名は惟實、維翁は其の號、初伏見宮邦輔公子たりし時安藤宗實の女を寵して生む所なり是に由りて安藤氏に鞠はれ居ること年あり既にして邦輔世子貞康を生む因て惟實立つことを得ず是に於て邦輔惟實を僧とせんと欲す適々三好細川の二氏黨を結びて相戰ひ京師大に亂る宗實惟實を携へ采邑丹波千早郷小口村に還り隱居亂を避く是の時に當りて天下麻の如く亂れ盜賊所在に充斥す然れども皆惟實を崇ひ呼ぶに王子を以てして敢て小口村を侵さず惟實老ゆるに及びて自ら維翁と號す歌詩を好み優游自娛む嘗て千早山入景仰(景仰)を好む(景仰)の記を撰す綴るに和文を以てす平生恒に推轡長鬚杖藜を曳きて或は近村に閑歩し或は藥囊を携へて村民の病あるものに施し或は所在に松杉柿栗の子を種えて久遠の計を爲す一生隱居自適以て終ふ元龜元年々四十一(近世叢書)

短矮にして弘重は長大遠く衆に起ゆ己にして兩騎相格し抱て馬より墜つ弘重力強くして其連を壓す而して終に其連の爲めに騎下を刺されて死す甲軍之を觀て憤り兵を進めて將に戰はんとす信玄之を止めて曰く我れ敢て食言せずと乃ち川中島の地四郡を以て越後の所屬と爲し兵を罷むと云ふ(野史)

命は孝昭天皇の皇子なり母は世襲足媛皇后(大日本史) 安部兵庫介(名不詳)は故江州石山の産にして占術に達す武田信玄その才を愛し信州水内郡に百貫の食邑を與ふ時に永祿十一年東方に烟霧を屬する客星見はる世人災異あらむことを恐る信玄これに兵庫に問ふ答て曰これ天、異を示して人を戒むるならむ凡滿れば缺け盛なれば衰ふるは自然の理なり故人君は毎に盈滿を戒しむ主君の繁榮二十代におよび今其盛を極む主君茲に意を留めよと信玄大に悔悟する所あり兵庫は是より職を辭し子孫を商となし自からは俸邑を還納し郷里にかへり老を養ふといふ(前代史)

安里「ウチミアムリ」

安里「ウチミアムリ」

安里「ウチミアムリ」



の時神衣を織る(古語拾遺)
アマノタチコノミコト 天種子命は天兒屋命の孫なり中
國已に定まりて國政整ふに至り天罪國罪を定め祭時を鳥見山
に建て、皇天を祭る世を以て職となす(古語拾遺)
アマノタチコノミコト 天帶根命は景行帝の皇子なり
アマノトコダチノカミ 天之常立神は天地剖判の時始
めて天に生せる神なり(古事記)
アマノトミノミコト 天富命は天太玉命の孫なり阿波の
齋部を率ゐて安房に移り麻を植む太玉命の社を建て安房社
と云ふ(古語拾遺)
アマノトリフネノカミ 天鳥船神(鳥之磐船命に同じ)
アマノタナカハラオキノマヒトノスメラミコト 天淳中
原瀛真人天皇(テムムテムラウ)
アマノハツチオノカミ 天羽植雄神は倭文の遠祖なり
神日退窟の時文布を作る(古語拾遺)
アマノヒワシノカミ 天日鷲神は天太玉命の臣なり阿波
の忌部の祖なり日神退窟の時津見神と共に穀木を種えて白
和幣を作る一夜にして蕃茂すと云ふ今の木綿なり(古語拾遺)
アマノフトタマノミコト 天太玉命は高皇產靈神の子な
り日神窟隱の時和幣を作る齋部氏の祖にして安房の一の宮な
る同國安房郡の洲崎神社に祀れる神是也(古語拾遺、日本一宮記)
アマノフキヨノカミ 天之吹男神は伊弉那岐神の子、
大日別神の弟なり一説に曰ふ氣吹戸主神の別名なり(古事記)
アマノホヒノミコト 天菩比命(一に天穗日命と書す)は
忍穗耳尊初めて中國を征する時將として遣はさるるの神な
り往いて大國主尊に媚び三年復言せず天若日子神をして代ら
しむ大國主忍穗耳尊と和するの後大國主を天日隅宮に隠れし
め菩比命をして之に祭主たらしむ(古事記、出雲國傳統書)
アマノマム子トヨオホチノスメラミコト 天眞宗豐祖
父天皇(モムテムラウ)

アマノタチコノミコト

アマノコウヂノミヤ

アマノミクマリノカミ 天之水分神はハヤアキツヒコ
ノカミの子にしてツラナヤノカミの弟なり(古事記)
アマノミコトヒラカスワケノスメラミコト 天命開別
天皇(テムヂテムラウ)
アマノミナカサシノカミ 天之御中主神は日本開闢の
初めに始めて高天原に生れし神なり(古事記)
アマノオホヒトツノミコト 天目一箇命は太玉命の臣也筑
紫伊勢兩國の齋部の祖日神退窟の時刀斧鐵鏝を作る(古語拾遺)
アマノモリ ギウナム 雨森牛南は儒家なり名は宗真字
は牙卿牛南と號し又松蔭と號す越前の人犬野の醫官たり牛南
山本北山に學びて經史に博覽なり尤も詩をよくす當時詩豪を
以て稱せらる文化十二年十二月に歿す年六十著はす所論語實
説、詩詠浦鞭、萬日紀行、筆京、松蔭春秋、松蔭醫談、牛南子、牛
南詩鈔等あり(續諸家人物志、鑑定復覽)
アマノモリ ハウシウ 雨森芳洲は對馬侯の文學なり名
は俊良又誠清、字は伯陽、東五郎と號す芳洲は其の號、又銅荷
堂と稱す平安の人或は曰ふ伊勢の人と幼にして醫を學ぶ伊勢
の人高森某醫を以て名あり一日人に謂ひて曰く書を學ぶもの
は紙費を醫を學ぶものは人費ゆ此語信に然りと芳洲傍に在り
之を聽き竊かに謂らく紙費あるは猶可なり人費すべけんや
と是より斷然復た醫を學ばず年十七八にして江戸に往き儒を
木下順庵に學ぶ才藻卓絶順庵稱して後進の領袖とす遂に其薦
めに因り對馬に仕へて文教を掌る一に書記 芳洲外國の語に通ず
毎に韓人の説話するに譯者を假らず韓人嘗て戯れて曰く君善
く諸邦の音に通ずるにして殊に日本に熟すと正徳辛卯朝鮮來聘
す時に新井君美善く用ひられ專其事を司り多く舊例を革む從
來朝鮮書を幕府に呈するに日本國大君の稱を以てす君美改め
て日本國王と稱せしむ芳洲乃書を君美に與へて其非を論す其
畧に曰く向聞、這回信使之來也、接應事例有異、前時、而其說、
皆出於執事之主張、思慮既精、處置適宜、正交隣之禮、省無

名之費、使沿路臣民無所患苦、荷微執事、孰能及之、真
所謂仁人之言、其利博哉者也、尋承内議、有稱王之舉、而
其說亦出於執事之主張、僕一聞之、且驚且痛、竊怪以執事之
學問見識、素明春秋之義、而乖刺顛倒、一何至於此哉、區々
褊性、不忍緘默、成事不說之戒、雖出於聖訓、改過勿吝
之義、將望於執事、幸採察焉、竊惟、國家源平相軋以來、王綱
日弛、不絕如綫、徒擁虛器、爲域內之共主、而世掌兵權、
者、名雖大臣、實乃國主、爵祿廢置、皆出其手、遂使域內之人
不知有君、天並日之聖統、巍々然據億兆臣民之上、冠裳倒
置、莫此爲甚、唯有臣子恭順一節、可當羊之告朔、
者、不敢公然自稱王號於朝鮮耳、夫稱我爲君、而我自不辭、
我即君也、呼我爲臣、而我不怒、我即臣也、歷代將家、不
敢自王而朝鮮稱以殿下之書、欣然輸納、未嘗爲之一辭、是
以王自居也、則與夫自王者、固自無間、然此猶有可恕者
存焉、今乃廢歷代特起之定例、創一切無替之新規、上則失
恭順之義、下則悖祖上之法、吾以爲凡爲臣子者、固當從容
規諫、繼以犯爭、務使其君不陷于偏、上欺下之地、然後
乃可謂不負聖賢之君矣、若有言半句、涉於德過、必
欲爲魏家之荀彧、則不但自談、且以誤君、吾知執事之必
不爲此也久矣、似聞有諸侯王例之說、此甚無謂何則或稱
日本國武藏王、或稱日本國關東王、是可無間而知其爲我
國諸侯王也、若專以國號架王字之上、則爲國內無土之尊
稱、豈非昭然一歟、設或如此、而可爲我國內無土之尊
朝鮮國王者、亦將以爲其國諸侯王、烏乎可也、云々、君美遂
に納れず芳洲本と白石と均しく木下順庵の門人にして相ひ諷
る三十年而して交情相ひ協はす常に白石を稱して其の心術測
る可らずと曰へり芳洲嘗て橋窓茶話を著はし惺窩羅山より其
の師順庵及び社友の凡そ一時に名あるものを擧ぐるも而して
獨り白石に及はざるは亦此を以てなり芳洲勤學老いて滋々篤
く其の子弟に教ふる懇々倦まず年八十一始めて國歌に志し古

アマノタチコノミコト

アマノコウヂノミヤ

今集を誦する一千遍又自ら賦する一萬首、人其の精力に服す
寶永五年正月六日没す年八十八、芳洲人と爲り道徳を重んず
常に曰く吾飲食衣服より以て宮室爵位に至るまで絶て偏好な
し故に閨厨寂寞家門無事之を鬼神に質して愧つるなしと又物
祖徳と交り親しきを以て嘗て子顯光をして從ひ學はしむ幾も
なくして曰く茂卿は一代の豪傑なり然れども其の人を教ゆる
浮華を尙びて德行に原かず久しく少年輩を託す可らずと遂に
辭せしむ著はす所橋窓文集、橋窓茶話、橋窓漫錄、多波禮草、朝
鮮畧説、隣好始末物語、鷄林聘事錄、交隣提醒あり子孫相繼て
學職となると云ふ(甘雨亭叢書、先哲叢書、近世叢書、近世名
家著述目録、事實文選)
アマノヨロヅトヨヒノスコトメラミ 天萬豊日天皇、カ
ウトクテムラウ)
アマノワカヒノカミ 天若日子神は天津國玉神の子
なり天之穗日命瑞穗國を征せんとして往て還らす命思兼神の
薦に因り天照大御神の詔を承けて往て征す而して瑞穗國の主
大國主神の女下照姫を娶り自ら其の國を獲んと欲して終に還
らざると八年天照大御神乃ち人を遣はして之を誅らしむ命之
れを殺す大神及び高御產靈神大に怒り命を射殺す(古事記)
アマノヨハハリノカミ 天尾羽張命は一に伊都尾羽張
神と云ふ伊弉諾尊柯遇土を斬るの刀即命なりと云ふ天安河の
河上に河水を逆に堰きて居る忍穗耳尊の勅により之に順ひ其
子(按ずるに曾孫)武甕土をして大國主を征せしむ又の名は伊
豆雄走神と云ふ(古事記)
アヤセ 綾瀬(カメダアヤセ)
アヤノコウヂ ザス 綾小路座主(ツツセム)
アヤノコウヂ ナガマサ 綾小路永昌は京都の鍛工な
り元遠江の人、昌阿彌と號す綾小路鍛工の祖なり子定利彌太
郎と稱す女永中の人(萬葉全書)
アヤノコウヂノミヤ 綾小路宮(シヤウエノホフシムラ

アヤノコウヂノミヤ

アラキ シンザエモム

アヤノコウヂノミヤ 綾小路宮「ソムシヤウハフシムラウ」

アヤノミヤ 綾宮「フクコノイシムラウ」

アヤノヤマダチノアサヘオホダチ 漢山口直大口は佛工なり後漢靈帝の後裔といふ孝徳天皇白雉元年詔して佛像一千軀を刻ましめたまふ(日本紀)

アヤベ カウリツ 綾部剛立「アサダゴウリツ」

アヤベ ケイサイ 綾部綱齋は豊後杵築藩の學士なり名は安正字は伯章一の字は惟木、綱齋は其の號、幼にして穎慧、父道弘に從て書史を受け長するに及びて京師に遊ひ伊藤東涯北村篤所に就て經史を學ぶ又國侯に從て江戸に赴き室鳩巢を見て大に悦ぶ遂に弟子となる専ら蘭洛の學を修め旁ら服部南郭に從て詩文を講習す綱齋人と爲り剛直にして孝信三世に歴仕して最も知を龍溪公に受く公年少しと雖も學を好み心を庶政に用ふ綱齋を擧げて經史を討論し事務を諮詢す嘗て西遊して餓津途に滿つ綱齋救治の法を識して有司の旨に忤ひ遂に譴責を受けて門を閉つ既にして職を罷め食色を離れる是に於て寂寞自守り經義を講析して自樂しむ常に曰く人倫の教は降りて師儒に在り然れども世人師儒を以て一方外のものとなし之を視ること釋氏に異ならず是其の道の明ならざる所以なりと遂に家庭指南一卷を著はし專釋倫に就て其の條目を明かにす讀者之を稱すと云ふ寛延三年歿す年七十五綱齋幼き時父道弘親ら易の謙の卦を書して之を佩はしむ綱齋服膺深く自ら稽誨す故に門人子弟と謀り謙卦の九三に取り私かに證して有終と云ふ(近世叢書野史)

アヤベ ダウコウ 綾部道弘は豊後杵築藩の儒なり其の先は丹波綾部に出つ因て氏とす子孫豊後に徙りて大友氏に仕ふ大友氏滅びて後祖可春、父道一、皆隱居して仕へず道弘年八

歳叔父の家に行く家人其の幼弱を侮り待つに禮を以てせず憤懣夜を冒し里餘の曠野を経て歸る父母其の勝を異とす試みに古文數百言を授く一過すれば即誦を爲す道一益々歎異す家素より貧し弱冠に及びて隣邦に仕ふ然れども時々歸觀して孝養を致す而して餘力あれば則ち書を讀み醫を習ふ既にして艱苦困頓東西に漂泊すること數年會々兄久しく病で資産空乏田宅を典するに至る道弘因て歸りて杵築侯に仕へ歳俸を分て田宅を贖ひ遺税を償ふ兄死して二子尙ほ幼道弘撫字以て成立するを得道弘人と爲り峭鯁にして議論屈する所なし而して内は親戚に敦く外は朋友に信あり故を以て衆其の嚴を憚り久して其の恩に服す稱して其郷の伯夷と言ふ平居子弟に教ゆるに四書小學及び古文詞を以てし未だ嘗て釋義博論の事を習はしめず元祿十三年口疾を得て歿す其の病革なるに及びて子安正東府に在り職守の爲に暇を乞ふを得ず會々其友伊東某東府に行くあり語を寄せて曰く予れ汝ちと永訣せんとす私情に率かれて公義を缺く無かれ故に歸省を要せずと年六十六(近世叢書野史)

アヤベ フハム 綾部富阪は文武兩通の士なり豊後杵築藩の士、綱齋の長子、名は安胤字は伊承風に家學を受て蘭洛の業を收め尤も毛詩に長せり終身誦誦して一字を誤らざ又博く武事に通す最槍術に名あり延享二年父の歿を嗣く江都に在ると四歳にして還る寶曆中累遷して郡宰と爲り采邑を賜ふ初め父郡宰を拜して邑を得、後故ありて官を罷め邑を没せらる此に至りて之を復す家人以て榮とす富阪心を持する公正、贈遺を受けす恩威兼ね行はれて能く衆心を得屢々疑獄を決して平反する所多し巡視の日首として孝節を訪ふ又國主の命を受け以還藩政多く梗塞す富坂命を奉して經營煩劇を辭せず因て疏通するを得其の功を以て祿益々加はる富坂官に居る前後四十年二君に歴事す獻替懈たらず事を論する剴切、上下敬憚す曩に郡宰たりし時侯其の獨任過勞を慮り爲に副宰を置かんと欲

アヤノコウヂノミヤ

アラキ シンザエモム

す富阪乃ち一農戸小申政後を薦む有司咸大に驚く富阪陳し乞ふて已まざ侯乃之を擢んづ果して職に稱ふ大坂中井竹山之を聞き歎して曰く今の公叔文子なりと其の上に乗するの公正なること此のごとし天明二年歿す年六十三、友人三浦梅圃其の素行を識し易の蹇卦九五の翼に取り私に證して中節と曰ふ長子佐嗣字は輔之(近世叢書)

アマヨカ 綾岡「イシダアマヤチカ」

アラカマ ニフダウ 荒加賀入道「ミナモトヨシクニ」

アラカハ イツノカミ 荒川伊豆守は武田信玄の武臣

なり勇武人に過ぐ金九某と闘ふて死す(武功正傳)

アラカハ チヤウベエ 荒川長兵衛は八條流の馬術家

なり屋代重俊の門人元和四年三月歿す(武術流祖傳)

アラカハ テムサム 荒川天散は紀州藩の文學者なり名

は秀、字は敬元、一景元、天散は其號、又蘭室、後天散生と號す通稱善吾、山城の人、八歳にして業を伊藤仁齋に受く、人と爲り明敏豁達にして經史に精通す古義塾中千里駒の稱あり十四歳の時仁齋事故あれば職代りて經義を講説し諸生を訓督す先輩先生と雖も與に抗する能はず塾中推して都講と爲す十六歳の時紀藩の國老三浦某見て其の才を奇とし之れを藩に薦む乃ち徵されて記室となる時寛文九年十月なり天散業を仁齋に受けてより紀藩に招聘せらるゝまで古義塾に寓すること凡て八年師弟の間に於て信愛尤厚し仁齋又其の贊を執ること尤群弟子に先んずるを以て之を遇すること亦他人に異なり然れども天散終身専ら師説を奉せざる爲く孔子の道は大に唐宋の間に備はりて程朱二公に至りて之を倣成す其の大意は往聖に繼ぎ來學を導ひき老佛の空妙を排し管商の功利を擯くるに在り若し世に道義を以て己か任と爲し能く此の意を續くものあれば是眞の儒者なり何ぞ必しも字々句句々其の師説を守りて而る後能く其の學を奉すとせん師説を墨守し其の遺教を崇奉し事々其の意の若くせんと欲するは朋黨の端なり夫黨を結ひ徒を構

へ偏一家を護するは小人の私心なり近時の中江藤樹山崎闇齋の輩流派を區別し子弟を競誘して己に歸せしむ其の末學の弊恐くは朋黨の病を免れざらんと仁齋一家の言を成して海内を風靡す其の語孟古義を著すや卷首毎に最上至極宇宙第一の八字を置き論語孟子を崇重するの意を表す當時弟子及び朋友異議あるなし天散以爲く語孟を推尊して崇重の意を表するは恐くは六經を睥睨して之を孔孟の外に置くに似たり語孟之を削去せんと仁齋之に從ふ天散講業の餘暇には吾邦の地誌を研究して城堡要塞の所在を諸記し詳かに其の道里の遠近を知る其の言に曰く士若し此に精しからざれば戰陣の用攻守の法を爲すに足らずと天散の詩多くは世に傳らず紀藩の伊藤海橋南紀風雅集を編する時其の詩數首を載す天散享保二十年に歿す時年八十二、弟善助の子某を養ひて祿を襲はしむ其の人品行悪しきを以て除籍せらるると云ふ(先哲叢書)

アラカハ ヒコダイフ 荒川彦太夫は本間流の槍術家

なり本間次郎兵衛の門人(武術流祖傳)

アラカハ ヤウテツ 荒川養鐵一に荒井は狩野家の書家なり書法を狩野常信に學ぶ(扶桑譜人傳)

アラキ カイウ 荒木加友は江戸の醫者なり泰菴と號す

旁ら俳諧を松永貞徳に學びて名あり寛文中の人著述「そら言」あり(俳林小傳、俳家時人談)

アラキ ゴタク 荒木吳橋は江戸の書家なり名は魁之字

は公楚吳江の子左二と稱す又青菴と稱す文化八年十二月二日歿す年五十八丸山長泉寺に葬る(江戸名家墓所一覽、名人忌辰誌)

アラキ ゴカウ 荒木吳江は江戸の書家なり東水と號す

名は克之字は子盈長藏と稱す寛政五年五月二十日歿す丸山長泉寺に葬る年六十五(江戸名家墓所一覽、名人忌辰誌)

アラキ シンザエモム 荒木十左衛門「アラキモトミツ」

アラキ シモノカミ

アラキ シモノカミ 荒木志摩守は荒木流の馬術の祖なり志摩守と稱し姓は藤原氏攝津の人村重の族なり馭を齋藤好玄に學ぶ(武術流祖傳)

アラキ ゼス井 荒木是水は書家なり志津摩の門に學びて遂に一家を成す(墨金便覽)

アラキ ソハク 荒木素白は書の名家名は光辰、通稱三次後ち内膳と改む姓は源氏、母は桂氏、素白甫めて九歳福山城主水野勝成に仕ふ十九の時同僚と争論す去りて伊勢に赴き津の城主藤堂高虎に仕ふ高虎勝成の爲めに酒饌を設く素白給事周旋す勝成怒りて之を高虎に請ふ高虎肯んせず素白去りて京師に如く勝成怒りて國に入るを禁す素白竄匿數年朝浦に到りて告首罪を乞ふ勝成宥して京師に歸らしむ素白削髮して禪を靈隱寺一絲に問ひ名を虚空素白と改む勝成復召して月俸を與ふ勝成勝俊次で卒するに及びて辭し去る後高虎の嗣子之を招けども辭して應ぜず素白常に書を好み藤本敦直を師として其の名頗高し世に上代風の中興と稱し書跡三跡の室に入ると云ふ後水尾帝素白に詔して團扇及び色紙に書せしむ大に旨に愜ふ晚年力衰へず病むに及びて權大納言藤原弘資使を遣して慰問す使者接續絶えず貞享二年春歿す年八十六、七男一女あり(野史、名家全書)

アラキダ ウヂダケ 荒木田氏筠は伊勢山田の祠官なり字は春生、齋震と號す、通稱丹下、正五位下に叙す伊藤仁齋に學びて詩名あり(名家全書)

アラキダ オキマサ 荒木田興正は伊勢山田の祠官なり字は董卿、鼎湖又南陵と號す通稱數馬從四位下に叙せらる江村北海の門に入りて漢學を能くす後ち伯父正富の家を嗣て釜谷氏を冒す歿年詳かならず(皇定便覽)

アラキダ ダイガク 荒木田大學は伊勢の人和學者にして内宮神職なり

アラキ ムラシゲ

アラキダ ツ子マサ 荒木田經雅は伊勢大神宮の神主なり從四位上に叙せらる篤學強識にして和學に精し天明中の人(名家全書)

アラキダ ヒサオイ 荒木田久老は通稱宇治主税、名は正董五十槻園と號す伊勢外宮の祠官度會正身の子なり始め彌三郎と稱し外祖父秀世の家を嗣き權禰宜に補す後離縁して實家に還り中書と稱す後齋宮と稱し荒木田久世の嗣となり内宮權禰宜に補す正四位の下に叙せらる幼より皇國の古典を研究し後賀茂眞淵の門に入り益々精勵して遂に大家となる最も力を萬葉集に用ふる眞淵の萬葉考に次で「槻の落葉」を著せり翁人と爲り豪放不羈常に青樓に登りて遊宴日を経、酒池肉林以て自娛しむ而して醉中間に忽然掌を拍て曰く古人未發の考をなせりと乃人に誇り曰く世の古典古語を解するものを見るに机上若干の書籍を置き沈按苦思以て之を解せんとは豈能く其の眞面目を得んや吾が學は之に異なり遊宴妓婦と戯れ盃盤狼籍の間に未曾有の奇説を發す是眞の活考たり世人の學問は多く死物のみと常に四方を漫遊し徒を聚め古典を教ふ從ひ學ぶもの頗衆し凡其の説く所古人の跡を踏まざり依然一家の學を唱ふ、時に本居宣長の説に服せざる者多く贊を翁に執る實に眞淵門の一巨擘なり詠歌は其の專とする所に非ずと雖ども又一擘の妙あり文化元年九月歿す年五十九、著す所萬葉集槻の落葉、記紀之歌解、信濃漫錄、續日本后記歌解、竹取物語歌解、難波舊地考、酒古名區志之考、古言清濁辨論、校正書肥前風土記、全豐後風土記、全出雲風土記、祝詞考校訂、祝詞考追考、文意考、古器考等あり(三十六家集略傳)

アラキダ ヒサモリ 荒木田久守は伊勢大神宮の神主なり從四位上に叙せられ五十槻園と號す久老の子、父の風を嗣て國學詠歌俱によくせり安政五年卒す年七十一(名家全書)

アラキダ モリダケ 荒木田守武は和歌連俳に名あり伊勢内宮の神官なり正四位に叙し園田長官と稱す足利氏の末

連歌世に行はる而して俳諧の語を以て連歌を行ふこと守武に始る則ち俳諧式を定む故に後世當時の俳人を云ふもの守武、宗祇、宗鑑等を以て唱首と爲すと云ふ天文十八年八月八日没す年七十七(俳家奇人傳、俳林小傳)

アラキ デブセウイフ 荒木治部少輔は京流の劍客なり初佐々木六角氏に仕へ後北條氏康に仕ふ(本朝武藝小傳)

アラキ マタエモム 荒木又右衛門吉村は伊賀荒木村の農にして臂力衆に過ぐ擊劍を好み柳生但馬守宮本無三四等に就て諸流の劍法を極む郡山城主本多甲斐守に仕へ秩祿五百石を食み一藩劍術の師範たり其の妻は松平忠雄の臣渡邊數馬の姉なり寛永七年七月數馬の弟源太夫同藩河合又五郎に殺さる數馬仕を謝して其の跡を逐ふと數年にして遭はす又右衛門義として傍觀に忍びす同しく仕を辭し相携へて諸國を周流す塲を江戸に開き劍を教授す同十一年十一月又五郎其黨二十餘人を從へ大和の奈良を發して江戸に赴むに會ふ又右衛門一行四人其行道なる伊賀上野に待つ七日味爽又五郎等上野城下を過ぐ數馬突出し源太夫の復讐と呼び又五郎に迫る又右衛門亦伊賀守金道の鍛へたる刀を抽て又五郎の黨櫻井甚左衛門に當り一刀に右足を斷ち二刀に胸を兩斷して馬より落し續て敵中に入り又一人を仆し數人を傷けて刀折る敵半弓を射る繁し數馬の若黨孫右衛門又右衛門の若黨武右衛門善く拒き馳驅奮撃す既にして敵四方に散亂し望中又目に遮る者なし時に數馬又五郎戰方に耐又右衛門趨至り呼て曰く黨者既に塵にせり數馬方めよや數馬之を聞き精神忽ち十倍し一跳して又五郎を重傷にして死す數馬傷を被むる十三箇所孫右衛門は十箇所又右衛門一をも受けす時に年三十七上野城主藤堂高次士卒を發して之を護送す是時數馬の舊主忠雄既に卒し嗣侯又遠く衛從を發して國に迎へ二人に祿各千石を給し使者を郡山藩に遣り僞て又右衛門重傷を病み死せりと稱し終身境を出るを許さす

アラキ シモノカミ

アラキ ムラシゲ

アラキミノイラツメ 糠君娘は仁賢帝の宮人なり和珥日瓜の女、選ばれて後宮に入り春日山田皇后を生む(大日本史)

アラキ ムニムサイ 荒木無人齋は無人齋流の捕術の祖なり(武藝小傳)

アラキ ムラシゲ 荒木村重は攝津の人なり姓藤原氏、波多野義通の裔なり父を義村と云ふ信濃守と稱す村重初の名は強介又信濃守と稱す天文弘治の際池田勝政に屬す永祿十一年八月茨木城を援て之に據る三好氏に黨し尼崎を保つ天正元年二月大將軍義昭兵を擧ぐ三月織田信長西上す村重之に屬し功あり請て攝津を伐ち攝津守に任ず信長の至るや勝政觀望して到らず事平く及で高野に遁る是に於て其下多く村重に降る天正二年三月村重伊丹を援き徒て之に居る改て在岡城と名く族人を別て諸城を守り威近國に振ふ三年三月信長の命を以て一向の寇と戦ひ大に之を敗る六年正月信長村重等十人を安土に饗し自ら之を送迎す初め村重使者となり安土に往く使事終り信長肉を餽し之を食ましむ村重伏して佩刀を脱し匍匐して進み顔を仰ぎ口を開て徐に肉を抜き食ひ盡し袖を以て刀を拭ひ以て左右に呈す信長其の大膽を賞し刀を賜ふ四月秀吉に從ひ毛利氏を伐つ播磨に次す村重の部下利を貪り敵城石山に驅する者あり安土の邊驛以て糧を敵に送るとなし之を安土に報ず明智光秀村重の新參にして名其上に出るを嫉み乘して之を讒す信長未だ信ぜず村重播磨より歸るに及びて信長人を遣り之を訊す村重大に驚き往て謝せんとす部下皆往くとなからんとを勸む光秀亦書を送り信長の怒り甚しと告ぐ村重乃ち意を決して叛き毛利氏及び石山と通ず信長親ら將として之を討つ外甥中川清秀茨木を以て降る十一月諸將來り偪る秀吉之を聞き三木より往て村重を諭す村重泣き且つ

謝し終に從はず手を執り涙を揮て別る秀吉又人をして之を説かしむ村重之を捉へ以て決意を示す十二月信長兵を合し伊丹を圍む村重撃ちて之を御く近江の兵一人槍を把て屏に乗る城兵將に之を殺さんとす其人槍を投して坐し母あり死する能はざるを告げ宿されんとを乞ふ衆憐み之を許す村重聞て其孝を賞し金を與へ人をして之を門に送らしむ信長力取す可らざるを覺り合して長圍を作り其糧道を絶つ天正七年食糧乏村重族久左衛門を留めて城を守らしめ自出で備中に赴き救を毛利氏に乞ふ路塞り果さず奔て尼崎に入る遂に花隈に往く十一月久左衛門使を瀧川一益に遣し妻子を救さば往て村重を説くと請ふ之を許す久左衛門を出づ城乃ち陥る久左衛門に赴く村重門を閉て入れず村重の妻伊丹に幽せらる村重と和歌を相贈り互に悲しむ十二月信長伊丹城を屠り村重の一族妻子を京師に斬る天正八年十月花隈食糧乏村重潜に兵庫津に逃れ安藝に奔り髪を剃て道童と號す茶事を以て日を送る後秀吉之を界浦に實き善く之を遇す或は曰く天正七年自殺して死す堺南宗寺に碑あり秋英宗齋居士と題す(野史茶人系傳全集)

**アラキ モトミツ** 荒木元満は荒木流の馬術家なり十左衛門と稱す元春の子、父元清に學びて能く箕裘を繼ぐ將軍徳川秀忠の師範となりて世に大に鳴る其の子十左衛門元政亦能く其の傳を繼ぐ(武術流祖)

**アラキ 井ガク** 荒木維岳は江戸の書家なり字は嵩夫吳井と號し八郎と稱す明和四年七月二十六日没す押上眞盛寺に葬る(江戸名家所一覽)

**アラゴラウモヘ** 荒五郎茂兵衛は江戸木挽町に生る性活達豪宕にして常に午後と爲るを耻づ一日或人に謂ひて曰く我れ今ま如何なる所爲をなさば昔時俠客の巨魁に愧ぢざる名譽を得るや其の人答へて曰く當時堺町に奴治兵衛と云へる者あり頗る強膽にして又又氣節に乏しからず若し之と一撃を試みば則ち名譽自ら來らんと茂兵衛曰く事甚だ容易なりと乃

アラキ モトミツ

アラシ サムゴロウ

出で治兵衛を窺ふ適之に演劇場外に會ふ茂兵衛事を以て之を挑み遂に刀を抜て背及び股に傷つく既にして人來りて彼此を和解し事終に止む後一年を経て復た治兵衛に木挽町に會ふ治兵衛呼て曰く久いかな荒五郎我今ま汝に難を報せんとすと乃進みて之を斫る茂兵衛屈せず捕して之を倒し轉展相擲つ會ふ三男三郎左衛門、ちつこ七郎兵衛等馳せ來りて之を和解し遂に兄弟の義を結ぶ此より其の名俱に著はる茂兵衛後ち深川に終る(本朝俠客傳)

**アラシ キチサブラウ** 嵐吉三郎初代は大坂俳優なり嵐勘右衛門の弟子なり初竹田吉三郎後坂田と改め寶曆八年五月嵐吉三郎と改む岡島屋といふ俳名里環元竹田芝居の出にて若年の頃は太坂演芝居の大立者なり寶曆八年より大坂桐の谷座へ苗氏を嵐と稱し初て出て十年冬京都澤村座へ上り五年間京都にて勤む明和二年大坂三軒座へ下り薄雲妻平の役至極の大評判にて同七年は富士松座へ出て淀屋橋の新狂言に早川又兵衛役古今の大出来夫より七年ぶりにて京へ上り益と抄法よく安永四年大坂角の座へ下り益替り岩川治郎吉大當りにて早川と岩川の此二つは末代家の狂言に殘す翌百年中の座にて座頭を勤む寺岡勘平の二役又は團七茂兵衛一寸徳兵衛にて當る同年冬京行暇乞として女護島俊寛の役大出来にて同七年大坂中の座へ下り鶯鷺どりの狂言にて貫ぬう門平其の外龜屋忠兵衛日高川にて鑄師大作の謀反役大當り也同九月には白太夫源藏の二役古今の大出来也同亥年は京を勤む第一男立派にて色白く男だて角力取の役は能似合しなりと云傳ふ安永九年十二月六日没す年四十四

**アラシ キチサブラウ** 嵐吉三郎二代は元祖嵐勘右衛門の三男なり岡島屋と云ふ後に瑠寛と改む幼年の頃竹田芝居へ出座本故近江大塚引合にて初代嵐吉三郎の由口上あり其後京へ上り修行し寛政元酉年四條北河内芝居へ出る翌戌年平が嶽の權六を當る其の翌年奥州日出演といふ狂言にて小栗栖小

兵衛の役を初て出す翌四子年大坂中の座へ下り忠臣蔵の勘平の代り役にて評判よく同七年角の座にて大磯谷五郎大當り翌辰年は京四條南芝居親見世と大坂中の座と兩座にて奴妻平の大出来より同九年巳年京芝居にて双蝶々の長五郎大當り同十年角の座にて猿廻し與次郎の役初て出し古今の大當り其翌未年同座にて上田慶次郎の大出来享和元酉年中の座にて里見伊助を初て出す同二年中の座にて石岡左善文化元子年角の座にて筑紫權六の大當り大入り同三年角の座にて石堂縫之助翌卯年同座にて自來也の政二郎志ん藏大出来又京南芝居にて古今獨歩の大入り文化五辰年中の座にて名古屋山三にて梅玉と張合同年赤根半七の役大當り同六年中の座にて鎮西八郎二の替りに青柳彈正の謀反役千兩嶋岩川を初て勤む同八年角にて經覺上人大師師の茂兵衛大當り同九年角にて天王寺寄進に月見の松亡父州三回忌退善に左甚五郎役を勤同十一年角の座にて朝顔の狂言初て出す古今大當り大入りなり翌亥年中の座にて小割傳内其翌子年熊坂範經の二役大當り切に油商人次に笹原隼人何れも大出来大入り又文政元寅年大坂堀江の芝居にて扇屋の熊谷大當り同年中にて伊賀越の十兵衛大當り翌卯年同座にて戀の白坂の日本駄右衛門を出す同四年己年中の座にて吉の字を改め橋三郎と成る吉の字牌あるに由てなり江戸役者幸四郎半四郎と一座してさどの島臺といふ狂言にて鹽の長藏と柳がせ左内の二役にて杜若どのぬれ事にて半四郎の目を驚かす同年五月大坂北の新地芝居にて頼政と阿波の十郎兵衛の二役大當り大入の處此狂言中に病氣にて引籠り尤當益替りに角の座にて梅玉と和陸して久々に一座をするとして口上看板まで出し則ち狂言は木下かけに極り有しに文政四年九月廿七日終る行年五十三才或曰く其前橋三郎の名は大三郎に譲り俳號瑠寛を用ふ此人のそなへ近來か程まで崩たる役者を見ず第一美男にて其上美音にて上品で先近世の稀人なり依て此人を大瑠寛と入みな云ひ傳ふ(俳優世々の接木)

アラキモ トミツ

アラシ サムゴロウ

**アラシ キチサブラウ** 嵐吉三郎三代は家名を岡島屋と云ひ俳名を鱗昇と云ふ實は二代目吉三郎の兄猪三郎の實子にて幼名大三郎と云ふ橋嵐の本家筋なり文政五年大坂中の座にて梅玉釜いりの狂言五右衛門の時俤五郎市役を勤め此時吉三郎にて初て出る是より暫く伊丹屋瑠寛に付て修行し文政十三寅年京因幡藥師芝居にて初て熊坂と切に岩川を出す天保四年大坂角中座へいり梅玉引立に成り一の谷の軍次千本の小金吾杯を勤め同申酉戌年は大坂演芝居にて修行し専ら名を上げて同十亥年初て江戸市村座へ下る弘化三年大坂角の座へ上る秋大膳奴妻平阿波十郎兵衛奴ちる内杯にて當る同四年又江戸へ下り始終助高屋と一座して適れ實惠の賣出しとなる嘉永七丑年故二代目富十郎江戸へ下りし時一座をしてまづ八陣の正清妹春山にては深七を勤る安政二卯年の冬尾州名古屋へ上り至極評判よく翌辰年秋大坂中の座へ上り御目見え狂言に佐々木盛綱の役古今の大出来なり翌巳年の春角の座にて犬田小文吾局岩藤の二役大當りにして次に毛谷村六助斧定九郎高師直又京東芝居にて六助何れも大當りなり同秋大坂中の座にて生田傳八郎役古今の大出来又京南芝居親見世に岩藤大出来なり元治元年九月年五十五にして歿す當時實惠の大立者なり(俳優世々の接木)

**アラシ キヨサブラウ** 嵐喜代三郎は江戸の俳優女形にして八百屋於七の演劇に於て七を演じ大に好評を得たり其時の衣裳に喜代三郎の替へ紋封じ文を用ひたるより後世迄於七を演ずる者必ず封じ文の紋を用ゆ以て其技の優れたるを證すべし正徳三年閏五月十五日歿す

**アラシ クロムジフラウ** 嵐冠十郎「アラシサムゴロウ」  
**アラシ コロク** 嵐小六(初世)「アラシサムモ五代」  
 (二世)「アラシヒナステ」(初代)  
**アラシ サムゴロウ** 嵐三三郎初代は大坂の俳優なり號は雷子、京都岡崎村の人本姓は島田幼名喜之助、初嵐勘四郎の

アラシ サムゴラウ

門人後故有て嵐三右衛門の弟子となる元文四年七月十二日歿す歳五十三(名人忌辰録)

アラシ サムゴラウ 嵐三右衛門は来芝と號す初代三五郎の男當三郎と云ふ俳名初め雷子後來芝と云ふ家號は京屋寛政九年剃髮して蜜巖と云ふ後東岡崎に閑居す享和二戌年五月六日歿す歳七十二(名人忌辰録)

アラシ サムゴラウ 嵐三五郎は雷芝と號す二代目の男初名は松之助寛政九年三五郎と改め文化十一年冬市村座へ下る歿年未詳(名人忌辰録)

アラシ サムゴラウ 嵐三五郎は雷子と號す三代目の子幼名三四郎後七代目三升の門に入り市川三十と改め後三五郎と云ふ天保八百年六月二十九日歿す歳三十四大坂下寺町源聖寺に葬る(名人忌辰録)

アラシ サムエモム 嵐三右衛門初は大坂の俳優なり初の名は西崎新平攝州尼ヶ崎に住す俳優となるに及んで名を三右衛門と改む古今の名人なり江戸に下り小夜嵐の狂言に非常に當りたるより世人渾號して嵐と稱す終に己れが姓とす元禄三年十月十八日大坂に歿す年五十六顔見世と云ふと此人に始る(名人忌辰録)

アラシ サムエモム 嵐三右衛門二代は大坂の俳優なり初代三右衛門の男初の名は門三郎、梨園中名優の名あり元禄十四年十一月歿す年四十一(名人忌辰録)

アラシ サムエモム 嵐三右衛門三代は大坂の俳優也杉鳥と號す二代三右衛門の男初の名は新平寶曆四年十月歿す

アラシ サムエモム 嵐三右衛門四代は大坂の俳優也三代三右衛門の養子初め松之丞と曰ふ俳名は杉風明和二年七月年廿六にして歿す(名人忌辰録)

アラシ サムエモム 嵐三右衛門五代は大坂の俳優也三代目の弟にして紫朝後に杉鳥又文射と號す四代三右衛門の弟子となる始め傀儡を業とし小六と曰ふ延享四年江戸中村座に

アラシ リクワム

下る暖簾を作て諸方に頒布し以て廣告す始めて女形の俳優暖簾を配布するの事起る後世終に立役の俳優も亦之に倣ふに至る三右衛門初め女形を専とし後立役を兼ぬ加役の事此人に始まる小六と稱する摸樣大に流行す三右衛門は立役となりて後の名なり天明五年八月廿六日歿す(名人忌辰録)

アラシ サムエモム 嵐三右衛門六代「アラシヒナスケ」本と五代三右衛門の門弟也師の名蹟を相續す初名は離三郎又眠子と曰ふ天保嘉永の頃大坂に名あり

アラシ ヒナスケ 嵐離助初は大坂の俳優なり五代嵐三右衛門の子なり初め名は岩二郎寶曆三年離助と云ひ女形たり安永四年元服して三右衛門六世となり立役となる同九年江戸森田座に下り後嵐小七と云ひ俳名眠獅又小六(一世)となる家號吉田屋と云ふ後剃髮して是心と法號す天明六年七月廿六日歿す年七十七(名人忌辰録)

アラシ ヒナスケ 嵐離助二代は大坂の俳優なり初代離助の養子なり初の名は秀之助又三世中村十藏と曰ひ二世離助と改む寛永中市村座に下る同十二年二月歿す年廿八

アラシ ヒナスケ 嵐離助三代は大坂の俳優なり二代離助の弟幼名秀之助又直次郎と曰ふ三代の名を嗣ぎ早世す

アラシ ヒナスケ 嵐離助四代は大坂の俳優なり離助の男、幼名は岩次郎又秀之助と曰ふ江戸へ下り四世離助と改め俳名眠升と稱す

アラシ ヒナスケ 嵐離助五代は俳優なり江戸の産にして初名を市川鯉三郎と曰ふ文化中五世離助と改む姓嵐を改めて叶となす

アラシ スナスケ 嵐離助六代は俳優なり大坂の産初め名は市川紅助五世の養子となり叶離助又嵐叶升と曰ふ後嵐離助に復す萬延中歿す

アラシ リカク 嵐璃玉家名を豊島屋と云ふ俳名璃玉實

アラシ サムゴラウ

は大坂道頓堀芝居茶屋豊重の粹にて幼名市太郎といふ大璃寛目徳の身弟子にて芳三郎の名をつぎ子供芝居へ出る女六未年大坂若太夫芝居にて竹田からくりを勤し時中將姫の雪攻にて赤頬の奴にて出しに子供に似合ずよ仕出しなりと評判高く此時より目徳璃寛の預り弟子と成り京道場芝居にて修行して天保二卯年璃瑠と改名して翌巳年大坂中の座見世に初出て平の宗盛の役を勤め同七年大坂堀江の芝居にて明神信乃の役替りより名を發し同九年大坂堀江の芝居にて明神の森に谷五郎にて小芝翫に出合夫より暫く濱芝居を勤め弘化二年春大坂角の座へ出翌未年三月同座にて太功記の鈴木孫市武智重次郎の二役大できなり同五年角の座にて佐倉宗五郎の役を任初め古今の大當りに引續て京東芝居にて二度目の大當り同年秋大坂筑後芝居にてあやつりの三番叟釣り狐白藏主の所作事大出来次に角の座にて安部の仲麿の狂言を名殘にして江戸中村座へ下る同七年春大坂筑後芝居へ上る關寺小町百まなこの所作事を出し同年京南芝居見世に釣り狐を勤安政二年春筑後芝居にて鉢の木白たへの役次に八重霞の(ト)の役大出来にて又京南芝居にて出し大當りなり翌辰年筑後芝居に於て吃又平役を當る同巳年角の座にて宇都谷峠座頭殺怪談を出し其外小は小平次怪談八百屋お七吉野山塚本狐法海坊團奢待の市杯當て助藝なり元治元年七月發狂して死す年五十二

アラシ リクワム

役を任初め古今の大當り大入なり是より益々名を上げ暫く徳の字仔細有りて壽三郎と云へり文政三辰年若太夫芝居にて永井源三郎と切千兩職の岩川の役を名殘にして江戸中村座に下る江戸にて目が大大きくて小柄故梅玉によく似たり目徳といひて評判よし文政五年大坂中の座へ上り橋三郎と改名し源三位頼政役を勤む翌未年には同座にて朝親の駒澤を勤め同年いせ物語の有道の役大出来にて翌戌年大坂堀江芝居にてひらかなの平次松右衛門の二役殊の外宜敷九月には角の座にて伊賀越の山田幸兵衛の親仁形をでかし同十年中の座にて今木傳七阿波の十郎兵衛大出来にて當年先師七回忌追善狂言に教經熊坂切に千兩職を同座にて當る翌十一年角の座にて大塔宮の齋藤切にかさねの女形を勤む此年同座にて璃寛と改名し加へ見山のどのと又助の二役早替り大出来翌丑年の春は中の座にて薄雪の妻平國俊さいざき五平次の四役にて角の大座と張合同年五月京東芝居にて梅玉と初ての一役にて白石嘶明神の森の出合古今の大出来同年秋大坂角の座にて二度目に出し大評判次に連歌の評判にて木下藤吉の役「南無三御供があくれた」の幕切りは今に云出さぬ者どてなき程の大できに同十三年春も同座にて雲月花狂言眞柴久次岩木藤馬高木次郎太夫小ぶな源五郎のしんばう狂言にて故慶子と兩人の取合至極の出来にて是切にて此年伊勢中の地藏芝居へ下り同年の秋大坂中の座へ出で彦山の久吉友平、切に八郎兵衛河漕の平次の役何れも梅玉と出合にて大當りなり九月には角の座にて芦屋の與勘平切に油屋お染を出し役まはり若干にて諸人目を驚す天保二卯年春同座にて尾形力丸の反逆の役切に法海坊を出し評判よく翌辰年春大坂筑後芝居にて宮本無三四の役近年稀なる大入なり同年秋中の座へ出で人形屋幸右衛門早世伊をりの二役至極の沙汰なり翌巳の春中の座にて小栗判官獵師浪七の二役大出来にて古今の大入次に川中島勘助輝虎の二役評判よく五月には角にて梅玉一座にて和藤内、切に厂金文七

の大出来此冬中の座にて大經師の茂兵衛と八郎爲朝を出し翌午年も同座にてたばこ切三吉切に出入添庄兵衛小萬の二役を勤む同六年も同座にて景任下郎但馬の二役大出来にて益替りには梅玉一座にて狭間の東吉切に白井權八鎗持定助次に忠臣講釋鹽谷判官小春屋彌七にて植木屋の場慶子との出合皆それこれに大當りなり同七年中はの座にて八犬傳に犬塚信乃金鞠大助の二役を仕初大出来なり同年より紋切に油商人を出し又京へ上り南芝居にて八陣の正清切に油商人を出し大當りをなし翌酉年は大坂角の座にて笹原隼人船頭小平次の二役を勤め同五月には筑後芝居へ出て尾上多見藏一座にて金比羅御利生に民谷源八郎と切に出村新兵衛の二役の處狂言中に病氣起り引籠りしが遂に養生叶はずして是が舞臺の名残りなり天保八百年六月十三日終る行年五十歳辭世「芳しき句ひは四方に立花のあらしに此世さるのか」(後一併傳世々の抄本)

夫のとり娘女猿廻し遠山甚三中野藤兵衛杯は別に評判高く安政二年冬大坂角の座へ上り翌春白縫物語にて大友若菜姫乳母秋篠至極の大出来なるに番附の居所が人氣にさわり跡へ安達の袖袂を出し是も大出来成りしも左のみ喝采なく其後同年京南芝居見せに袖袂を出し大に好評を博したり夫より益人氣立直り翌辰年大坂角の座にて彦山のお園次に京南芝居にて和田の板額秋は角の座にて大塔宮の花園何れも大出来にて女形さへして居れば當時外に肩を並ぶる者なしよつて一方の大立者たり文久三年四月五十二にして歿す

アラシ リクワム

アラシ カウサイ

男弟子の後六世孫意富乃古の連雄器の御世に東夷に不臣の民あり悉く臂力ありて朝軍を押し防ぎ是に於て意富乃古の連甲冑五つ重を造り之を着て敵の庭に進みて官軍を勞することなく一朝に滅ぼすことを得たり天皇其の功績を悦び更に名字を加へて暴代連と號すと姓氏録に見ゆ又暴代連は武内宿禰の事なりと云説あれども信じがたし(監工傳略)

アラシ ノリアキ 荒野則明は毛利氏の家人なり曾て吉川氏邸に三人の勇士匿るあり衆之を捕ふる能はず則明戸を破り直に進みて之を掩捕すと云ふ

アラシ リクワム

アラシ カウサイ

アヲ井 カムセツ
アヲ井 カムセツ 荒井寒雪は狩野派の畫人なり寒竹の男、畫法を父に學ぶ(扶桑畫人傳)
アヲ井 カムセツ 荒井寒竹は狩野派の畫家なり名は常實、字子敬、市郎と稱す佐久間洞嶺の子、服部南郭に學ぶ後ち仙臺侯に仕ふて歿す(龜谷傳)

アヲ井 ハクガ
アヲ井 ハクガ 新居日薩は學僧なり字は文嘉、容月と號す上野桐生驛新居宗右衛門の六男なり年甫めて九歲武藏國秩父郡御堂村淨蓮寺日軌師の弟子となり嘉永元年加州金澤に遊び龜山日輝師に就く才學日に進み二十二歳にして其師に代り法華文句を講讀す龜山の從子に野口土政といへるものあり少うして文辭を嗜む師之れと交はり最とも善し安政三年二十七歳の時相俱に江戸に來り當時都下に名ありし藤森弘庵の塾に入り其の經說を聽き兼て詩文を學ぶ後駒込蓮久寺に住職たるや老蚌の母を迎へて介抱に至らざるなく旁ら俗家の子弟を化導するに其の名遠近に聞えて信徒漸く歸せり後暫くにして錫を池上に移し檀林を復興す一時讀書の聲鳴響の聲と相和し教法日に隆んたり此の時に方り世は王政復古となり政府教部省を設けて寺院を監督し八宗の才學を召して其宗理を案驗す皆其人なきに苦みしが日薩一宗に推されて其重任に當り一身全宗の事務を負擔して官吏に接し俗徒に應對し事を處する宜きを得一宗日薩に賴りて寧かりしといふ次で政府一宗の流

アヲ井 カムセツ
アヲ井 カムセツ 荒井寒雪は狩野派の畫人なり寒竹の男、畫法を父に學ぶ(扶桑畫人傳)
アヲ井 カムセツ 荒井寒竹は狩野派の畫家なり名は常實、字子敬、市郎と稱す佐久間洞嶺の子、服部南郭に學ぶ後ち仙臺侯に仕ふて歿す(龜谷傳)
アヲ井 シトミ 新井節は上野甘樂郡の俳人なり雲和は其の號、一に安樂居の號あり弘化中の人其の俳歌に曰く「供つれて面白みなきすみかな」(俳諧海内人名錄)
アヲ井 セムキヤウ 新井宣卿は江戸の儒者なり平藏と稱す白石の男、寛保元年七月二十四日歿す淺草報恩寺中高徳寺に葬る(江戸名家墓所一覽)
アヲ井 ゼムサイ 荒井全哉名は盛武佐太夫と稱す其の先は草名氏世々奥の荒井に家す子孫因て氏とす五世の祖名は盛次天正中質を貞山公に委し弓隊卒の長を以て始めて仙臺に臣たり其孫名は某次子を以て別に食邑を賜ふ是を全哉の曾大父と爲す全哉の父名は盛定母は新妻氏全哉弱冠より青山獅子の二公に仕へ公事に東都に從ふ凡そ三十一反其間歴る所の庶務皆其職に稱ふ享保中今侯雲松公主に尙せらる全哉を以てこ

アヲ井 ハクガ
アヲ井 ハクガ 新居日薩は學僧なり字は文嘉、容月と號す上野桐生驛新居宗右衛門の六男なり年甫めて九歲武藏國秩父郡御堂村淨蓮寺日軌師の弟子となり嘉永元年加州金澤に遊び龜山日輝師に就く才學日に進み二十二歳にして其師に代り法華文句を講讀す龜山の從子に野口土政といへるものあり少うして文辭を嗜む師之れと交はり最とも善し安政三年二十七歳の時相俱に江戸に來り當時都下に名ありし藤森弘庵の塾に入り其の經說を聽き兼て詩文を學ぶ後駒込蓮久寺に住職たるや老蚌の母を迎へて介抱に至らざるなく旁ら俗家の子弟を化導するに其の名遠近に聞えて信徒漸く歸せり後暫くにして錫を池上に移し檀林を復興す一時讀書の聲鳴響の聲と相和し教法日に隆んたり此の時に方り世は王政復古となり政府教部省を設けて寺院を監督し八宗の才學を召して其宗理を案驗す皆其人なきに苦みしが日薩一宗に推されて其重任に當り一身全宗の事務を負擔して官吏に接し俗徒に應對し事を處する宜きを得一宗日薩に賴りて寧かりしといふ次で政府一宗の流

アラ井 ハクセキ

美字は在中、初名は瑛、一の字は濟美、白石は其の號、又紫陽、錦屏山人、天齋堂、勿齋等の號あり江戸の人、其の先新田二郎削髮して僧と爲り上州荒居に居る因て新井を氏と爲す父正濟久留里侯に仕ふ明曆丁酉侯の邸火あり正濟從て侯の族内藤政親の柳原邸に寄居す而して白石を生む侯因て呼びて火兒と曰ふ白石生れて岐嶽類敏三歳の時能く大字を書す侯其の幼慧を愛し召して膝下に置く一日盛岡侯來り之を異として曰く吾嗣子なし請ふ養ひて子とせん侯曰く是侍臣の子吾か見に非ず盛岡侯曰く必す吾に賜へ吾其の長を待ち當に祿千石を與ふへしと侯固辭す七歳の比父母と戯劇を觀、歸りて之を語るに一も遺忘する所なし父歎異す十歳に及びて常に侯側に給事して侯の文翰を書するに殆ど老成の如しと云ふ侯卒して正濟致仕す嗣侯頼直無頼なり延寶四年臣某等廢立を謀りて之を正濟に問ふ正濟不可とす六年春事發はれ某等皆逐はる白石亦父の此の謀に與かるに坐して禁錮せらる白石傲不羈勝氣あり嘗て慨然歎して曰く大丈夫生きて封侯を得ずんば死して當さに閻羅王となるへしと既にして節を折りて書讀む江戸の富人河村瑞軒妻はすに孫女を以てせん且欲す且三千金の地を以て勤學の資とせんことを請ふ其の男をして之を説かしむ白石曰く余之を聞く昔し潭上に小蛇あり人其の腮を微傷す俄に大龍の此の邊に死するものあり此れ即ち觸きに傷くる所の小蛇にして其の癩一尺に餘れり子子の翁今予に妻はすに其の孫女を以てせん欲す是小蛇を傷ふなり後來余家を興すの日其の癩豈小ならんやと遂に從はず是に於て家滋、貧而して苦學懈らず能く經史百家の書に通す天和二年二月古河侯に仕ふ後木下順菴の門に遊ひ該博を以て稱せらる後故ありて堀田侯を辭す、去るの日唯々青錢三百米三斗あるのみ而れども江戸に隱居し貧に處ると晏如たり順菴君美を加賀侯に薦め

んと欲す適々加入岡島伸通威然白石に語るに國に老母あることを以て自ら代らんとを請ふ白石之を順菴に告ぐ順菴白石の信あるを嘆美し遂に其の言の如くす元祿六年德川家宣猶甲府藩邸に在り白石辟されて其の儒官となる時に年三十七待遇日に淫し進講畢る毎に必坐を賜ひて國家の遺事を説かしむ十四年命じて新に列侯譜を撰せしむ七月草を起して十月稿を脱す其の譜三百三十七家、慶長五年に始まりて延寶八年に終る凡八十餘年間の沿革備に之に載す乃命じて藩翰譜と曰ふ寶永元年家宣立て將軍の儲副となり將に西城に入らんとす君美聞部詮房に由て言ひて曰く凡天下の事臣嘗て進講せり今亦何をか言はん請ふ忘るゝなくんば幸甚と後ち家宣詮房に謂て曰く君美の一言予一日も敢て忘れず居ること幾もなく召されて侍講となること藩邸の時如し六年家宣繼て將軍と爲るや祿五百石を賜ひ文學を以て殿中に給事せしめ事大小となく必召して之に諫ふ正徳元年冬十月朝鮮の使來聘す白石從五位下に叙し筑後守に任せられ其の事を掌とる凡そ驛傳供給の制進見鑿賜の儀に關して建白する所多く施行せらる其略に曰く(一)鎌倉建府以て還外國政府の書を我が國に奉るや天子を稱して日本天皇と曰ひ幕府を稱して日本國王と曰ふ而れども寛永以來我が將軍を稱するに日本國王の號を以てす抑々大君とは附屬國を稱するの詞なり宜しく改て舊の如くすへし(二)韓使の我が國に來るや沿道饗遇の厚き朝使も及はざる所あり特に過くるの所處々の費計られす宜く之を廢して路費食料を給すべし(三)韓使客館に至らば宜しく與を下りて門に入るべし我が使客館に至らば宜しく之を階下に迎ふべし(四)韓使國書を上る時上々官之を奉す爾後正使をして之を奉せしむへし(五)韓使殿見の時坐位連支三家に同し宜しく改めて卑くすへし(六)韓使賜饗の時連支三家陪伴す是古禮に合はす我が使彼の國に至るも此の禮あらず宜しく之を廢すへしと又故事に韓使を饗するに猿樂を用ゆ是に至りて始めて雅樂を用ゆ韓使辭見の禮

アラ井 ハクセキ

畢り復書を得るに及んで難して曰く書中我が國七祖の諱を犯す願くは之を改めよ君美曰く臣子、君父の爲めに諱むは禮なり安ぞ隣國の君をして國諱を避けしむることあらん且つ五世にして諱まざるは禮なり何ぞ七世の祖を諱まん抑々臣子の情果して忍ひざる所ある乎貴國の書既に我國祖考の諱を犯す何ぞ先づ改め書して後之を請はざると使者屈服其の言の如くす然れども時人君美の故事を變更するを視、謗議喧然、君美骸骨を乞はんと欲す家宣聽さず十一月前後の功を以て祿を倍して千石を賜ふ君美病に寢する數十日家宣市正直をして病を問はしむ歸り報して曰く過慮牌を傷ひ元氣頗る衰ふ四花の灸、萬壯に及へども未だ効あらざと家宣正直を顧みて曰く嗚呼君美世を憂ふるの心實に深し豈に特にと萬壯の灸の能く治する所ならんやと三年家宣薨す執政儲君の喪服を議す祭酒林信篤曰く儲君年未七歳に滿たず服なくして可なり君美之を駁して曰く儲君襁褓の中に在り且も雖も立て大統を承く服なかる可らずと乃古義を引いて信篤と辨論す執政遂に君美の議に従ふ初め家宣我か邦久しく冠服を廢し上下章なきを恨み禮儀を制し俗風を改めんと欲して屢々君美と議す君美乃ち經邦典例を著して詳に制度沿革の事を記す君美又請ひて銅字活版を鑄造して以て經籍を天下に周布せんと欲す皆命を奉し行はずして家宣薨す後幾くもなく儲君亦不幸にして薨す而して君美漸く老て當世に意なし乃ち門を杜ち客を謝し日夜典籍を以て樂とす其の著述三百餘種、世に其の有用を稱す加賀侯嘗て君美著はす所の古史通を讀み歎して曰く本朝第一の良書、能く萬古の疑惑を決すと而して事を記する多く國字を用ゆ故を以て日用の簡牘と雖も皆以て傳ふるに足れり尤詩に長す其の豊腴馴雅直に盛唐諸名家と相ひ顔頤す是に由りて四方争ひ傳へて遠く海外に傳播す清の韓林鄭任鑰序する所の白石餘稿世に行はる享保十年五月十九日卒す年六十九、君美知を家宣に得て獻替する所少なからず特に其の著しきものは惡幣鑄造の議に

關する事なり初め家宣將軍拜受の禮を行はんとするや先づ本城の御座所を改築するを例とす時に勘定奉行萩原重秀府庫空乏なるを以て惡幣を鑄造し此の贏利を以て其の費に充てんとを議す君美之を駁して曰く前將軍綱吉惡幣を鑄造してより物價標準を失ひ人民四もに苦しむ而して今又更に之を惡くす恐くは不測の變あらん且速に前將軍の座所を毀つは父子の情忍ひざる所あり抑々大禮の行はるゝや前殿白書院等に於て改築を議するも敢て晚しとせざと家宣之に従ふ翌年重秀又純金新幣を造るの議を建て、曰く方今流通金貨の雜分を去り其の形を小にして慶長大小判の重さに半はすへし民明かに其の純金たるを知らば敢て行はざるなしと君美之を聞て思らく苟も改むる以上は其大小輕重亦た古に復するの勝るに如かず且將に之を改めんとするに當りては必ず奸計を其間に回らし竊かに其の品位を竊むことあるべしと遂に請ふて貨幣鑄造監察官を置く後果たして金銀の純分定法の如くならざるものあり君美重秀の姦を怒り抗疏して曰く彼姦惡無比今黜けずんば患必ず國家に及はんと重秀遂に職を奪はる正徳四年金銀諸幣を改めて慶長の純質に復するも君美の建議に出るなり但君美は金銀銅の外出を憂へ嘗て其の歲額を定め及び海舶互市の數を限らんとすることあるは所謂金屬貴重説にして經濟の誤見たるを免れず然りと雖も當時重秀敗政を以て甚用られ閑老と雖も其の好を知るなし若し君美にして無らしめは其の災當に此に止まらざるべし實に卓識の人と謂ふべし君美又兼て阿蘭の學を講す嘗て羅馬人及び和蘭貢使に就て見聞する所を集めて采覽異言西洋紀聞等の書を著はす之を我が國洋學を唱へ起すの權輿とす大槻玄澤嘗て六物新志を著して荷蘭學の概略を擧ぐれば藩翰譜、經邦禮典、古史通、采覽異言、西洋紀聞の外讀史餘論、殊號事畧、外國通信事畧、本朝寶貨通用事畧、



折焚柴記、蝦夷志、南島志、西洋圖説、殊方通信録、阿蘭陀風土記、和蘭紀事、朝鮮禮聘事、聘事文案、市舶議、改貨議、改貨後議、應接事議、本朝軍器考、列朝實録、琉球事考、蝦夷事考、東雅等なり男明卿家を繼ぐ(甘雨亭叢書、先哲叢談、近世叢語、君臣異傳、折焚柴記、采覽異言、白石遺草、近代名家著述目録、事實文篇、古今雅俗石亭菴談)
アラ井 ヒロム 新井熙は江戸の儒者也名は熙、静齋と號す字は君雖、崑垣松苗門の一人、江戸に出て儒を以て業とす(名家全書 鑒定便覽)
アラ井 マイケイ 新井明卿は江戸の儒者なり傳藏と稱す白石か二男享保八年五月十四日歿淺草報恩寺中高徳寺に葬る(江戸名家墓所一覽)
アラ井 マイモム 荒井鳴門は淡藩の儒官なり名は公廉字は廉平一の名は豹字は斑藏、半藏と稱し鳴門と號す南山、豹庵、蟻屈軒皆な其別號なり阿波の人徳島の儒員那波魯堂に從ひて業を受け程未を以て宗と爲す文政紀元の春江都に來り林述齋の門に入る姫路侯、淀侯並びに鳴門を聘す乃ち褐を淀侯に釋き文學教授と爲る後徳公待つに師禮を以てし春遇殊渥、命して侯家譜系及び歴代事實を撰はしむ前後秩を加へて二百三十石を賜ふ嘉永六年七月廿九日歿享年七十九、鳴門親模にして氣和、仕籍に登ると三十一一年四公に歴事し忠諫獻替一日の如し著す所中庸新疏、増注孟子外書、増注古今名諺、江湖詩鈔、芳野新詠、漢華四時雜興、學庸散注、孝經親注、師弟錄、漢城紀聞、吉野志、遷都前後金石遺文、豹庵隨筆あり(藝叢)
アラ井 ヤウセツ 荒井養雪は狩野家の畫家なり寒雪の男、畫法を父に學びて能くす(扶桑叢書)
アラ井 ヤウテツ 荒井養鉄は狩野派の畫人にして狩野常信の弟子なり(扶桑叢書)
アラ井 ヨ 新井瓊(アラ井ハクセキ)
アラヲ 荒雄は筑前國津屋郡志賀村の人なり和歌を善くするを以て名あり詠歌は萬葉集其の他諸書に散見す(萬葉集傳)

アラ井 ヒロム

アリフサ

者體歴
アリイヘ 有家「コセアリイヘ」
アリガ チヤウシウ 有賀長收は浪花の歌人なり長伯の孫、家風を守りて詠歌を修む浪花に住す門に入て學ぶ者多し初の名は長因と云ふ文政元年五月七日歿享年七十九(鑒定便覽)
アリガ チヤウハク 有賀長伯は有名の歌人なり以敬齋と號す京師の人、平間長雅の門に入りて學び苦學數年業大に進み終に一家を成す専ら名所を探り歌枕秋の寐覺を著はして世に益あり時に從ひ學ぶもの甚だ多し元文二年六月二日歿享年七十七其他著はす所、初學和歌式、和歌八重垣、同分類、歌林雜木抄、濱のまきこ、和歌二葉冊、同籠の座、世々のしをり、同退加、源氏掌故、長伯集あり(鑒定便覽諸家人物志)
アリカハ バイイム 有川梅隱は薩摩の藩士なり秀ら畫を善くす明人に法りて墨梅に巧みなり(畫乘要略)
アリキ ゼムゼム 有木元善は備前沼隈の醫なり名は吉元善は其の字、又通稱に用ふ山脇東洋に就て醫を學ぶ吐納眼言を著はす記する所發明多し(皇國名醫傳)
アリサカ カムサイ 有阪閑齋は狩野派の畫家なり畫法を狩野常信に學ぶ(扶桑叢書)
アリサダ シムウウ 有定親王は東山帝の第三子なり母は宮入藤原氏、元祿十年二月生る三宮と稱す十三年八月圓滿院に入り行惠入道親王の弟子となる寶永五年八月親王となる其の十二月院に入り剃髮して名を覺專と改め戒を實性院僧正に受く正徳三年十二月更に公辨入道親王の弟子となる四年正月居を滋賀院に徙す其の二月山東に行き輪王寺に入り名を公覺と改む四月二品に叙し五月五月寺務を繼ぐ享保二年二月一品に進み三年六月天台座主に補す七月牛車に乗りて宮中に入するを許さる(野史)
アリサハ エイテイ 有澤永貞は賀州藩の兵學家なり字は天淵、通稱は采女右衛門、其の亭を高臥と號す幼童より鈴箱

を讀み喜んで兵事を讀す是の時佐々木秀桑と云ふものあり山鹿義に從ひ學ぶこと三十年貞享丙寅の年四十八歳にして其の兵訣を究め甲陽軍鑑本末通解十八卷を著し北條氏長及び上杉謙信の兵理を祖述して名譽海内を傾け雄二鑑雄備武教等の書世に行はる天淵之を讀みて喜はず以て徒言と爲す是に於て自ら徑に高阪氏の家法に就て書數萬言を著す一切書するに國字を以てす藩臣其門に入らざる者なし元祿辛未家火災に罹り百物皆焼す唯、一井一梧を存在するのみ即ち苑宇を其傍に構ふ門人之れを梧井菴と呼ぶ終身兵を談し年七十七にして卒す(燕巖風抄)
アリシゲ 有重は畫人なり稱號詳ならず正安中の人、巨勢家の畫風を受く(扶桑叢書)
アリスガハノミヤ 有栖川宮「タカヒトシムヲウ」「タルヒトシムヲウ」「ユキヒトシムヲウ」「モトヒトシムヲウ」
アリダダ 有忠は巨勢氏の畫人なり修理亮に任せらる弘安年中の人(扶桑叢書)
アリノブ 有信「イウカムサイ」
アリハラ シゲハル 在原滋春は葉平の次子なり善く和歌を作る人稱して在次君と曰ふ大和物語を著はす(大日本史)
アリハラ ナリヒラ 在原業平は阿保親王の第五子なり天長中兄行平と共に姓在原を賜ふ世稱して在五中將と曰ふ體貌閑麗にして放縱拘はらず善く和歌を作る論者以謂へらく葉平の歌は意に餘りありて言盡さざる所あり之を調謝の花に譬ふ生色少しと雖も尙ほ餘蘊あり貞觀中右馬頭に任せられ教を奉じ鴻臚館に就て渤海使人を勞し右近衛中將と爲り元慶中兼相摸美濃權守を歴る卒する年五十三嘗て武藏に遊びて隅田川に至り水鳥を見て名を問ふ曰く都鳥と乃ち悽然として和歌を作て曰く「なにしちはい、いざことゝはむ、みやことゝり、わがおもふ人はありやしやと」世傳へて絶唱と爲す後人祠を加茂巖本に建つ寺に自筆の肖像あり三條四條公芳野道記に曾て此の像を觀る元

アラ井 ヒロム

アリフサ

慶四年五月廿八(大日本史)
アリハラ ムナハリ 在原棟梁は葉平の男なりこれをムナハラと讀むは誤なり棟と梁とは家を造る第一の具なるが故に名づけたる名なり築は魚を取る具にして棟には縁由なし此人古今集中の作者にして春の上に「春たてど花もにははぬ山里はものうかるぬに鶯のなく」(古今集打聽)
アリハラ モトカタ 在原元方は棟梁の子にて葉平の孫なり古今集の巻頭に撰ばれたる「年のうちに春は來にけりひととせをこそぞやいはむ今年とやはむ」の歌は此人の所詠にして最も人口に膾炙せり(古今集打聽)
アリハラ ユキヒラ 在原行平は阿保親王の第二子なり初め諸王たり天長中阿保上表して子男に姓を賜らんことを請ふ行平兄弟に姓を在原朝臣と賜ふ承和中藏人に補し從五位に叙せられて侍從となり右近衛少將に累遷す齊衡年中因幡守に除し天安元年兵部大輔と爲り尋で中務に轉じ左馬頭に任せらる貞觀中左兵衛督に遷り播磨信濃備前備中四國の守を歴て正四位に進み參議に任じ檢非違使別當左衛門督と爲り藏人頭に補せらる參議にして藏人頭に補せらる、は之を始めとす尋で從三位に叙せられ太宰權帥に任せらる是より先き筑前肥前等六國の穀を漕して對馬の年糧と爲す年中漂没する者十の六七行平奏して六國の運漕を停め其の民を發して壹岐の水田を營み以て對馬の年糧と爲さんと請ふ又肥前松浦郡の庶羅值嘉二郷を合して更に二郡を建て上近下近と號せんと乞ふ茲に之を部卿に遷る上表して辭す許さず仁和の初め陸奥出羽按察使を兼ね尋て表を上て辭す優詔して許さず再び表を上る詔して之を許す寛平五年薨享年七十六嘗て奏して變學院を左京三條に創す(續本朝書紀行平は丹波守あり(大日本史))
アリヒサ 有久「コセアリヒサ」
アリフサ 有房は畫人なり未だ其の姓氏を詳にせず有房

アリマ ゲムカム

繪所預と爲り前加賀權守を兼ね嘗て建長内裏を造るに方り有  
房沼に應し之れを書かんと欲す舊本なし偶々人あり鳴居殿の  
倉より金岡が書本を出だして之れを有房に傳へ以て其の役を  
勤めしむと(本朝書史)

**アリマ ゲムカム** 有馬元函は京師の醫にして有馬涼及  
四世の孫なり性酒を愛して放縱拘らざる嘗て病家に囑して曰く  
謝金願くは密に予に與へよ然らざれば刑妻取りて米鹽の費に  
充つ甚惜しむべしと然れども心を醫術に用ひ平時傷寒論を讀  
んで須臾も手に卷を釋かず卒に祖先數世の說を集めて傷寒論  
神解を著す其の書唯々太陽三篇を解す以爲らく傷寒の傳經は  
此の三篇に止る陽明以下は所謂の中寒なりと伊藤蘭調の薦に  
因りて紀藩に仕ふ(近世時人傳、皇國名醫傳、近世書誌)

**アリマ デンテツ** 有馬玄哲は素固と號す洛下の名醫に  
して法印に叙せらる其の子存庵涼及も亦其名を知らる寛文五  
年七月二十五日卒す(墓誌)

**アリマ サ** 有正「ヒセムアリマサ」

**アリマ タムヨリ** 有馬忠頼は久留米の城主なり豊氏の  
長子、本名は忠卿、小字を吉法師と稱す慶長十八年元服して  
諱字及び冠服を徳川二代將軍秀忠より賜はり從五位下に叙せ  
られ中務少輔と稱す後元和三年兵部大輔と改む寛永十四年  
島原の賊起るや忠頼父に代り赴きて賊を伐ち功あり尋て東府  
に往き更に中務少輔と改稱す二十年從四位下に叙せらる承應  
四年三月連職の途次備前の海上に於て卒す時に年五十三、一  
子あり頼利と曰ふ(野史)

**アリマ タムザム** 有馬丹山は京師の醫なり寛永中福井  
侯病ありて醫を京師に求む丹山招きに應じて至る侯已に危し  
諸臣之を憂ふ丹山診し畢りて藥籠を開き白末雪の如きものを  
取り沈思稍々久うして曰く之を殺さんのみと聞くもの愕然皆  
其の安を疑ふ一老臣曰く公病日に篤し衆醫手を收む然るに彼  
れ決然とを下たす是必見る所あらん如かず姑らく其の藥を進

めんにとは衆之に従ふ果して効あり丹山既に歸る途三國の娼  
家を過る美人あり之を悦び將に率ゐ去んとす樓主其の價を請  
ふ丹山曰く汝侯府に往て取り來れと或は言ふ丹山は有馬涼及  
の別號ならんと(皇國名醫傳、漫遊雜記)

**アリマ トヨウヂ** 有馬豊氏は久留米の城主なり則頼の  
長子、小字は萬助、天正中從五位下に叙せられ玄蕃頭と稱す庚  
子の秋父と與に徳川家康に從ひ諸將と與に西上し大垣の敵を  
濃州と赤坂に撃ちて之を破る十一月采邑を加賜せられ丹後福  
知山城に移り六萬石を食む(通史、八萬石)十九年休戦を賜はり東府  
を發して駿府に抵る會々大坂兵起ると聞き命を承て軍旅を整  
へ直に馳せて攝州吹田に到る天潢口に陣す次年役に従ひて敵  
首五十七級を斬る元和六年筑後に封ぜられ二十二萬石を食み  
久留米城に治たり寛永三年從四位下に叙せられ十一年侍從に  
任せらる島原の賊起るや命を承け赴き撃ちて之を平く十九年  
八月卒す時に年七十三なり法名を如夢道長と曰ひ春林院と號  
す三子あり忠頼、信賢、頼次と曰ふ

**アリマ ノリヨリ** 有馬則頼は赤松則村の裔孫なり兵部  
少輔と稱す姓は源氏祖父則景始て攝州有馬郡に住す依て氏と  
す父重則播州三木城に移り又轉して淡河城に移る則頼に至て  
豊臣秀吉に仕ふ慶長四年三月石田三成藩に家康の伏見の節を  
燒かんがす則頼晝夜侍して家康を護す其の後家康に京師又  
は關が原の役に從ひ功あり因て攝州有馬郡の内食祿を加へ  
都て二萬石を賜り三木城に住し七年七月卒す二子長は豊氏次  
は豊長三千石を領す子孫あり(近代諸士略傳)

**アリマ ハツギ** 有馬白岐は肥後の藩士なり詩に工みな  
り名は名成字は元章、白岐は其の號、熊本の人、少壯の時女  
あるを以て市井の中より擧げられ累遷して世子の近侍横目と  
なり晩年學校の訓導に任せらる未だ幾くならずして老す白岐  
人ど爲り朴實にして好んで詩を作る是に於て専ら詩詠を事と  
す其の敏捷比なし累年作る所の梅花詩四百首あり藩人推して

て子直純に四萬石を賜ふ

**アリマ ブゼムノカミ** 有馬豊前守は有馬流の劍法家  
なり家康に仕へ後紀侯頼宣に仕ふ子彦八郎父の業を襲て亦紀  
侯に仕ふ(本朝武職小傳)

**アリマ ヤマトノカミ** 有馬大和守は有馬流劍術の祖  
なり一名は乾信、飯篠長威の門人松本政信に從て天眞正傳神  
道流の刀槍を學ぶ後世此傳を稱して有馬流と謂ふ(武術流祖錄)

**アリマ ヨシズミ** 有馬義純は肥前の武族なり本名鎮純  
姓は藤原氏、伊豫藤純友の後胤なり純友の子諸純父と俱に謀  
反して死す諸純の子直純救に遇ひて遠江權守に任す直純六世  
の孫幸隆に二子あり兄を經澄といふ將軍實朝に仕へ城を有馬  
に築き初て有馬と稱す經澄九世の孫貴純大内義隆に屬し近境  
を抄略し威武稍々張る孫晴純に至て將軍義隆の相伴衆に列し  
六郡の主となり大友宗麟と戦ひて勝たず義直其の子義純皆相  
伴衆となり是時宗麟と連和し龍造寺隆信と戦ひ敗れて而又之  
と和し義純の女を隆信の子政家に妻す義純隆信の暴戻を憎み  
島津義久と通す隆信患て兵を遣して之を攻む義久之を援ひ其  
兵を卻く天正十二年三月隆信自ら將として島津家久と島原に  
戦ひて死す十五年夏秀吉西海を徇ふ義純行營に到り本領を賜  
ふ義純の弟晴信其の後を續ぐ

**アリマ リヤウキフ** 有馬涼及は京師の醫なり名は存庵  
涼及は其の號、又臥雲と號す性安達不羈にして醫術に精し嘗  
て某侯の招に應じ往て其の疾を療す留まると數日請ふて曰く  
老夫寂寞に堪へず請ふ侍女を借らん侯乃麗妹二人を擇びて其  
の使令に充つ涼及大に喜び夜に至れば左右に置きて其の間に  
臥す然れ共亂に及ばず歸るに臨んで請ふて二女を得既にして  
得る所の金を出たして衣裝を作り以て嫁せしむ嘗て水尾帝不  
豫なり日を累ねて益々劇し乃涼及を徵して診せしむ涼及曰く  
聖病極めて重し然れども臣能く之を癒さんと配劑日ならずし  
て癒ゆ功を以て擢られて尙藥となり法印に叙せらる一日召さ

アリマ リヤウキフ

アリマ ゲムカム

詩豪と爲す白岐初め侯に從ひて江戸に往き昌平黨の諸學士及  
ひ紀平洲、古屋昔陽等と詩を以て交り尤和韻を善く嘗て李  
紫溪の家在り酒酣なるととき戯に一句を吟して曰はく海内詩  
無敵、生涯酒是名と聞く者其の誕を笑ふ然れども其の敏捷に  
於て之に敵するもの寡し一日熊本火あり白岐の家火道に當る  
其の妻衣服什器を收む白岐詩稿一篋を出して曰く此吾が精神  
の寓する所先つ持去るへし其餘の諸物盡く祝融に付すと雖  
も敢て惜むに足らずと詳かならず没す年七十餘(近世書誌)

**アリマ ハルノブ** 有馬晴信は肥前の武族なり小字十郎  
兄義純の後を繼ぎ原日野口兩城に居り左衛門大夫又修理大夫  
と稱す慶長五年關原の役起る西國大名戰艦に乗て赤間關に到  
る大村喜前建議して悉く城邑に還る晴信亦城に歸り子直純を  
遣り兵二千を率ゐて吉川小西が水津城を攻しむ關原取るに  
及て守將自殺して士卒の死を宥されん事を乞ふ晴信乃ち其城  
を屠り直純を遣て捷を報す食邑を保有す慶長十四年十二月東  
照宮晴信に命して長崎港に至り異國船を燒かしむ是より先弘  
治三年南蠻商船周防に到る爾後一二來往絶えず是に於て長崎  
を定めて港となし互に交易す蠻人或は天主教を奉む其法を廣  
めんと欲して土民を誑惑し之を信仰する者は富貴意の如しと  
いふ故に稍く之に歸する者多し初我が商香水を交趾に求めん  
と欲し乘組五十人風浪に遇て亞媽港に漂着す群夷遮留めて終  
に之を殺す東照宮憐ばず是年來舶交易を乞ふ夷或は竊に告ぐ  
往に我が買人を殺す者此船中に在りと晴信具に東府に聞す故  
に之を燒くの命ありと晴信長崎奉行長谷川廣智に議して守備  
を嚴にす夷之を察し上陸せず風を發せんとす晴信輕騎を  
馳て之を追ふ夷銃を縱て拒み去る十二三里烈風遽に起り硫黃  
島に漂流す晴信火箭を縱て之を襲ふ銃火夷船の火薬に移り炎  
熾沸涌船乍ち碎破し夷人悉く死亡す晴信竊に天主教を修す子  
直純諫むれ共聽かず廣智に懇て強諫す猶聽かず慶長十七年三  
月晴信罪あり甲斐に配せられ國除す尋て死を賜ひ舊封を割き

アリマ リヤウキフ

アリマ クウツ

る時に涼及客と圍棋す使者數、促せども起たす因て不敬の罪を以て逐はる後幾はくもなくして救さる嘗て一日嵯峨に適く途に大櫻樹の花方に開くを賭敷金を以て購ひて家に移さしむ櫻樹庭に横たはりて植る能はず役夫相視て噴々たり涼及欣然として曰く姑く之を舍け臥して之を觀んと其の曠達なること此の如し傍ら茶事を好む元祿十四年十二月七日歿す年六十九涼及に三子ありて業を繼ぎ皆父の稱を襲ふ其の一人家貧にして衣なし然れども蕩達にして拘はらず人或は招けば乃裸躰にて盤輿に乗じて往く常に花街に遊び宴樂日を経て歸らず然れ共始終傷寒論を手にし毎紙爛るゝに至る又た名醫屋を醫と時を同するものあり相ひ共に名聲を争ふ涼及老いて聾なりを醫病みて覺なり互に聾聵を以て相ひ語る一日病者來りて診を乞ふ涼及曰く此の如き病狀は尤も覺の能くする所、汝ち試に往きて治を請へ汝の病は耳に在り彼視察此に及ばざれば其の術を得ざるなり吾乃ち之を治せん病者其の言に従ふを醫診し畢りて曰く病候耳に在り之れに藥を與ふ涼及聞て曰く意はざりき夫の覺此の如き技あらんとは(皇國名醫傳、近世醫語、近世時人傳、茶人系傳全集)

アリマロ 在滿(カダアリマロ)

アリマロ 在滿(カダアリマロ) 紀小足媛、皇子性靈、齋明帝の時非望を抱き帝を欺き奉て牟婁の温泉に幸せしめ其の處に乘して大臣蘇我赤兄と事を舉んとを諷す適々皇子の脚故なくして折る以て不祥とし互に盟ひて止む而して其の夜赤兄人を遣はして皇子の第を圍み馳使を牟婁に馳せて之を以て開し遂に太子を執へて行在に送る皇太子面り叛狀を問ふ皇子答へて曰く唯天と赤兄と知る我は知らずと遂に死を藤白坂に賜はる時に年十九(大日本史)

アリミチ シムウウ 有道親王は貞敬親王の子也享保二年六月生る文化五年二月光格帝に養はれ尊眞入道親王の弟子となる八年九月親王となる九年三月青蓮院に入りて剃髮し名

アヲエ ヤスツク

を尊實と改め戒を尊眞に受く文政十二年十月業を受けて灌頂す十一月二品に叙し十二月天台坐主に補す一身阿闍梨となる天保三年九月坐主を辭し尋て薨す年卅一蓮華壽院と號す(野史)

アリム子 有宗(コセアリム子)

アリム子 有宗(コセアリム子) 名は兼治一に兼清軍人の次子(水滸安島帶刀の子) 劍法を善くし麻布十番に場を開て子弟を教授す嘗て水戸に寓して烈公の爲に知遇せらる烈公并伊直弼を怒り金子孫次郎等直弼を刺さんとするに際り金子の勸誘に因りて同盟をなし萬延元年三月三日を以て直弼を櫻田門外に要し與中より曳出して其の首を斬る敵あり背より兼治の臂を撃つ兼治之を斬り拂ひ首を掲げ高吟して去る行くこと幾ならず重創歩し難きを以て日比谷門外に屠腹して死す(之れを知らずする(今日、日比谷、振氣篇(愛國偉績))

アリヤス 有康(コセアリヤス)

アリヤス 有康(コセアリヤス) 有行(コセアリヤス)

アリヨシ ナガアキラ 有吉良明は攘夷家字は子德熊次郎と稱す長州藩より弱冠にして吉田松陰に從ひ學ぶ其師の再

郷、宇田川玄眞等と共に蘭方を以て一家を興せり而して林宗尤も力を究理學に用ひ格物綜凡の著あり是を我が國究理學の始めと爲す文政五年命を奉じて立卿と與に天文臺に就きて馬場氏譯する所の遺厄日本紀事を紹きて其の業を終へ十年又命を以て萬國地志を譯し銀二十錠を賜はる後其地志六十五卷を草し巻帙浩翰なるを以て釐めて七卷と爲し名けて輿地志畧と稱す又格物綜凡中に就きて其の要を擇採し以て氣海觀瀾一書を著す後天保三年水戸侯に聘せられて醫員兼西學都講と爲り四年二月疾を以て歿す時に歳五十九なり林宗資性沈靜淵黙能く清苦に耐へ常に一室に獨坐して洋書を左右にし譯述を以て自ら娛みと爲す世の洋學を講ずる者概ね漢學の力なし林宗は然らず故に其の書皆秩然條理ありと云ふ林宗二男五女あり二男は共に溺死し二女坪井信道及川本幸民に嫁すと云ふ(方輿傳、林宗神隱)

アヲエ サダツグ 青江定次は備中の鍛工なり右衛門亮

と稱す守次の子後鳥羽天皇の二月の番鍛冶たり孫大隅權介亦貞次と稱す(萬寶全書)

アヲエ ツグイヘ 青江次家は備中の鍛工なり貞次の弟

にして權介と稱す後鳥羽天皇の八月の番鍛冶なり(萬寶全書)

アヲエ ツグツグ 青江恒次は備中青江の鍛工なり安次

の孫、守次の子、備中守と稱す後鳥羽天皇五月の番鍛冶たり孫に同名あり(萬寶全書)

アヲエ ノリタカ 青江則高は備中青江の鍛工也元備前

の人瀬尾刑部四郎と稱す元曆中の人歿する年六十餘(萬寶全書)

アヲエ マサツ子 青江正恒は則高の弟建永中の鍛工なり

常遠の門人歿する年五十、子正恒は建保中の人也(萬寶全書)

アヲエ ヤスツグ 青江安次は鳥羽天皇の時備中青江の

刀工にして當時の名匠なり志津嶽の戦に丹羽長秀の將長東正家柴田勝家の長子國丸を擄にし其佩刀青江を秀吉に獻ず秀吉これを長秀の子長重に賜ふ長さ二尺三寸餘頗る銘劍なり青江

アリマ クウツ

建つ其冬再び上京す明年甲子六月五日の變良明重圍を脱して速に國に歸り報す尋て又久坂等と脱走し天王山に到る七月十九日の戰鷹司公の邸に死す(防長正氣集)

アリヨリ シムウウ 有頼親王は職仁親王の子なり享保十五年十一月生れ十八年八月御門天皇の養子と爲り九月圓融房を繼ぎ元文五年十二月親王と爲る寛保五年五月房に入り髪を削りて名を敵仁と改め戒を尊眞入道親王に受け道仁入道親王に從ひて業を受け寛延元年七月灌頂す後享保三年七月二品に叙せられ明日薨す時に歳二十四なり證して後正法院と號す(野史)

アリウウ 有王は俊寛僧都の僕なり主の流されて硫黃島に在るや其の免されざるを憂ひ書を帶ひて請所を訪ふ俊寛故郷の音を聞て喜び且泣き遂に病て起たざるに至る有王看護の後其の死屍を火葬し骨を帶て京に歸り俊寛の女に告げて後高野の僧となる(源平盛衰記)

アリヲカ ダウズ井 有岡道瑞は京師の茶人なり茶道を久田宗也に學びて能くせり(茶人系傳全集)

アルガ 有賀(アリガ)に出したるもの多し)

アルガ シゲノブ 有賀重信は水戸の人なり文久元年重信及び岡見富次郎等十餘人と英人を東禪寺に襲ひ其の二人を傷つく衛吏之を禦く頗る死傷あり重信等二人之に死す餘皆な逃散すと云ふ(近事記登)

ア井 セイカム 阿井清閑は狩野派の畫人にして狩野安信の門人なり(共進畫人傳)

ア井ハラ ム子マサ 藍原宗正は伯耆流の劍法を善くす相原是平の門人なり(武術流祖傳)

アツイケ リムソウ 青池林宗は江戸の醫家なり松山侯の侍醫快庵の子、名は盈、字は子遠、芳辭と號す初家學を受け漢醫學を修め京坂の地に遊學す文化の初年東都に歸りて蘭學に志し乃譯官馬場佐十郎に天文臺に就きて之を學び杉田立

アヲエ ヤスツク

の劍工安次を以て始祖となす安次子あり守次といふ其技また父に劣らず(松府重器譜、古刀銘鑑、工藝志料)
アヲキ エイシヤウ 青木永章は肥前長崎諏訪社の宮司なり從五位上丹波守に任ず詠歌を善くするを以て時に稱せらる(皇代便覽)

らん吉隆驚愕す八月三日敦賀を發して鯖江に抵る而して旅を整へ將に府中城を攻めんとす一矩復た人を馳せて謂て曰く大聖寺既に陥り宗永父子首を授く來援如し遲緩せば我れ亦た保せずと吉隆乃ち兵三千を率ゐて馳せ到る利長已に師を班へす會々三成の遞夫來て曰く東師已に到る速に關原に會す可しと吉隆即ち兵を轉ず利長一矩の反覆を怒り兵を督して北莊に迫る會々關原の敗聞至る一矩大に懼れ降を乞ひ任子を送る利長乃ち其降を受けて南下す一矩尋で卒す利長爲めに哀免を家康に乞ふ聽かれず十月反覆に坐し邑除せらる(野史)
アヲキ カチイヘ 青木金家は肥後の金工なり重兵衛と稱し鐵仁と號す父の名は亦金家山城に住す兵衛に通ず天正中(皇代便覽)

豈亦痛ましからずや縦ひ種藝の地と雖ども凶年に遇へば民業色なき能はず意ふに百穀の外穀に當つべきものは蕃薯に如くは莫しと官に陳じ種子を薩摩に求め試に之を官の苑中に出せしむるに蕃薯甚速なり是に於て蕃薯考一卷を著はして其の培植の法を演ぶ之を上梓し種子を併せて諸州に配賦す未だ數年を出でざるに處として種ざるなきに至れり今に至り上下之を便とす歳登らざと雖も民の過かに餓へざるは實に昆陽の惠なり其の墓に題して甘薯先生之墓と曰ふも此の故を以てなり昆陽の時に當て和蘭の學未だ開けず昆陽獨り以爲らく其の説に於て必ず收用すべきものあらんと是に於て或は長崎に往きて譯者に質し或は博く其書に考へ遂に粗々了會するを得後世西學の隆盛なるは時勢の然らしむる所と雖ども亦一は昆陽に本かざるを得ず大槻玄澤の六物新志に曰く和蘭學之一途草創於白石新井先生、中興於昆陽青木先生、休明於蘭化前野先生、隆盛於鶴齋杉田先生、故近時從事於斯者、皆莫不淵源於四先生、と昆陽博學洽聞にして著書甚だ富む經濟纂要前集、同後集、同續集、官職略記、刑法國字譯、昆陽漫錄、同續錄、國家食貨畧、國家金銀錢譜、同續、答問小錄、奉使小錄、對客夜話、夜話小錄、一夕話、續一夕話、雜集、郡名考、和蘭勸酒歌解、和蘭櫻木一角説、長崎開書和蘭文字考、和蘭語譯、同後集、草廬雜談、續草廬雜談、秋夜談、職原抄注、和蘭貨幣考、雜集、明官略記、官職略記等あり(先哲叢談、近代名家著述目録、蘭學考)

アヲキ ジヤウウエモム 青木城右衛門は鉄人一刀流の劍客なり名は金家、宮本武藏の門人、鉄人と號す(一日、アヲキ シムシユク 青木神叔は神道家なり又俳諧を北村季吟の門に學ぶ元祿頃東都石町に住す嘗て句あり「我顔やしなくてほる井戸の中」(俳林小傳)
アヲキ シムベエ 青木新兵衛は岡内左内粟生美濃等と共に上杉氏の臣なりしが上杉氏の衰るや新兵衛を沒收せられ去て結城秀康に仕へ武勇を著はせり曾て伊達政宗秀康に語て曰く前年會津口の戦に於て最も非常の功名を爲したる者は新兵衛と永井善右衛門なり然ども新兵衛の功は却て其の上に在りて秀康愈々之を愛遇したりと云ふ
アヲキ ジヤウウム 青木常雲は江戸の金工なり刀劍の裝飾に名あり四郎左衛門と稱す後藤榮乘と同時の人なり(萬葉全書)
アヲキ シユクヤ 青木夙夜は畫家なり本姓は徐韓國章王の後ち名は俊明字は大初春塘又八岳と號す畫法を池大雅に學び特に山水に巧みなり大雅没する後其の舊跡たる東山の大雅堂に住す門を杜ぢ備書して口を糊す草樹除かず階庭掃はざるもの殆ど十年應舉吳春等と時を同らす(古今雅俗石亭記、扶桑語人傳、名家全書)
アヲキ シムシヨウ 青木春澄は俳人なり後ち貞悟と稱す松江維舟の門人、俳林小傳には重正徳五年没す(俳家奇人傳)
アヲキ ジヨス井 青木如水は茶人なり宗佐に茶道を學びて能くせり京師の人(茶人系傳全集)
アヲキ ソウホウ 青木宗鳳(初代)は遠州流の茶人なり山田大有に學びて能くせり浪花に住す薙髮して几島と名く紫雪庵水浦一統子と號す明和二年十二月没す年七十六(茶人系傳全集)
アヲキ ソウホウ 青木宗鳳(二代)は遠州流の茶人なり初代宗鳳の男にして父に茶法を受く初めの名は宗舒新柳軒と

アヲキ エイシヤウ

アヲキ ソウホウ

アヲキ ソウホウ

號す又は温故齋寛政五年七月没す年六十四(茶人系傳全集) アヲキ ソウホウ 青木宗鳳(三代)は遠州流の茶人なり

アヲキ タクブ 青木卓蕪は俳人なり越後魚沼郡の人、卓蕪は其の號一に鼎の號あり嘉八郎と稱す弘化中の人其の句に曰く「蚤のとかそへて居たりすまひとり」(俳諧海内人名錄)

アヲキ トウアム 青木東菴は儒者なり名證、字元證、一字元徴、又以行、拓岳と號す別號竹雨齋、姓餘氏平安の人、木下順庵に學ぶ京師の人(鑑定叢書)

アヲキ ナガヒロ 青木長廣は肥前國長崎の神官なり主計頭に任せらる周防守と齊しく神學を以て聞ゆ或時意外の事に座せられて閑居す後赦されて京師に出で、隱遁す櫻町帝其の名を聞き勅して召して神代卷を講せしめ旨に合ひ宸翰を賜ふ是に於て之を奉持して四方に周遊す富士山に登りし句に云く「ふしのねを登りて見れば敷たへの枕に結ぶ草だにもなし」(近世時人傳)

アヲキ ブンビ 青木分尾は俳人なり上州群馬郡の人、分尾は其號一に魚垣の號あり甚兵衛と稱す弘化中の人(俳諧海内人名錄)

アヲキ ホウキウ 青木鳳丘は俳歌を能くせり薩州鹿兒島の人鳳丘は其の號一に拍庵又喜雨散人の號あり靜左衛門と稱す弘化中の人(俳諧海内人名錄)

アヲキ ボクベイ 青木木米「ボクベイナウ」

アヲキ ロス井 青木鷲水は京師の俳人なり名は五省白梅園歌仙堂又三省軒と號す離屋立圃の門人、享保十八年三月没す年七十六著述俳借新式俳借八重垣その他戯書數種あり(俳林小傳)

アヲチ カライ 青地可頼は京師の俳人なり安原貞室か門人(俳林小傳)

アヲヤマ エムウ

アヲチ セイケム 青地齊賢は加州侯の臣なり通稱藏人字は伯汝讓水又兼山と號す本姓本多、實は佐渡氏五世の孫、人と爲り篤實にして決斷あり好みて經術を學ぶ室鳩巢常に伯父と稱し國士無双となす久しく劇職に在り簿書其の前に填委すれ共手に隨て判決すること流るゝか如し著す所兼山秘策あり(燕臺風雅)

アヲチ レイカム 青地禮幹は加州侯の臣なり藤大夫と稱す居る處仁智樓と名く字は貞叔、伯汝の弟なり好て書を讀み手に卷を釋かず初め羽黒先生の寓館に至り弟子の禮を修す先生歸國の後再び室鳩巢に從ひ窮理學を研究し粗其の蘊奥に通し又恒に見聞する所尙くも國家典故に裨益あれば巨細となく記して後來稽査の引徴となす著す處淡新文集三卷なり(燕臺風雅)

アヲト フヂツナ 青砥藤綱は上總人、父を藤滿と曰ふ初め北條時頼鶴岡に詣りて齋宿す夢に神之告げて曰く汝治を致さんと欲せば須らく青砥藤綱を用ふべしと既にして覺む明日書を下して藤綱を徵し食邑數所を給す藤綱怪みて其の故を問ふ即ち告ぐるに實を以てす藤綱辭して曰く佛經に實相なきを譬へて曰く夢幻泡影の如しと今ま夢を以て僕を用ふ他日又た夢を以て僕を斬らんか夫れ功なくして實を受く是を國賊と謂ふ臣未だ微効もあらず敢て當らざる時頼其の言を賢なりと益々敬異し奏して左衛門尉を授け引付衆と爲す人徳宗と田を争ふ者あり其の辭直而れ其衆咸な時頼を憚り田を以て徳宗の領に屬す時北條氏の家督を稱して徳宗と曰ふ藤綱其の事を嚴議し其田を以て本主に歸す本主喜びて錢三百貫を裏にし密に藤綱の庭内に置きて去る藤綱怒りて曰く訟を斷じて平を持す豈に特に汝が爲めにせんや苟も我を以て公平とせんか相摸殿宜しく賞せらるべし汝の貨焉ぞ我を汚すを得んやと金を以て其の家に還す嘗て夜行て滑川を過ぎ誤りて十錢を水に墜す藤綱遽に從者に命じて五十錢を以て炬を買ひ水を

アヲキ ソウホウ

照らし錢を搜りて竟に之を得或ひと其の大を失して小を得るを嘲る藤綱驚して曰く甚だしいかな子等の意を經て用ひざる十錢少なりと雖も之を失へば則ち永く天下の貨を損せん五十錢は我れに損なりと雖も亦人に益す彼此六十錢其の利たる亦大ならずやと此論後世議者多し藤綱時頼及び時宗に歷仕して邑數十所を食む家財に富み而して立身清約衣服簡陋刀室糝せざ出る毎に一人木刀を持して後に從ふ官を授くるに及びて應に衛府太刀を佩ふべきに藤綱裝飾を爲さず只だ袴袋を加ふるのみ性施を好み入る所の俸給は悉く貧困に賑給す其の職に在る廉潔剛直にして權貴を憚らざる是に於て姦吏迹を斂め人々自ら節しむ一時風俗翕然として頓に改まる今に至りて鎌倉に美績を談ずる者咸な時頼時宗を稱す蓋し藤綱補益する所多しと云ふ(大日本史)

アヲノ シュウケム 青野叔元は京師の人なり字は欽之、源藏と稱し後源左衛門と改む幼にして學に志し凡そ書として讀まざるなし最も史學を勤む而して詞章を爲すを喜ばす誇示する所の人あれば之を迂なりと謂つて顧みざる也冠する比博聞強識の名都下に播く方に水戸西山公の國史を編するや聞て之を召す仕ふること二十年寶永三年丙戌十二月十日病むて江戸府に終ふ歳五十有四女あり甫めて三歳没するに臨み之を安藤爲實に託す爲實は乃ち同仕にして素と相好き者因て叔元を府下慈照院に葬る而して遺言し又同僚三宅某に囑して其碑に銘せしむ吁二十一世之史浩なり一涉獵を得るは世の學士の難しとする所而して叔元之學始めて凍水の編を取り讀むと十有八遍君臣の事迹と治亂の要と優經該熟而して進むて正史に及ひ斑馬より金元に至る讀こと各再遍人物制度天文地理財賦有司の事又皆審らかに檢尋を加へ上下綜して巨細舉り其をして累然貫珠の掌に在るが如くならしめ遂に一史毎に參ゆるに各代の稗官を以てし旁ら達根推て以て同異を較し一に是正に歸し而して後已む或は叩問に値へば輒ち成文を舉げ以て答

アヲヤマ エムウ

ふ是くの如くなる者之を史の専門と謂ふも可也嘗て書を著し諸史を駁す積草管に盈つ多病を以て廢す人咸な之を惜しむ(碑文)

アヲヤギ タキノブ 青柳種信は筑前の藩士なり通稱勝次本居大平の門に遊び古學を唱へて世に稱せらる又詠歌を善せり(鑑定叢書)

アヲヤギ ブンザウ 青柳文藏は仙臺東山の儒醫なり字は茂明東里と號す父を三達といふ書籍二萬卷を藏す皆讀まざるはなし藩侯に乞て地數畝を得書庫を作り青柳文庫と名つけ之を醫學館に屬す松崎樓堂青柳館の碑文を撰し堀田侯正衡篆額を書す戊辰維新の亂後書庫碑石と共に廢れ書籍も從て散逸す(仙臺史傳)

アヲヤギ ミツナリ 青柳光成は裝劔彫工なり初の名は貞光、江戸數寄屋川岸に住す稻田氏の弟なり(裝劔奇賞)

アヲヤマ エムウ

アヲヤマ エムウ 青山延子は水戸藩の文學者なり字は子世通稱は量介、雲龍又拙齋と號す世々水戸藩に仕ふ祖は與道父は延壽皆な小官に終る延子幼にして機警稍、長じて業を立原萬に受け力を文章に専らにして手ら柳文を寫し文才大に進む鎔裁卓絶時の爲めに稱せらる年二十餘にして江戸に來り先輩紀平洲山本北山等と交りを結ぶ時に水戸藩文學隆興し高橋垣宜藤田幽谷川口綠野皆な聲譽を擅ま、にす延子之と雖を並べて馳せ駑々乎として先を争ふ而して文辭に至りては則ち皆な延子を推して壇長と爲す文公みづから大日本史を按し諸生に課し史表を脩せしむ延子神祇志六卷を撰し以て獻す文公聽するに及んで武公遺志を繼ぎ史臣に督課す延子又た禮義興服二志を撰し以て獻す袁公封を襲ぐに及んで延子建言して水戸藩史を修せんことを請ふ公之に従ひ命じて新に史局を開き以て藩史を修せしむ延子日夜之に拮据す一卷を進むる毎日に公善しと稱す何ばくもなく稿粗、就る總べて三十六卷命じて東藩文獻志と曰ふ大抵延子の修むる所に係る而して剛潤未だ

アヲヤマ エムクハツ

成らざるに公覺延于職を罷め史局亦た廢せらるる識者之を惜む世子立つ是を烈公と爲す公の弘道館を起すや延于を擢んで小姓頭と爲し總裁を兼ねしむ延于學館に登り致々として懈らざりて中風を患ひ瘳へて天保十四年九月六日没す年六十八延于人と爲り剛直にして諛を惡む故に流俗の爲めに容れられず而して武烈兩公尤も之を優遇す延于其の知遇を感じ言を盡くして隱すことなし左右或は竊笑し以て迂と爲す而して延于願みずと云ふ(近世先哲叢談)

伯卿通稱は量太郎青山延于の長子城西田見小路の宅に生る幼にして喜んで書を讀む未だ曾て幼童の戯をなさず又天性強記にして一たび目を過るときは終身忘れず尤詩文に長し力を史學に盡す其の志父祖の業を繼ぐに在り嘗て繼述傳を著はして古來能く父祖の業を繼ぐ者十數人の傳を作る又赤穂四十七士復仇の事を仰慕して荷くも其の事跡にかゝる者は悉く之を蒐録して後四十七士傳を作る時年僅に十八水戸侯深く其才を愛し彰考館の編修に補す後進んで編修總裁となり其修正潤色する所甚多し弘道館の立つに及んで烈公先生を擢んで教授となし役料百石を賜ふ父は教授提舉たり子は教授となり者前後のなき所なり父没して教授頭取となり會澤恒藏と共に文武教授の事を提督す時に藤田東湖學校奉行となる三人相並んで一藩の教化を贊翼す烈公の爲に重せられ大事は常に諮詢を受く後又進んで側用人となり馬廻頭の上に班す又久中藩に黨起り長岡驛に屯す若年寄渡邊超と共に命を受けて之を討す巖に執政某命を受けて往て諭す却て騒擾を醸して歸る延光の往くに及んで黨人退き去る慶應四年黨人亂を作し弘道館に據る諸將出て戦ふ延光槍を把て進む黨人の銃彈延光の袖下を過ぎ後者を仆す延光神色自若たり人其勇に服す大日本史の成るや烈公之が跋を書す延光をして稿を起さしむ稿成る豊田天功評して曰く立論著筆其史の才なりと明治二年朝廷徴して大學中博士

アヲヤマ タマヨシ

となし從六位に叙す同三年九月病没す年六十四朝廷其能く家學を受けて國史に力を用ふるとを稱す延光もと佩弦齋と號す又晩翠と號す晩に春夢居士と號す史學文章に至ては尤其所長にして著述編纂の書甚多し其既に書を成す者左の如し國史紀事本末七十三卷、同論贊一卷、南狩野史三、佩弦齋外集一、征韓雜志一、野史纂要五、三藩事畧年表一、四十七士傳一、雪夜清話一、義人遺事一、刀劍錄二、騎史新編(未刊)一、酒史新編一、櫻史新編一、名花省覽一、學校興廢考(未刊)一、佩弦漫錄(未刊)一、文集(未刊)九卷、長子勇少年より烈公の近侍となり小性頭取に進む維新の後内閣の屬官たりしが後病を以て退居せり(青山延光傳、内藤兼史通報)

アヲヤマ オキミチ 青山興道字は子誠清内と稱し西塙と號し又一略と號す元文四年水府に仕ふ青山氏の先其出を詳らかにせず五世の祖六郎延久より佐竹義篤に事へて常州水來の城主と爲る佐竹氏封を秋田に移すに及び曾祖名は延字常州議原色に退隱す祖名は延友父名は道親並ひに仕へず興道少より學を好み教授して以て自から給す篤實謹厚を以て郷里の稱する所と爲る土豪野口某家富み族盛に氣熾一邑に燻灼たり興道士族を以て其下に居るを耻ち遂に去て水府に客たり時に醫官某其文行を愛し以て嗣と爲さむと欲す興道背かず乃ち郭外に僑居し教授して以て口を嗣す田代倍政と稱す一遊文恭(舜水の謚)の祠堂を管す興道因て弟子と爲る時に倍政年老ゆ興道代りて其事を攝す倍政死するに及び官興道を以て職に補す幾何くもなくして總裁の薦めを用て史館に入る初め總裁興道の詩稿を讀みて其才學を觀むと欲す興道即ち詩百首を爲り以て之を示す總裁歎稱し遂に之を推戴すと云ふ興道酒を好み客を愛し毎に客の至るあれば必ず酒肴を備へ歡を極めて止む家素と貧し瓶米屢々空しきも晏如たり寶曆丙子九月五日を以て病みて没す年五十五(安雅遺談)

アヲヤマ エムクハツ

狩野常信の門人なり(共榮傳人傳)  
アヲヤマ オキミチ 青山興道字は子誠清内と稱し西塙と號し又一略と號す元文四年水府に仕ふ青山氏の先其出を詳らかにせず五世の祖六郎延久より佐竹義篤に事へて常州水來の城主と爲る佐竹氏封を秋田に移すに及び曾祖名は延字常州議原色に退隱す祖名は延友父名は道親並ひに仕へず興道少より學を好み教授して以て自から給す篤實謹厚を以て郷里の稱する所と爲る土豪野口某家富み族盛に氣熾一邑に燻灼たり興道士族を以て其下に居るを耻ち遂に去て水府に客たり時に醫官某其文行を愛し以て嗣と爲さむと欲す興道背かず乃ち郭外に僑居し教授して以て口を嗣す田代倍政と稱す一遊文恭(舜水の謚)の祠堂を管す興道因て弟子と爲る時に倍政年老ゆ興道代りて其事を攝す倍政死するに及び官興道を以て職に補す幾何くもなくして總裁の薦めを用て史館に入る初め總裁興道の詩稿を讀みて其才學を觀むと欲す興道即ち詩百首を爲り以て之を示す總裁歎稱し遂に之を推戴すと云ふ興道酒を好み客を愛し毎に客の至るあれば必ず酒肴を備へ歡を極めて止む家素と貧し瓶米屢々空しきも晏如たり寶曆丙子九月五日を以て病みて没す年五十五(安雅遺談)

アヲヤマ タマヨシ

伯耆の言ふ所は至理なり雅樂如し之を聞かば奈何すべき唯伯耆の言納るべし是故に家光能く諫を納る初弱少にして遊師を好み美麗を樂む雙鏡を設けて髪を梳る忠俊も無賴の裝を好むは是れ亂の端なりと忠俊頗る機察あり放言避けず故に卒に緝獲ならず忠俊幽居す後數々命して之を徵す從はずして歿す後慶安元年閏正月子宗俊を召て小諸城を賜ひ邑三萬石を食む是日家光宗俊を床下に召して曰汝の先考能く輔翼の道を竭す孤年若く慮淺く方今其の冤を悔慚し中心孔た疼む故に爲に其魂を吊ひ今汝を以て小諸に封す汝亦父の心を攬り以て元子に仕ふべしと言未だ畢らざるに垂涕衣を濕す(名賢言行錄)  
アヲヤマ オキミチ 青山興道字は子誠清内と稱し西塙と號し又一略と號す元文四年水府に仕ふ青山氏の先其出を詳らかにせず五世の祖六郎延久より佐竹義篤に事へて常州水來の城主と爲る佐竹氏封を秋田に移すに及び曾祖名は延字常州議原色に退隱す祖名は延友父名は道親並ひに仕へず興道少より學を好み教授して以て自から給す篤實謹厚を以て郷里の稱する所と爲る土豪野口某家富み族盛に氣熾一邑に燻灼たり興道士族を以て其下に居るを耻ち遂に去て水府に客たり時に醫官某其文行を愛し以て嗣と爲さむと欲す興道背かず乃ち郭外に僑居し教授して以て口を嗣す田代倍政と稱す一遊文恭(舜水の謚)の祠堂を管す興道因て弟子と爲る時に倍政年老ゆ興道代りて其事を攝す倍政死するに及び官興道を以て職に補す幾何くもなくして總裁の薦めを用て史館に入る初め總裁興道の詩稿を讀みて其才學を觀むと欲す興道即ち詩百首を爲り以て之を示す總裁歎稱し遂に之を推戴すと云ふ興道酒を好み客を愛し毎に客の至るあれば必ず酒肴を備へ歡を極めて止む家素と貧し瓶米屢々空しきも晏如たり寶曆丙子九月五日を以て病みて没す年五十五(安雅遺談)

に寄宿舎を建設し以て子弟寓學の便に供し又舊藩士民の日を逐ふて困弊するを見るや數千金を投じて懷舊會なるものを設け自ら會頭の職に當りて舊封内の士民を救濟し其他獻金義捐金等を爲す事極めて多く明治十九年海防費三萬圓を獻納し銀製黃綬章を下賜せられたりしが其衰狀の下る日は方きに病暮にありて困頓煩悶之際之を拜して怡色面に現はれり云ふ

國血井村にて五百石を賜はる九年事に坐せられて免せらる十年又從五位下に叙し雅樂頭に任ず後大藏大輔に改む十七年下總國高崎村にて千石を加賜す十八年二月父忠成卒す所領一萬六千石を兄弟に分賜す幸成千五百石を受く大坂冬の兩役共に軍に従ふ伊非直孝の旗下に屬す元和五年一萬石を加へられ始て評定席に列す九年遠州にて天方村三千石を加賜す寛永十年二月遠州懸川城を賜ひ二萬六千石を領す十一年又七千石を加賜せらる十二年八月懸川を改め攝津尼崎城を賜ひ五萬石を領す十七年七月讃岐國主生駒氏罪ありて遠流せらる幸成井上筑後守と讃州に往て處置す寛永二十年二月十六日卒す四子あり長は幸利次は遠通從五位下に叙し丹後守に任す次は幸正從五位下に叙し信濃守に任す次は幸高藤藏と號す共に子孫あり(近世諸士略傳)

イ之部

イウ 遊の方「アムシヤウ井ム」

イウアム 遊安は江戸浄土宗靈山寺の沙門なり字は廓榮上野小島新田氏の兒也母は砥氏見なきを憂ひ妙見菩薩に祈る勝應に感じて生る年十五春岳和尙に投じ剃染す天資穎特聰明強記一回善く五十頁を暗記す幾ばくならずして南京にゆき俱舍唯識を研究す平安に遊ぶ華嚴法を鍛練す又宇津宮氏に謁し鄒魯の學を究め遂に法を智哲上人に嗣ぎ貞享三年靈山寺に住

し大に講筵を開く學人蟻集す元祿八年正月十日念佛坐化す享壽八十著はす所生要集指塵鈔あり(續東國高僧傳)

にして源顯家大兵を率て近江に至る帝祐覺に救して船七百艘を發して之を迎へしむ尋て僧徒及び諸將を分ちて足利尊氏を京師に討つ既にして尊氏歿を納る、帝還るに及びて祐覺駕に屬して京師に入る足利尊氏其の山徒の首謀たるを惡みて之を斬る(大日本史)

アヲヤマ トクラウ

イウキ

る所と爲る一日父我が屈すること聞き大に怒て曰く生きて  
屈辱を受けるは過く死するに如かずと刃を持して逐はる我れ避  
けて之を脱る此れより勤學して懈らず晝勵夕惕寸楨嶺より歸  
るに及びて則ち昔の吾を屈する所のもの皆來て誨を承く一も  
抗衡するなし豈に誓古の力にあらざや旃れを勉めよ旃を勉め  
よと宜修驗多し初め金剛定寺にあり一昔燈下書を寫す忽に一  
女子あり爲に燈炷を正す宜問ふ誰ぞ曰く妾先きに水を涉り失  
脚して溺死す父母知ることなし妾歸する所なし願くは救濟を  
賜へ宜曰請ふ所若し實ならば明夜復た來れ女諾して去る明夜  
果して來る宜爲に髪を削り戒を授く女禮謝して曰幸に慈化を  
蒙る必當に解脫を得べし鴻恩を報せんと欲して恨らくは寸  
珍なし此の衣浣たりと雖ども幸に慈化を賜へ即ち衣を脱して  
之を奉ず須臾にして之く所を失ふ直ちに其の衣を視るに甚だ  
濡へり詰且僕夫に命して市に出して之を曝さしむ其の女の父  
視て恠みて其の故を問ふ僕備さに言ふ父母哭泣して戸を覓む  
果して之を灘頭に得たり宜の常人にあらざるを信するなり後  
昔川に在り夏大旱す志摩守隆唐所寄を請ふ宜之を許諾す院側  
に小池あり宜佛舍利一粒を以て竹葉に載せ水に泛べ詈れ持す  
少選ありて筑波山頂に片雲出るあるを見る形牛尾の如し衆  
人目を屬す忽ち飛び來りて池上に懸懸す驟雨盆を傾く士民大  
に喜ぶ宜集する所鈔記一十八種世に行はる其手寫卷帙將に棟  
に充ち牛に汗す慶長十七年壬子冬十一月從容諸子を誦勵し囑  
するに後事を以てす十一日早晨浴室に入り自ら淨髮し訖りて  
浴槽中に於て跣踏して化す報壽七十七僧臘六十二顔色怡然生  
平に異らざ三日の後泉涌寺に葬る祐宜心を繪事に用ひ暇あれ  
ば常に筆を揮ふ墨畫を善くす雪舟の筆法を學びて其の真趣を  
得(扶桑傳人傳、續東國高僧傳)

イウキアム 有寄庵「インシムザウ」  
イウキダウ 有紀堂「トシマサイヒ」  
イウギモム井ム 遊義門院「レイシ」  
イウクワイ 宥快は高僧なり京師の人、羽林次將藤原實  
光の子、天資聰敏幼にして金剛峯に登り寶性院信弘の室に入  
りて三密の瑜伽を習ひ兩部の秘教を受け心を義學に潜めて議  
論の場嘗て敢て取らざるなり經論章疏に涉獵し顯密の蘊奥に該通  
す是に於て聲光朝野に輒く應安七年信弘の命を承けて寶性院  
の造營を董す時に年三十大法幢を建つ四方の學士蟻聚す毎に  
龍樹の論無畏の疏は弘法の大師の義章に就き其の文理紛糾義  
路室塞する處を開析して斐然章を成すもの凡そ五百餘條是に  
於て其の幽旨與意判然として明かなり義學の法此に由りて興  
る永和三年與雅僧正に安祥寺に謁して入唐惠運僧都が一流の  
淵源を咨叩す僧正其の器宇を喜び心を傾けて付與す後光嚴帝  
其の識行博峻なるを敬し毎に寵遇優渥なり至德中詔して宮中  
に入りて秘法を修せしめ特に御製の和歌一首を賜ふ快即ち製  
に應じて和す時人傳へて以て榮とす悉雲章は前來能く之を習  
ふもの罕なり快筆を操て其の鈔を述ぶ然れ共未だ意に愜はざ  
る所あり一夕此山の神丹生津姫女人と化し來りて一々之を指  
授す應永二十三年七月十七日手に契印を結び神呪を誦し定の  
如くにして化す年七十二平生の述作數百卷あり盛んに世に行  
はる(東國高僧傳)

イウクワウサイ 幽篁齋「ユスゲマタサアラウ」  
イウクワウサイ 幽篁齋「サワキスウシ」  
イウケイ 有景「ミヤワキイウケイ」を見よ  
イウケム 由賢「トウバウソザム」  
イウケム 友元「ヒトミイウケム」  
イウケム 友元「メカタアキノア」  
イウケム 幽軒「ヒトミイウケム」  
イウケム 祐嚴は准三后一條關白左大臣成思寺經嗣の子

にして東寺長者、法務たり(三寶院門傳)  
イウコ 祐觚「ナバクワツシヨ」  
イウコウ 祐公は僧僧なり善秀軒と號す攝津極樂院に住  
す禪餘醫治を事とす(皇國名醫傳)  
イウコク 幽谷「フヂタイウコク」  
イウサ 祐佐は狩野派の畫人なり或は云ふ一説に曰ふ休白  
の弟子なりと(扶桑傳人傳)  
イウサ 有佐「トミチカウサ」  
イウサイ 幽齋「ホンカハフヂタカ」  
イウサイ 友齋「テラザハイウサイ」  
イウサイ 悠哉「イトウイウサイ」  
イウザム 右山「ボクイム」  
イウザム 悠山「イマオホヂイウザム」  
イウザム 幽讚「カムタリカウウム」  
イウザム 友山「オクヌキイウザム」  
イウザム 幽山「タクノウチイウザム」  
イウザム 友山「ダイダウヂシグスク」  
イウジ 西爾「カツカハハルアキ」  
イウシウ 有終「サイトウセツダウ」  
イウシウ 祐周は畫僧なり雪村の筆意を學びて墨山水を  
能くす(本朝畫史、扶桑傳人傳)  
イウシキ 友識「コイケイウシキ」  
イウシム 有辛「ウバヤギイウシム」  
イウシムアム 有儘庵「サイトウダウセツ」  
イウシヤウ 祐昌は江州義仲寺の住職なり旁ら俳諧を善  
くす文化四年二月歿す(俳歌奇人傳)  
イウシヤウ井ム 有章院「トシガハイヘツク」

イウシヨウ 友松「カイホクイウシヨウ」  
イウシヨウ 侑松「セツガムイウシヨウ」  
イウシヨウ 祐乘「ゴトウイウシヨウ」  
イウシヨウアム 幽松菴「セイラ」  
イウシヨウシ 友松子「マナホセイケイ」  
イウジヨウバウ キクウ 祐乘坊義空は醫者なり義存の  
子、北條仲時に從ひて京師に往き初め佛を學ぶ後ち醫を爲す  
終に醫を以て顯はる貞治三年徵れて御脈を診す故を以て民部  
卿三位法印に叙せらる將軍足利義詮最も親信し毎に之に治療  
を屬せり(皇國名醫傳)  
イウジヨウバウ ギソン 祐乘坊義存は鎌倉將軍惟康  
親王の子なり親王職を罷めて京師に歸る後ち義存鎌倉に生る  
其の母之を育すれ共貧甚だしきを以て僧疎石見て之を憐れみ  
收めて徒弟と爲す名づけて祐乘坊と曰ふ後ち賣藥を業とす世  
に傳ふる所の磨積丸是なり子孫遂に祐乘坊を以て稱とす(皇  
國名醫傳)  
イウジヨウバウ ズイケイ 祐乘坊瑞景は醫者なり義  
宣の子、丹波氏に從ひて學ぶ治術衆に超ゆ典藥に任せらる時  
に丹波の家適々嗣絶えて元日屠蘇の調進闕くるあり應安五年  
幕府瑞景をして代りて獻せしむ後ち以て例と爲す(皇國名醫傳)  
イウジヨウバウ ソウシウ 祐乘坊宗琇は醫者なり瑞  
景の子、號披壽院を賜はりて治部卿に叙せらる子は宗安披壽  
院の稱を襲ふ子瑞兆亦た三位法印に叙せらる宗安又た上池院  
紹胤の子瑞頌を養ひ子と爲す後ち紹頌と改む子瑞昌を生む琇  
存より瑞昌に至るまで五世典藥頭に任ぜらる其子瑞久法眼に  
叙せらる子瑞翁宗安の稱を襲ぐ其著はす所胃氣辨、緊要方、  
灸治口訣、肥肉傳あり(皇國名醫傳)

イウジヨ ホツシムワウ 祐助法親王は後二條院の皇

イウキアム

イウシヨウ ホツシムワウ



イウセイ

子母は權中納言公泰卿の女也桂林院と號す曆應四年十一月十八日座主に任ず

- イウセイ 祐清「カノテルノブ」
- イウセイ 祐清「カノクニノブ」
- イウセイ 由誓「トシマイウセイ」
- イウセイ 友清「カノミチノブ」
- イウセイ 祐勢「カノマサノブ」
- イウセイ 遊清「ホムマイウセイ」
- イウセイ 祐清「カノムチノブ」
- イウセウ 幽嘯は越後の俳人なり文化中の人(大家人名録)
- イウセキ 友石「ヤマモトイウセキ」
- イウセキ 友石「エムラカウサイ」
- イウセツ 有節は伊勢桑名の骨董戸なり陶法を巧にし樂燒等古人の器を模造す嘗て萬古の印を擬せむことを希ひ萬古燒の祖沼浪五左衛門の孫五郎兵衛に乞ひしに五郎兵衛これを承諾すこれより後皆萬古の印を擬し盛に器物を製出す其製作舊萬古と異にして手頭捏造の急須を專にし釉を施し、ものあり施さざるものあり能く人の愛顧をひく故に其地の工人もまたこれに倣ひ多くこれを製出して後竊數二十餘處に及ぶといふ(工藝志料)
- イウセツ 友雪「カイホクイウセツ」
- イウセツ 祐雪「カノムチノブ」
- イウセム 友泉「カイホクイウセム」
- イウセム 幽仙「ウヘノイウセム」
- イウセム 融川「カノイウセム」
- イウセム 友川「カノイウセム」

イウエム

イウゼム 友禪は有名の染工なり姓は宮崎氏京師の人後ち加州金澤に移る専ら職業を研究して遂に一家の風を興す所謂の友禪染是なり又書に工みなり絹本に染物繪を寫して其精密巧妙なると他人の及ぶ所に非ず祇園の梶女が歌集「梶の葉集」に其筆跡あり元祿年中の人或ひは云ふ友禪は染工にあらざして畫僧なり専ら扇面に花草等を畫きて世の求めに應ず婦女喜びて其扇を用ふ故に染工其畫を請ひて以て摸範となし一種の染法を發明せり是れ友禪染の名ある所以なりと兩説未だ孰れか是なるを知らず(扶桑畫人傳、燕石十種)

イウソム 祐尊は畫師なり大貳の公と號す其の姓氏及び歿年等詳かならず(讀本朝畫史)

イウチク 有竹は畫家なり紀伊の人野呂介石に従ひ學んで山水を畫く(鑒定便覽)

イウチク 友竹「ヒシガハモロノブ」

イウチク 友竹「カイホクイウチク」

イウチイ 友汀「イシダイウチイ」

イウチイ 幽汀「イシダイウチイ」

イウチイ 宥貞は京都眞言宗智積院の沙門なり字は仙丁上野勢田郡奈原氏の子也曾弟俊秀志し出塵を願ふ郡の王藏院祐慶に師事して得度受業す尋で四度瑜伽灌頂等を受く元和八年笈を負ひ京に上り智積の日譽僧正に謁して受業日新なり又高野に上り實翁の講を聽き次に三井に遊び台教及び俱舍を學ぶ後ち智積元壽僧正に見を請益四年道香遠遊請に依り越後長岡の王藏院に住す次に武州寶仙圓福累歴して住す明應二年台命を奉じ智積に視蒙す雲衲五千指獅子坐を圍繞す明年勅あり僧正に任ず貞平素法験多し初め圓福に住する日檀越牧野氏の女疾あり藥石効なし貞に加持を請ふ未だ至らざるの前女即

イウセイ

ち悶絶して人事を知らず手脚已に冷なり貞爲めに持念須臾くして廻ち蘇息す一日檀信戸田氏の少婦狂疾に嬰る貞に屬して持咒せしむ魅大言す貞聲を抗て叱して曰く十法界一佛性即身即佛備置皆昧にして自ら知らず兒女を逼惱する何んぞ其れ愚なるやと言いまだ了らず病婦拜伏流汗す魅即ち退き病尋で癒ゆ其の感應此くの如し寛文元年北野大報恩寺に退隱す四年夏少恙に染む五月初めの六日睡るが如くにして徂く享年七十三法歳五十九(續東國高僧傳)

イウテム 祐天名は愚心顯譽と稱す江戸の僧なり奥州岩城郡新妻村西村善内の男なり幼名三之助檀通上人の弟子となる寶永四年十一月二十三日雷鳴沙を雨らす白晝暗夜の如きこと三日駿河の富士山焚け鳴動して雷の如し始めて其の雷に非ざるを知る駿河參河を檢察せしむるに砂石殆んど五尺爾後連夜沙を降して已まざる將軍綱吉僧徒を召して問ひて曰く天沙を雨ふらずは吉凶如何祐天從容として答へて曰く沙は地に在る者なり天沙を下す順と謂べからず禽獸は人を待て而して生活するものなり今將軍禽獸を以て人を殺すは順と謂ふべからず綱吉憐れず明日又祐天を召して曰く汝が言甚だ直しと物を賜ひて之を賞す累女の亡魂人を惱ますや祐天讀經をして遂に之を治めたりと云ふ享保三年七月十三日中目黒村に寂す年八十三享保中二世祐海遺跡に寺を建て祐天寺と云ふ(富嶽進志、武江年表)

イウトク 友徳「は俳諧師なり加友の門人(俳林小傳)」

イウトク 友東軒「タチハラキヤウシヨ」

イウトク 有年「スマキイウテム」

イウバイ 友梅「セツソムイウバイ」

イウハム 祐繁「ホソカハヨリハル」

イウヒ 有斐「オホモリイウヒ」

イウエム

イウヒサイ 有斐齋「ミナガハキエム」

イウホ 友甫「カノイウホ」

イウホ 祐甫「セツサウイウホ」

イウホ 祐甫「ナカ井イウホ」

イウホ 又甫「フナキイウホ」

イウマム 有満「デメイウマム」

イウム 意雲は後土御門帝の時園基の良手なり堺の人可竹と號し又體隱と號す(境鑑)

イウムアン 有無庵「ババタイリ」

イウムアン 有無庵「イナツキクウ」

イウムテム 有無軒「タクノウチケム、ハ、イツ」

イウム ジヨキム 怡雲如欣は越前洞源寺の僧なり同州の人夙に圓通山に入て偈を讀み俄に志を發して直傳和尙に就て學ぶ其れより諸寺を歴遊して修行せりと云ふ(洞上聯燈錄)

イウラム 幽蘭は俳諧師なり調和が門人(俳諧小傳)

イウリ 友利「クイシツ」

イウリム 有隣は醫僧なり臺隱庵と號す南禪寺に居る貞治中梵網經に本づき福田方悲田方を著はす

イウリム 有隣「フカミイウリム」

イウリム 有隣「サトウイウリム」

イウリム 有隣「サトウイウリム」

イウリムテム 有隣軒は茶人なり姓は鷹司名は輔信關白房輔の四男にして寛保元年逝去年六十二

イウリヨウラム 有凌庵「スギモトフサイ」

イウレム 由蓮「ミナモトマサル」

イウエム 檜園「コデラキヨユキ」

イウエムダウ

イウエムダウ 遊園堂「ナイトウロセム」

イウツウ 遊翁「フタムライウツウ」

イガザキ ハルカタ 伊賀崎治堅は冷泉元満の臣なり... 慶長二年朝鮮在陣の時蔚山の戦に毛利の臣冷泉民部少輔元満戦死せしに其臣伊賀崎治堅は白松善右衛門時勝吉安太郎兵衛言之等と用事あつて他邦に行き主君の最期を聞いて死を共にせざるを歎き晝夜を分たず急げども途遠くして敵已に退けば治堅大に悲み主君の祖父判官殿は大内義興卿京都より防州に伴ひ來るとき我祖父も亦主君に供奉せしより君も三世我も三世特に幼少より寵愛を受けて片時も離れず仕へしに此場に後るは残念なり頼て追付奉らんと云へば白松吉安も見義不爲無勇我も争か跡におくるべきと各主君の歿骸を拜し坐を同うして共に殉死す是時伊賀崎が妻は長州問田に在りしに此事を聞て夫は君の爲めに死す我は夫の爲に死せんとい一首の辭世を詠じ遂に自害す(豹皮録)

イカシコメ 伊香色 謎は開化帝の后なり后初め孝元帝の妃と爲り彦太忍信命を生む開化帝之を蒸す崇神帝御眞津比賣を生む開化帝六年正月立て、皇后と爲す崇神帝位に即き尊びて皇太后と曰ふ(大日本史)

イガタ サウスケ 伊形 莊助は肥後の詩人なり名は實字は大素、父祖世々農を業とす莊助に至りて始めて學ぶ人として卓犖にして豪才あり弱冠にして熊本に遊學し五言古詩五十篇を作る府學祭酒數孤山見て驚て曰く李太白復た生れたりと乃ち薦めて之を君侯に上らしむ是に於て莊助の詩名大に顯はる後ち擧げられて詩文學師となる居ること數年一旦心に屑しとせざる所あり致仕して郷に歸る李紫溪、辛島鹽井書を貽りて之を招け共卒に出でず(續近世叢書)

イガタ タイボク 伊形 太朴は肥後の詩人也名は淳、莊助の弟、人と爲り孝謹篤介、交遊を喜ばず口訥々言ふ能はざるもの、如し莊助熊本に遊學するに遊太朴留守して家に在り是

イガミツム子

の時莊助の詩名國中に鳴る太朴獨り莊助の爲す所を觀て時に或は微笑す然れども人能く其の才藝を知るなし莊助と雖も未だ之を知らず一日莊助詩社より歸り詩一卷を出して曰く是れ時彦の作なりと其の夕太朴盡く之に和す凡そ三十餘首莊助驚き且つ喜て曰く吾に弟ありと遂に之を府學祭酒數孤山に示めす孤山悦んで之を奇とす乃ち薦めて學生とす太朴益々其の業を講す是に於て才學日に進み著述月に富む莊助兄弟の名一時に盛んなり天明二年平戸侯太朴の名を聞き重聘以て請ふ藩之れを許す將に往かんとして病歿す時に年二十七(續近世叢書)

イカツルヒコノミコト 五十鶴彦命は崇神天皇の皇子

母は御間城姫皇后なり

イガノツボ子 伊賀局は藤原伊賀守の女なり新待賢門院

に事ふ高師直吉野を犯すに及び帝賀名生に幸す門院僅かに後宮數人を從へて同じく赴く吉野川に至る比ひに橋板半ば斷つ爲す所を知らず伊賀局巨樹の枝を折り接して以て門院及び諸妃を濟す敵退くに及びて試みに多力者をして之れを折らしむ能はず後補正儀に嫁す(大日本史)

夜なり次て翌日平明に至る範俊の一族及び從兵二十餘人奮擊血戰皆之れに死す(野史)

イカハヒメ 五十河媛は景行帝の妃なり神櫛皇子稻背入彦皇子を生む(大日本史)

イガ ハイナイザエモイヘナガ 伊賀平内左衛門家長は平氏の士大將なり八島の役敗るゝ及びて平知盛と共に海に投して死す(平家物語)

イガ ミツム子 伊賀光季は佐藤朝光の長子也朝光の女は北條義時の後妻たり故を以て父子恩遇を得建保三年光季父の職を襲て左衛門尉檢非違使と爲り伊賀判官と稱す承久の初め源實朝害に遭ふ義時京師に變あらんことを慮りて光季を遣はして警衛せしむ尋て大江親廣を遣はし俱に京師を鎮せしむ三年後鳥羽上皇將に北條氏を討たんとして親廣光季を召す光季藤原公經の報を得て既に急あるを知り對て曰く頃日兵馬群集し流言巷に盈つ臣が職は警衛に在り事あれば當きに先づ聞知すべし而して未だ詔命を聞かず今にして臣を召す臣竊かに感ふ敢て辭すと再び勅して曰く事當きに而勅す可し速かに來れ光季曰く命を承けて敵に赴くは臣の分なり輒く宮闕に入るは臣の知る所に非ずと往かず從者鎌倉に走らんことを勸む光季曰く吾が職は警衛に在り而して禍發せんとして先づ逃る何を以て自ら贈はん且つ今所在梗塞す走らんを欲して得べきか其の道路に斃れて自ら醜名を遺さんよりは如か死を此に致して以て貳なきを明らかにせんにはど時に從者多く逃逸し留る者纔かに二十七人光季明日京極二門を閉ち高辻の土門を開て待つ午に及びて官軍來り攻む從者逆へ拒ぐ官軍進まず京極門を斫んと欲す光季從者をして開かしむ左衛門尉野時連先登す光季之を射る時連走り三浦胤義進んで光季を呼んで朝敵と爲す光季曰く汝君を欺て亂を倡ふ吾詳に之を知る猶ほ何ぞ饒舌なる今吾れ汝を舍さむと射て其弓に中つ官軍驚ひ入り從者散亡す唯だ贊田三郎第四郎と力闘するのみ三郎重傷を

イウエムダウ

イガミツム子

被て自殺す光季火を其家に縱ち先づ長子光綱を殺して火に投じ自ら腹を割て焚死す贊田四郎も亦自殺す光季の子光綱、季村、時重、後北條泰時光季の故地を以て季村に與ふ(大日本史)

イガ ミツム子 伊賀光綱は左衛門尉光季の子なり壽王

冠者と稱す承久中光季京師に守衛す光綱從ふて俱に在り後鳥羽上皇將に北條義時を討たんとす先づ兵を遣はして光季を討つ光綱時に年十四光季曰く汝尙ほ幼弱宜しく所親に投じ長ずるを待て幕府に仕ふべしと光綱曰く大人節に死す兒何ぞ去るに忍びんやと光季悦び門を開て敵を待つ既にして官軍來り攻む從者力闘す光綱檢非違使佐々高重の至るを見て矢を挟んで謂て曰く初め君我に冠を加へ約して子婿と爲す今將さに死せん少と敢て賜ふ所の矢を還して以て訣れんと射て其の胸に中つ年少に臂弱くして矢甲を撤せず高重之を憐れみ流涕して去る官軍驚ひ入り從者散亡す光季火を其家に縱ち先づ光綱を殺して火に投じ自ら腹を割して焚死す(大日本史)

イガ ミツム子 伊賀光宗は左衛門尉光季の弟なり伊賀

二郎左衛門尉と稱す建保の末侍所司五人を置く光宗其の一たり承久の初め政所執事に遷り後朝官を授けられて式部丞と爲る初め北條義時光宗の妹を娶て後妻と爲し政村及び女を生む女參議藤原實雅に適す故を以て實雅を召して幕府に侍せしむ元仁元年義時疾篤し泰時六波羅に在て未だ還らず義時の妻光宗と謀て頼經を廢し實雅を立て、將軍と爲し政村を以て執權と爲し而して光宗兄弟威福の柄を操らんと欲し光宗弟朝行光重と密かに將士に結ぶ義時卒す流言あり曰く武州京師より還り將士に諸弟を殺さんとする人々危懼す泰時還るに及びて鎌倉騷擾す光宗兄弟、三浦義村の家に至る道路頗る怪と爲す又義時の妻の居所に聚りて共に誓ふ泰時頗る之を知る然れども置て問はず旬餘にして近國の兵驟に至り殆んど城市を填む政子夜潜かに義村の家に至て之を論す義村謝して之を知らずと爲す政子色を作して詰責す義村申ぶるに誓言を以てす既

イガムサイ

にして政子頼經を奉じて泰時の家に往り數日にして議決し實雅を逐ひ光宗の邑五十二所を奪ひ其の舅二階堂行村に屬して之を囚へしめ遂に信濃に幽す光宗謫所に至りて薙髮し西光と法名す明年政子薨す泰時冥福を修するを以て光宗等を召還し之れに舊邑八所を授け既にして任じて之を使ふ光宗評定衆となる正嘉元年を以て卒す時に年八十(大日本史)

イガムサイ 怡顔齋「マツチカサヨアム」

イガラシ クワテイ 五十嵐華亭は書師なり通稱は相模、越後の人美人花鳥に工みなり(書要)

イガラシ ゼムケイ 五十嵐元敬は書人なり俊明の三男、書法を父に學び書及詩書に巧みなり(扶桑書人傳)

イガラシ ゼムセイ 五十嵐元誠は書人なり俊明の二男、書法を父に學んで殊に人物に巧みなり(扶桑書人傳)

イガラシ シウジュ 五十嵐秋壽は野州宇都宮の俳人なり秋壽は其の號一に玉潤舎の號あり與左衛門と稱す弘化年頃の人(俳諧海内人名錄)

イガラシ シキム 五十嵐子謹は書人なり吳俊明の長男、書法を父に學んで其の技に通ず傍ら又書に巧みなり(扶桑書人傳)

イガラシ ジサエモム 五十嵐次左衛門は寛永年間肥前唐津の城主寺澤忠高に仕へし人なり此人陶法を善くす任へて辭して筑前にゆく黒田忠之朝鮮の歸化人入藏といふものを藏と共に高取に於て陶器を製せしむ是より盛に諸器を製出し諸國の陶器はために聲價を落したりといふ點茶家に於て珍貴する所の有名の茶壺數種あり今に至りて名譽を失はず遠州高取燒是なり事八藏の傳にあり(工藝志)

イガラシ シユムメイ 五十嵐俊明は越後の儒者なり姓は吳一に吳は自修の字は方徳一に爲 孤峯、又穆翁と號す俊明は其の名越後新潟の人、本氏佐野氏、家世々商を業とす俊明

右衛門といふ其の地の工人巧を傳へて今に至る其造る所のものは土偶人及び禽獸また祭器に用ふる蓋壺の類なり(工藝志)

イカルガ ヘイジ 班鳩平次は初め上杉謙信に仕へ後ち諸州に漂流して加藤清正の臣莊林隼人に寄食す清正平次の武力を愛して之を祿用せんと欲す隼人乃ち平次に問て曰く子は仕へんと欲する乎且つ祿は多きを需むる乎我れ之を聞く子は嘗て越に仕へて祿二千石を食むと未だ其の實を審にせず請ふ其の祿を問はんと平次答て曰く固より仕を望むと雖も其の祿の如きは月俸にして是れり抑々我の越に於けるは功を累ねて得る所なり今此に到りては未だ尺寸の功なし夫れ舊秩を銜りて多きを食ふが如きは越人の耻づる所なり願くは定むるとなくして仕へ他日軍旅に臨む毎に一槍を以て定めて五百石と爲さば是れ漫に之を與ふるに非らず又た虚しく之を受くるに非らずと清正之を聽可す是に於て平次証明の役に從ひ殊功を建つ總て七回にして終に三千石を食むに至れりと云ふ平次居常人に語て曰く武功に依りて名を擧げ榮耀に誇らんと欲し或は餘慶を子孫に遺さんと欲する者の如きは皆な慾なり故に能く拔群の殊功を樹つるなし毎ねに戰場に臨みては其の地を定めて死地と爲し身命を顧ざれば則ち功を建るなり強て利害得失を思惟すれば則ち絶倫の功あるべからずと(野史)

イキウヂ 伊岐氏は二條帝の宮人にして大藏大輔致遠の女なり六條帝を生む(大日本史)

イキ カウカウ 壹岐好々は奥州仙臺の俳人なり好々は其の號又好々庵の號あり弘化中の人(俳諧海内人名錄)

イキ カラクニ 壹岐韓國は大友帝の臣なり壬申の亂に兵に將として天武帝の將坂本財を衛我川に擊て其の軍を破る進んで葦池に戦ひ大伴吹負の爲めに敗らる其の終る所を知らず(大日本史)

イキ コレヲ 伊岐是雄は壹岐の島石田郡の人なり本姓は卜部後ち今の姓を賜ふ始祖忍見足屋命より世々龜卜を掌ど

イキハカトコ

に至り故ありて佐野氏を冒す俊明幼より學を好み壯年京に入り山崎闇齋の門に從て儒學を學ぶ又宇士新等と遊ふ詩を善くするを以て稱せらる又書を嗜しむ江戸に來りて狩野真信に學ぶ後ち宋人梁楷及張平山等の遺跡を追慕し遂に一家をなす山水人物草花共に之を能くす最も設色に長ず嘗て一樓を建て、書を學ぶの所とす而して其樓を下らざる事四十日兼て書を善くす故に其の名海内に振ふ其の三子皆書を學ぶ嘗て戒めて曰く書は小道と雖も因て以て世道を輔く可し爾輩筆を執る必ず賢哲の遺跡に於てし謹んで誕設淫褻の事を作りて以て人を敗る勿れと平生財を輕んじ己れを棄て、人の急を救ふ實曆中州大に饑ゆ乃ち家資を傾けて賑濟す囊篋既に竭く更に傳寶書畫古器を鬻ぎて之に繼ぐ爲めに全活するもの甚だ多し是時郷の有司困荒を濟ふの意なし乃府に至りて百姓の爲めに之を請ふ有司愧謝大に廩を發す天明元年八月十日没す年八十二、三子あり長を子謹と云ひ其の書乃翁に似たり又書を能くす仲を元誠と云人物に長す叔を元敬と曰詩書畫共に美なり俊明平生飲を嗜ます人或は之を勸めて曰く酒は愁を掃ふの帯なりと俊明日予幸に太平に生れ六經の教に盡沐し詩書及畫に優遊す其樂餘りあり未だ曾て愁を知らず帯を用ゆる所なしと(近世書畫扶桑書人傳、書要略)

イガラシ チクサ 五十嵐竹沙は南宗派の書人なり元誠の二男、名は主勝、竹沙は其の號亦靜所と號す書を父に學びて能くす且つ當時の諸大家に就き大に書學を勉勵して益々上達す故に其の書父に優れり特に水墨の山水に巧みなりといふ(扶桑書人傳)

イガラシ チヤサン 五十嵐茶三は俳歌を能くせり奥州會津の人茶三は其の號一に石華齋又は栗園の號あり清兵衛と稱す弘化年頃の人(俳諧海内人名錄)

イカルガ カウエモム 鶴幸右衛門は山城伏見の人なり元和年間始めて小兒玩具の土偶人を造る時人呼て人形屋幸

り子孫傳習し是雄に至りて最も其の術に精し當時推重する處となる嘉祥中東宮の宮主となり清和帝の時轉じて宮主となる貞觀中從五位下に叙せられ丹波權掾に任ぜらる(大日本史)

イキ コマロ 伊吉古麻呂は大寶の初遣唐使に從て唐に往く慶雲中其功勞を賞して綿布銀數を賜ふ天平の初從五位上に至り下野守と爲る(大日本史)

イキシミ、ノミト 息石耳命は安寧天皇の皇子なり母は瀛名底仲媛皇后(日本紀)

イキ オマサダ 伊木忠貞は池田侯の臣なり字は三十九郎、大父忠次始めて池田信輝に事ふ父忠繁は難波の役に功あり忠貞五歳にして父没す池田氏其の食邑三萬三千石を賜ふ元和三年池田氏の轉封に從て伯州倉吉に徙る寛永九年又從ひて前に徙る十一年池田氏の命を奉じて武江に往き城壁を築く役畢るの後ち徳川氏に謁し衣服及び白金を賜はる十九年又池田氏に武江に從ひて築役を執る寛文三年禁裏に踐祚の事あり池田氏忠貞を京師に遣はして賀を上らしむ十二年病で武州河崎驛に卒す年六十一(事實文編)

イキ オマツグ 伊木忠次は尾州清洲の産始め香川を氏とす嘗て濃州伊木山の役に軍功あり縁て改めて伊木と稱す所謂伊木清兵衛是なり始めて贊を池田信輝に執る攝州花熊及び攝州山崎尾州犬山の戦に堅を破り敵を走らし武名甚だ著はる輝政の播州を領するに逮て忠次を從五位下に叙し豊後守に任じ同州三木城に居らしめ秩祿三萬七千石を賜ふ(事實文編)

イキ トウエム 壹岐桐園は名は幸猷字は道夫五左衛門と稱す豊後の儒者なり享和九年歿す年五十七(諸家著述目録)

イキ トホダケ 伊木遠雄は勇力の士なり曾て大坂の役真田幸村に從て天王寺を守り東軍と戦ひて勇名を著はせり然れども衆寡敵せず戦ひ破るゝに及びて遁れて往く所を知らず(本朝武功正傳)

イキ ハカトコ 伊吉博徳は齊明天皇の朝に遣唐副使津

イガムサイ

イキハカトコ

イキハムシ

守吉祥等と共に唐に在り讒せられて罪を獲博徳も亦其の中にあり其の證を申辯す因て免るを得たり時に唐百濟を伐つ博徳西京に幽囚せられ困苦年を経既にして事平ぎ國に歸ることを得歸航の途風に遭ひ耽羅島に漂到す其王の子阿波岐等九人を率て來る耽羅島の入貢此に始る天智帝の時に至りて博徳小山下に叙す百濟司馬法聰等を護送し年を踰て還る大津皇子の謀反するや博徳之に黨す持統帝宥して問はず後務大貳に進み直廣肆小野毛野等と新羅に使す大寶中律令を定むるの功を賞して田十町を賜ひ五十戸に封じ從五位上に叙せらる寶字の始め太政官奏して功田を子に傳へしむ(大日本史)

イキハムシ 壹岐判官「タヒラトモヤス」

イキフドウヨヘ 生不動與兵衛「ヨヘ」

イクイシ マヒト 生石眞人は和歌を善くするを以て其名高し勝實中正六位を歴て外從五位下に叙せられ姓生石村主を賜ふ(萬葉集作者履歷)

イクガ 都賀は房州の俳人なり氏は山口通稱善右衛門平山梅人の門人(俳諧人物傳)

イクダヒノカミ 活杵神は角杵神の妃なり(古事記)

イクコニヨウ 幾子女王は直仁親王の女なり元文五年十一月法華寺を繼ぐ寛延元年剃髮して名を商覺と改め眞如と號す明和元年十一月薨す時に歳二十八、諡して遍照律院と號す(野史)

イクシウ 郁洲「シノザキサムトウ」

イクジマ シムゴラウ 生島新五郎は俳優なり京都に生れ江戸に下りて山村座に出演す幕府の侍婢江島と通じ竊かに城中出入す正徳四年顯はれて八丈島へ謫せらる山村座亦爲に禁せらる享保十八年正月没す年六十四(古今役者大全)

イクシエム 郁子園「カタチカヒロミツ」

イクタノカミ 生田神「ワカヒルメムチノカミ」

イク サダカツ

イクタ キヤノスケ 生田木屋之介は勇士なり舊名隅田小介といふ日向の人なり、隅田刑部の嫡男たり十六歳の時其朋輩を殺して出奔し黒田の臣井上九郎右衛門の許に詣り實を孝隆に委せんと請ふ九郎其の膽力を愛し時を以て薦達せんと欲す其の夜隣舎に人を殺せる者あり木屋之介直に往き之を縛す九郎即ち孝隆に説き即日職祿を授く嗣後攝津の生田にて衆に挺して手柄ありければ孝隆悦びて名を生田木屋之介と命ず天正五年佐用城攻の前宵竊に城壁に附て屏柱に鋸の切痕を入れて目標となし翌日先登して其柱を鈎繩にて曳置し城を凌て涯分の功を揚げぬ(豪傑言行錄)

イクタ クニブム 生田國文は江戸の和學者にして氣吹酒舎の門人なり(諸家著述目録)

イクタマ キムグウ 生玉琴風は江戸の俳人なり元大阪の人架羅架と號す芭蕉其角等の門に遊ぶ享保十一年二月七日没す(俳家傳年表、江戸名家墓所一覽)

イクタマベ タルクニ 生玉部足國は阿波の人天平寶龜中和歌を善くするを以て世に其の名あり詠歌は萬葉集其他諸書に載す頗ぶる秀逸多し(萬葉集作者履歷)

イクタマヨリヒメ 活玉依媛「タマヨリヒメ」

イクハウモム井ム 郁芳門院は白河の皇女媛子内親王なり母は堀川帝と同じ齋宮と云ふ三后に准す永長元年八月七日崩す年二十一

イクハノトダノスクチ 的戸田宿禰初めの名は盾人宿禰應神帝十六年平群木兎と師を帥て新羅を討つ仁徳帝十二年高麗鐵盾鐵的を貢す帝高麗人を朝に饗し大に群臣を會して其の盾的を射さしむ衆能く穿つものなし戸田射て之を洞す高麗人大に驚き共に起て拜す帝之を嘉して翌日改めて今の名を賜ふ(大日本史)

イクベ ミチマロ 生部道麻呂は陸奥の人天應中六位

を歴て外從五位を授けらる小にして學を好み和歌を善くす萬葉集等諸書載する所秀歌多し(萬葉集作者履歷)

イクマ セム 生馬仙は隱者なり攝州住吉郡の人河内高安郡の東山に入り深谷の中に住す寛平九年沙門明達頭陀の行を持して東山の絶頂に至り深谷を見るに草庵あり下て庵所に到るに優婆塞あり顔色黄粟に似たり頭に白帽を戴き身に白衣を著る明達近づきて曰く誰そや對へて曰く我は是れ生馬仙なりと乃ち五瓜を明達に與へて曰く是れ此地の産なり以て飢に充つべしと明達之を嘗む其の美言ふ可らず明達更らに問ひて曰く此に何をか爲すと曰く吾れ山に入りてより以來未だ山脚を見ず只だ菩提を求むる耳と云ふ(元亨釋書)

イクメイリヒコイサダノスメラミコト 活目入彦五十

狭茅天皇「スホニムテムラウ」

イクワシ 伊窩子「フヂ非ラムサイ」

イクワム 以貫「ホヅミイクラム」

イク井 キウシツ 活井舊室は江戸の俳人なり聒々坊又岳雨と號す等家局庵の門人なり身の丈け大にして世の人天狗坊と云ふ句あり曰く「夕立にうたれてふとる田面哉」明和元年十一月廿八日に歿す年七十(俳林小傳、俳家傳年表)

イクイ オシヤウ 怡溪和尚は石州流の茶禮を能くす諱は宗悦江戸品川東海寺中高源院の開祖也正徳四年五月二日寂す法忍大定禪師と號す又大徳寺に住す(茶人系傳全集)

イクイサイ 以敬齋「アリガチャウハク」

イクガミ シラウ 池上四郎は鹿兒島亂徒の一人なり父を貞齋と云ふ島津家の奥醫なり四郎幼より醫を好まず常に西郷伊地知の諸先輩に従て其の訓誨を受く戊辰の役屢々軍功あり朝廷召せども就かず征韓の黨議嘗て與からず又私學校黨に交はらず隆盛兵を擧るに及んで終に之を佐け第三大隊を領して肥後に入り熊本城を攻むる連日拔けず自ら川尻の營に至り

利秋等を會し説て曰く今數千の兵を止めて城兵の尾撃を扼し全軍擧て南の關に出で直ちに上國を蹂躪す可しと利秋勇を恃んで聽かず四郎利秋等を顧みて曰く子等老成を以て吾言を容れず他日其悔勿れと其の陣に還る人其の軍容あるを稱す後隆盛に従て城山に戦死す四郎將士を馭する甚だ紀律あり軍中皆之を仰慕ふ聲威或は桐野の右に出ると云

イクガミノソウジ 池上僧都「クラムチユウ」

イクサダカツ 池定勝は土州の藩士なり始の名は藏太

後姓名を變して細川左馬之助と稱し又細江徳太郎と稱す父は才右衛門母は某氏世々土州に仕ふ少うして義氣慷慨風に國勢の衰頽を憂ひ同志の士と謀り將に爲す所あらんとす文久三年癸亥藩廳の命を以て江戸に在り還て大坂に至り姓名を變して義に長州に赴く發するに臨て書を藩邸に留て曰く臣の去る所以は決して祖宗數百年來の鴻恩を忘失するにあらず熱々當時の勢を察するに尙も志氣あるもの決して座視傍觀す可きの時にあらず臣等只其の竭す可きを竭し以て國家萬一の裨益を謀らんと欲する耳と此時に方りて長藩特に天下に先つて攘夷の事を行ふ定勝撰はれて遊撃隊の參謀となり佛艦を馬關に迎へ討つ功あり全年八月中山忠光を推て將と爲し兵を大和に擧ぐ定勝常に先鋒にありて忠光を擁護す九月十三日戦方さに急なり力闘敵を斫る算なし向ふ所披靡す即ち間に乘して忠光を脱せしめ自ら數百人を率ゐ戦ひ且つ退く衆寡敵する能はずして盡く餘兵を亡す定勝單騎退兵の圍む所と爲る縱橫騷突遂に圍を潰て大坂に走る其全志と再擧を謀らんとするの約を踐むなり後ち再び長州に在り偶々航して鹽屋崎(肥前)を過く颶風俄に起り激濤天を打つ舟空中に掀翻し殆んど將に覆没せんとす定勝其生く可からざるを知り船中に在て自刃す死する年二十六

幾時もなく舟果して沈没し死するもの十有二人時に慶應二年丙寅五月二日なり島人石を其海濱に建て題して溺死各靈之墓と云ふ定勝今村氏を娶り一女田鶴を生む(南海義烈傳)

イキハムシ

イク サダカツ

イケ セムテイ 池專定 イケダセムヂヤウ
イケゼムニ 池禪尼は從四位上少納言兼修理大夫藤原宗兼の女刑部卿平忠盛の後妻家盛賴盛等の母にして清盛の爲めには繼母なり
イケダ アヤヲカ 池田綾岡は書人なり又書を能くす奈良屋吉兵衛と稱す人の需めに應じて書畫の板下等を書す意匠あり明治二十年五月二十四日歿す年七十一
イケ ダイセイ 池貸成 イケノタイガ
イケ ダイナゴム 池大納言 タヒラヨリモリ
イケダ イハマヘ 池田磐前は佐大公に出で世々上野に住す磐前和歌を善くするを以て寶龜中に其名あり詠歌は載せて萬葉集其他諸書に在り(萬葉集作者履歷)
イケダ エイセム 池田英泉は有名の浮世繪師なり俗稱善四郎に善次名は義信一筆菴、國春樓、北豪、淡齋、無名翁の號あり初め狩野白桂の門に入りて書法を學び後一格を出して浮世繪を書けり又小説の著あり嘉永元年八月十六日歿す年五十七又曰く七月廿三日年五十九(蘇石十種、扶桑譜人傳、廣益諸人名錄、戲作者小傳)
イケダ カツマサ 池田勝政は攝津の人なり初字は八郎三郎筑後守又民部大輔と稱す永祿十一年十月信長芥川城に入る諸城退去す勝政は池田城を孤守し力を竭くし拒戦す明智光秀人をして歸降を勧めしむ勝政遂に降る大將軍義昭食邑二萬石を與ふ十二年三好の黨義昭を襲ふ勝政急を聞き伊丹親興荒木村重と寇を桂川に撃ち利あらず元龜元年六月自ら城を棄てて去る(野史)
イケダ キヘイジ 池田喜平次 喜平は徳川家康に仕ふ少時博奕を好み悉く財産を失ふ天正元年九月廿日武田勝頼が陣に入て馬を盗まんとして縛らる勝頼濱松城中の狀を問ふ池田曰く城中武具兵糧完備するのみならず城兵皆大將の恩義

に感し必死の精兵多し之を攻るも容易に陥るべからずと武田が軍士是を聞て將卒皆色を失ふ勝頼依て屋代山を歴て山梨に出で須雲原に陣す既にして喜平次通れて濱松に歸り此由を家康に奏しければ家康罪をゆるされしと云ふ(君臣略傳)
イケダ キムトキ 池田金時 京師の町奉行たり寛政元年秋七月任滿て江戸に歸る金時豪邁明決曾て言ふ一を罰して衆を誡むるは吾の律なりと大災の後米價既に低落す奸商等猶相謀て其の價を減せず金時怒り徹服して其の魁首に至り米を沽ふ其の商俯して之を升るに及び直に刀を抜き之を斬る諸商驚駭して俄に米價を低下せりと云ふ(續々皇朝史略)
イケダ クニシゲ 池田國重は攝津の鍛工なり又不動國重と曰ふ中河内の門人也天和中の入(新刀一覽)
イケダ クワムザム 池田冠山名は定常字は君倫源姓松平氏縫殿頭と稱す因幡國主の支封なり考名は政勝妣淺倉氏冠山年甫めて七歳先侯大隅守名は定得の養子となり天明五年始めて朝見し爵從五位下に叙せらる後十七年間郭門を番衛する三たび駿府城に加番する者一たび享和紀元病を以て職を謝す家子兵衛名は定興嗣く兵庫先たつて卒す冠山次子をして以後を承け大番頭と爲る初め冠山の朝に立つや寛政中に在り大政一新文武賢能群然彙進す時に柳間詰の諸族文學を以て著る者三人あり佐伯侯毛利高標仁正寺侯市橋長昭并に冠山なり冠山詞翰に於て尤も優なり人々爲り寡欲にして他の嗜好なし唯墳籍に耽り古今和漢の書渉らざる所なし致仕の後恒に著述を以て娛みとし地理物産の説に至るまで皆これを研究し旁ら佛典に及び時々高僧名鑑を延き以て討論す人或は佞佛を以て之を譏す然れども其の彼に求むる所は蓋窮理の一途に在りて世の漫りに冥資を祈る者と同じからざる也冠山性又慈諒謙下にして常に草布の交を爲す故に都下碩儒鴻匠夫の一技一藝有る者と群胥來往卒に虚日なし冠山亦老健苟くも與に語る可き者ありは貴賤を論せず身親から訪訊し殆むとの其封侯たるを忘る

イケ セムテイ

イケダ ツナマサ

る也遂に薙髮して冠山道人と稱す文政十二年己丑三月に至り砲洲の賜邸災に罹る因て移りて砂村の別業に居り自後漸く泛交を謝し一二の親申と相來往す或は娘を園池樹藝に寄せ濫然息慮し以て自から願養す今茲七月七日適、砲洲の宿に如く其翌丙夜頂背痛み甚たしく瘧風の如し左右倉皇醫を邀ふ醫刺絡して稍々緩るむ復た發す療治効なく九日寅の初刻を以て正寢に終ふ(事實文編)
イケダ コソム 池田孤村は書人なり名は三信、孤村は其の號、又舊松軒と云ふ越後の人、弱年の頃東都に來り書を酒井抱一に學びて其の趣を得晩年明書を學びて稍々書風を一變す曾て抱一の著はせる光琳百圖に倣ひ新撰光琳百圖を著はして世に賞翫せらる一時抱一の遺蹟を鑑定して世人の疑惑を解す性雅趣あり世に一奇人と稱せらる慶應二年二月十三日歿す年六十六(扶桑譜人傳)
イケダ シンダキ 池田重顯は家康の臣なり越前守と稱す重政の子にして參議輝政の甥なるを以て武門に列し慶長十九年五月廿一日徳川家康に仕て其の家人となる十月大阪の軍起る重顯命を受け尼ヶ崎の城を守る建部三郎政長を援て功あり孫又八郎邦照に至て家絶ゆ(君臣略傳)
イケダ シム 池田晋は徳川幕府の醫官なり名は晋柔行と號す又錦橋と云痘疹の療治を専門とす古義堂と號せり(皇定傳覽)
イケダ シヤウシキ 池田正式は大和國郡山の藩士なり松永貞徳か門に入り俳諧を能くし傍はら狂歌を咏ず平群實梯、布爾田造等の狂名は其の戲號なり松江維舟毛吹草を著して正式の「庭訓は春のはじめの試筆かな」の句を巻頭に掲げんと約し而して違約す正式怒り氷室守を著して毛吹草を詈る維舟元より狂傲の性禁する能はず大に争ふ正式其の嚇怒に恐れ謹て之を慰諭す(俳林小傳)
イケダ シヤウニフ 池田勝入 イケダノアテル

イケダ セムサイ 池田遷齋は江戸の書家なり名は隣字は徳輝彌十郎と稱す文化七年二月十三日没す白山蓮華寺に葬る(江戸名家墓所一覽)
イケダ ソリウ 池田素琉は奥州仙臺の俳人也素琉は其號一に玉裡山の號あり茂兵衛と稱す弘化中の人(俳諧海内名鑑)
イケダ ダイリ 池田大理は高魂命の後なり延暦四年正六位下を授けられ明年外從五位下に進む仁和元年下總國海上郡大領と爲り外從五位上に叙せらる大和歌を善くす其の歌は萬葉集其他諸書に見ゆ(萬葉集作者履歷)
イケダ タツツ 池田忠繼は輝政の第二子なり小字は藤松丸、母は眞照源夫人、慶長九年正月備前國を輝政に賜ひ忠繼の封國となす更に十郎と稱す十三年將軍徳川秀忠諱字及族を賜ひ從四位下に叙し侍從に任じ右衛門督を兼ね十八年播州兵備用赤穂三郡を加賜す十九年大阪兵起る忠繼兵を率ゐ野田福島を攻め之を取る進むで今橋口を攻む城中砲を發する雨の如し秀忠鎧楯を忠繼に賜ふ忠繼等連りに巨砲を發し城墻を射る城兵橋に火して去る元和元年二月遽かに卒す年僅かに十七法名靈臺元祥龍峯寺と號す忠繼孝友智勇を兼ね子なし弟忠雄嗣ぐ(野史、君臣略傳)
イケダ タマヲ 池田忠雄は輝政の三子なり小字は勝五郎母は眞照源夫人、慶長十二年將軍徳川秀忠諱字及び族を賜ひ從五位下に叙し宮内大輔と稱す時に年甫めて七歳、十五年二月淡路國を輝政に加封し忠雄の封國となす十八年正月父薨じ淡路國を割き六萬三千石を食み成山城に居る十九年大阪の軍に從て去り元和元年六月忠繼の後を承け封を備前國三十二萬石に轉す二年正月從四位下に叙し侍從に任じ寛永三年八月參議に任じ正四位下に進む九年四月薨す年三十一法名仁秀眞勇清泰院と號す(野史)
イケダ ツナマサ 池田綱政は光政の子從四位下左少將兼伊豫守に叙任し備前岡山の太守たり武事の餘暇和歌に志し

イケ セムテイ

イケダ ツナマサ

其蘊奧を得て秀歌多し亦書に能達す宇治平等院に納むる處源三位賴政入道賴圓の像は祖先たるを以て殊に力を致したり

く封を吉田州に徙す邑十五萬二千石を食む又た伊勢小栗栖の莊を賜ひ在京の料とす初め輝政中川清秀の女を娶る利隆を産んで死す文祿三年九月秀吉命して輝政に配するに徳川家康の二女を以てす是を眞照源夫人とす慶長五年家康に小山の行營

へよ善熟して火の如し輝政性れず手を延はして受く其の人と爲る沈毅寡欲にして大畧あり恒に言ふ我は大主の殊遇を荷ひて列國を併有す以て恩の報すべきなし但た西方事あれば東旅の動を疎たず我れ當きに之を殲滅すべしと封を播磨に賜ふに及んで姫路城を通宿中國府寺の三邑に築き更に姫路城と號す

書院に講す醫官に痘科あるは瑞仙より始まる瑞仙性度簡安邊幅を修せず然るに甚た家法を惜む血を刺し神に誓ひ誠心祈求するに非ざれば敢て軽く傳へず而して其指授を經る者皆能く名を世に見はす蓋し痘瘡の方瑞仙に至りて稍々備る治效枚擧するに違あらず一見あり痘色紫黒伏起きす口吻血を流し殆んど死に瀕す瑞仙正宗涼隔散を作り麻黃穿山甲を加へ之を與ふる三日藥を服する三十貼遂に生く率ね是の類なり其著す所痘科辨要、痘疹戒草、痘科鍵剛正、治驗錄、及遺稿等なり(皇國名醫傳)

イタダ テルオキ

イタダ トシタカ

イタダ テルオキ

イタダ トシタカ



世奇人を以て之を目す書肆の僕遊蕩主人の金を廢して逐はれ...

イタノ チウナゴム

イコマ カズマサ

連戦數十日將士頗る勉む官軍亦八代に襲ひ入る我が兵前後敵...

イタノ チウナゴム

イコマ カズマサ

扶桑書人傳、書業略、墓誌、慶定假覽、香亭雅語、イタノチウナゴム...

イタケベ、ハツ、池部、池邊、池野、池守、池水、池田、池田、池田、池田...



イコマ サムサム

イコマ サムサム 生駒山人は儒者なり本姓は森名は文雄字は世傑龍藏と稱す河内の豪農なりよりて生駒山人と號す詩を以て聞ゆ著はす所生駒山人集あり(諸家人物志)

イコマ サカトシ 生駒高俊は正俊の子なり父卒して其の封を襲く寛永三年八月從四位下に叙せられ壹岐守と稱す高俊資性魯鈍にして菽麥を辨せず故に諸事舉て之を老臣に委す十七年七月二十一日高俊癡愚にして守職に耐へざる罪に坐し殊に死一等を減し出羽の由利に流され其の封讃岐を沒收して更らに矢島の地一萬石及び下谷の別墅を賜ふ赦に遇ひて後ち萬治二年六月卒す時に年四十九、二子あり高重、權佐となす(野史)

イコマ チカマサ 生駒親正小字は甚助、本と土田氏、姓は藤原、尾張の人、生駒豐政養ひて子となし困りて生駒氏を冒し七郎左衛門と稱す天正六年羽柴秀吉に作州に從ひて七條城を攻め路を奪ふ秀吉乃ち江州北郡田山邑一千石を賜ひて其の功を賞す十一年賤ヶ嶽の戰に從ひて第五隊に列らなる十二年小牧の役に從ひて功あり是夏又た從て根來、雜賀、湯川を撃ち首級を獲たり乃ち食邑二千石を賜はる六月江州高島の田二萬石を賜はり再び神戶城采邑四萬一千石を加賜せらる從五位下に叙し雅樂頭に任せらる天正十五年封を徙して讃岐の邑六萬一千石を領し高松城に居る小田原及び征韓の役殊功を樹つ文祿二年五月諸將と與り唐島を守る再び師を朝鮮に發するに及び其子一正をして之に赴かしむ慶長三年七月秀吉親正の貞忠にして才幹あるを愛し援擢して中老となし中村一氏及び堀尾吉晴と與り國事を預り聞かしむ後病て卒す一正其の後を繼ぐ(野史)

イコマ バムシ 生駒萬子は加賀の大夫なり内膳と稱す初め藤九郎と云ふ祿八百石を食ひ白隠居士と號す芭蕉に從て兼て俳諧を學ぶ此君菴と號し金澤長町に住す句あり「吞む程に三日月かくる櫻かな」と(俳林小傳、俳家略人談抄)

イシカハ アウシヨ

イコマ マサトシ 生駒正俊は一正の子なり初め左近大夫と稱し從五位下に叙せらる慶長庚子の役大阪に屬して諸將と丹後を攻奪す後ち關原の軍敗る、や特に正俊の罪を宥さる蓋し父一正東征に從ひて功あるを以てなり慶長十七年從四位下に叙せられ侍從に任せらる十九年冬藤堂高虎と與り大坂城の南面を攻む大阪夏の役起るに及び軍に從て功あり元和六年六月卒す(和七年)時年三十六、法名は機外宗光、法樂寺と稱す一子あり高俊と曰ふ(野史)

イサイ 意齋(シブヤイサイ) 菴無事窟の諸號あり五竹が門人にして諸國名録、百里齋、夏山等の著書あり(俳林小傳、俳家人物志)

イサ エイタク 伊佐榮琢は石州流の茶人なり半寸菴幸珠に學び看山と號す(茶人系傳全集)

イサ カウタク 伊佐幸琢初は石州流の茶人なり怡淡和尚に學び半寸菴と號す延享二年六月十二日卒す(茶人系傳全集)

イサ カウタク 伊佐幸琢初は石州流の茶人なり伊佐半半庵に學び半寸菴と號す(茶人系傳全集)

イサ カウタク 伊佐幸琢初は石州流の茶人なり伊佐半提庵に學んで能くせり(茶人系傳全集)

イサカハノカミ 率川神社は五十鈴依姫を祀る春日の率川に鎮座す推古帝の時之を祀る

イザナノカミ 伊弉諾神は倭根神に次ぎて生れたる男神にして國土を創設せし神なり傳へ云ふ伊弉諾神伊弉那神と高御產靈神の命を奉し天浮橋に立ち天瓊矛を執て共に滄海を採る矛尖より滴る所の潮凝て島を成す是を遊龍基呂島と曰ふ蓋自凝の義なり島を凝見たるならん(二神殿を建て、爰に居始めて交婚をなして日月星辰及び素盞鳴尊及び水蛭子を生む事て淡島、淡道、伊豫、筑紫、伊岐、津島、隱岐、佐渡、大倭

イコマ サムサム

イコマ サムサム 生駒山人は儒者なり本姓は森名は文雄字は世傑龍藏と稱す河内の豪農なりよりて生駒山人と號す詩を以て聞ゆ著はす所生駒山人集あり(諸家人物志)

イコマ チカマサ 生駒親正小字は甚助、本と土田氏、姓は藤原、尾張の人、生駒豐政養ひて子となし困りて生駒氏を冒し七郎左衛門と稱す天正六年羽柴秀吉に作州に從ひて七條城を攻め路を奪ふ秀吉乃ち江州北郡田山邑一千石を賜ひて其の功を賞す十一年賤ヶ嶽の戰に從ひて第五隊に列らなる十二年小牧の役に從ひて功あり是夏又た從て根來、雜賀、湯川を撃ち首級を獲たり乃ち食邑二千石を賜はる六月江州高島の田二萬石を賜はり再び神戶城采邑四萬一千石を加賜せらる從五位下に叙し雅樂頭に任せらる天正十五年封を徙して讃岐の邑六萬一千石を領し高松城に居る小田原及び征韓の役殊功を樹つ文祿二年五月諸將と與り唐島を守る再び師を朝鮮に發するに及び其子一正をして之に赴かしむ慶長三年七月秀吉親正の貞忠にして才幹あるを愛し援擢して中老となし中村一氏及び堀尾吉晴と與り國事を預り聞かしむ後病て卒す一正其の後を繼ぐ(野史)

イシカハ アウシヨ

イコマ マサトシ 生駒正俊は一正の子なり初め左近大夫と稱し從五位下に叙せらる慶長庚子の役大阪に屬して諸將と丹後を攻奪す後ち關原の軍敗る、や特に正俊の罪を宥さる蓋し父一正東征に從ひて功あるを以てなり慶長十七年從四位下に叙せられ侍從に任せらる十九年冬藤堂高虎と與り大坂城の南面を攻む大阪夏の役起るに及び軍に從て功あり元和六年六月卒す(和七年)時年三十六、法名は機外宗光、法樂寺と稱す一子あり高俊と曰ふ(野史)

イサイ 意齋(シブヤイサイ) 菴無事窟の諸號あり五竹が門人にして諸國名録、百里齋、夏山等の著書あり(俳林小傳、俳家人物志)

イシカハ アサ

イシカハ カズマサ

退き十三年二月某日を以て歿す年五十九その人となり相親俊  
 邁慷慨氣節ありその學漢洋を兼ぬ將軍慶喜毎に謂ふ櫻所は國  
 を醫するの才ありその人たるもふべし著はす所内科簡  
 明、養生訓等あり而して養生訓は實に獄中消遣の餘に成る内  
 科簡明一書はその譯稿を松島に起し大半業を卒ふその東京に  
 入るや林洞海、石黒忠憲また已に譯稿成るに會す三人期せず  
 して一書を譯す奇といふべし因て三氏の藏板となすといふ櫻  
 所また詩文を善くす大沼枕山、小野湖山等の諸大家皆推賞せ  
 ざるはなし歿後その詩を刻して香雲閣詩鈔といふ(仙臺史傳)

**イシカハ アサ** 石川朝は内命婦なり和歌を善くす其の  
 詠歌は載せて萬葉集其の他諸書に在り(萬葉集作者履歷)

**イシカハ イチム** 石川一夢は講談師なり塗物商にして  
 會津屋佐兵衛と稱し牛込神樂坂に居る初め一口と號す安政元  
 年五月廿一日歿す年五十一(名人居歴)

**イシカハ イヘナリ** 石川家成は清兼の第二子なり初字  
 を彦五郎と稱す家成父の後を繼ぎて日向守と稱す永祿三年五  
 月徳川家康丸根城を攻む家成從て其の先鋒となり兵を督して  
 之を抜く四年七月家成松平信一と中川の附城に據りて鳥屋  
 根城を攻め家康の援軍を得て終に之を陥る一向の賊徒起  
 るや親屬多くは其の門徒たり獨り家成忠誠なく松平康高と  
 兵を發して之を上野に攻む十二年家康の今川氏眞を掛川に攻  
 むるや家成之が先鋒となり撃て之を屈す氏眞和を請ひ相撲  
 に遷居するに及ひ家成其の城を賜はり新附を撫綏す是より先  
 き家成酒井忠次と三河東西の旗隊長たり是に至りて其の職を  
 姪數正に讓る元龜元年九月家成忠次と與に命を受けて織田信  
 長を近江に援け敵將佐々木承禎と戦ひ一日二十四回途に擊ち  
 て之を走らす後ち天正元年二月武田信玄の兵を香具輪(或は  
 阿久)に攻め其の守將を斬る八年家成家事を子康通に譲りて致  
 仕殊に老休の田を賜はる十八年伊豆の梅繩の田五千石を賜  
 はる庚子の役家成東府城を守る十二月康通卒し嗣子尚幼なり

り家成乃ち老休の田を外孫に譲り大垣に徙居して再び家事を  
 執る十四年十月卒す時に年七十六法名を香譽梅嚴常壽院と號  
 す(野史)

**イシカハ ウ子ノジヨウ** 石河晴之丞は御天守下番露  
 村啓次郎の次男にして石河麻次郎の養子となる天保二年八月  
 家督を繼ぎ小普請を命ぜられ其翌年十月表火之番となり其翌  
 年十二月支配勘定出役を命ぜられ天保十二年十二月に至り其  
 職を免ぜられ同十三年正月病氣願に依り小普請入仰付られ大  
 島甲斐守の組に入れらる其後病漸く癒ゆるを以て心筋に時  
 機を察し要職に居らんとを希ふ時に御書物奉行天文見習の濫  
 川六藏と相知り其の紹介を得て當時の奉行島井甲斐守に見ゆ  
 水野越前守の諸政を改革するに乘じ奸計を施さんと欲す然れ  
 ども若年寄堀田攝津守并御側御用人新見伊賀守跡部能登守等  
 の諸人皆な越前と其意を同くす是に於て其の事の行はれざる  
 を危ぶみ攝津等數輩を除かんとして是を招き告ぐるに機密を  
 以てす石川等は是を諾し百方攝津等の失行を漏洩せんとを慮り  
 だ其の瑕瑾を知る能はず甲斐守其の機密を漏洩せんとを慮り  
 事に託して石川に甲斐守を命ずるを以て大ひに怒り甲斐等  
 の奸計を繼述して上書し甲斐守の宥恕を乞ふ甲斐等の奸計  
 是に於て暴露し甲斐守は京極長門守の領地丸龜に禁錮せらる  
 石河も亦た罪に坐して籍沒せらる其の擬律書に曰く  
 一色數馬組  
 高七十俵五人扶持  
 石川晴之丞  
 巳四十五歳

イシカハ アサ

イシカハ カズマサ

取候姿に仕成又者澁川六藏より同様の探索筋等談受候節も  
 一旦承知之及挨拶其上同人儀甲斐守身分を謀り上書いたし  
 候趣相咄草案讀開候次第等如何之儀と乍心附其儘に打過  
 又は榊原主計頭より豆町下田町之儀申立候張訴狀内筋筋并  
 御金改役後藤三右衛門貯金内探之儀願受或は御政事向之儀  
 に付主計頭より存意尋請見込之趣夫々認取差出退而同人よ  
 り進達いたし候書面に取調直差越候様申談候者如何之筋  
 と可心附處右見込み次第御取用相成候は自然仰付候節に至  
 り右者内探筋等機密之儀願開候次第發覺可致儀を厭ひ甲斐  
 守は勿論六藏等より品能申立候故之儀に可有之哉と疑察お  
 よび右兩人の所置御札有之候は自然甲斐守御宥恕可相  
 成と探索筋其外引合候廉々書面を以申立候始末旁不届に付  
 御切米御扶持方召放可申付候云々(御報知新聞)

**イシカハ エイサツ** 石川映作は東京經濟雜誌の記者な  
 り福島縣岩代國河沼郡野澤の人石川市十郎の第三子にして安  
 政五年四月二十四日を以て生る映作幼にして粗豪磊落敢爲奇  
 行あり然れども學に勉強し親戚朋友等に對しては情誼最も厚  
 かりき又た事を處する大人の如くにして學業の傍らに家業酒  
 造の事を幹せしと云ふ明治六年横濱なる高島學校に入り英書  
 を學ぶ翌七年東京に轉じ語學校、化成舎、又慶應義塾に入る此  
 際實に映作の千辛萬苦を嘗めし時なり然れども學費復た給せ  
 ざるを以て一時千葉縣に赴き小學訓導となる偶々尺振八の共  
 立學舎に於て數學の教師を要す映作數學に長せるを以て乃ち  
 同學舎に入り數學を教授し而して英書を講修す明治十二年映  
 作櫻鳴社に入り辯論家の名忽ち擧がる同年共立學舎の閉ぢ  
 らるゝに及びて大藏省に奉職し十五年十月病を以て官を辭し  
 經濟雜誌社に入り政治類典翻譯の業を起す十七年十月即ち滿  
 二年にして豫期の如くに此大業を成就せり加るに此際映作經  
 濟學講習會の幹事となりて事務を統理し又「アダムスミス」氏

の富國論を譯し櫻鳴社其他所々の會に出で、演説をなす其勉  
 勵想ふべし後紙幣交換始末を著し又此間に於て深く本邦婦人  
 の有様に注意し明治十八年婦人東髮會を起し我邦婦人風俗の  
 改良を謀り且明治女學校創立の際の如き與りて最も力ありき  
 勉勵病を惹きて十九年四月廿七日歿す年二十八歳東京經濟雜誌  
 を以て名を知らる文武帝の二年直廣肆を授けられ美濃守と  
 なり從五位下に叙せらる(萬葉集作者履歷)

**イシカハ カウザム** 石川香山は尾州藩の儒者なり名は  
 安貞字は順天香山と號し貞一郎と稱す尾張の人、松平君山に  
 學ぶ文化七年十二月歿す年七十五歳(萬葉集作者履歷)

**イシカハ ガケイ** 石川賀係は和歌を善くするを以て大  
 寶中其の名を知らる詠歌は萬葉集其の他諸書に載す(萬葉集作  
 者履歷)

**イシカハ カヅノリ** 石川數矩は數正の二男なり肥後守  
 と稱す父の邑を領ち受て一萬石を食む慶長十九年の冬大阪の  
 軍起り時に城に籠りて戦死す(君臣略傳)

**イシカハ カヅマサ** 石川數正は清兼の孫にして康正の  
 或は康昌の子なり初字は與七郎、内記又た伯耆守と稱す數正世臣  
 の故を以て幼より徳川家康に勤仕して寵遇日に漲く其の軍に  
 從ひて常に左右に侍す且つ父祖の遺業を承けて酒井忠次と與  
 りて郡邑を侵す數正家康の先鋒となり之と石瀨に戦ふ後ち家  
 康今川氏眞と協はざるに至り數正竊かに謂らく世子信康駿府  
 に質となりて護衛なし今川氏の狂暴なる其の安危測られずと  
 乃ち往て之に侍せんと欲し家康に請ふ聽されず因て潜かに  
 書を留めて往て之に侍す永祿五年三月家康の兵鶴殿長照の  
 二子を擒にす氏眞常に長照を重んじ併せて其の子を鍾愛す故  
 に痛惜して措かず數正之を聞き關口義廣に因て質子を易へん

イシカハ カズミツ

とを請ふ氏真欣然之を許す數正乃ち人を馳て之を家康に報す家康亦喜びて長照か二子氏長氏次を駿府に送歸す數正乃ち清池夫人今川氏及び世子信康を奉して駿府に至る國人皆之れを數正の精忠に歸すと云ふ後味方原の役數正軍に従て織田氏を援く又姉川長篠の役並に先驅たり其の向ふ所多くは破れざるなし天正十一年五月命を受け征て羽柴秀吉の大坂城に徙るを賀す十二年秀吉織田信雄と隙を構へて相戦ふ家康師を出して信雄を援く數正秀吉の勢ひ日に益々盛なるを見て心大に動き終に意を決し天正十三年十月學を載せ大阪に奔る然れども秀吉其の不義なるを疾みて禮せず數正是に於て慚悔し終に病と稱して家居す十四年正月和泉國に封せられ水野忠重と監軍の事を掌り更らに出雲守と稱す後秀吉家康と和するに及び數正の爲に請ひて家康に謁見せしむ十八年七月信濃の深志城に封せられ邑十萬石を食む二子あり康長清に傳る家康勝と曰ふ(野史、諸士略傳、本朝武功正傳)

イシカハ カズミツ 石川一光 太郎記に貞は父を家光と云ふ一光小字兵助、姓は源氏美濃鏡島の人なり一光羽柴秀吉に仕へて志津嶽の役に從ひ眉尖刀を執りて先登し敵軍を斬り猶ほ以て功となすに足らずとなし其の首級を擲り進んで越兵安井四郎五郎と相遇ふ四郎長槍を舞はして戦ふ一光槍下を潜り進んで四郎の右腕を斫り終に其の首級を獲又進んで拜卿入盈と接戦す雌雄未だ決せざるに越兵十數人齊進して一光に萃る久盈乃ち去り一光衆と血戦し敵三人を傷け射亦數創を蒙り眩暈して崖下に陥り刀を握りて倒る會へ福島正則及び加藤清正到る一光二人に謂て曰く我れ傷けり二人乃ち之れを扶け起す一光又た謂て曰く幸にして卿等に相遇ふとを得る設令今死すとも先登の功は他人に譲らざるなりと言畢りて乃斃る野史イシカハ カツヨシ 石川勝吉は黒田孝高の家人なり十右衛門と稱す慶長五年關原の役に島津義弘の家人伊集院有川等義弘の妻子を守護し國に歸らんとするに當たり大に戦ひ

イシカハ サチキヨ

て遂に悉く島津が船を焼き沈む(君臣略傳)イシカハ カムサイ 石川侃齋は書人なり越後の人山水墨竹を作るに巧みなり(龍乘要略、鑒定便覽)イシカハ カムシチ 石川勘七は橋普請御用達にして兼て石州流の茶道を好み此君庵と號す(茶人系傳全集)イシカハ カムスケ 石川勘助は柏山と號す羽州の人京都に來り佐々木志津摩に學び書を以て業とす享保六年台命に依り六論術義大意を書す歿年六十八(名人忠貞錄)イシカハ キナイ 石川記内は裝劍彫工なり越前に住す鐔線頭を作るに巧みなり先祖より記内に至り五代目なりと云ふ(装劍奇賞)イシカハ キニコ 石川君子 君子一吉は和歌を以て知らる秀歌は載せて萬葉集中に在り和銅六年從五位下に叙せられ靈龜元年播磨守に任ぜらる養老元年從五位上に進み入て兵部大輔と爲り侍從に遷る神龜元年正五位下に叙せられ三年從四位下に進む(萬葉集作者履歷)イシカハ キムコク 石川金谷は大炊御門家の儒員也名は貞字は大乙、頼母と稱す金谷は其の號河内の人儒を南宮大湫に學びて帷を大津に垂る後大炊御門家に仕ふ著はす所唐音唐詩選、唐音論孟、李嶠詠物詩解等あり(續諸家人物誌、鑒定便覽)イシカハ キヨカ子 石川清兼は忠輔の子なり本名は忠成、初字を助十郎と稱し姓は源氏、三河の人徳川清康に仕へて諱字を賜はりて清兼と改め安藝守と稱す酒井正親と與に其の家事を執る後清康卒して其の子廣忠を伊勢に迎へ又傳通太夫人を刈屋に迎へて婚を調ふ夫人徳川家康を生む清兼又之れに仕へて卒す二子あり康正或は康昌と傳る家成と云ふ(野史、諸士略傳)

イシカハ サチキヨ 石川眞清は光吉は一光の一族也備前守と稱す秀吉に仕へて尾張犬山城主となり邑一萬二千石を食む大阪庚子の役貞清石田三成に黨して犬山城に據り東軍を拒く加藤貞泰竹中重門等騎兵七千餘を率ゐ來て之を攻む關一政と島正則に傳云る者皆て貞清と親あり因て人をして貞清に歸順を勧めしむ貞清乃ち之を諾し城を致して京師に走り(石田三成傳)貞清城を致すの時猶ほ兵一千五百人あり馳せて關原に赴き三成と相會し本多三藏と戦ひ敗るに及び朽木谷を經て京師に入り妙心寺に潛匿し又播磨に走り關原に依りて京師に居る川氏の家人と爲るに傳(野史、君臣略傳)イシカハ サダノブ 石河貞信は石川一光の一族にして貞清の弟なり、雅樂助と稱す族を奥山氏と云ふ貞信豊臣秀吉に仕へて越前の田色一萬石を賜はる庚子の役石田三成に黨し大谷吉隆と與に北陸道を徇へて鯖並に陣し北莊に抵りて青木一矩等と軍議を爲す時に吉隆小松を歴て關原に赴く貞信は越前に在り三成に會して相戦はんと欲し海津に抵る而して關原の軍敗れて三成奔ると聞き潛に京師に入り髪を削りて宗巴と號し今出川に幽居して終ると云ふ(野史)イシカハ サダマサ 石河貞政は姓は源氏美濃鏡島の人伊豆守と稱す力三十人を兼ぬ豊臣秀吉及び其の子秀頼に大阪に仕ふ慶長十九年九月秀頼貞政及び薄田兼相をして片桐且元を撃たしむ已にして貞政心を變し密に之れを織田常真に告ぐ常真之れを且元に通ず且元乃ち自ら備へて衛る大阪騒然たり大野治長等將に且元の第を襲はんとするに及びて貞政妻孥を挈けて高野山に奔る是冬徳川家康兵を率ゐ來りて大阪を攻む貞政其の軍に從ひ藤田信吉と與に平野を取り遂に徳川氏に仕ふ後髪を削りて佳春と號す子孫祿せられて世々幕府に仕ふと云ふ(野史、君臣略傳、本朝武功正傳)イシカハ サチキヨ 石川眞清は江戸の和學者にして野村琢齋の門人なり(諸家著述目録)

イシカハ カズミツ

すれども敵せず嵐流謂らく然れども帯刀は幕府の士なり我は敗るとも害なし勝を彼に譲らんと故さらし敵を惱まして後之に打たるイシカハ ゴムジヤウ 石川玄常は江戸の醫師なり名は世通字は子深愚岡と號す文化十二年正月二十八日歿す深川靈巖寺に葬る(江戸名家墓所一覽)イシカハ コゲツ 石川壺月は俳人にして貴志活洲か門人なり(俳林小傳)イシカハ ゴダウ 石川梧堂は徳川幕府の旗下にして書を能くす名は總明字は錫我一の字は龜甫、知秋菴と號す嘉永五年正月歿す年六十餘(續諸家著述目録)イシカハ コムリヨウ 石川昆陵は書家なり名は陽字は東丈河内の人書を能くす(鑒定便覽)イシカハ ゴエモム 石川五右衛門は大盜なり三好氏の家臣石川明石の子、身軀長大にして力三十人を兼ぬ十六歳の時竊に主人の寶藏に入りて金裝刀を盜む管守之れを知り五右衛門を捕へんとす五右衛門刀を揮て遂に其の三人を斬りて遁る是より諸國に流寓し到る所盜を爲し虐を行ふ文祿の末秀吉命して之を捕へ其子一郎と與に釜に入れて油を以て煎殺す時に寛永九年四月九日年三十七或は云ふ五右衛門始め眞田八郎と稱し遠州濱松の人なりしが故ありて河内國石川郡山内古底と云へる醫家に依り遂に石川五右衛門と改めたりと其の刑に就き將に死せんとするや歌一首を吟せり「石川や濱の眞砂子はつくるども世に盜人の種はつくまじ」(本朝武功正傳、熊石十種)

イシカハ サウラウ 石川滄浪は江戸の儒者なり名は清字は濁、滄浪と號す通稱は清平、奥州の人井上金峨に學びて江戸に講説す金峨歿して後に益々金峨の義子南臺と力を合せ折衷學を唱へ師説を繼述す金峨の門人半は此の人に從ふ米倉侯其の學を信し聘するに賓師の禮を以てす天明中に歿す年三十九著す所滄浪遺稿あり(續諸家人物誌、鑒定便覽)

イシカハ サチキヨ

イシカハ サチキヨ 石川眞清は江戸の和學者にして野村琢齋の門人なり(諸家著述目録)

イシカハ シクタム

イシカハ シクタム 石河叔潭は徳川幕府の旗下なり名は之清、大凡と號す、叔潭は其の字重太郎と稱す儒學を好んで物徂徠に學べり(學定傳)

イシカハ シケイ 石川之裝は津藩の文學者なり字は士尙別號は竹屋通稱は貞一郎近江の人なり、幼にして敏警京に遷るに及びて村瀬榜亭に學び一時號して神童と爲す年甫めて十六來て津藩に遊ぶ國侯見て之を奇とし歳に俸米を與へて學資に充てしむ仍て還て村瀬塾に寓す文政三年國校有造館を建つ之裝首として徴に應じ來て講官に任ず時に二十七尋で督學に副し庠政に參謀し又は小性頭を兼ね經筵に侍讀し屢々顧問を蒙むる之裝學は考證に長じ典故を誦んず大禮の議下る毎に輒はち古今を引證し哀然冊を成して上つる國校の學規釋奠の儀注等其の草する所皆大に旨に稱ふ文政八年津阪督學職を辭す之裝代て其の職に居り文武の學政を總督す尋で班物頭に進み三百石を食む人として爲り謹恪にして儀容修整、燕居獨處と雖ども凝然として危坐すること泥塑人の如し術に上り學に入るに及びて進止皆常處あり尺寸を失はず未だ嘗て人を謾罵せず人亦之を憚かる下屬吏臍に至るまで皆役を執て唯々謹しむ學政を掌ること二十年諸寮秩然事皆條ありて紊れず之に久して用人格に升り復た侍讀を兼ね將に風從して江戸に如かんとして俄に疾を獲て歿す時に天保十五年九月二十日年五十一之裝少にして詞藝及び書法を以て聞ゆ意之を屑とせず遂に經義を研尋し尤も心を論語に潜め説約七十卷を著はす古今諸儒の説を折衷して章句訓詁を主とせず微するに和漢の事實を以てす又通鑑を校し校勘記を草せんとして中道に歿す歿するに臨んで次子圭に遺囑し繼で之を成さしむ其の他著書亦殆んど身に等し少時嘗て廣益名物六帖四十卷を輯めて綜該遺すこと靡し以て其の強記博物なるを見る可し(墓表)

イシカハ ジムシラウ 石川甚四郎は京都二條の城番たり天明八年正月大内災あり公卿武人及び人民の家屋概ね焼燼す乃ち番長某に謂て曰く速に倉庫を發し都下の人民を賑はせと某曰く江戸に請て而る後發せんと甚四郎曰く歳歉にして且つ災あり民饑餓に迫る何ぞ救命を待たんや其の擅に之を發するの罪は吾れ獨り之に當らんと遂に殺を發して以て之を賑ふ將軍家齊之を聞き甚四郎を擢て、大目附と爲す(續々皇朝史略)

イシカハ チヤウザム

イシカハ シクタム

天明八年大番組頭と爲る寛政三年擢んで目附と爲る明年洋船我漂浪を護送して松前に抵り別に請ふ所あり官乃ち忠房に命じて諭告せしむ忠房松前に往き洋人に告諭するに我國法を以てす頗る其の事情を彈くす洋人亦敬服し將に辭し去らんとす會々北風彌旬帆を開くこと能はず時方七月若し此候を過ぎば風濤險惡或は淹留歳を踰えんことを懼る忠房乃ち國詩を裁して賽禱の意を寓す既にして風止む洋船爲めに帆を開くことを得衆嗟歎して以て至誠神を感ず尋で歸都して復命し又海防籌略を具陳す大に旨に稱ふ七年作事奉行と爲り九年勘定奉行に遷り道中奉行を攝す是より先き驛政久しく墮つ乃ち弊を革ため奏を除き奮習一新す民皆感歎し爲めに生祠を建て是の時昌平營を重修す亦預りて力あり十三年又た旨を承けて蝦夷の諸務を措置し又た其の地を巡視して深く不毛に入り國界を定め表柱を樹つ文化三年西城留主に遷り五年小普請支配と爲る文政二年再び勘定奉行と爲り道中奉行を攝す十一年本城留主に進む七年病みて卒す年八十二忠房人として爲り剛明質直にして勇斷あり事を處して爽快人の及ばざる所なり居常人に謂て曰く余の今日を致す者は實に臣の直猛に由る徳忘る可らずと其の誠實舊を遺れざることを概ね此の如し(事實文編)

イシカハ タムツサ 石川忠總は徳川氏の家臣にして大久保忠鄰の子なり、小字は忠十郎、石川家成養ふて子となす因りて石川氏を冒す慶長元年元服して諱字を秀忠より受け近侍たり秀忠東征して小田原に次す忠總時に年十九一隊長となり軍に従ふ會々上國の變報至る又其の軍に従ふ八年叙爵せられ主殿頭と稱す家成卒するに及びて其の遺領を承く十九年正月實父忠鄰事に坐して謫せられ忠總亦た坐して駿府に幽居す是の秋大阪城兵を擧ぐ秀忠曰く忠總既に出で、家成を嗣ぐ忠鄰と縁坐するの理なしと忠總之れを聞き潛に西上す(石川家譜に受けて西上伏見に至り家士を勵まして曰く我れ父の故を以て必死を決す願くは汝有衆の一命を請はんと厚く果物を饗して發し自ら難處を請ひて蘆洲に向ひ衆を麾いて之を濟り奮戦して若を抜き進んで佐土港の寨を取る夏の役又從て敵首三級生虜二百七十を獲たり明年秋忠總遷りて豊後の日田に封せらる寛永十年邑一萬石を加賜せられ下總の佐倉城に徙る次年從四位下に叙し尋て近江の膳所城に封せられ邑一萬石を加へ七萬石を併食す慶安三年十一月卒す時に年六十九なり法名を日觀と號す六男子あり康勝、總長、貞當、泰總、邦總、總氏と曰ふ(新史蹟士略傳)

イシカハ チヤウザム

イシカハ タムツサ 石川丈山は洛東の隱士なり名は回、初の名は重之嘉右衛門と稱す丈山は其の字六々山人四明山人、回凸窩、大拙、鳥嶼、山木、山村、藪里、東溪、三足等の號あり參州碧海郡の人、祖正信長湫に戦死す父信定亦武名あり丈山人と爲り驍勇武事に熟練す又好みて書を讀み歌詩を善し傍ら茶道に通す大阪の役東照公の麾下に在り殊功を建んと欲し獨り竊に營を出て、先登し首二級を斬る然れども其の軍令を犯すを以て黜けらる遂に京師に閑居す時に年卅三乃ち藤原惺窩の門に遊ひ林羅山、堀杏菴、菅原得菴、野間三竹等の諸名士と交遊し相交り嘗て漁村夕照の詩を作る其の末句に曰く欲將一蓑衣一曝返照釣竿還是魯陽戈と惺窩稱して曰く斯の人後必詩宗とならんと母老い家貧しきを以て強いて紀伊侯淺野長晟の招きに應ず將に往んとするとき羅山及び得菴に謂て曰く此れ我が志に非らず已むを得ざればなり母天命を得ば我必ず吾志を成んと時に年四十一後ち從ひて藝州に徙る之に事ふる十三年母疾を以て歿す乃ち上書して致仕を請ふ許るされず職ち私に行て京に反る所司代板倉周防守は丈山と舊あり善く之を遇す乃ち徳川幕府に薦めんと欲す丈山固辭す寛永十八年

敷山の麓一乗寺村に於て詩仙堂を築て以て居る畫師狩野探幽をして漢魏より唐宋に至るまでの詩家三十六人の像を寫さしめ自ら其の詩を書して楯間に遍列す因て自ら六々山人と號す或は頭仙子又凹凸高と號す日に其の下に吟哦して優游自ら娛しむ諸名公の經過する毎に談論唱和以て娛樂す居ること久し世其の風を仰ぎ來り訪ふもの目に多し丈山其の應接を厭ひ周防侯に謂て曰く我れ老たり甚た世事に倦む將に故園に歸隱して吾が天命を終へんとす侯許さず丈山曰く然らば自今復た城市に入らずと乃ち和歌一首を作りて其の意を示す丈山復た小川の邊くも老の波後水尾上皇其の風操を高しとす徴して之を見んと欲す丈山乃ち嘗て作る所の和歌を書て之を上り辭するに誓て鴨川を渡らざることを以てすと上皇歎賞強いず諸侯の辟召皆應ぜず寛文十二年五月廿三日没す年九十丈山尤も詩に長ず朝鮮の權式稱して日東の李杜とす物徂徠も亦東方の詩杰と云ふ兼て書と畫とを工にす嘗て後光明天皇の勅を奉じ録書を作りて以て獻す帝大に悦ひ酒肴を賜ふ世之を榮とす妻妾を置かず故に嗣子なし門人安宅某繼て詩仙堂を守る後又僧尼の住するあり其の遺琴劍扇拂視等依然として尙は存す享保中靈元上皇嘗て一たび詩仙堂に臨幸す是に由りて遂に列して洛東の名勝と爲ると云ふ著者詩仙堂朝野群載本朝仙法近世叢書事

及び正税三萬東を賜ふ東海道巡察使と爲り陸奥守に遷り正五位上に進み春宮員外亮兼左中辨に除せられ從四位下に進み春宮大夫と爲る是より先き諸國に詔して金光明寺、法華寺を造らしむ而るに主者怠慢久しうして成らず是に至りて年足及び從五位下阿部小島布勢宅主等を分遣して檢察せしむ勝寶元年從四位上に進み式部卿兼紫微大弼を以て參議に拜せらる是歲宇佐大神憑語して京師に至らんことを欲す事聞ゆ年足藤原魚名等と迎神使となり月を踰えて神輿を奉じ京師に入る五年從三位に叙せられ太宰帥と爲る寶元年神祇伯兼兵部卿に遷り中納言に任じ正三位に進み文部卿を兼ね勳十二等を賜ふ勅を奉じて惠美仲麻呂等と官號を改易す勅して各意見を上らしむ年足封事を上りて曰く臣聞く治官の本は固と律令に據る爲政の要は格式を須ゆべし方今科條の禁簡牘に著ると雖も刑式之法未だ制作あらず伏て乞ふ別式を作りて律令と並び行はんことを遂に別式二十卷を作る其餘目各々本司に擊く其未だ施行せずと雖も時に頗る其の法を雜用す尋て御史大夫と爲る遷門娘と同日に嫡と爲る和銅六年十一月竈門娘と並に貶せられ號嬢と稱するを得ず(大日本史)

**イシカハ テイサイ** 石川艇齋は詩人なり名は年覽字は公通世々尾州侯の臣なり江戸に住す寛齋の弟子なり梧所と號す通稱は艇次郎(續藤原)

**イシカハ トヨナリ** 石川豐成は年足の弟なり勝寶中右少辨、東山道巡察使に補せらる寶字の初め京畿内問民苦使と爲り左中辨に補せらる六年從四位下を授けられ右大辨兼尾張守に轉じ參議を拜す神護の初め太宰帥と爲り進みて從三位に叙せらる上言して曰く賊を防ぎ邊を成るは本と東國の軍に資る威を宣ふるの事惟々筑紫の兵のみに非ず今筑前等六國の兵を割て以て防禦し其の餘を以て上下に分番す恐らくは防守濟り難し願くは東國の防人を請ひ舊に依て配成せんと勅して曰く陸奥の城柵を修理するに東國に力役を與す事須らく彼此融通して各其の宜きを制すべし今聞く東國の防人多くは筑紫に留

イシカハ テイサイ

イシカハ マサタケ

ると宜く掄括を加へ且つ以て配成すべし六國の點する所を簡し其の欠く所を計りて東人を差點し以て三千を填めは是れ乃ち東國の勞輕くして西邊の兵足らんとは歲畿内七道巡察使を命せらる但し西海道は府をして勘檢せしめらる尋て宮内卿と爲る寶龜の初め右京大夫を兼ね正三位を授けられ中納言に任ぜらる三年薨す使を遣して弔問せしむ(大日本史)

少と稱す世々水府に仕ふ寛政六年館に入り國史を校訂す信順より業を東望に受く文才あり詩を能くす享和元年七月二十七日病むて歿す年二十九娶らす子なし遺稿若干卷ありと云ふ(文苑遺談續集)

**イシカハ ナヅリ** 石川名足は年足の子なり寶字中下野伊勢備前守等を歴る神護中備前より奏して曰く藤野郡は薄土にして尤も貧、而して差科公役、途に觸れて煩劇なり山陽の驛路を承け西海の達道を帶ぶ人少く役繁し何ぞ能く堪へんや請ふ邑久郡の香登郡赤阪郡の珂摩佐伯二郷、上道郡の物理肩背沙石三郷を割て藤野郡に隸せんと之に従ふ景雲の初め陸奥鎮守副將軍を兼ね陸奥伊治城成る其の功を以て正五位上を授けられ尋て大和守に遷り陸奥守と爲る寶龜中民部大輔、太宰大貳、右大辨を歴て參議を拜す延暦中播磨守を兼ね從三位に叙せられ左大辨と爲り中納言兼兵部卿、皇后宮左京大夫、大和守等に任ぜられて薨す年六十一名足強記にして口辯あり割斷滞ることなし然れども性頗る褊急、好みて人の過を擧ぐ事を議して合ざれば口を極めて罵る故を以て諸司が官曹の進止を取るに名足の事を聴くに値へば多く言を盡さずして退く嘗て勅を奉じて文武より考議に至る實録を修するに與かる(大日本史)

**イシカハ ハチザエモム** 石川八左衛門は徳川氏麾下の臣なり驍勇を以て聞ゆ寛永元年將軍家光日光山に詣る八左衛門從ず偶々本多正純叛を謀りて家光を弑せんと欲す既に謀ごと泄る時に家光路に石橋驛に宿す八左進で白して曰く事既に迫る今夕測る可らず且つ道路も亦不慮願はくは竊に夜を以て發し速行して歸らんと家光之を納る八左乃ち近臣と家光を護し松平越中守の前行なりと稱して宵を以て驛を出づ人知る者なし翌日未刻に至るまで奔走すること十七里飲食するに違あらず從者皆疲れて能く從ふことなし八左怒りて獨り昇轡を肩にして行くと六七里西刻江都に達す大門鎖せり敲て之を報ず門者怪みて曰く大門開くべからず急あらば盡そ他門よりせざると八左怒りて與槓を抽き其の門を擊て之を開く留守越前宰相忠昌城中に令して之を禦がしむ去らず銃を放つ八左昏夜に家光に傷つけんことを恐れ乃ち南廻して桔梗門より入る是に於て城中始めて其の實を知る後忠昌家光に白して曰く石川八左衛門は忠勇と雖も夜大門を敲て天下の大法を敗る罰せざるべからず其の功を賞し其の罪を罰して可なりと乃ち秩四百石を加へて之を深川永代島に流す即ち八左衛門島(伊賀文編)

**イシカハ ヒロナリ** 石川廣成は和歌を善くするを以て名あり萬葉集中多く其の秀歌を載す寶字二年正六位を歴て從五位下に叙せられ姓朝臣を賜ふ五年文部少輔と爲り攝津亮に轉じ名を廣世と改たむ景雲元年播磨守に遷り周防守に任ぜられ三年伊豫守と爲る寶龜元年正五位下に進む(萬葉集作者履歷)

イシカハ テイサイ

イシカハ マサタケ

**イシカハ ノブユキ** 石川信順字は思甫安亭と號し乙五日本史

**イシカハ マサタケ** 石川正武は京師の町奉行たり、明和五年任滿て江戸に還る政武聰敏明決、獄を決すること流る

イシカハ マサツグ

か如し其の初め任に就て前尹決する能はさる三十の罪人を決し戸券の廳章を改め東寺南門を開き以て通路に便に是に至りて上下皆別を惜み送りて石部驛に至り涙を揮て歸る是より先き大阪町奉行たり多く政績を顯せり(紀明)

イシカハ マサツグ 石川正次は徳川家康に仕へて信康に侍せり後ち故あり内藤家長に屬すへき命を受けしを以て大に憤り祿を捨て走りしが再び歸て大功を著せり(君臣略傳)

イシカハ マサトシ 石川正俊は伯耆守康昌の弟なり半三郎と稱す一向の賊と共に家康に叛きしが後ち歸服して三方原の戦に關死せり子安次其の後を繼ぐ(君臣略傳)

イシカハ マサモチ 石川雅望「ロクツユエン」

イシカハ マサヤス 石川正養は和學者にして金兵衛と稱し多頭適舎と號す石見の人にして野々口隆正の門人たり官大教正に昇り明治二十四年歿せり年七十一

イシカハ ミナミチ 石川水道は萬葉集作者の一にして和歌を善くす名當時に知らる(萬葉集作者履歷)

イシカハ ミヤマロ 石川宮麻呂は連子と曰ふ近江の朝に大臣大紫に至る宮麻呂和歌を善して名、世に著はれ萬葉集中多く其の秀歌を載す慶雲中從四位下に叙せられ太宰大貳に任ぜらる和銅中右大辨と爲り從四位上を歴て正四位下に叙せらる同六年超て從三位に叙せられ尋で病を以て薨す(萬葉集作者履歷)

イシカハ モトヅマ 石河幹忠は水戸の藩士なり字は公恕通稱は徳五郎操齋と號す文武に兼通し大に志操あり文政中藩主哀公疾病あり繼嗣のいた定らず衆望を公子齊昭に屬す當路者あるひは其の英明を思み陰に異議を持す幹忠二三同志輩と侃々争辯して之を折く哀公薨するにおよび遺命して國を公子に傳ふこれを烈公となす公の立つや大に爲す所あらむと欲し首として舊制を改め封内を四分し幹忠を擧て武茂郡宰と爲しその西部を管せしむ藤田彪、川瀬教徳、吉成信貞をして東

北南の三部を管せしむ時に俗吏私に黨を結ひ上下壅蔽し政令阻格す公特に幹忠及び教徳を江戸邸に召ひ革弊の方法を詢ふ二人共に抗論して旨に忤ひ公怫然衣を拂て起つ幹忠を率て極諫す公もまた大に悟り藤田彪、戸田忠敬を擧用し樞機に參し紀綱大に張る齊昭讒に遇ひて退隠し後復軍國の大事に參す乃ち幹忠を用ひ奥右筆頭取となす是時天子敵聖銳意攘夷を主張す然るに幕議陰に和好を持す公東西乖離變を生せむことを慮り幹忠をして西上獻替する所あらしむ安政四年七月十六日病を以て卒す年六十有二(墓碑)

イシカハ ヤスサダ 石川安貞「イシカハカウザム」

イシカハ ヤスミチ 石川康通は徳川氏の臣にして家成の子なり左衛門大夫と稱し後ち長門守と云ふ高天神の戦に敵首十六級を獲たり天正八年父の後を繼ぐ十八年小田原の役先登して功あり其の八月上總鳴戸の田二萬石を賜はる庚子の役康通軍に従ひて小山に在り是より轉して西上し松平家清と與に清須城を守る明年二月美濃の大垣城を賜はり邑二萬石を食む慶長十二年七月卒す時年五十四(清須城の戦に十年(野史))

イシカハ ヨシズミ 石川義純は八幡太郎義家の子孫河内源氏と稱す從五位判官代に任す後醍醐天皇の勅に應じ元弘元年九月廿七日笠置山に於て勇闘衆目を驚かし落城の節戰死す(太平記)

イシカハ ヨシチヲウ 石川與七郎は權の頭の嫡子にして東海第一の美男子なり力群衆を出で其の美男は崑山六郎重安に比せり故に國人呼で今重安と云ふ(未朝武功正傳)

イシカハ ヨリアキ 石河頼明は豊臣氏の家臣なり家光の第四子にして一光の弟、姓は源氏美濃鏡島の人、本名は一宗字を長松と呼ぶ秀吉兄一光の功を追思し邑一千石を賜ふ後秀吉に仕ふるに及び累加して一萬石を賜り掃部頭と稱す庚子の役大阪に黨し立花宗茂に従ひて大津城を攻め軍敗れて山林に潜匿し脇坂安治に憑りて救を井伊直政に請ふ聽かれず遂に自

イシガヤ サダキヨ

年甲州の内に食祿千石を加賜せらる十三年東福門院不豫なり貞清命を奉し驛輿に乗じて洛に入り奉問す是の時竟永通寶錢を江州郡下に鑄る貞清命を奉じて往て之を監察す十四年肥前高來郡に耶蘇宗徒蜂起して有馬の舊壘に據る幕府特に板倉重昌と貞清を擇み以て使節と爲す命あり曰く彼に至るの日先づ肥前筑前の兵を招きて之を討つべし若し猶ほ足らざれば則ち肥後筑前の軍を加ふべし其の夜府を發し日を刻して肥前に至る時に年四十四天草の軍有馬の賊と合し島原に壘を構へて居る重昌貞清肥前筑後等の軍を監して賊壘を攻む其の餘西海山陽山陰の兵來會す十五年正月元日大舉して慶戰の勢を張る先鋒利あらず重昌戰歿す貞清奮發機まらず退走する者を慶く然れども還り戦ふ者寡し貞清鞭を揚げ進みて壁下に至る賊其の幟を奪はんと欲す貞清力戦して曳け進み壁下に至る賊其の士扶けて舍に歸り以て獨り軍事に任ず城兵夜に乘じて襲ひ出でんことを慮り疵を荷ふて諸軍を巡視すること四回戒令を加へ防衛を嚴にす既にして松平信綱戸田氏鐵江戶より至る貞清嚮導して軍中の事を告ぐ二月二十七日諸軍競ひ進で城を攻む其の夜貞清壘に入り翌朝奮戦して首級を得壘遂に陥り賊平らぐ諸軍凱旋す其の後命あり軍中挾む所の幟及び着る所の冑鎧を御覽に備ふ十八年鳥銃長に補せられ新たに騎士十人歩卒五十人を擇びて之に隸せしむ正保二年騎卒を率めて江州水口の館を成る慶安三年五畿内及び江州大水あり貞清巡察使と爲り往て之を視る四年江府の令ど爲る未だ幾ばくならず由井正雪丸橋忠彌等反を謀て發覺す貞清急に騎卒を遣はし忠彌及び其の黨若干人を捕ふ正雪駿河に逃れて死す是歲從五位下に叙せられ左近將監に任ぜらる明暦三年江城大に災す貞清城外を繞りて非常を戒む勞務頻繁能く其の事を幹す萬治二年病を以て致仕し薨髮して土入叟と稱す寛文十二年病で死す年七十九貞清人となり専ら武事を好み騎射に達す其の江府の令ど爲るに及びて官反内貨來の五字玩物喪志の四字を板に刻し壁に

殺す(野史)

イシカハ ヒウガノカミ 石川日向守は伊勢國龜山藩主なり高六萬石にして通稱は石川家とす

イシカハ リウヰム 石川柳園名は依平權か本と號し惣太夫と稱す遠江の和學者なり鈴廼舎の門人なり安政六年歿す年六十九(諸家著述目錄)

イシカハ リムシウ 石川麟洲は小倉侯の儒官なり名は正恒字は伯卿一字は伯毅、麟洲は其の號、平兵衛と稱す平安の人、幼より學を好みて才氣あり先輩皆其の大成を期す初め柳濱洲湖南湖に從ひて學を受く弱冠の比父に從て江戶に來り増井養拙を見る養拙則ち修辭家の作る所の艱澁の文を出して之を試む麟洲一目輒ち誦を成す養拙驚て奇と爲す壯なるに及びて小倉侯に仕ふ嘗て辨道解蔽を著はして徂徠の學を反撃す其の持論多くは肯綮に中る寶曆九年父を京師に省す會、疾作り遂に起たす同年七月十三日歿す時年五十三(先哲叢談、定便覽)

イシガヤ サダキヨ 石谷貞清は大織冠鎌足十二代遠江守爲憲より出づ九代を歴て信濃守行光に至り鎌倉幕府に事へて二階堂邊に住す因て二階堂を以て號とす祖は政清父は清定共に徳川氏に仕ふ貞清十歳と稱す慶長十四年秀忠に奉仕す時に年十六元和元年土岐定義の隊に列し大番を勤む其夏大阪の役起るや定義の一隊皆江府を居守す貞清執政に告げて軍に從はんことを請ふ許されず貞清志を決して長途の難を嘗め駕の後へに從ひて京師にいたる秀忠其の志を賞して黃金を賜ふ戦に臨みて馬側を離れず且つ敵機を窺ひて之を告報す時に年二十二凱旋するに及びて上總の内采地三百石を賜ふ四年又二百石を相摸の内増賜す八年秀忠日光山に詣る回轅の時故ありて野州宇都宮より馳せて江城に入る其間三十里可り貞清健歩敢へて後れず寛永九年歩卒長と爲る十年監察使に補せらる十年京畿洪水あり官使と爲て上國に赴き堤防を巡察す同

イシカハ マサツグ

イシガヤ サダキヨ

掛けて自ら警しむ寡欲にして胎物を禁じ訟を聽て私なく刑罰  
理非を明辨す毎に標を捧げて至る者あれば晝となく夜となく  
早と出て、以て之を裁し少しも滞留する所なし其の職を辭  
するに及びて人皆追思せりと云ふ貞清好みて人物を薦引し  
食客常に門に滿つ嘗て一士人を某侯に薦めて曰く渠れ極めて  
材藝あり又た巧に細腰鼓を作すと侯大に喜び召して之を祿す  
侯封土に歸る其士も亦從ふ侯曰く爾巧みに鼓を作ると吾  
が爲に之を作すか其士愕然として辭し敢て作さず他日侯土入  
に語るに此の事を以てす土入笑ひて曰く然り是れ必ず辭せし  
ならん其曾て僕の家在り饗賓の事あるに會す某に命じて箸  
を作らしむ凡そ箸を作るは腹腹にして尾瘦たるを常とす某の  
作る所之と異なり中瘦て首尾皆豐なり僕之を覩て以爲く此れ  
鼓胴を作す必ず妙なるべしと職ち以て言と爲したるのみ僕老  
たり前事皆茫然請ふ之を恕せと言頗る諧謔に近しと雖ども  
亦以て人材を薦引するの妙手なりと云べし(事實文編、野史、黃梁一  
夢)

イシクロ ダウテイ 石黒道提は茶人なり珠光に學びて  
茶道を能くす京師千本街に住す子孫東都今紫野正受院に仕ふ  
其の所持の茶具南蠻の製なり一本に云ふ南都千福寺の代官な  
りと始め畠山政長に事ふ地四十石を以て眞壺に換へて賞斷す  
其の壺の名を四十石と呼び後世名器の名あり(茶人系傳全集)

子遊、穎川と號す通稱與右衛門なり遠州濱松の人、父を正數  
と曰ふ濱松侯に仕ふ筑波幼にして絶倫六歳にして書を讀む書  
及び詩を江戸徂徠翁に寄せて業を請ふ年十二韓客に客館に會  
して唱和響の如し是に由りて名稍々顯る父致仕して後ち其の  
祿を襲ふ然れども其の人と爲り卓學豪邁仕進の間に俯仰する  
能はず遂に臣たるを致して去る京畿に遊び歸途名古屋に滞留  
すること四年從遊極て多し後筑波山下に隱居す蓋し曾祖正  
徹下館侯に仕へ舊田宅此に在るを以てなり居ること二年復た  
江戸に來り服部南郭に從ひて遊詩才を以て一時に雄視す寛  
保壬戌徒を聚めて教授す業一時に振ふ諸侯屢々徵せども皆辭  
して應ぜず詩は嘉萬七子の風を祖述すと雖も専ら李王の緒論  
を墨守せず博く衆家の長する所を採る寶曆四年八月十七日歿  
す歳五十一著はす所斐荷園初稿、同二稿、白石孝女傳あり(先  
哲叢書、事實文編、諸家人物誌、墓誌、定規覽)

イシダ シゲイヘ 石田重家は三成の長子なり、姓は藤  
原氏、隼人正と稱す重家關原の役祖父爲成或は晴成又た、入道圓  
齋及び三成の兄重成或は三成の外祖父宇田頼忠と留まりて佐和  
山城を守り敵將小早川秀秋、田中吉政、井伊直政に圍まれ軍  
敗れて自殺す(野史)

イシクロ ジムエモム

イシダ ビトク

イシクロ ジムエモム

イシダ ビトク

イシダウ ヨシフサ

通稱又右衛門、江戸の人一時江戸を去り相摸に隠る幾程もな  
く再び江戸に來り髪を削りて兩替町に住す松永貞徳が門人に  
して學殖奇才あり著に「吾吟我集」等あり寛文九年七月十八日  
歿す年八十三句あり曰く「出し置て寝られぬ伽に炭火哉」(俳  
林小傳)

頼房右馬頭中務大輔と爲る足利直義高師直を殺さんと欲し事  
敗れて大和に走る頼房越智某と直義に歸順せんとを勸む、尊  
氏の播磨書寫山に走るや直義頼房等を遣して之を撃たしむ頼  
房等光明山に屯して尊氏と相持す會々高師泰石見より還て尊  
氏を援く頼房直義に兵を益さんことを請ふ俄かにして尊氏來  
り攻む頼房等力戦して連りに之を破る直義又崑山上杉の諸將  
を遣して之を援く尊氏退て兵庫に陣す頼房又擊て之を破る  
尋て直義に従ふて越前に奔る尊氏兵に將として來り擊つ頼房  
桃井直常と近江入相山に戦ひて敗る頼房觀音城に匿る既に  
して父義房と直義に鎌倉に從ひて尊氏を薩摩山に拒ぎ軍敗れ  
て降る義房鎌倉に在るに新田義興に應せんとして之を頼房  
に計る頼房愕然として色を變じて曰く入臣と爲て貳心を懷く  
は士の恥づる所なり僕深く將軍の爲めに依頼せらるる常之に  
報いんことを思ふ古より父子兵を構ふるも亦各々其主の爲め  
なり吾之を將軍に告げざんばあるべからず父子の恩義既に絶  
す敢て再び相見ずと遂に去て尊氏に從ふ後歸順して刑部卿  
を授けらる既にして足利直冬山名時氏等歸順の將士と俱に細  
川氏春等を攝津に討ち尋て楠正儀等と赤松光範を多田部城に  
攻めて其の街市を火して還る後復た叛して吉良義興と足利  
義詮に降る(大日本史)

イシダ ミツナリ

石田三成は本名宗成、小字を佐吉と  
稱し姓は藤原氏(或は白姓)近江の人、父を爲成と曰ひ兄を重成  
と曰ふ三成の身を起すに及びて并に叙爵せらる爲成は隱岐守  
と稱し重成は木工頭と稱し各采邑一萬石を食む初め三成の書  
を觀音寺に學ぶや偶々羽柴秀吉鷹を郊野に糞ち渴して飲まん  
と欲し寺に入りて茶を乞ふ三成乃ち温茶を巨盞に汲み盛ると  
七八分以て進む秀吉咽を鳴して之を盡くし再び請ふに少盞に  
して之を進む是に於て秀吉以爲らく此の兒凡庸に非らず即ち  
住持に乞ひて携へ歸り以て仕へしむ時に歳甫めて十三なり是

イシダウ ヨシフサ

れより三成左右に給事して能く秀吉の心を飾り恰も響の聲に  
應ずるが如し初め祿五百石を食む三成嘗て請ひて曰く臣寵遇  
を蒙むる茲に年ありと雖も未だ酬ゆる所あらず願くは宇治  
及淀川兩岸の葦荻を賜ふを得れば則ち萬石の軍を以て洪恩に報  
せんと秀吉其の請ふ所を奇と爲して之を聽す三成乃ち毎日課  
銀を定めて之を收む後秀吉軍を丹波に出すに及び三成自ら  
騎兵を率ゐて軍に従ふ旌幟騎標皆人の認め得ざる所のものを  
用ふ秀吉人を遣はして其の三成なることを知り益々才幹の用ふ  
べきを察し衆に起えて擢用すと云ふ天正十三年七月三成從五  
位下治部少輔に叙せられ名を三成と改む秀吉三成の奇才  
を愛し政事を論せしめ事大小となく委任す是に於て列侯群牧  
依頼し門前常に市を爲すに至り寵遇其の右に出づるものなし  
三成佐和山城主となり采邑十八萬六千石を食む(或は二十萬三  
十八年五月秀吉に從ひて東征し大谷吉隆、長束正家、速水守  
久等と館林城を圍む城の東南に大澤あり頗る險なり三成乃ち  
居民を驅て木を伐り屋を撤し浮梁を造り以て之に架し衆を麾  
て齊く登る守將遂に城を致して去る六月三成吉隆等と忍城を  
攻む女祿元年六月三成兵二千を率ゐて海を渡り征韓の軍に從  
ふ慶長三年太閤秀吉薨す三成異謀あり嘗て謂らく秀吉百年の  
後我れ天下を掌握せん而して之を阻撓するものは徳川氏な  
り又我れに警するものは上杉氏なりと因りて上杉景勝の臣直  
江兼繼と親昵せんと欲し金帛を贈て交を締ふ霖雨の夜兼繼を  
私第に饗し密かに謂て曰く秀吉千歳の後兵を起して我が天  
運を啓かんと欲す而して之れか病根たるものは徳川家康なり  
之を爲す如何して可ならんや兼繼亦膽容あり對て曰く急に  
謀らば則ち難からん浦生氏郷と云ふもの會津に在り渠れ剛勇  
にして實に家康の扶翼たり因りて先づ氏郷を亡すに若かず之  
を爲すの計は其の嗣を誣ひ罪に託して封を奪ひ代ゆるに上杉  
氏を以てし而して後ち景勝を調して異圖を懷かしめば家康必  
ずや赴きて之を伐たん而して足下兵を上國に起し我れ會津よ

イシダ ミツナリ

り夾みて之を撃たば則ち百千の家康ありと雖も如何ともす  
る能はざる可し我の勝を得る必せりと三成其の言に従ひ密に  
計策を設く四年正月三成異圖益々急にして増田長盛、長束正  
家等と屢々家康を攻めんと欲す而れども議諸はらずして輒ち止  
む池田輝政、加藤清正、福島正則、黒田長政、淺野幸長、細  
川忠興、加藤嘉明の七人相議し人をして三成に謂はしめて曰  
く我儕骨を粉にし身を碎し外征に従事すること數年蔚山及び  
梁山の苦戦の如き幸長、長政及び清正最も力を戮せて明虜を  
捕獲し其の功勳甚なからざる然れども監軍福原直高、垣見家純、  
熊谷直陳(大谷河津)太田一吉の具狀達せざりて秀吉賞する所な  
し請ふ其の罪を糾して三子に死を賜ひ以て我儕の冤枉を明に  
せしめよ三成對て曰く監軍の具狀の達するを達せざるは故の太  
我の未だ知らざる所なり而して賞するを賞せざるは故の太  
關の深慮に在りて存す我れ奚ぞ預り聞くを得んやと七人憤慨  
し乃ち連署して家康に就き三成を罪狀し顯戮を加へんとを請  
ふ聽れず更に前田利家に請ふ亦許されず七人愈々憤懣して措  
く能はず士を驅り兵を整へ將に三成を攻めんと欲す宇喜多秀  
家、上杉景勝素より三成と交誼あり是に於て三成服を變して  
宇喜多氏に匿れ兵を備へて自ら衛る已にして三成佐竹義宣の  
言に従ひ伏見に往きて家康に歸す七人皆追ひて伏見に至り家  
康に就きて復た前請を申入れ兵を諸邸に聚めて命を諒つ居人  
騷然たり伊奈今成家康の命を受け輝政の邸に就き七人を開諭  
して曰く方今幼君新に立ち偏に無事を欲す七將俱に是れ先君  
社稷の臣なり開諭せざると雖も治を以て要と爲すを知るべし  
且つ夫れ三成相抗し難きを以て大阪を去りて今斯に在り卿等  
逐ひ來りて府下を騷擾す吾れ今國政を預り聞く亂を欲せず請  
ふ意を宥めよと七將從はず家康又今成を以て謂て曰く三成を  
ば則ち吾れ三成と俱に安危を決せんのみと是に於て皆愕然と  
して言はず終に命を聽きしと雖も猶ほ各邸に據りて罷め去



らず明日家康中村一氏、及び生駒親正をして三成に謂はしめ...

や今卿の音を聞くに既に玉を掌中に得るか如しと是に於て兼...

イシダ モクノカミ

イシダチ シマノスケ

を以て之を觀るに是れ機を當に戦ふべきに失するなり先君一...

純の陣舎に繫ぐ十月朔與平信昌命を受けて三成及惠瓊、行長...

イシダ モクノカミ

イシダチ シマノスケ

イシヅヤ ソウエイ

初め白山新三郎と號す紀州侯の抱たり長け六尺四寸七分、體量四十五六貫、臂力衆に絶し「叩き」を以て輪を制す曾て之れを以て兜山權太右衛門を勢州に撰殺したることあり寛永中の入なり(早引人物故事、相模令昔物語)

イシツヤ ソウエイ 石津屋宗嬰は泉州堺の茶人なり武野紹鷗の門人(茶人系傳全集)

イシヅ リヤウチヨウ 石津亮澄は國學者なり屏助と稱す大阪の人、本居太平の門に學ひて詠歌を學ぶ又古學を修めて上達す後ち徒を聚めて教ゆ(鑿定便覽)

イシデ ジヤウケム 石出常軒は幕府の士なり帶刀と稱す世々典獄たり常軒聯歌を善くし春雨鈔を著す寛文七年二月六日江戸大火あり傳馬町の獄舎に延焼す時に常軒獄囚を誡めて曰く火已に延焼して免れ難し而れども今汝等しく焦死するは亦哀むべきなり因て吾れ之を解放し以て火災を免れしめん必ずや三日を期して歸るべし歸る者は特赦の典あらん若し否らざるものは三族を夷滅せんと乃ち悉く放つ而して明日に至り皆回へり來りて一人も漏れ走る者なしと云ふ(野史)

イシド トウザエモム 石戸藤左衛門は弓術の名手なり吉田出雲の弟子名を竹林と改め三井寺に隠れ居たり家康之を召して家人となし旗本の士へ弓術を教へしむ是れを竹林流と云ふ(君臣略傳)

イシノ ウヂトシ 石野氏利は雕想流鎗術の祖なり初め一藏と稱し又彌平兵衛と稱す赤松圓心の裔石野正直の子なり衣笠七兵衛原俊重に從て學ぶ紀伊に仕ふ元禄十年十一月十七日歿す年七十三(武術流祖傳、武藝小傳)

イシノ トウリヤウ 石野東陵名は卿卿字は子揚播磨の儒者なり中井積善に學ぶ(諸家著述目録)

イシノ ヒロミチ 石野廣道は和學者なり本姓中原氏、平藏と稱す幕府に仕へ祿三百石を食む從五位下遠江守たり御膳奉行より佐渡奉行に進む時に佐渡志を著す又普請奉行とな

イシヤマノソウヅ

りて上水記を著す和歌を冷泉爲村に古典を伊勢貞丈に學ぶ寛政十二年五月歿す年八十三(鑿定便覽、近代名家著述目録)

イシバシ カズヨシ 石橋和義は足利高經の從祖兄弟なり初めの名は氏義、尾張三郎と稱す祖は義利廣澤太郎と稱し父は義博吉田三郎と稱す和義從五位下左近衛將監、左衛門佐、參河守を歴る足利尊氏反して筑紫に走るや官軍の爲めに追撃せられんことを慮り和義を備前に留む和義田井飽浦松田内藤福林等の諸氏と三石城に據り築を甲斐河に築て船坂杉坂の隘を塞ぎ以て水陸を扼斷す新田義貞兵に將とし西征して播磨に至り弟脇屋義助を遣して船坂を攻めしむ會々見島高德義貞に應じて義を熊山に擧ぐ和義敵の國內に起るを以て大に懼れ乃三石船坂の半兵衛を分遣して熊山を攻めしむ義助の兵間道より三石驛の西に出づ船坂の兵敵至ると意はず以て吾兵熊山より還ると爲して復た備を設けず義助の兵火を繼て鼓舞して攻む船坂の兵乏ふること能はず山に緣て逃潰す和義出で、救ふを得ず已にして義助來て三石城を攻む和義等相持すること旬日會々尊氏東上す義助圍を棄て、去る和義乃ち尊氏に從て京師に入る高師直足利直義を除かんことを謀るに及びて和義其の子宜義及び足利高經等と兵を率て直義の第を警衛す會々尊氏直義と謀和義前きに直義に黨するを以て罪を尊氏に得んことを懼れ髪を削つて名を心勝と更めて以て自ら禍を解く正平十六年足利義詮授くるに若狹守護を以てし今富莊を興へて食邑と爲さんし明年時氏其の將小林重長を遣はして之れを助けしむ重長兵勢頗る勁し和義等之れを難んし篠村に至り輒く進まず重長糧盡きて自から退く後其の終る所を知らず(大日本史)

イシバシ デムウエモム 石橋源右衛門は兵法家なり承應年間門人別木、林等幕府の芝増正寺に於て法會を執行すと聞き同志を糾合し火を繼ちて寺を燒き其の財物を掠めて軍資となし以て事を擧げんとす石橋も亦其の黨に加はる者と認

イシヅヤ ソウエイ

定せられ縛に就く是より先き別木、林の二人事露はれて縛につき官に告るに源右衛門を以て魁首となす官吏源右衛門を捕へて其の實を糾問す源右衛門答ふるに黨にあらざるを陳ず詳細は別木左衛門の傳にあり(黄梁一夢)

イシバシ ヨシナカ 石橋義仲は足利泰氏の遠孫なり小字は松壽、父を滿博と云ふ左近衛將監と稱す永享十二年六月島山滿泰を攻て藤川滿貞を殺す義仲父に繼ぐ結城氏朝足利持氏の孤を扶けて兵を起すに當たり將軍義教命して兵を募り結城を攻めしむ義仲兵を出さず嘉吉元年結城陷る義教教を下して義仲を責む長祿三年將軍義政兵を募て足利成氏を古河に攻む義仲兵を出すと遲緩なるを以て譴を受く義仲の子を尙義と云ふ義仲に繼ぐ四本松城に居る後ち家臣大内宗政の爲めに謀せられ石橋氏亡ふ(野史)

イシバシ リヤウシツ 石橋良叱は泉州境の茶人なり武野紹鷗の門人(茶人系傳全集)

イシハラ シユゼム 石原主膳は元甲斐の山縣昌景の統士なり天正十年徳川家康に仕へ秋葉山にて誓詞し舊領を給はり井伊直政の輔臣として附屬を命せらる其後の軍に隨て戦功多し

イシハラ テイアム 石原鼎菴は石原直修は儒醫なり名は學魯字は貫卿、鼎菴は其の號又梓山と號す長崎の人、杭僧澄一及瀨僧心越に從て學ぶ醫に精し書に工みなり壯なるに及びて江戸に遊び木下順菴に從て學ぶ順菴深く之を器とす鼎菴詩名あり人と爲り俶儻にして富勢を喜ばす官路に趨らず澹然貧に居る元祿戊寅江都に歿す年四十餘鼎菴初め仕進の意あり或人謂て曰く子の多能を以て之を公門に沾らば當に祿八百石を得べしと鼎菴慨然遂に仕念を絶つ此れより後諸侯の聘禮を被むると雖ども固辭して應ぜずと云ふ(續近世叢書)

イシハラ トウテイ 石原東隄名は和字は子周美濃の儒者なり(諸家著述目録)

イシヤマノソウヅ

イシハラ マサアキ 石原正明は尾州の歌人なり初の名は將聰後正明に改む喜左衛門と稱し蓬堂と號す塙保己一の門に入り有職に精しまた和歌をよくす詠草一萬首に及ぶ文正四年正月七日歿す年六十二著はす所蓬堂集あり(續諸家人物志、鑿定便覽)

イシヒメ 石姫は宣化帝の女なり欽明帝初め納れて正妃と爲す位に即くに及びて立て、皇后と爲す箭田珠勝大兄皇子敏達帝、等羅皇女を生む敏達帝位に即き尊びて皇太后と曰ふ(大日本史)

イジフ 以十は書人なり姓氏詳ならず尾形光琳の畫風を能くす落款に光琳以十書とせしものあり

イシム 意深「キクガハイシム」

イシムアム 以心庵「リヤウシツムホウシムツウ」

イシムラ ヌムゲウ 石村檢校は琵琶法師なり又三味線一に蛇皮、蛇皮を以て張りたる故なり、三味線は三絃の故なりを善くす初め檢校琉球に渡航して小弓一、二絃を以て作り之を小弓に懸け以て彈ノリズ石村之れを探て以爲らく一絃二絃は琵琶に均し三絃は琵琶の三に比して其の高さ二調子なり蓋し琵琶に由來する者ならんと是に因て始めて三絃を發明す或は謂ふ中小路琉球より之を傳ふと未だ其の孰れが是なるを知らず(聲曲類書)

イシム井ム クロムバク 已心院關白「フヂハラモロノリ」

イシムラ デムザエモム 石村源左衛門「コアファミ」

イシヤマ ゲツイウ 石山月悠は俳歌を能くせり羽州最上の人、月悠は其の號、一に知足菴の號あり佐助と稱す弘化中の人(俳諧海内人名錄)

イシヤマ セムトク 石山川徳は狩野派の畫家なり書法を狩野常信に學ぶ(扶桑畫人傳)

イシヤマノソウヅ 石山僧都は良深の號なり良深は昭登

イシヤマ モロカ

親王の子花山の皇孫にして法務權少僧都となり東寺長者石山座主と成る承暦元年八月二十四日卒年五十三

イシヤマ モロカ

石山師香は從二位中納言に任ずに任す狩野永納に學びて職書能す又金木彫物に巧みなり享保十九年十月十三日薨年六十六

イシヨウアム 倚松庵

誠初安兵衛後康介と稱す塞軒は其の號又黃裳、確庵の號あり父は則之元祿十四年四月十八日を以て近江甲賀郡水口邑に生る幼にして穎悟弱冠にして京師に遊び業を三宅尙齋に受く博く諸名士と交り講究數年遂に久米訂齋井澤濯園と宅門の三傑と稱せらる而して塞軒は其の魁たり嘗て大洲侯の聘に應じて伊豫に至り政事を預り閑く侯遇するに賓禮を以てす頃ありて親の老たるを以て辭して郷里に歸る父母を奉養すること甚だ厚し人皆其の孝を稱す其の歿するに及びて田宅家財悉く族人に附與し單身平安に遊ぶ講說徒に授く理を窮め道に任ずるを以て先務とす尙齋屢々其人となり稱す寶曆三年五月三始めて江戸に來る嘗て仙台侯の請ひに應じて孟子を其の邸に講ず翌年又阿波侯の聘に應じて之に遊事す侯甚だ之を重んじ擢んで大夫となし俸六十口を賜ふ將に委ぬるに國政を以てせんと欲す居ること數歲侯の失行を見て俸を辭して再び平安に來り帷を下して道を唱ふ尤も太極圖說の旨を研究し太極圖說大意講義二卷を著す故に人皆太極圖說の旨を研究し太極圖說大意講義、黃裳文集あり其の餘論孟經說は散佚傳はらずと云ふ(先哲叢書後編、諸家人物志)

イシ井 イツセイ

石井一晴は奥州仙臺の俳人なり一晴は其號、別に鳴鳩庵の號あり駿河と稱す弘化中の人(俳諧海内人名錄)

イシ井 ヲキセ

石井雨石は奥州須賀川の人なり雨石

イシ井 ヒヤウスク

は其號、別に夜話亭の號あり久右衛門と稱す弘化中の人(俳諧海内人名錄)

イシ井 カムシウ

石井韓收號は三榮花五郎兵衛と稱す安房の儒者に仕す享保九年歿す年七十六(近世諸家著述目録)

イシ井 キチベエ

石井吉兵衛「ゲムセイ」

イシ井 キチイ

石井磯亭名は光致吉兵衛と稱す下毛の儒者なり(近世諸家著述目録)

イシ井 クワクザム

石井鶴山は佐賀藩の儒者なり名は有字は仲車、佐賀の人、幼にして穎悟未だ父母の懐を離れざるに大學を誦す郷校に遊ぶに及びて勤勵怠らず年十七にして都講となる嘗て作る所の詩を詩僧大湖に示す大湖大に稱嘆し遂に携へて京に入り高葛阪に從ひて學ばしむ既にして江戸に來り遊道日に廣し聲譽頗る揚る藩侯之を聞き用ひて侍講とす眷遇尤も隆し是より後侯東上する毎に鶴山必ず從ふ藩に國學の興るや教諭を兼ね詩を作る敏捷酒酣なるに及び忽ち紙を展はして筆を揮ふ必らず幾多言宿構の如し又涉覽を好む終身居る所海内に半はす凡そ山水奇勝に於ては盡く之を詩に發す平居人と語りて幽勝の事に及べは必ず娓娓とじて倦ます人をして傾聴せしむ寛政元年侯に從ひて江戸に來る明年春疾に罹る猶ほ強いて侯の歸國に從ふ攝津に至る比復た從ふ能はず大坂の邸に留まる二旬にして歿す死に臨み起坐口占して曰く玉皇使者自風流、四十七年花月遊、今日朝天餘一恨、主恩海岳未曾酬(近世諸家著述目録、新編先哲叢書)

イシ井 サダオキ

石井貞興は肥前長瀬村の人なり舊と竹之助と稱す舊佐賀縣の大馬たり始め江藤新平の亂に應じて鍋島直大の家祿金數萬圓を欺き取り以て軍資となす已にして戦ひ敗る夜に乘し官軍の圍みを脱して廣江村に走る即ち漁船を求めて薩摩に通れ桐野利秋に投ず是れより吉田山中に穴居するもの四年利秋俄かに召命あり從て至るに隆盛大に治兵す

イシヤマ モロカ

是に於て利秋に屬して肥後に入り傳令司となり常に麾下に在て専ら攻守進退の命を行なふ尋て豊後に赴き火藥製造を監督す幾はくもなく宮崎に還り亦利秋に從て永井村に退く可愛嶽を越るに方て川越余代と共に深谷の中に墜ち人事を覺せざるもの多時黎明山上を望むに官軍進み至る因て潛伏食せざる七日漸く起て路を求むるに隆盛等の所在を知らず因て民家に投し匿る、と數日乃ち意を決して郷里に還らんと出て、澤津に到る終に捕はれて斬らる

イシ井 サムスケ

石井三介は半三郎の弟なり元祿中兄と與に父祖の警を龜山に復す語は祖兵右衛門の傳に在り(野史)

イシ井 シホウ

石井子彭名は、條大夫と稱す江戸の儒者なり館林府に仕、續三王外記の著あり(諸家著述目録)

イシ井 セイジフ

石井青什は俳歌を能くせり野州氏家の人、青什は其の號、一に青洲居又樵巢の號あり孫兵衛と稱す弘化中の人(俳諧海内人名錄)

イシ井 タクシヨ

石井擇所名は文表字は子哲貞平と稱し尾藤二州に學び前橋藩に仕す(諸家著述目録)

イシ井 タムカウ

石井潭香姓は石井後韓と改む名は徽言字は士勵江戸の人なり又唯一と稱す父は上野菊池の人なり壯年に及びて幕府の小吏石井氏を繼ぎ海保氏を娶りて潭香を生む潭香生れて甫て二年父蝦夷鎮臺に隸し舉家北に徙る潭香數歳にして海保氏没す父再び松前某氏を娶る某氏善く潭香を視ると己れ生む所の如し文政四年辛己潭香年十六父母に從ひて江戸に還る父没するに及て籍を他人に譲りて去り獨り母と居る母子親睦家庭諳如也潭香初め書を市川米庵に學ぶ性筆札に長し將にこれを以て世に卓立せむとす尤も清人の書法を好み其口訣を得むと欲し乃ち母を尾藤水竹に託して崎陽に游ひ清客江芸閣に就て悉く其の法を受け歳餘東に歸る書未だ甚だ佳れず會々連年凶飢頗る生計に苦しむ時に人の松前藩に筆仕するを勸むる者あり潭香喜て仕へて日に賤役に服すること自

イシ井 ヒヤウスク

若たり既にして士大夫に交遊し藩人始めて其の常人に非らざるを知る相識して曰く彼れは名士なり之を卒伍に置くは藩の辱也と請せて徒士と爲す時に藩侯年僅かに十餘歳潭香をして傳たらしめ且書を教ふ甚だ親昵を得たり侯逝て子なし軒公立つ是に於て潭香進みて士班に列す然れども薄俸多累後遂に債を市人に負ふ償ふ能はず債主將に官に訴へむとす公之を聞き有司をして藩士の外債を負ふ者を檢し金を内庫に取り悉く之を償はしむ事蓋潭香を恤むに由つ後又俸を増す最後復た役するに吏務を以てせす其の優遇想ふへし潭香人となり廉直寡慾未だ名利に汲々たらす唯性太た酒を嗜み財を視ると土泥の如し研に臨む毎に必ず盥ひ且書し而後筆を執る文具清潔若し一物も人の手に觸れば拭はされは措かず平生傘を支ふる未だ嘗て右手を用ひず行くときは則右手を將つて懷中に架す蓋運筆に害あるを以てなり晩年從學愈々多四方の筆を索むる給するに暇あらず苟しくも意に屑とせざる所者は即ち之を叱斥す其の言行時に過激に亘ると雖ども之を要するに廉直之を出て酒或はこれを害す故に世復た敢て之を咎めず藩人亦之を度外に置く明治二年己巳徵命を蒙りて太政官の大録と爲る明年庚午五月六日病むて歿す年六十五(西島秋帆潭香傳)

イシ井 ツ子ウエモム

石井常右衛門「ゲムセイ」

イシ井 ハムザブラウ

石井半三郎父を兵介と曰ひ祖を兵右衛門と曰ふ共に濱松城主太田資定に仕へて祿二百石を賜ふ兵右曾て事を以て同僚赤堀源藏の爲めに暗殺せらる兵介其の讎を報せんと欲し反て亦其の仇の爲めに殺さる半三郎時に年甫めて三歳僕常右衛門に携へられて大阪に至り常右の妹狭衣の爲めに育はれ後丸龜藩士三井十左衛門に依る元祿の初め年十七に迨ひて第三介と共に警を龜山に報す太田氏之を嘉褒し其の舊秩を復す(野史)

イシ井 ヒヤウスケ

石井兵介は兵右衛門の子父と共に濱松城主太田資定に仕ふ兵右衛門嘗て事を以て同僚赤堀源藏

イシ井 ヒヤウエモム

の爲に殺さる兵介其の誓を復せんと欲し暇を乞ふて諸州を歴索し後濃州谷汲に至り反て誓の爲めに掩殺せらる語は兵右衛門の傳に在り(野史)

イシ井 ヤゴヘエ

過ぐる毎に榜を掲げて劍槍の師を招き其の技を試む過ぐる所必ず勝つ自ら誇て謂へらく天下に敵なしと一時濱松に舍る兵右衛門を提げ進で其の胸を擲く無一猶ほ進みて己まづ源藏叱して曰く汝知らざる乎と擲んで之を投ず衆歎賞して己まづ源藏叱く者益々多し一夜雨雪す諸少年會飲し醉後百怪を語り燈心百條を照し一譚畢る毎に一條を滅せし將に半ばならんとして燈忽然として滅す中庭に果して物あり車輪の顛倒するが如し源藏槍を提げて之を刺し燭を擧げて之を見れば家狗なり國中傳笑して曰く狗を屠らんと欲せば須らく源藏に學ぶべしと兵右衛門聞て之を病み竊かに源藏を誑む源藏術を較べんことを請ふ兵右衛門流し杖を執て起つ源藏槍を舞して進突す兵右杖を揮て槍を繳し直ちに入て連りに頭を咎うち叱して曰く汝が父の杖なり宜しく心に銘し骨に鏤すべしと源藏拜伏して罪を謝す乃ち酒を命し慰勉して之を遣る兵右衛門の家奴事を解せず稠人中其の主の能に誇て曰く前日源藏主人と藝を比らば答うたれて起つこと能はずと語遂に流傳し源藏の徒以て告ぐ源藏悲て謂ふ兵右衛門奴をして吾か醜を播かして以て吾を辱しむ人定て後源藏潜かに寢室に入り之を刺して遁れ去る時に兵介宿直なり計を聞て回り戸を抱いて慟哭し城主に請ふに復誓の事を以てす太田氏召して曰く共に天を戴かざるの仇報せざる可らざるなり我善く妻孥を撫せん汝其れ顧慮する勿れ乃ち兼高作の刀を賜ふ兵介拜謝して行く先づ嵯峨に往き松軒に見て曰く汝の子我父を殺して亡命す冠必らず汝の家に匿れん汝速かに之を出せと答て曰く在るは則ち焉に在り而れど汝の父獨り爲す所我れ豈に汝の敵ならんや如かず疾く歸るには兵介大に怒りて刀を抜き之を擧て斃す將に絶せんとし哀告して曰く不肖の子思に背き義を忘れて汝の父を殺す予豈

イシ井 ヒヤウエモム

に之を容れん予汝の爲めに殺さると聞かば彼れ將に自ら出でん汝志を違うすべし予先きに汝を罵るものは汝の怒を邀へんが爲なり汝其れ旃を勉めよと言畢つて絶す是に於て榜を戸側に掲げて曰く松軒を殺す者は石井兵介なり汝父の仇にして報せざれば以て天地の間に立つ可らず濃州谷汲に在りて汝の至るを俟たん寛文七年七月赤堀源藏に示すと而して兵介谷汲に在り之に久うして資に乏し乃僕常右衛門を遣して濱松に歸へす初め常右主兵介に従て國を出るや兵介の妻身めるあり是に至て男を擧ぐ常右相見て慰問す家益々困しむ常右妹あり未だ嫁せず私かに告げて曰く主人資に乏しくして未だ復誓すること能はず汝女子と雖も主の爲めに力を出すこと如何妹曰く唯と時に娼家の人京より來る者あり乃ち相約して妹を賣り八十金を得乃ち復た谷汲に至る此時源藏姓名を變して大坂に客居し多く悪少年と遊交す或る人告げて曰く頃ろ京西に人を殺す者あり榜して曰く石井兵介と汝之を知る乎と源藏大に驚き往て之を見る乃ち父己に殺に遇ふ乃悪少年三人を率ゐ三絃を鼓し乞兒と爲て谷汲に適き仇を窺ふ兵介一日行て里中の稱名寺に遊ひて夜歸へる源藏南陽院の側に伏す會て天雨ふる兵介傘を傾て之を過ぐ伏起て夾み撃つ兵介叱呼して曰く何物の賊か無禮なるを刀を揮て相支ふ衆寡敵せず亂刀の下に死す常右死を聞き切齒すれども及ばず涕泣して濱松に歸り之を告ぐ兵介の妻哀慟に勝へず血暈して絶す常右天に號泣し誓て曰く一家の此禍に罹る者は皆源藏に由る二孤を長養して以て誓を復する者吾に非ずして其れ誰れかあらんと乃ち三歳の兒を携へ初生の孤を懷き途中に乳を乞ふて大阪に至る時に妹妓と爲りて新町に居り狭衣と名づく常右二孤を託せんと欲す狭衣慨然として託を受く常右乃ち服を變じ笈を負ふて諸州を歴て源藏を蹤跡す後病みて海西に死すと云ふ狭衣自から遺孤を撫し客に接する毎に士人の義氣ある者を見て情を盡くし歎を迎へ以て依頼を爲さんと欲す九龜の士三井十左衛門情好特

イシ井 ヤゴヘエ

に密なり一夕二兒の妓側に在るを見て之れを異しむ狭衣哀訴して曰く是れ妾が主の遺孤なりと告ぐるに實を以てす十左其の節義に感じ乃ち携歸して養育すること十餘年兄半三郎既に十七歳弟三介も亦成童是に於て兄弟に謂て曰く汝父祖の仇あり報せざる可らず狭衣の託を受け以て汝の成立を俟つ者も亦唯だ是れが爲めのみ父の志を紹ぎ以て其の靈を慰むるも亦只斯に在り身を立て名を揚げ絶を繼ぎ廢を興すも亦只斯に在り汝其れ旃を勉めよ乃ち二十金を出し以て行資と爲す兄弟涕泣し恩を謝して行く共に奴と爲て小諸の士鳥井元右衛門の家に住ふ兄弟小心事に服するを以て愛せらる一日兄弟私かに語て相泣く元右其の故を問ふ兄弟告ぐるに實を以てす元右歎じて曰く汝年少にして其の志憫む可し此の地は僻陬便ならず予が兄郷左衛門東府に在り予書を寄せて汝を託せん誰れか行くべきものぞと弟三介請ふて行く郷左衛門を善くする者あり行人に相會ふ毎に則ち語て曰く寡君槍を善くする者有らば則ち教へられよと龜山の行人曰く吾藩に赤堀某なる者あり管槍を善く當て人を殺し其子誓を復せんと欲す亦之を殺す寡君其の勇を聞き召して師と爲す君侯求むる所は其れ斯人の徒乎と郷左歸て三介に告ぐ三介大に喜び拜謝して曰く幸ひに大人に頼て仇の所在を獲請ふ疾く歸り報じ以て素志を違うせんと乃ち星夜小諸に還り兄弟共に龜山に往て仇を狙ふ一日之れに途に遇ふ兄半三郎後より呼んで曰く子は赤堀氏に非ざる乎と顧みて曰く誰れそ石井氏の子なり父祖の仇を復せんとすと奮撃して背に傷つく源藏怒り闢ふ三介跳り進で其の額を撃て倒す半三坑を刺す事龜山城主板倉氏に聞ゆ板倉氏其の孝義を嘉みし命じて之を館饋し使を遣はして狀を太田氏に告ぐ太田氏嘉褒し其の秩祿を復し又命じて金を出し狭衣を贖はしむ兄弟之れを母とし養ふ仇を復せしは實に元祿四年五月二十八日なり(野史)

イシ井 ヤゴヘエ 石井彌五兵衛「イハ井オサム」

イシ井 ユキタマ

イセ テイヂヤウ

イシ井 ユキタマ 石井行忠「イハ井ユキタマ」  
イシ井 ユキヤス 石井行康「イハ井ユキヤス」  
イシ井 ヨサム 石井收「イハ井ヨサム」  
イシヨ アハノカミ 石尾阿波守は石川流の茶人なり  
怡保和尙に學びて之を能くす浮舟と號す(茶人系傳全集)  
イシラカ 因斯羅我はもと漢人なり雄略天皇七年七月詔  
して新漢(イマキノアヤ)陶部高貴鞍部堅貴等と共に居住の地  
を賜ふ

する者あり銘して吳祥瑞或は五郎太甫と曰ふ是より其名海内  
に播けり永正十年六月歸朝し肥前今利に寓を閉て盛に之を製  
す終に今利に歿す(工藝志料)  
イセ サダツカ 伊勢貞孝は貞忠の子なり姓は平氏貞隆  
の孫從四位下に叙せられ兵庫頭に任せらる(或は待從に任  
せらるに傳る)天文十  
九年將軍義晴の遺言を受けて義輝を扶翼す後三好黨の異謀  
を挾むを察し數々義晴を諫むれ共聽かれず終に永祿五年九月  
一族を率ゐて三好黨を伐ち與に船岡山に戦ふ兵潰れて之れに  
死す子あり貞良と曰ふ俱に戦死す(野史)

イヌウシ 伊嵩子「フヂ井ラムサイ」  
イヌケヨリヒメ 伊須氣余理比賣「ヒメタ、ライス、  
ヨリヒメ」  
イスマヨリヒメ 五十鈴依媛は綏靖帝の后なり事代主  
命の少女にして皇太后履踏躡五十鈴媛の妹也綏靖帝二年立て  
皇后と爲す安寧帝を生む安寧帝位に即き尊んで皇太后と曰ふ  
(大日本史)

イセ シムクラウ 伊勢新九郎「ホウデウツナガウヂ」  
イセジマ シナイ 伊勢島宮内は淨瑠璃を以て業と爲  
す江戸の人虎屋源太夫の門人なり性淨瑠璃を嗜みて其の鑑興  
を究め後遂に一機軸を出し伊勢島宮内と稱す承應の頃より世  
に行はる其の門人松本佐太夫嘗て京師北野に芝居を興行し宮  
内及び井上播磨孫宇治加賀掾等の淨瑠璃を唱ふ是より其の名  
益々著はる後ち宮内剃髮して節齋と號し左内と相ひ競争す  
(聲曲類纂)

イセ ウチツナ 伊勢氏綱「ホウデウツナ」  
イセ ゴラウダイフシヤウズ井 伊勢五郎太夫祥瑞  
は松坂の磁器職工なり氏を山田(或は松本)と曰ひ則之と名づく飯  
野郡黒部村に生る幼より陶器を製せんことを欲し後柏原帝の  
時明に航して之を學ぶ江南に在りて陶磁を製す時に日本に輸入  
す(鑑定便覽、扶桑書人傳、本朝書史)

イセノ ダイジムグウ 伊勢太神宮は内宮外宮に分つ  
内宮の祭神は天照太神にして度會郡宇治にあり太神が天孫に  
賜ふ所の神鏡を祀る初め崇神帝の六年大和笠懸邑に奉祀し垂  
仁帝の二十五年此地に遷す外宮は豐受大神宮即ち國常立尊を  
祀る度會郡山田の遠津宮に在り雄略帝の二十一年丹後國與謝  
郡具井原より豐受神を招きて之を祀る

イセ サダハル 伊勢貞春は萬助と稱し和學者にして貞  
丈の男なり(諸家著述目録)  
イセ サダフヂ 伊勢貞藤は貞親の弟なり歿存居士と號  
す入道して常喜と云ふ備中守に任す好みて圖畫を作す(繪林五  
風集、皇國名畫拾遺)

イセ サダツカ 伊勢貞孝は貞忠の子なり姓は平氏貞隆  
の孫從四位下に叙せられ兵庫頭に任せらる(或は待從に任  
せらるに傳る)天文十  
九年將軍義晴の遺言を受けて義輝を扶翼す後三好黨の異謀  
を挾むを察し數々義晴を諫むれ共聽かれず終に永祿五年九月  
一族を率ゐて三好黨を伐ち與に船岡山に戦ふ兵潰れて之れに  
死す子あり貞良と曰ふ俱に戦死す(野史)

イセ サダム子 伊勢貞宗は兵庫助と稱す父は伊勢守貞  
親と稱し將軍義政の嬖臣なり永享八年尾州斯波の嫡子卒去の  
後家系相續の子なきに由て一族大野持種か子義敏を嗣嫡とす  
老職甲斐朝倉織田の三人是に服せし遂に伊勢守に就て將軍家  
に訟へ義敏不徳にして入君の器に當らず願くは是を廢せんと  
云ふ其時貞親か妾は甲斐か妹なり内縁の親に由て言を巧にし  
公方家に懇訴す義政乍ち義敏を廢して瀧川義廉を嗣とす其  
の後義敏は漂泊して中國に至り大内教弘に寄寓せり是時伊勢  
守に驥幸の妾あり新造と云ふ此女義敏か妾と又兄弟なれば義  
敏之を徳と私に新造を頼んで再び斯波家繼嗣の事を伊勢守に  
頼む伊勢守又内縁の最負を以て乍ち心を諭し再び義敏赦免の  
事を公方家に願はんとす子息貞宗此を聞て父に謂て曰く大人  
何ぞ斯の如く表裏の心を生ずるや私の最負を以て公務を亂す  
は不忠是より大なるはなし若し方を此事に盡さは天下大亂を  
生ぜんと涕泣して再三諫れども父貞親曾て用ひす却て貞宗を  
放黜す貞宗大に號泣し門を杜て幽居せり程なく義敏公方の赦  
免に遇ひ再び斯波家を相續し義廉は罪無うして俄に改易せら  
るゝのみならず京都の邸も義敏に渡すへしと屢々嚴命なり義  
廉甚憂ひ頓て執事山名宗全に懇訴す宗全怒て遂に大亂に及は  
んとす公方家此を聞て大に恐れ忽ち伊勢守を遣放し領地を沒  
收せらる然れども子息貞宗か忠孝の徳義に免し領地を貞宗に  
賜り家名再び相續せり(釣皮錄)

イセ テイヂヤウ 伊勢貞丈は有職家なり名は貞丈平氏  
安齋は其の號平藏と稱す父貞益幕府の士たり千石を領す兄貞  
陣封を襲きて幾くもなく天死す依て封地を返官す幕府殊に舊  
領地の内三百石を平藏に賜ひ家を嗣かしむ平藏幼より有職故  
實を好み博覽宏通中世以降の記録に於て研考せざるなく之れ

イシ井 ユキタマ

イセ テイヂヤウ

イセ サダム子 伊勢貞宗は兵庫助と稱す父は伊勢守貞  
親と稱し將軍義政の嬖臣なり永享八年尾州斯波の嫡子卒去の  
後家系相續の子なきに由て一族大野持種か子義敏を嗣嫡とす  
老職甲斐朝倉織田の三人是に服せし遂に伊勢守に就て將軍家  
に訟へ義敏不徳にして入君の器に當らず願くは是を廢せんと  
云ふ其時貞親か妾は甲斐か妹なり内縁の親に由て言を巧にし  
公方家に懇訴す義政乍ち義敏を廢して瀧川義廉を嗣とす其  
の後義敏は漂泊して中國に至り大内教弘に寄寓せり是時伊勢  
守に驥幸の妾あり新造と云ふ此女義敏か妾と又兄弟なれば義  
敏之を徳と私に新造を頼んで再び斯波家繼嗣の事を伊勢守に  
頼む伊勢守又内縁の最負を以て乍ち心を諭し再び義敏赦免の  
事を公方家に願はんとす子息貞宗此を聞て父に謂て曰く大人  
何ぞ斯の如く表裏の心を生ずるや私の最負を以て公務を亂す  
は不忠是より大なるはなし若し方を此事に盡さは天下大亂を  
生ぜんと涕泣して再三諫れども父貞親曾て用ひす却て貞宗を  
放黜す貞宗大に號泣し門を杜て幽居せり程なく義敏公方の赦  
免に遇ひ再び斯波家を相續し義廉は罪無うして俄に改易せら  
るゝのみならず京都の邸も義敏に渡すへしと屢々嚴命なり義  
廉甚憂ひ頓て執事山名宗全に懇訴す宗全怒て遂に大亂に及は  
んとす公方家此を聞て大に恐れ忽ち伊勢守を遣放し領地を沒  
收せらる然れども子息貞宗か忠孝の徳義に免し領地を貞宗に  
賜り家名再び相續せり(釣皮錄)

イセ テイヂヤウ 伊勢貞丈は有職家なり名は貞丈平氏  
安齋は其の號平藏と稱す父貞益幕府の士たり千石を領す兄貞  
陣封を襲きて幾くもなく天死す依て封地を返官す幕府殊に舊  
領地の内三百石を平藏に賜ひ家を嗣かしむ平藏幼より有職故  
實を好み博覽宏通中世以降の記録に於て研考せざるなく之れ

イセ ナガウチ

を以て一家を成す制度典章器械服飾に至るまで考據精密にして是より先き有らざる所なり著述の書も皆寫本を以て行ると雖も人々之を珍重す天明四年六月五日歳七十にして歿す西久保大養寺に葬る著す所武器考證、軍器考首書、軍器考補正評、武林原始首書、管像辨、愚得隨筆附考、武家法度考、十七條考、故實三家異考、源家八領鑑考、古鏡色目考、鏡具足辨、鏡直垂色目、甲冑威毛色目、甲冑名考、刀劍問答、寶劍寶鏡記、諸鞍日記考證、鳥帽子考、古代折烏帽子圖、馭馬故實評、保呂衣推考、源平盛衰記附書、松島日記註、鳴鼓鑿目考、三種神器名考、三木三鳥考、後院、位袍、船艦訓、日蔭之蔓、武藏鑑、まゝなき、田樂考、舊事紀剝偽、神代卷獨見、尉子五篇解等あり(續々人物志、鑑定、覽)

イセ ナガウチ 伊勢長氏「ホウデウナガウチ」

イセノ オホスゲ 伊勢大輔は歌人なり中古三十六歌仙の一人たり伊勢祭主大中臣輔親の女なり和歌を善くし紫式部和泉式部小式部等と名を齊うし俱に上東門院に仕ふ大輔初め宮に入る關白道長側に侍す時に櫻花を獻する者あり道長筆研を取りて大輔に授け和歌を題せしむ大輔筆を乘りて立どころに成る曰く「古のならぬ都の八」櫻けふ九重に匂ひぬるかな」道長大いに感賞す其の敏捷此くの如し(大日本史)

イセム 伊川「カノイセム」

イセム ブムサイ 以船文濟は武州の人なり初め密教を學ぶ後ち棄て去て野州大平に住き培芝に參せり俊屋に謁するに及びて玄旨を悟り俊屋の死するに際し其の席に補たり武州平井の令某氏が寶光寺を創して師を開山始祖と爲す天文丁未の年寂す(海上勝遊錄)

イセヤ ジョセツ 伊勢屋如拙は奥州水澤の俳人なり

如拙は其の號、一に福壽軒の號あり伊八と稱す弘化頃の人(俳諧海内人名錄)

イソガハ レウアム

イセヤ ソウテキ 伊勢屋宗滴は泉州堺の茶人なり武

伊勢屋の門人(茶人系傳全集)

イセヤ ハチベエ

伊勢屋八兵衛は俳人なり別號小知江戸の人豪放爽快にして好みて俳諧を作り書三井親和に學ぶ晩年に産を破る俳諧を以て業と爲し其の居る所に就て神田庵と號す嘗て曰く人は童心を失はざるを要す高尙理を論じて更に何事かを傲し得ると乃ち多く兒童の玩具を蓄へて左右に陳列す紙虎鬚馬、河豚鼓、蘆管笛、錯落として幕布し八兵衛從容其の間に居り吟詠自若たり人其の癖好たるを知り亦た遺くるに玩具を以てす八兵衛大に喜ぶ故を以て家益を貧し一日貴公子を訪ふ公子贈くるに金を以てす八兵衛乃ち途に玩具數十を購ひて剩す所數錢に過ぎず僅に薪米の費に充つ文化三年江戸大に災し八兵衛も亦た災に逢ふ門人變を聞て來り救ふ師の往く所を知らず皆な謂へらく翁年高し恐らくは焚死せりと分ちて之を四方に求む居ると一日罹災者數百人護持院原に屯す八兵衛松下に箕踞し筆を抽りて俳句百韻を批す絶えて火を知らざる者の如し卒する年九十二(讀傳)

イセヤ ヤスエモム

伊勢屋安右衛門は松本氏幸彦と稱す淺草藏前に住す性甚だ學を好む藏書萬卷同好の人有りは則ち親疎を論ぜず借覽を許し以て樂と爲す儒生編流神官等其の門に屬集す其藏書の所を名けて勝鹿文庫と稱す(相國漫錄)

イセ ヨシモリ

伊勢義盛は源義經四天王の一人にして伊勢の江村の人なり初め江の三郎と稱す嘗て姑夫を殺して久しく獄に繋がれ赦に遇て出づ上野荒時郷に往て居し劫盜を以て生を爲す義經の陸奥に往くや道上野を歴て義盛の家を以て義經其容貌を察して奇士用ふべしとなし遂に約して君臣と爲る軍に從て累に功あり屋島の役に平教經死すを帥て戦を挑む義盛土肥實平等と力戦して之を拒ぐ會々日暮れて交、退く時に諸軍寝ねざること三日將卒皆な罷倦して昏睡す義經敵の偵知して之を襲はんことを慮り高きに登りて瞭望す義盛片岡經

イセ ナガウチ

春と終夜軍を巡りて之を警しむ是の夜教經義經を襲はんことを謀りて遂に果さず義經既に屋島を破り義盛に命じて田口成直を誘降せしむ是より先き成直宗盛の命を承けて三千騎を率ゐて河野通信を伊豫に破りて還る義盛十數騎を從へて之に赴く皆甲を被むら先づ一卒をして旅客の裝を爲して往かしむ成直軍を廻り見て問ふて曰く汝馬くにか往く曰く屋島より伊豫に赴く曰く屋島何事かある曰く九郎判官大軍を率ひ攻めて屋島を破り内府以下宗族多く虜と爲り櫻間大夫擒に勝浦に遣ひ貴父民部大輔戰敗れて降る其の餘或は戰死し或は溺死す熊野別當河野四郎も亦た舟師を以て往て之に屬す是の外騎兵四國九州より益集して阿讃の縁海は兵衆雲の如く判官軍を駐めて服せざるを撃つと其の他は則ち我れ聞かずと成直聞て落膽し歎じて曰く家君の敵に降る豈に我故を以てか然れども路人の言遽かに信ず可らずと進て琴造宮に至りて義盛に遇ふ義盛曰く子は田口左衛門に非ずや吾は是れ源家の郎黨伊勢三郎なり吾れ子と戦はん欲するに非ず一事あり而あたり之を論さんと欲すと成直馬を進めて近づく義盛曰く我軍既に屋島を破りて内府以下宗族皆虜と爲り子が父既に降る櫻間大夫も亦た擒へられて皆我營に在り子が父一たび君を見んと欲して日夜泣く恩愛の情固と應に此くの如くなるべし吾れ之を聞くに忍びず子をして之を知らしめんと欲し故らに來りて之を諭す子戦はん欲せば戦へ降らんと欲せば則ち降れ子儻し再び父を見んと欲せば則ち吾れ子の爲に父の命を乞はん成直之を聞て乃ち背を免ぎ弓を弛めて降る義盛曰く己に降らば宜しく士卒を率ゆべからずと乃ち其の徒をして皆散去せしめ成直を將て志度に至る義經歎賞す幾ばくも亡く成直の父成良一に其能も亦歎附す壇浦の戦に義經宗盛清宗を生獲す義經の宗盛を押送するや義盛從ひて鎌倉に赴く途中に後藤基清と僕從の故を以て殆んど鬪闘す基清は藤原能保の從兵なり能保義經と同じく開諭して解くことを得たり頼朝聞て悲り是に由りて頼朝の爲

イソガハ レウアム

めに悪まる義經將に京師を去らんとするに及びて義盛曰く臣此れより辭せん公西海に至る比ひ當に退ふて奉從すべしと遂に伊勢に歸りて守護首藤經俊を襲ふて克たず鈴鹿山に窟匿す經俊來り撃つ義盛自殺す(大日本史)

イセ リツアミ 伊勢立阿彌は茶道を能くするを以て世に名あり利休と同時の人然れども其の師門及び歿年等詳かならず(茶人系傳全集)

イソガハ カウハク 五十川剛伯は加州藩の儒員なり字は濟之剛伯は其の名亦通稱に用ふ鶴舉と號す本姓源氏、平安の人梅菴の子なり常に武を嗜み刀槍の術に精し平生慷慨にして義氣を負ふ後節を折りて書を讀む延寶三年五月加州侯聘して儒官となす歳祿三百石を賜ひ水府の朱舜水に從ひて業を受けしむ元祿十一年十一月旨を奉して集學聚文辨并に助語集要を編集す又詩範一部を撰す功成り奥村易英に由りて進呈す侯之を嘉賞す十二月其の子の贖銀の事に坐して禁錮せられ明年五月二十六日能州曲色に謫せらる(飛騨雜風)

イソガハ マサヤス 五十川昌安は裝劍師なり源七と稱し養松堂と號す永川堂の弟子なり濃州大垣傳馬町に住す尤も刀脇差の身に極をかくに妙を得たり(裝劍奇賞)

イソガハ レウアム 五十川了庵は醫者なり名は春昌一の名は宗知、後ち春意と改たむ了庵は其の通稱、祖は淨鑑父は了任、了庵天保七年を以て京師に生れ八歳にして世醫盛方院紹繼に養はる居ること七八年業を紹繼に受け復た内田黙了庵細川興元に從ひて豊前小倉に赴く明年了庵初めて太平記を梓に刻し以て世俗に便にす事幕府に聞ゆ家康了庵をして新に東鑑を刻せしむ年月を歴て功成り以て之を獻す八年家康了庵をして信州河島に往き羽林忠輝に仕へし忠輝は家康の愛種なり後ち忠輝封を越後に益すに及びて了庵も亦た二百石を加賜せらる國に在りて花井氏の娘の熱病を療して効あり秀

イソガヒ マサヒサ

忠聞て之を褒む是に於て歴下の士林も亦た其の名を知る又瀧川氏の内傷を治して驗あり家康書を忠輝に賜ひて之を感美す元和中忠輝事に坐して國を除かる了庵時に四十三洛の舊宅に歸休す此より筆任に意なく閑居すること四十餘年方技益々進み聲名愈々顯はる刀圭の暇好みて書を讀み頗ぶる和歌を嗜しむ老て益々矍鑠として飲食減せず問對流るゝが如く方書を點檢し自つから細字を寫す毎に病家の告ぐるれば還通を問はず駕輿して往き昇く者足疲るれば則ち徒歩して還る寛文元年死す年八十九著はす所藥石異錄 針灸要略 飲食纂要等あり

イソガヒ マサヒサ 磯貝正久は赤穂四十七士の一人なり十郎左衛門と稱す兄を内藤萬右衛門と曰ふ幕府の土松平與右衛門に事ふ正久幼にして機悟敏を學び散樂を能くす年十四堀部金丸の薦を以て淺野長矩に事へて見小性となる長矩好みて書を讀む正久借書を善くするを以て命じて書を寫さしむ是れより絶て鼓を擧げず物頭並に遷り百五十石を食む長矩の死するや正久片岡高房と極を護して泉岳寺に至る悲憤に勝へず各々髪を斷て還る二人相ひ謂て曰く義典は仇なり吾等國の重恩を荷ひて仇讐を斬らざれば何ぞ生を用ふることをせんて計を聞かざるは誤なり居て將に赤穂に赴かんとする時母に謂て曰く兒縱令國に淹滞するも請ふ幸に割愛書問を勞する勿れと母之を許す遂に高房と俱に赤穂に至る大石真雄に見え事を議して合はず乃ち衆に謂て曰く君等城に死せ我は仇に死せん國に殉するは一なり君等之を勉よと遂に江戸に還る既にして衆復仇を謀ると聞き吉田兼亮に由り真雄に請ひて盟に與る衆或は其の年少うして信し難きを疑ふ而れども正久高房と復仇の議を執り終始變せず其の後母疾に嬰りて死に瀕す會々衆事を舉く正久慨然之に赴き進みて吉良氏の第に入る室中闇黒衆向ふ所を知らず正久乃ち一人を執へて蠟燭を索め毎室に之を燒く兎籠畫の如し衆其の機敏に服す明日泉岳寺に赴く路將監橋

イソノカミ ヲケツク

を過く真雄等正久を顧て曰く卿か兄の家近きに在り宜しく往きて母氏を省すべし正久曰く今日何ぞ敢て私親を省みんと竟に往かず堀部金丸細川氏の第に在り人に語りて曰く同盟の士は率ね皆な世臣なり正久新進の少年則ち能く奮勵難に赴く世臣に愧ぢず豈に得易からんやと死する時二十五(赤穂四十七士傳)イソガヤ サウシウ 磯谷滄洲は儒者なり名は正脚字は子相覺左衛門と稱す滄洲は其の號尾張の人松山君山に學び博洽を以て聞ゆ明和中朝鮮來聘のとき其の學士南秋月筑前の龜井道載及滄洲を併ひ稱して東海の鸞鳳と曰ふ享和二年歿す歳六十六著す所尾張國志滄洲文集あり(續諸家人物志 龜井道載傳)

イソガヤ シムザエモム 磯谷新左衛門は江戸の茶人なり伊丹宗朝の門人(茶人系傳全集)イソ ジムザウ 磯甚藏は石州流の茶人なり有寄庵と號す岡田道竹の門人(茶人系傳全集)イソダ コリヨウサイ 磯田湖龍齋は浮世繪師なり庄兵衛と稱す江戸小川町土屋家の浪人後ち兩國藥研堀に住す浮世繪を善き法橋に叙す然れども巧みならずと云ふ(扶桑繪人傳)イソナミノオキナ 磯波翁(ヲカダバムサイ)イソノ カヅマサ 磯野員正 磯田家譜には近江の人なり父を員吉と曰ふ員正父死して其の後を嗣ぎ丹波守と稱し淺井氏に隸す元龜元年六月姉川の戦ひ其の先鋒となりて野村に陣し坂井正尙と奮戦し敗れて士卒散す會々長政の麾下來り援け再び進みて羽柴秀吉と相ひ撃つ後ち隊散れて潰散し自ら餘兵を率ゐ退て佐和山を保つ織田信長遂に師を進めて員正を圍む員正險阻に據りて防禦し二年二月勢撓みて降を乞ひ終に城を致して高島に移り天正元年九月杉谷善任房を擄にして之を岐阜に送ると云ふ(野史)

イソノカミ マサヒサ

イソノカミ アナホノミヤニアメノシダシロシメシ、スメラミコト 石上穴穗宮御宇天皇(アムカウテムワウ)イソノカミ オトマロ 石上乙麻呂は物部目の後胤なり父は左僕射、地望清華、當時の右族たり左僕射の季子なるが故乙又た弟麻呂と稱す性穎敏にして雍容閑雅尤も風儀に善く少にして學を好み墳典に耽ける翰墨詩賦當時に冠たり久米若女に姦せし罪を以て土佐に流さる臨淵吟澤志を文藻に伸べ悲操二卷を作る天平中詔して遣唐使を簡ましむ從來此舉は其の人を得るに難んず之を朝堂に選ひ乙麻呂の右に出づる者なし遂に徵還して大使と爲す衆皆時の爲めに推さる、此くの如きに服す而れども事果さず後ち從三位に進み中納言兼中務卿に拜せられ遂に台位に登る風采日々新に芳猷遠く傳ふ勝寶二年卒す著はす所の書亡せて傳はらず詩篇は僅かに懷風藻に存す(日本書紀傳、大日本史)イソノカミ カタナ 石上堅魚は養老三年從五位下を授けらる神龜元年内物部を率ゐて神橋を齋宮南北二門に立つ三年從五位上に叙せられ天平六年正五位下に進み八年正五位上に至る(萬葉集作者履歷)イソノカミ ノウジ 石上皇子は欽明天皇の皇子母は皇妃倉稚媛なりイソノカミ ヒロカノミヤニアメノシダシロシメシ、スメラミコト 石山廣高宮御宇天皇(ニムケムテムワウ)イソノカミ ツツノオホカミ 石上布都大神(一に布流大神に作る)は佐士布都神又の名は斐布都神又の名は布都御魂神を祀る大國主尊國土を天孫に獻するの後天照太神建御雷神をして再び降て中國を循撫せしむ建御雷神曰く僕自ら降らずども専ら此事に任せる乃佐士布都神を降さんとは石上に祀る神祇なり素盞鳴尊授る所十握劍即是なり祭神は鹿島明神と同一二十二社の一に列す大和國山邊郡に鎮坐す(古事紀、二十二社本編、二十二社註、延喜式神本編)

イソノカミ ヲケツク

イソノカミ ベノウジ 石上部皇子は欽明天皇の皇子母は皇妃堅鹽媛なりイソノカミ マロ 石上麻呂本姓は物部連、大連目の後、衛部字麻呂の子なり壬申の亂弘文帝敗走し大臣以下皆な散ず獨り麻呂之に従ふ天武の朝大乙上を授けられ遣新羅大使と爲る年を除て還る小錦下直廣參に昇進し姓石上を賜ふ持統の朝筑紫に赴て新城を監す尋で直廣壹に進み資人五十人を假し直大壹に進めらる文武の朝筑紫の總領と爲り尋で中納言に進む大寶元年正三位を授けられ大納言兼大宰帥と爲る慶雲元年右大臣に轉り封二千一百七十戸を益す和銅元年正二位に累進し左大臣に轉す都を平城に遷すや麻呂難波京留守と爲る養老元年薨す年七十八帝深く悼みて朝を廢す式部卿長屋王左大辨多治比三宅鷹をして第に就て弔購せしめ從一位を贈る百姓追慕、痛惜せざるなし及其の家に繩壹百匹絲四百約綿一千斤布二百端を賜ふ(大日本史)イソノカミ ヲケツク 石上宅嗣は黃門乙磨の子なり性敏悟にして辭容閑雅心を經史に潜めて涉覽する所多く善く文を屬し兼ねて草隸を工みにす淡海三船と文人の魁と稱す勝寶の初め朝散大夫に叙し治部少輔に補せられ後ち文部大輔に遷り内外官に歴任す寶字中藤原真繼の事に坐して大伴家持と俱に吏に下され日ならずして解くことを得たり景雲の初め參議に銀青光祿大夫に至り實龜の初め出で、大宰帥と爲り居ること幾ばくもなく入りて式部卿に遷り藤原永平等と定策して光仁帝を立て中納言に拜せられ請ひて姓を物部と更ため遠祖の姓に復す後ち數年詔して石上に復し大納言に轉じ金紫光祿大夫に至る宅嗣平素心を文雅に留め山水景致以値へは便ち筆を把りて懷を撫す著はす所の詩數十篇世襲して相傳ふ今亡せて傳はらず唯だ小山賦一篇を存するのみ天應元年官に卒す(日本書紀傳)

イソノ ガムセム 磯野岩泉は俳人にして焦翁か門人なり其の句に「さし木せし人は白髪か古柳(俳林小傳)」イソノ キヘエ 磯野喜兵衛は装剣師なり升屋小左衛門の男京都御幸町御池上ル所に住す(装剣奇賞)イソノ ジョウチク 磯野乗竹は装剣師工なり升屋文右衛門と稱す寛延のころ小左衛門と改む京師に住す(装剣奇賞)イソノ セイハク 磯野正伯は装剣師工なり升屋小左衛門と稱す京都御池柳馬場東へ入ル所に住す(装剣奇賞)イソノ セイニフ 磯野正入は装剣師工なり小左衛門後小兵衛と改む京二條鉄屋町西へ入ル所に住す(装剣奇賞)イソノ ゼムシ 磯禪師は源義經の妾靜の母なり京師に住す(装剣奇賞)イソノ タメカズ 磯野爲員は源三郎と稱す父を右兵衛大夫員詮といひ世々京極家に仕ふ永正十五年淺井亮政を小谷城に攻む此時京極勢大に敗走し悉く敵の猛威に恐怖す爲員屈せず一歩も引去らず敵六騎を切斃し奮戦して遂に歿すといふ(約皮録)イソノ ヒデマサ 磯野秀昌は淺井長政の臣なり丹波と稱す姉川の戦長正に従ひ織田信長の兵と戦て大に武勇を顯はせり(本朝武功正傳)イソノ マサヒロ 磯野正博は装剣師工也小左衛門と稱す京都二條鉄屋町西へ入ル所に住す初め正勝と銘す(装剣奇賞)イソノ マサモト 磯野正元は装剣師工なり俗稱升屋小左衛門と曰ひ京都御池柳馬場東へ入ル所に住す(装剣奇賞)イソノ ノリマロ 磯法麻呂は陰陽師なり和歌を善するを以て其の名四方に聞こゆ詠歌は載せて萬葉集其他の諸書に在り(萬葉集作者履歷)イソノ ヤシ シムザウ 磯林眞二は在韓公使館附武官なり

イソノ ガムセム

イタクラ カツアキ

り土佐國高知の藩士にして明治四年藩主に從ひて上京し御親兵に編入せらるる五年三月陸軍教導團に入り十二年七月更に陸軍士官學校に入る臺灣の事起るに及びて陸軍歩兵少尉試補に擧げられ八年一月歩兵少尉に任ぜらるる偶々朝鮮の頑民我が雲揚艦を砲撃するの事ありて政府黒田特命全權大使を派して其の事を所理せしむるに會し隨行の命を受けて彼地に航す先の陸軍大將西郷隆盛等亂を鹿見島に作すや眞三師團團長に任ぜられ又征討第二旅團參謀を命ぜられ大に田原坂に戦ひ後肥薩隅日の間に轉戦し遂に城山を圍み自ら請ひて進撃隊に屬し衆の命を奉じ單騎にして竹橋の兵營に至る其の途次暴兵の群撫の命を奉じ單騎にして竹橋の兵營に至る其の途次暴兵の群に遇ふ衆皆銃鎗刀劍を揮ひて眞三の前後を圍繞し將に手を下さらんとす眞三乃ち機智を運らし大聲呼びて曰く余も亦た微意なきに非らず請ふ少しく余が言を聞け抑々黨を樹て事を擧げんと欲するものは必ずや首長なかるべからず余不敵と雖も亦た少しく經驗に富めり敢て請ふ其の任に當らんとすと諸兵乃ち遂に退いて追らざりて一兵あり衆に代り進みて曰く公の言大に理あり某等推して以て將と爲さん請ふ早く令を掌れと眞三之を諾し馬首を轉じ諸兵を率めて皇居の門外に至り又謂て曰く衆暫く茲に待て余入りて以て謀る所あるべしと乃ち近衛局に至り事情を悉して申報し仍りて以て是等の諸兵を悉く捕獲せりと云ふ十五年七月朝鮮に大院君の亂あり我公使通れて長崎に歸る己にして政府訓令あり公使をして再び韓城に入り謀る所あらしむるや眞三命を奉じ公使花房義實に隨行して大に盡力する所あり十月同國公使館附を命ぜらるる是より後朝鮮に在りて公務に執掌し傍ら彼の國語を學ぶ十六年二月歩兵大尉に任ぜらるる十七年十二月又朝鮮京城に變あり是より先き眞三は内地旅行の命を帯びて語學生徒赤羽平太郎及び從者某を從へて京城を發し十二月五日龍仁縣に達し夫よ

り道を水原道に轉じ黒川縣を経て將に歸京せんとす偶々變亂の起るに會す人其の京城に入るを危み皆之を止む眞三聽かずして曰く己に京城の急報を聞きて命を惜み難を避くるが如きは日本男兒のなきざる所なりと遂に決然馬に鞭ちて直に南大門に進む門を去る僅に五六町青坡驛に至りて暴民の爲めに圍まれ終に戦死す後其の屍を檢するに全身傷かざる所なく慘狀觀るに忍びずと云ふ後竹添公使其の屍を斂めて之を仁川路傍日本人埋葬地域に葬る各國公使領事其の他貴紳及び我が海陸の武官會葬す實に明治十七年十二月二十一日なり子あり熊一と曰ふ後政府其遺族に祭祀料八千圓を賜ふ(時事新報)イタガキ ソウタム 板垣宗愷は水戸藩の儒醫なり名は矩字は隆徳、眞菴と號す宗愷は其の通稱、亦中村氏江戶の人業を幕府醫官方啓院に受く水戸侯に仕ふ兼て儒學に善し侯修史の擧あり命じて編纂に任す爲めに朝に請ひて法橋に叙す侯又萬葉集の正解なきを憂ひ諸説を薈萃し折衷して一に歸せんと欲す宗愷又其の事に參す未だ竣はらずして江戶に歿す時に元祿十一年六月九日なり年六十一、宗愷人となり方正嘗て宴に侍す或人侯に勸めて曰く宗愷少して猿樂に慣る必ず觀るべきあらん盍ぞ試に之を爲さしめざると侯宗愷に命ず宗愷頹然目を張り肯て命に應ぜず一座興を失ふ侯徐言して曰く儒醫の道は弄臣と同じからず宗愷堅く拒む固より其所なりと因て褒賞を賜ふ勸者大に慚づ(皇國名醫傳、香齋得聞、江戸名家墓所一覽)イタガキ ノブカズ 板垣信形は武田氏の功臣なり或は信方に作る駿河守と稱す信虎に仕へて其嫡子晴信の傅たり信虎次子信繁を愛して晴信を廢せんとす信繁は凡庸にして晴信は慧敏なり信形諸老臣と謀り晴信を助て家を襲ぐを得せしむ晴信初陣に平賀源心を亡ぼし漸く驕奢の心を生じ宮室を起し日を詩歌管絃に消す信形思ふ所あり僧某に就て詩を學ぶと三十日晴信の詩會に際して諫めて曰く君近く武事を忽にして風流に耽る亂世に在て不急の事なり臣詩を學ぶ三十日粗々其

イソノ セイハク

イタクラ カツアキ

の要を得たり武事に於ては三十年日猶は足らずとすいま君にして臣が諫を納れ詩歌を廢して武事の練習に志さずんば臣將に死して鬼となり以て君家詩を賦する人に災せんとすと目を瞋し刀を把て諫む晴信大に覺り専ら軍國の事を治む武田氏の威爲に遠近に振ふ信形軍ある毎に參謀となりて功あり諷諭の郡代となり伊奈城に居る天文十五年三月戸石の役晴信上義十月竿吹の役晴信上義晴信に代りて諸軍を督し戰捷を得て大に賞を得たり乃ち豐應を設けて士卒を勞ふ饗膳二あり一は佳肴を供へ一は粗菜を以てす功ある者には甲を與へ功なき者には乙を與ふ衆喜ぶ者あり慚る者あり爾來皆死を決して善く戰ふに至る役罷みて諷諭に歸り子信里の室に至る會々床に扇面歌を題する者あるを見る因て問ふ曰く晴信公の賜ふ所也其の歌を見れば則ち曰く「誰も見よ滿ればやがて虚る月の十六夜の空や人の世の中」と蓋し世を誡むるの歌なり信形沈吟涕泣して曰臣竿吹の役敵の首級千二百餘を得て欣喜に堪はず主公に代て實験の式を行ふ此の歌或は其の式主公に傳したるの咎めなり臣今鴻恩を被むり公族の上に班し諷諭の郡代を辱うす主公或は臣が終に主家を犯さんとするの志あらんを疑ひ此の歌を以て暗に諷するものなりと是より時あらんを疑ひ此の歌心なきを明さんと欲すと明年八月廿四日信州上田の役晴信の先鋒となり村上義清と戦て大に捷つ將に軍を還さんとす敵將安中一藤太急に之を襲ふ信形奮戦之れを拒ぐ安中が士上條織部信形が傷を被り疲るゝを伺ひ終に相闘て信形を殺す(野史)イタガキ ミムブ 板垣民部は京師御靈社の祠官なり山崎垂加の門に入り神道を學びて之れを唱ふ(鑑定履歷)イタクラ カツアキ 板倉勝明は安中城主なり字は子赫甘雨又た節山人と號す勝重の裔勝尙の庶子幼字は鶴五郎又百助と曰ふ文政三年五月年甫て十二封を襲く從五位下に叙し伊豫守を襲稱す天保十四年十一月奏者番に拜す明年五月病を以て職を免ず勝明學を好み林樗宇、古賀侗菴を延き經史を講究



其の加番を以て大阪に在るや藤崎、後藤機等を召し孟酒文を論じ布衣の交の如し人となり英敏抗爽競奔を喜ばず諸侯の燕會逢迎一切謝絶す朝請を奉じ邦政を聽くの餘終日案に對し經史を貫穿し傍ら國乘に及ぶ尤も體操に精しく又善く文を屬す著はす所西征紀行、東還日記、中禪寺紀遊及び文集若干卷家に藏す嘗て深く慶元以來儒先の著述日に溼滅に就くを惜み多方搜索し參伍校訂以て朝嗣に命じ名けて甘雨亭叢書と曰ふ藩風の遊情に流るゝを歎じ改革一新す幕府の士下曾根某西洋砲歩操を以て名あり勝明臣某を遣し之を學ばしむ人咸な之を嗤ふ已にして外艦屢々來り廟議海防を嚴にし西洋歩操時に行はる識者始めて其先見を服す又命じて楮、漆及び杉木を開曠の地に植ゑ以て民産を饒にし橋梁を修め驛舎を飾り以て行旅を便にす其の他施設務めて遠大を期す文化六年十一月十一日に生れ安政四年四月十日に卒す享年四十九行狀諸家著述目錄

とも是れ公事なり拜するを拜せざるとは真人の心にあり委美を預り聞かん勝重曰拜と拜せざるとは敢て吾が心にあらざる子の心にあり古より今に至る迄和漢共に重職に任し顯著に補せられて宗を滅し身を亡す者少しとせず而して其原因は或は内廢に就き或は苞苴に依る災害多く婦女子に發す若し我れ命を拜して後設令親戚と雖も子其訟獄を拒むべきか賄賂を卻くべきか且つ我身體言行異性の業ありと雖も發言するなきか其の盟約を聞くにあらざれば我必らず命を拜せず是れ則ち子と誓ひ議する所以なりと妻熟思して曰く惟々命是れ從はんと勝重怡然として神に盟ひ佛に誓ひ將に柳營に登らんとし服を裝へ出づ其の裝を逆にす妻遽に之を言ふて改めんとす勝重色を作して曰く前の盟は是なり何を遺失の速なる此の如くなれば我れ命を拜する能はずとて將に服を脱せんとす妻悔歎して謝す勝重乃ち出づ家康曰く婦何を謂ふ對て曰く拜すべしと笑て曰く可なり勝重職に就き請謁を杜ち苞苴を絶つ法を奉し理に循ひ努て大體を存す境內翕然として其吏の稱あり遂に小田原及び關東の代官を兼ぬ武藏の田一萬石を賜ふ慶長六年五月所司代を京師に置け勝重及び加藤正次を擢びて之れに任ず尋て正次本願寺壇地に關し私斷あるに坐し罪を獲る勝重命を蒙て專ら之に任ず是時に當り大亂新に平らき衆心だ一ならず畿甸故に征れて動もすれば口を豐臣氏に藉り未だ東征の施措に安んぜず是の職たるや上み宮闈より下も公卿百司に至るまで公私の事務皆辨せざるを得ず時未だ禁下に理官を置かず故に四民の賦役、關訟、市井の禁令、寇盜の詰誅より傍ら神戶佛宇の控訴請求に至るまで舉て一舉に領す勝重上を奉し下を御す字誠條達、威和并び行はる萬緒叢委と雖も雍容之處し裁決流るゝが如し府に滯案なく獄に淹因なし貴賤目を拭て新政に推服す勝重幼にして浮屠に歸す家に歸るに及て既に吏事に從ふ故に亂世に居り未嘗て甲を擯し陣に臨まざ然とも功或は執矛の右に出づ職にあり二十年家康心を傾けて之を信任せり

イタクラ カツシゲ

イタクラ シゲノリ

九月三河の田六千六百十石餘を加賜す八年二月從五位下に叙し伊賀守と稱す十四年九月山城の田九千八百六十石を加賜す五年從四位下に叙し侍從に任ず六年職を辭す子重宗之に代る是より先き勝重屢々其の職を辭す慰諭すれども固く請ひて止まず秀忠曰く孤未だ其の人を得ず汝宜しく衆を選び以て登庸すへしと勝重答て曰く臣洛にある年尚し故に諸士の美惡を識らざる請ふ君之を擇べ若し強て臣に選舉せしめば則ち愚子重宗なるか彼れ驚と雖も密夫を誡すべき者にあらざる聽さるれば則ち臣の闕を補はんと公悦ひ重宗を召し之を命ず重宗亦固辭す公曰く子を知るは父に如くはなし汝の父の薦る所なり故に補す重宗職に任じ初めて京師に入るや勝重之に謂て曰く余聞く頃日一子あり寺に就き佛道を學ぶ一日家に還り其の父に告て云く寺主公無道にして忍び難しと父之を叱す子答て云く嘗て味増を搢れば其の能はざるを譴る固に入れば之を責む鬚を剃れば亦之を呵すと父以て然りと爲す乃ち寺に適き具狀して爲めに暇を乞ふ主僧云く事皆實に反す彼れ鬚を剃り移し杓子を把て之を壓す遂に杓子を折る乃ち是也と其の數本を取て之を示す又新に寶圓を修造して錠を鎖す彼れ錠を裂き固に入りて晝寝ぬ錠を取り之を示す又頃間少しく毛鬚を剃り得る因て試に余の頭髪を剃らしむ彼れ求めて其の子の惡を知れり公事と雖も示す是に於て其の父初めて其の子の惡を知れり公事と雖も亦斯の如し片言以て訟の理非を定むべからず交々審考熟議を盡せば則ち理非明辨す必らず偏決すべからずと重宗能く庭議を守り遂に亦其吏の稱あり勝重粟生永勝の女を娶り重宗を生む粟生氏初め中島重次に配す二女一男を産み而して再ひ勝重に嫁す勝重養ひて子となす男名は重好字を與五郎と稱す天正十八年家康命して中島氏に復し重次の後とならしむ(野史)

戸の人、父復軒徳川幕府の士なり瑣漢物徂徠に師事す聰敏人に絶す而れども放蕩不軌、太宰春臺嘗て衆人の前に面折す瑣漢此より春臺を輕誣して曰く渠一錢も直せずと護園の徒嘗て服部南郭の家に集る春臺獨り後れて至る足過ちて瑣漢の刀を踏む義當に拜謝すべし然るに徑ちに上方に坐し一言過ちを陳へす瑣漢恒に春臺の乖僻動もすれば苛禮を以て己れを律するを憚る是に於て特に春臺を目し自ら其の刀を執り之を己れか額上加へて之を拜す春臺意色特に惡し瑣漢都下に教授して藝苑に稱せらる著帆丘集あり(近世談話)

イタクラ シゲサト 板倉重郷は重宗の嫡子なり寛永十三年十二月從五位下に叙し長門守に任す後阿波守に改む明暦三年父の家督を繼ぎ五萬石を領す萬治元年七月寺社奉行となる寛文元年十二月十八日卒す年四十三(諸王略傳)

イタクラ カツシゲ

イタクラ シゲノリ

腐を食はず故に市街に出て、之を食ふものは犬なり鹿にあらざるなりと社人僱服す  
イタクラ シゲマサ 板倉重昌は重勝の第二子なり初字は宇右衛門又主水と稱す勝重の二男重宗の弟なり慶長十年四月從五位下に叙し内膳正と稱す殊に食色を賜て營中の事を執る之を御近習出頭人と曰ふ大阪冬の役起る師に從ふ東西成きを行ふに及びて木村重成來て神盟の血判を監す家康衆を擧げ重昌を擧ぐ重昌時に歳十八城に赴き右府秀頼を見る進て左右を顧みて曰く右府公容量聞く所に超ゆ嘗て聞く膝の長け扇と等しと今日幸に咫尺するを得る親しく容姿を窺ひ營に還り具之を啓せんと扇を把て坐を起ち秀頼の膝を計るに擬して載書を熟視す尋て秀頼宛名を問ふ重昌曰く東西和穆始て成る幕府は乃ち秀忠公なりと乃ち以て對ふ會、家康謂らく内膳を城に遣り孤第一事を遺失す宛名を何と爲せりや答て曰く臣命を奉せし一萬五千石を領す寛永十四年冬耶蘇の教徒島原に蜂起す重昌命を受け征討使と爲りて發す教徒未だ滅せず幕府復た松平信綱を遣はして之を伐つ十五年正月朔重昌其の賊巢を冒して死す歳五十一法名劍峯源光と曰ひ攝月院と號す重昌初め征討の命を承くるや會、腫物を患ふ諸老或は曰ふ他人をして之に代らしむべし酒井忠勝曰く否々諸老未だ人を識らず設令重昌腫を患ひ堪へざるも人をして代らしめは彼れ必らず生きず之を遣るに若かずと重昌深く其の言を徳とす信綱再發すと聞き子重矩を誡て曰く子孫に至る迄忠勝の義を護るゝなかれと遂に之に死す子二人あり長は即ち重矩次は重直從五位下に叙し筑後守と稱し采邑を領ち幕府に仕ふ

り徳川秀忠に仕ふ慶長十四年四月從五位下に叙し周防守と稱す屢從隊番頭に十人徒歩等の隊長と爲る殊に采邑六千石を賜ふ元和六年父に代て所司代と爲り食邑二萬七千石を併有す九年十一月從五位下に叙し尋て侍從に任ず寛永元年父の遺領を繼ぎ采邑を弟重昌に領ち舊邑を併せて三萬八千石を食む十年四月一萬二千石を加賜し正保二年五月右近衛權少將に任じ尋て從五位上に轉ず後水尾天皇詔して菊の記號を賜ふ承應三年七月職を罷め明曆二年關宿城を賜ふ是冬十二月卒す年七十法名秀峰源俊と曰ひ松雲院と號す重宗沈重能く慮りて後行ふ父勝重在職の秋徳川家光假に公事紊亂の論を設け子重宗重昌兄弟を召し之を判たしむ重昌直ちに理非を裁判す重宗沈重能く退き兩三日を歴て對ふ重昌の裁斷と異らず衆擧て重昌の才敏を稱す他日勝重入て見る家光兄弟の裁斷を説く勝重匍匐對て曰く内膳弱にして智なし周防量あり庸ゆべし家光恠み問ふ答て曰公事は則ち國政、國政は重務、一言を以て億兆に施す是非決斷尙もすべからず熟思再三にして後決すべし是を以て周防登庸すべきなり内膳鼻頭の辨才のみ事を任する甚た危しと宗重父の職を襲ふ詔を聞く毎に必らず先づ西に向て遙拜し後ち出で、廳事に臨む躬親ら香を引き茶を碾し紙障を隔て、而して之を聽く未だ嘗て詔者の顔を視ず人其故を問ふ重宗從容語て曰く吾聞く愛宕神は甚た靈驗なり吾れ獄を斷する一正しからされは神必らず極罰す抑、詔を聽くの明暗は吾か心の動靜に由る心靜なれば則ち茶の落碾必す細かなり心動けば則茶必す細かならず詔を聞く亦猶ほ此くの如し且夫れ人の面温柔の者あり猛惡の者あり吾先づ其の面を視は則ち其辭を聽かすして正邪曲直既に胸中に決す然れども人心の知り難き未だ遽に外貌を以て之を卜すべからず猛惡なる者は必ず正しからざるに非ず温柔は必ず皆正しきに非ず此を以て障紙を隔て、而して之を聽く所以なり其の心を用ふる緻密此の如し故に職に在る殆んど四十年人之に服す二男子あり長重柳次は重形重

イタクラ シゲマサ

イタザカ ボクサイ

郷父の後を繼ぐ(野史)  
イタクラ セツサム 板倉節山「イタクラカツアキ」  
イタクラ タマシゲ 板倉忠重は好重の子なり宇右衛門と稱す天正二年遠州高天神城の戦に松平家忠に隨ひ冒首一を獲たり後ち遠州小山を攻むる時家忠の先手となり首二つを取る天正十二年長久手合戦に家忠及び酒井忠次の家人中にて強兵五十を撰ひて密に敵の機勢を伺はしむ此時忠重第一に合戦し功あり寛永三年三月朔日卒す年八十三(野史)  
イタクラ フクサム 板倉復軒「板倉氏自らは徳川幕府の麾下なり名は九字は惇叔、復軒は其の號、九右衛門と稱す江戸の人、將軍家宣に潜邸の時に仕ふ當時之を甲府殿と稱す其の邸を櫻田御殿と曰ふ復軒幼より學を好み業を木下順庵に受く故に始め其の薦を以て侍史となり後ち家宣宗藩より西城に入るに及びて擢んでられて御勘定方となる幾もなく司計曹長となり正徳中三城丸御留居番となる復軒嘗て論語を經筵に講す季文子三思而後行之章に至り極めて集注に在る所の程子圈外の説を駁す一寵臣あり朱説を回護して大に之を難詰し威力を加へて之を屈せんと欲す復軒色を正うして辨對す其の辭詞累累條理あり寵臣再び言を發する能はず其の學木門に出つと雖も室鳩巢雨森芳洲等の如く程朱に於て毫も疑を容れざるが若きに非ず物徂徠と交り善く其子をして業を門下に受けしむ徂徠亦厚く復軒を禮す平生人の奇書を藏むるを聞けば百方之を求め必ず謄寫す故を以て得る所凡そ二百餘種五百八十卷の多きに至れり享保十三年四月廿三日歿す年六十四復軒人となり剛直にして顧避せず其の官署に在る時曹長甚だ復軒の謬譎廉直を疾む故に紛冗過り易きものは皆復軒を以て大器ありと爲して之に委屬す實は其の過失あるを俟て之に中てんとするなり然れども隙隙の乘す可きなし復軒又能く其の意を知り獨り任して之を終始す前後八九年にして一の過失なし著す所復軒雜記及文集等あり三子を擧ぐ伯は惇行字は敬徳蘭溪と號す

イタクラ シゲマサ

イタザカ ボクサイ

通稱助三郎職を襲ぐ仲は安世字は美仲帆丘と號す安右衛門と稱す叔は經世字は美叔、龍洲と號す經之丞と稱す昔物徂徠に從て學び文章を善くす安世特に藝苑に著稱せらるると云ふ(先哲叢談後編、事實文編)  
イタクラ ラムケイ 板倉蘭溪は江戸の儒者なり名は惇行、字は敬徳、助三郎と稱す蘭溪は其の號復軒の長男、業を徂徠の門に受く(鑒定便覽)  
イタクラ リヨウシウ 板倉龍洲は江戸の儒者なり名は經世、字は美叔、經之丞と稱す復軒の三男業を徂徠の門に受く(鑒定便覽)  
イタザカ ソウカウ 板坂宗高「イタザカボクサイ」初代高、宗徳の曾孫父を備後と曰ふ京師の人家世、朝廷の醫たり幼にして伶俐僧と爲りて南禪寺東禪院(或は曰く東福寺)に住し武田信玄の言に依りて甲陽に往き還俗して曰く微恙患ふるに足らざれば其數年の後必す發せん發せば則ち治むべからず請ふ早く之を計れと晴信可かす後ち果たして其言の如し天正中小田原の役に徳川家康に從ひ後ち田宅を賜はりて江戸に居り頗る恩顧に預つかる(皇國名醫傳、卜齋傳)  
イタザカ ボクサイ 板坂卜齋「二は醫人なり幼名は長太郎、如春と稱す又東赤と曰ふ卜齋初の子なり父徳川家康に仕ふ如春幼にして父を喪ひ家康吉田意安、同宗恂、施藥院宗伯等

イタバナ ケムケウ

イチウ シユムカ

に命して之を教導せしむ長するに及びて父の稱卜齋を襲ひ職府に給事す家康晩に尤も心を濟生に留め和劑局方に據り良藥を製し以て諸臣に賜ふ卜齋毎に其の事に與る徳川頼宣封國和歌山に就く時家康命して侍醫とす居ること數年世子光貞に従ひ江戸に遷る治療頗る効あり名聲大に顯はる後老を乞ひ淺草に退居す優游性を養ひ藥物を植えて自ら樂しむ又多く醫籍を藏め喜びて方論を聚む明曆元年病で歿す年七十八(皇國名醫傳、卜齋傳)

イタバナ ケムケウ 板鼻公棟校名は某何許の人なるを知らず實永年間の人なり幼にして眼を患ひ終に盲す稍長じ慧解あり一聞忘れず尤も和歌を能くす既にして甯を某侯に獲たり侯事あり信州を過く檢校從ふ姓棄山下に至る時に月色皎潔侯其の奇景を愛し願て檢校に謂て曰く汝も亦好懷ある乎檢校偶々我心なきさめかねつ更科のやあはすて山に照る月を見ての古歌を誦し乃ち其末句の一宇を改め濁音と爲して以て獻し兩日月色を辨せざるの感を述ふ侯大に其精敏を賞し寵遇益々厚し後官檢校に至る没すと云ふ(醫人傳)

イタミ カツナガ 伊丹勝長は康勝の長子なり姓は源氏中興武家盛衰記に姓は源氏初め藏人と稱す慶安三年七月勝長父の後を繼ぎて一萬石を領し甲斐の徳美に居り其の一千石を割きて弟勝重と與ふ勝長勘定頭となり萬石三年冬從五位下に叙せられ播磨守と稱す蒲原の代官一邑内藏助は好意にして私曲あり土民之を懇げ勝長之に處替を命せんす内藏助處替の忍び難きを哀陳し次座に進み刀を揮ふて勝長を斬る勝長爲めに死す歳六十一(子勝政傳)

するに及びひ旌を偃し降を乞ふ是より先き將軍義昭越前敦賀に在るの日親興人を遣し信を通し城邑三萬石を保有す後義昭京師に入るに及び親興信長に畔き火を河邊武庫近邑に放ちて之に應ず義昭爲めに兵庫の頭に任す元龜四年七月信長荒木村重をして來り伐たしむ親興拒戦力盡く遂に自殺し城陷る(所史)

イタバナ ケムケウ

イチウ シユムカ

イタミ マサチカ 伊丹正親は元豐臣家に仕へ後徳川氏に屬す關ヶ原の役に石田三成の臣物頭安宅作右衛門と銘を接へ既にして之を倒さんとす黒田長政の家人黒田三左衛門來て安宅を鑑倒し伊丹に向て首取を可しと曰ふ伊丹は諾して其の首を取らんとせしに既に重傷を蒙り遂に其の儘倒死す(君臣傳)

イタミ ヤスカツ 伊丹康勝は康直の子初字を喜之助と稱し姓は源氏中興武家盛衰記に姓は源氏駿河の人天正壬午の後徳川家康に仕へて眞賦の事を掌る大阪の役に從ひて首級を獲納戸頭と爲る寛永元年從五位下に叙せられ播磨守と稱す九年甲府城の在番と爲る十八年十二月頭毛盡く疑したるを以て入道して順齋と號す留守居の職を歴て松平正親と同しく天下郡國の吏務解結を掌ると而れども皆に達て其の職を罷免寛永十九年三月順齋酒井紀伊守及び杉浦正友と共に勘定頭と爲り農を勤め商を通して民と利を同うす一時稱して循吏とす後慶永二年六月卒す時に歳七十九、康勝能く吏牀に練達す其の勘定頭たりし時都下一豪商毎歲税金千兩を幕府に納めて悉く甲斐の小紙の專賣權を請ふ有司將に之を許さんとする獨り康勝固く執て之を不可とす執政問て曰く千金微なりと雖も國用を資るに足る子何ぞ獨り固執して不可となすや康勝曰く若し其法ありて盜を禦ぐべければ可なりと老中恠しみて之を問ふ康勝曰く小紙は貴賤用ふる所に於て一日も闕く可からず唯其の利を奪はんと欲せば此れ紙價を貴うして以て之を償ふの計に過ぎず紙價一たび貴とければ百物皆騰貴す其の勢必ず小民に及はん小民窮すれば盜を爲さずして何ぞ嗚呼千金の微を以て天下の民を困しむ殆んど我が肉を割き腹を充たすに異ならずと執政乃ち歎服す二子あり長は勝重次は勝長而して勝長嗣く(野史、名賢言行錄、常山紀談)

イタミ ヤスナホ 伊丹康直は駿河の人、姓は源氏中興武家盛衰記に姓は源氏加初め僧となりて津阿彌と號す甲將武田信玄駿藤氏の支流に作る

州に克ち康直をして俗に還らしめ更めて大隅守と稱し船手隊長と爲す子あり康勝と曰ふ(野史、君臣傳)

- イタミ ヤセウ 伊丹屋紹無は茶人なり千利休と同時の人(茶人系傳全集)
- イタミ ヤ ヒロナガ 板谷廣長は土佐流の書人なり廣當の子、童髪して桂舟と曰ふ父の業を嗣て書を善くす(扶桑書人傳)
- イタミ ヤ ヒロマサ 板谷廣當は土佐流の書人なり初の名は廣度、童髪して慶舟と云ふ住吉廣守の門に入りて書を學び師に越て活動あり當時の人之を賞せり廣當元青山大膳亮に仕ふ後徳川將軍に仕へ住吉家に次て柳營の書師となり寛政九年歿す(扶桑書人傳)
- イチア 一蛙は江戸の俳人なり氏は横井通稱梁右衛門と云ふ思林舎半日菴離目一鳥の諸號あり金令舎道彦の門人初め三世宗瑞の門人(俳諧人物傳)
- イチア 一阿は江戸の俳人なり氏は立川一掬庵と號す三世宗和の門人初め山口雪才の門人麻布に住す(俳諧人物傳)
- イチイウ 一有「チカニシ非チウ」
- イチイウサイ 一勇齋「ウタガハクニヨシ」
- イチイウサイ 一幽齋「ニシヤマンウイム」
- イチイウシ 一幽子「ニシヤマンウイム」
- イチウアマ 一雨庵「ゴシム」
- イチウサイ 一雨齋「イヒカハシウキヨウ」
- イチウ シユムカ 一字俊箇は相州の人、初め同州總世寺の安良に參し後去て諸方に遊び再び總世に歸れば更既に逝して智海其の處に補たり因て智海に從て教を受け已にして永平寺に出世せしが幾許もなくして智海の席を繼て總世に遷り

イチウム

晩年宗淵寺に退去して寂すと云ふ(海上職燈録)
イチウム 一運は大佛師なり法橋に任し此年代前後に絶
(てなき名工なり貞享三年十一月十一日歿す(佛工系傳)
イチウム 一雲は狩野派の畫人なり通稱彌三郎、肥前長
崎に住す畫法を狩野永徳に學び倭畫に長せり(扶桑畫人傳)
イチウムサイ 一雲齋、ウタガハクニナガ

イチウラ ナムチク 市浦南竹名は直春字は子木備前の
儒者なり寶曆頃の人(諸家著述目録)
イチエム 壹演は相應寺の住持なり平安の人、姓は大
臣備州の刺吏治知の子なり早に仕途に登る二兄相ひ繼て歿
す因て幻を厭ひ冠纓を解き藥師寺の戒明に就き出家して具戒
を受け常に金剛般若經を持す真如阿闍梨之を見て道器と爲し
授るに密教を以てす壹演居士定まらず或は水邊の樹木に或は
山間の岩口に至る所として休宿せざる無く偶々河内に往く一
老嫗宅を譲りて曰く此の地は商賣の巷、魚鹽の津なり師の深
悲に非ざれば誰か其の愚頑を諭さんや今此の宅を以て精藍と
す願くは此に居れと壹演基址を平にする時一の古佛像を得た
り時人傳へて以て異とす漸く天聽に達す有司に勅して其の功
を蓋せしめ寺額を賜ひて相應寺と曰ふ壹演土を運び方壇を築
き靈像を安置す其の壇忽ち變して白色となり宛かも石灰を塗
るが如し見るもの驚異す又感應寺を建つ會、皇太后不豫なり
壹演を召して之を咒せしむ立ち所に効あり太政大臣藤原良房
病に歿す壹演至れば疾即ち除す上大に悦び擢んで僧正とす壹
演固辭すれども許されずと云ふ貞觀九年七月十二日小舟に乗
して水に浮ひ泊然として化す壽七十五 元享釋書、東國高僧傳)
イチエムサイ 一烟齋、ウタガハクニナホ
イチオウ 一翁、オホクボイチオウ
イチオウ 一翁、シゲサト
イチオウサイ 一翁齋、ウタガハクニミツ

イチカハ エビヅウロウ

イチオウ ソウシユ 一翁宗守「セムサウシユ」
イチオム井ム クロムバク 一音院關白「フヂハラタ
ダイハ」
イチカハ イチザウ 市川市藏は多見藏の次男、安政中
江戸に技を演じて頗る聲譽ありしが後ち大阪に於て死せり
イチカハ ウダムジ 市川右團次は大阪の俳優なり市
川小團次の男初めの名は福太郎後右團次と改む俳名家升と號
す

イチカハ エビヅラウ 市川蝦十郎元は大阪の俳優な
り家名を播磨屋と曰ふ俳名新升、寛政元年大阪北の新地芝居
にて宮園淨瑠璃首振興行の時頭取市川樹右衛門といふ者口上
引合せにて此度の座本市川團藏門弟にて市川市藏と申升と云
ふ是れ此人の出初にて此時十二才也同年冬より博勢町の稻荷
子供芝居へ出永らく修行し通れ上手と稱美せられ同十二年
中の座親見世に初て出前狂言信仰記にて新作の役を勤め其の
後始終師匠市川紅に付て薄雪の妻平國とし布引の多田の藏人鬼
一のちる内平本櫻の梶原廿四孝の慈悲藏金門の久次杯立役にて
第一男よく評判宜敷文化五辰年中の座にて八陣の集人の助
役の處師匠急病に付政清の替り役を勤め古今の大できにて是
より世上に名を上げ翌巳年大阪堀芝居にて在原系圖の業平を
名残り狂言にして江戸中村座へ下る江戸の人氣別の沙汰にて
始終實業を勤め益々受よく文化八未年森田座にて忠臣藏の七
役古今獨歩の大當り是より翌申年壹十何を出しても仇矢
なく當り續けしは珍しき事なり同十二年九月七日目三升へ
梅玉取次を以て師弟契約調ひ依て團十郎より蝦の文字を送る
蝦十郎と改名して俳名新升と號す師弟契約の當日は歌右衛
門には勿論幸四郎半四郎男女藏其の外市川家残らず相ならび
目出度盃相濟み團十郎より引出物として送りし品、二代目團
十郎持品の狂言の大太刀壹腰、四代目團十郎同長大小壹腰、
四代目同自筆の掛物壹幅、黒羽二重定紋付の衣服壹重、柿色

イチウム

定紋付の麻上下一具、此外町中ヒイキ連中よりの送り物山の
如く堺町へ積飾りし事前代未聞の様なり即當所御名殘狂言は
妹背山のふか七大大出来にて江戸狂歌連中より三百枚の狂歌
折紙として其の頃江戸の浮世繪師豊國に伊勢海老の船盛の中
に蝦十郎ふか七にて荒稿の上下八巻大小襦を持居る圖を書せ
送る其の三百の内七八を爰に顯はす「新なるかへ名をみ
ます市の鶴浪花の蘆は御世の大海老」蜀山人「かある名の海老
はだいしめ飾又大江戸の座がしらを松」四方歌垣眞顔「海
老洞のよろひ直垂にしき着て歸る浪花の役者大將」七代目市
川三升「七五三三三、升が飾りぞや箔の付たる海老の舟盛」山
東京傳「摺物の折紙をへてわざもの、蝦軸巻を送る浪花路」
式亭三馬「あら事の家形蝦の目貫とはほり出し物の道具市川」
淡洲樓馬馬以上の色紙短冊は蝦十郎屏風壹双に仕幅して所持
す、同年冬大阪角の座へ乗込大はつみなり歌右衛門の傳に委
く記す翌子年春同座にて稚見淵に久次と岩木屋藤三郎齋藤内
藏之助何れも大出来次に御堂前政討に島川太兵衛大當りにて
同十四年も同座にて三浦荒次郎にて梅玉の源左衛門との出合
古今大出来にて一代名を殘す同年堀江芝居にて忠臣藏七役此
冬は中の座へ出で大里冠と一座せり翌文政元寅年も同座にて
加賀見山の長左藤定七の二役評判翌同三辰年は角の座にて
花大樹にて山口九郎次郎役歌右衛門の木下と鐘の長短の場末
代其名を殘す是切にて又江戸へ下り同三四は同地を勤め同五
午年春大阪中の座へ上り染分總にて齋藤藏之助山形屋茂平關
野萬兵衛の三役大當りにて同年同座にて毛刺九右衛門を出す
翌未年は角の座にて和雷八役大出来なり次に忠臣藏にて梅
玉市紅三人共七役を勤め五月替りには夏祭の一才と儀平次の
二役大々大當り九月には伊賀越にて澤井又五郎般若阪の早替
り大出来にて同七年は矢張同座にて廓大門にて伊勢新九郎
と非人丸鐵の二役次に菅原にて松王丸と輝國、切に救入濱等

イチカハ エビヅウロウ

濱地源左衛門とくもんの庄兵衛新町橋出入の所未代手本にも
なるべき大當りなり同八百年も同座にて百萬石に島井又助鹿
子勘兵衛次に梅玉一世一代に和泉の三郎毛谷村六助一の谷彌
陀六何れも大出来なり此時分は始終梅玉と一座にしてしつくり
と狂言に腹が合しゆる面白く故に文政六未年同座にて宗禪寺
の政討の時生田傳八郎の役に兄弟は梅玉と市紅にて返り討
の場誠にるぐたら敷見物も目を明て見て居られぬ位の事餘り
蝦十郎の仕内にくいてに付場よりたばこ盆の火入を授けし事
實に政討の本意なりと其火入を蝦十郎が頂きしとの事文政八
百年は八月より又角の座へ出で梅堀の由兵衛赤堀水右衛門廿
四孝の横藏何れも評よく翌九戌年は梅玉一座にて京東芝居を
勤め同秋より大坂中の座へ出極彩色の藤兵衛と喧嘩屋の二役
次に瀧口上野切に笹野三五兵衛何れも大出来なり同十亥年同
座にて遊山のそり新作に西如清を勤め此狂言の中場にて角
の芝居の舞臺より出火にて殊に暮半頃の事に付大西杯は狂言
最中にて其騒動大方ならず老人女中子供は踏たふされ其なき
さけぶ聲いと哀れなり此の時中の芝居は切が付ゆる其稽古中
場に此騒動に付忽ち蝦十郎表へ飛出で芝居の濱へをり舟を用
意して多くの舟へ載せ助けし事役者には奇特なりと御上様よ
り御稱美の上御褒美を頂戴す夫より京東芝居へ出で香西典藏
役にて傳七役に目徳瑞寛泉之介に頼十郎内見場大出来にて此
狂言其の儘大阪中の新芝居へ持かへる次機物語に強盗たんせ
き浮洲の岩松切に八百屋のばを勤め生涯の名残にて文政十
年七月十六日に歿す行年五十一歳(俳優世々の接木)
イチカハ エビヅラウ 市川蝦十郎元は大阪の俳優
なり、俳名を新升と云ふ幼名助藏と云ひて文化十二年角の
座親見世に初て出で同年秋同座にて梅玉平井權八の時右内の
娘役を勤め子役に似合ぬ仕内なりとの取沙汰にて其後始終父
のそばに付ばけやつし斗りをして居たりしが文政十亥年春中
の座にて遊山櫻に石田佐吉役にて大序に石橋の立廻りはげ敷

評判よく同年秋父死去の後中陰中休み居たりしが九月より梅玉引立にて角の座へ出で鶴門庄兵衛役則梅玉との出合大出来にて是れ此人の出世狂言なり次は梅玉に付て備中宮内へ下り同十一子年角の座に出で天満宮にて紀の長谷雄雪の金兵衛父の面顔有て大出来なり六月芝居にて竹田にて東鑑の朝日奈梅玉の吉兵衛橋辨慶何れも評判よく翌丑年は角の座にて薄雪の團九郎古今の大當り大人氣にて五月には京東芝居にて白石の臺七と切に雷庄九郎益替りは角の座にて右の臺七と切木津川八景に堀口萬右衛門腕の次兵衛大出来なり其の後病氣にて出勤なく惜むべし是れ限にて文政十二年十一月廿四日歿す行年廿四歳(俳優世々の接木)

イチカハ エビシウラウ 市川蝦十郎 三代は大阪の俳優なり、俳名を新姓と云ふ初中山紋十郎弟子にて甚吉と云ふ其後初代蝦十郎門に入て市川瀧十郎と改め濱芝居にて修行し後には濱にて大立者となり座頭を勤め居たりしが文政十三年春梅玉引立となりて角の座へ出る天保五已年親見世同座にて三代目蝦十郎と改名して一の谷の彌陀六を勤め其翌午年目徳瑞寛一座にて伊賀越の豊田内記鎌くらを龍松の金助の三役京大阪にて大當り同未年秋も中の座にて頼政にて母春日役油商人に平岡丑平古今の大で翌申年春同座にて八犬傳の大塚番作犬川角藏の二役第一の大當りなり天保七年九月十二日歿す行年五十歳(俳優世々の接木)

イチカハ エビシウラウ

イチカハ コダムシ

哀毀生母に過ぐ後西京に遊び居ること三歳にして東都に歸へる鶴鳴時師の講見あるに非ずして妄りに口辯を弄して生徒を欺むくを悪くみ嘗て師説を著はして以て其の志を道ふ専ら經學を單思し教授を意と爲さず而して從遊する者蟻集す鶴鳴頗る之を厭ふ會々家、災に罹る因て去て信州に客となる飯田侯之を侍つこと甚はだ厚く假すに藏書を以てす是に於て學益々博し乃ち又尾州に遊ぶ人々の識る無く其の門に遊ぶ者僅に平寛平長齋及び江根疾等の數人のみ而して鳴海に梶川翁と云ふあり獨り鶴鳴を奇とし妻はすに其の女を以てし遂に鳴海に徙居す鶴鳴西海に遊ぶの日薩の島津公子其の賢を聞き待禮の厚きを以て往て之に従ふ留ること三年復た西京に遊び始めて教育の志あり學者至れば則ち諄々として之を誘ふ天明戊申京災し宅亦た延焼す乃ち浪華に徙る門人隨ひ至る者數十人名聲日々に盛んなり寛政辛亥高崎侯之を徵す鶴鳴喜びて急に装を治め家人に謂て曰く往に吾れ學を嗜し閑に耽り累に遇ひて藩を去る學成ると雖ども臣子の道未だ缺くるあり乃ち今にして後ち吾れ忠孝の全からざるべからざるを知るも即ち家を携へて東都に入る侯見て大に悦び祿百五十石を賜ひて世子に侍讀す恩寵日々に隆なり寛政七年七月病みて卒す年五十六其の賤に在るや侯世子と日々に醫を遣はし以て之を看せしむ一藩以て榮と爲す鶴鳴學古今を綜べ經術に長ず著はす所經說七部、老子考文、讀莊子及び鶴鳴舎文集若干卷あり多くは皆な先儒の未だ發せざる所なりと云ふ(纂註諸家人物誌)

イチカハ コダムシ 市川小團次 四代は江戸の俳優なり家は高島屋と稱し俳名米升、本姓は堀越氏實は江戸日本橋着川岸の出生といふ幼名米藏といひて七代目白猿門人なり若年より上方へ上り京和泉式部芝居へ出で子供にて忠臣蔵の由夏之助四谷怪談のお岩の早替り狐忠信杯にては見物に我をらせ天保三辰年に初て大阪竹田芝居へ出市川米十郎と改め森之助と兩人にて三番叟を勤め夫より暫く濱芝居にて修行し評判よる歿其後天保十四卯年冬師匠白猿角の座へ上りし時菅原の

イチカハ エビシウラウ

イチカハ コダムシ

宿禰と八重の二役を當て翌春は同座にて石川染にて奴矢田平にて大立廻り大出来にて此時小團次と改名せり次裏表の忠臣藏に高師直の役切源平つゝに扇折小萩大當りにて弘化三年...

イチカハ コマザウ

イチカハ ダムザウ

紋所を改め年々曾我五郎役にては大當りをとる享保十六亥年冬中村座にて十八年振にて團十郎栢庭と萬國和合一字太平記と云ふ狂言の時和陸整ひ舞臺にて一字を除き元の紋に改め元...

イチカハ コマザウ

イチカハ ダムザウ

松本錦升中國筋へ下る時同道して弟子となり松本七藏と改む其後今の小團次米十郎と號せし頃京宮川町芝居にて四谷怪談...

なり同六丑年京三樹座へ上る龍鱗に立脇太郎役を勤次に御所の土佐坊役の處辨慶の替り役を勤め大出来にて次第に受よ...

イチカハ ダムザウ

る處森田座役者不人に付無據顔見世中すけに出て西國順禮正  
直正兵衛實は五代三郎にて五代目白猿との久々の出合は見物  
とよみ返る程大入にて三座一の大當りなり翌正月角の座へ上  
る此年女護島の俊寛を出し大出来なり文化寅年は大阪中芝居  
にて鬼一法眼と業平物狂ひを勤め尾州名古屋へ下る同四卯年  
角の座にて自來也と名越長兵衛の二役大當りにて同年京四條  
南側芝居顔見世に自來也を出し古今獨歩妙ふしぎの大當り大  
出来なり同五辰年九月大阪中の座にて八陣の正清と切に南柯  
話に厚く十内笠松平三の三役にて正清古今の大出来の處此  
狂言中に病氣にて引籠りこれ生涯の名残にて文化五辰年十月  
九日歿す行年六十四歳、辭世の句あり「けふも夢寝ても起ても  
ゆめの夢ゆめに夢見る夢の世の中」と門人市川市藏事後に元  
祖蝦十郎師恩を思ひ千日竹麻寺に石碑を營む事奇特千萬なり  
又伴團三郎團之助の兩人は江戸出勤ゆゑ兄團之助は叶はざる  
事有て暫く延引なれど弟團三郎は取物も取あへず上坂退福の  
營意なく下寺町遊行寺に辭世を彫刻して石碑を建る(俳世々  
の接木)

イチカハ ダムザウ 市川團藏四代は江戸の俳優なり三  
代目團藏の三男、俳名を市紅と曰ふ幼名團三郎といふ寛政七  
卯年大阪中の座にて父市紅春藤次郎右衛門の時子役にて庄之  
助役を勤め同十年父と俱に江戸へ下り子供芝居にて忠  
臣藏の由良之介を勤め通末頼母敷との取沙汰にて父死後には  
大里冠引立と成て文化六年大阪中の座へ出潮來風にて小路主  
水役を勤め父の面影あるとの評判にて夫より演芝居にて修行  
し八陣の正清其他長柄長者の源之助但馬屋のつち殺し三十  
三問堂の平太郎杯此人より仕初む同十二年春角の座にて法  
界坊評判よく翌十三年中の座にて大里冠長範の時牛若丸役  
を勤む是が出世の初なり文政二卯年より江芝居にて三七信高  
大和橋馬と切大出来なりよく辰年角の座にて父十三回忌退善  
に布引の實盛役を勤め此年大星由良之助當る同六年同座にて

イチカハ ダムザウ

て夏祭の時三ぶと磯之丞の二役大できなり末代名を幾す同七  
申年同座にて小春屋彌七の植木屋場松江との出合大評判文政  
五年春四代目團藏と改名す同八百年中の座にて座頭と成鳴  
門白浪にて萩塚鳴戸之助大當りなり此年太功記にて明智光秀  
と清水長左衛門の二役大できなり同九戌年同座にて才原勘解  
由福岡實大當りなりよく亥年中の座にて遊山の正清次に京東  
芝居にてひらがなの源太夫評判にて同十子年大坂角の座に  
て天滿宮の丞相源藏宿禰の三役よく丑の春も同座にて團部兵  
衛國俊の二役同十三寅年も同座にて忠臣藏に判官本藏勘平の  
三役何れも大出来天保三辰年中の座にていせ物語の豆四郎大  
當りなり此年江戸河原崎座へくだる同十亥年冬角の座へ上り  
鬼一法眼帶屋長右衛門阿古屋の三曲を出し何れも大できなり  
弘化元辰年角の座にて石川染にて久よしと岩木屋藤三郎切に  
國性爺のかんき役中の座にては切の戻り駕にて治郎作の役兩  
座かけ持にて是切にて出勤なくついに舞臺の名残と成て弘化  
元辰年三月終る(俳世々の接木)

イチカハ ダムザウ 市川團藏五代市川團藏十郎の門人に  
して森之助と云ふ後四代目の養子となり團三郎となる文政五  
年春五代目を嗣ぎ團藏と改む弘化二年六月六日没す年五十八  
(名人原稿)  
イチカハ ダムザウ 市川團藏六代は家名を三芳屋と稱  
す俳名三猿別に市紅と號す三代目市紅門人市川荒五郎俸に  
て幼名照世といふて七代目白猿門人なり其後三藏と改又茂々  
太郎と成て文政十一年大阪備後芝居へ初て上り大經師の下  
女お玉忠臣藏にて定九郎阿古屋の三曲にて名を上げ又白藏と  
改名して演芝居にて修行をし次第に名を上げ一端江戸へ歸り  
九藏と改め弘化三年大阪角の座へ上り富士右門八百屋半兵  
衛阿古屋の三曲を出す次に京へ上り東芝居へ出て右三役の上  
へ近江源氏の見妙を勤めすに江戸へ下り又た此時市川三猿

イチカハ ダムザウ

にて上る其後嘉永五年大阪角の座へ上る四代目市紅相續人  
と成り五代目團藏と改名す狂言は吉備大臣と物種太郎切に白  
石噺に兵部之介宮城の、役次に京東芝居にて右の役を勤めよ  
く丑年春角の座にて工藤祐經次に由良之助師直を勤める安政  
二卯年親見世に京東芝居にて佐々木がらりう笠原新三郎切に  
鬼一法眼左り甚五郎何れも大出来金江谷五郎は大當りなり三  
庄太夫女護島の俊寛日蓮記の狂言を相勤む明治四年十月廿二  
日没す年七十二(俳世々の接木)

イチカハ ダムザウ 市川團十郎は江戸の俳優  
にして三津津荒事の開山なり俳名才牛と曰ふ堀越十藏の俸に  
して萬治三庚子年の誕に幼名海老藏といふ其頃江戶の  
狹客に唐大重右衛門といふ人あり海老藏といふ名は此重右衛  
門が付しといふ依て重右衛門より贈りし絹地に海老を畫ける  
掛物世、市川團十郎の家所持して秘藏せり雅なきより伎藝  
を好み戯場に入る名を改めて初は市川段十郎といふ延寶元癸  
丑年中村座にて四天王雅立といふ續狂言を興行す此時十四歳  
にて初舞臺紅白粉を以て惣身を塗り荒事といふ事を始め又先  
祖より傳はりたる三本太刀あり夫を鎧どり狂言太刀に挿へ今  
に至る迄しばらくの狂言には太刀を三本佩なり又顔の隈取紅  
のさし方にも作法ありて一朝一夕の事に非ず延寶三卯年五月  
木挽町山村座にて勝鬨會我といふ狂言にて五郎時宗役を  
始めて勤む十郎祐成に宮崎傳吉工藤祐經は永島磯右衛門勤る  
なり是曾我狂言の始りにて明治廿八年まで二百餘年に成る貞  
享元子年中村座にて門松四天王といふ狂言にて鳴神上人役を  
初めて勤む大當りにて江戸中の大評判なり末世に至るまで譽  
と成る元祿六百年京四條村山平右衛門座へ始めてのぼり其の時  
権が本才麿が門に入て俳諧を學び才牛と呼ぶ是役者に俳名を  
唱ふ始めなり此の時段十郎の段字を團十郎と號し上京す同十  
丑年江戸中村座へ團十郎にて下る大福帳ふくびき名護屋とい  
ふ狂言にてしばらくを勤む其頃の實悪に山中平九郎といふ者  
と大福帳引合のせりふ大當り寶永元申年市村座にて是合十二

イチカハ ダムザウ

段といふ狂言とも又忠信四番續といふ狂言ともいふ則ち佐藤  
忠信役にて幕切の時鼓打に杉山半之丞と云ふ者團十郎に意恨  
ありて幕引にまきれて刀を以て團十郎の脇腹をさぐる才牛は  
此深手に堪まらざ忽ち其場にて命終る元來は商賣の事に付此  
そどうとなるといふ二代目栢越孝心によりて父の仇を報せ  
んと彼舞臺にて用ふる狂言太刀を以て半之丞を討ちしといふ  
寶永元申年二月十九日歿す増上寺山内常照院俗稱あかん堂に  
葬る門譽入寶覺榮居士行年四十五

イチカハ ダムザウ 市川團十郎二代は江戸の俳優  
也元祖團十郎の子通稱成田屋重兵衛、俳名を三升と曰ふ後栢  
越と改む別に才牛齋と號す幼名九藏といふ元祿十丑年十歳に  
て初舞臺是迄は子役と云し事なく若衆役と云しが此九藏出て  
より子役といふ事初るなり寶永元申年十七歳にて父に離れ中  
陰中六月迄休み七月より木挽町山村座へ二代目團十郎と改名  
して出勤す宮崎傳吉の引合せにて其の追善の口上見物の貴賤  
涙に袖をぬらす此時平安城成定と云に八力九役を勤む寶誓  
齋其角が追善の句に「ぬり顔の父はながらの雄子の聲」三ッ  
升やおよそ水らぬ水の筋」同年秋より下總國成田山不動明王  
へ祈誓をかけ普ねく世界に名を上げん事を立願して祈る事度  
度なり扱こそ十ヶ年を経ぬ内に日本は云ふに及ばず唐高麗迄  
其名轟く事偏に成田不動明王の御利益有難しとて家名をば成  
田屋とよび是れより代々成田屋といふなり正徳三己年山村座  
にて花館愛護櫻といふ狂言の二番目に花川戸助六の新物を出  
す古今未曾有の大入大當り享保三年森田座春狂言に若縁勢曾  
我にてういろう賣初て勤む同十一年中村座春狂言に父團十郎  
三十三回忌追善鳴神を出し大當り同十四年同座にて扇恵方  
曾我にて矢の根五郎を初て勤む古今の大入大當りにて正月よ  
り五月まで勤む此時座本に土藏を立る夫を矢の根くらと名付  
け同二十卯年に海老藏と改名して俳名栢越といふ寛保三亥年  
冬大阪佐渡島座へ上る鳴神上人毛貫彈正の二役古今の大出来

イチカハ ダムジフラウ

にて翌延享元年六月迄二百餘日の大當りなり寶曆八寅年一  
世一代に矢の根五郎を勤む舞臺の勤六十二年に及び大極上上  
大吉といふ位にて古今獨歩の名譽といふ寶曆八寅年九月廿四  
日歿す行年七十一歳(俳優世々の接木)

なり俳名を三升と曰ひ德辨と號す二代目の門弟三升屋助十郎  
の子と云ふなり又は下總佐倉の出生とも云ふ幼名升五郎と云  
ふ享保十二年七才にて初舞臺にて補正行役を勤む同正成を  
父栢廷勤め櫻井の宿にて三略巻を譲る趣向大當り寛保三亥年  
父と終に大阪佐渡島座へ上り同年冬父を上方に殘し自分は先  
へ江戸へ歸り翌延享元年二月廿七日歿す隨譽覺應信士行年  
二十一歳此時父栢廷より一首の發句を江戸へ送る「梅ちるや  
三年飼ふたきりくす(俳優世々の接木)

イチカハ ダンジフラウ 市川團十郎<sup>四代</sup>は實は江戸の  
人松本幸四郎悻にて松本七藏といふ栢廷舞臺なり享保五年荒  
岡の荒事初舞臺にて同十三年頃娘形の部に入同二十卯年市村  
座にて二代目松本幸四郎と改め悪禰師公曉役元文五年には實  
惡の巻頭となり祭の平内左衛門佐々木岸流工藤祐經鐵坊斧  
定九郎加古川本藏八郎爲朝熊坂長鏡三庄大夫等何れも大出來  
なり寶曆四戌年冬栢廷の養子と成て四代目を相續し團十郎と  
改名して岡崎悪四郎にて暫らく出端大當り此時悻幸藏に三代  
目幸四郎を譲る其後色々勤し中にも土左衛門の傳吉平親王將  
門油屋九平治河津の三郎荒五郎茂兵衛甚盤忠信大見八幡之介  
寺岡平右衛門手浦八兵衛悪七兵衛景清等度々勤大當りなり明  
和九辰年海老藏と改名して又實子幸四郎に五代目團十郎を譲  
り自分は又元の幸四郎となり安永五申年菅原の松王丸と飛入  
茶の湯景清を一世一代に勤め舞臺を五十八年間勤む後に深川  
木場へ隱居して水石を樂しむ俳名を海丸又夜雨庵二世五粒と  
號す世に之を木場の親玉と稱す安永七年三月朔日歿す廓譽  
悟粒隨念法子行年六十八歳(俳優世々の接木)

イチカハ ダムジフラウ

事何れも大出來にて古今希なる大入なり此時五十六歳にて此  
を一世一代とし葛飾の牛島須崎村に閑居して名を七左衛門と  
改め俳名白猿と云ふ舞納壽歌に「惜まるゝ時散りてこそ世の  
中の華も花なり鼻もはななり」寛政十年年中村座不入に付勤  
三郎の心配六代目半四郎は弟分ゆゑ兩人數度來り再勤を乞ふ  
白猿承引せざりしに頼に付き然らば興行中口上を述るに極り  
卅日夕間に毎日舞臺にて即吟の狂歌一首宛を詠む其翌年五  
月悻三升父に先ち身まかりぬ愁傷限りなく殊更わけ有て市川  
家退轉にも及ぶべき事義時に市村座は内縁有に付瀬川菊之丞  
が勤めに依て祖先の百年忌を幸ひ又孫の海老藏幼年れども  
七世の團十郎と改名させ顔見世三十日夕間再勤をする生茂浪  
うねに回國の修行者覺善實は大夫の黒主にて狐をさし殺  
しながらのせり出し以前にかわらず大評判にて又享和二年戊午  
河原崎座は元祖栢廷の伯母の血すじを立たて岩井三郎は甥  
の事故又兩人再勤を乞ひに參る此に曳され再勤の事調ひ名歌  
徳に三升玉垣に警若五郎照秀にて暫くの出端修行者ばん龍大  
友のくろ主にて吉例の六部の出立西國順禮正直兵衛實は五  
位之助よし實に三代目團藏兩人の出合古今の大出來にて三座  
第一の大入なり翌年春同座にて初紋日扮飾曾我にて工藤左衛  
門祐經役對面場にて烏帽子大紋にての出端昔よりなしとの評  
判二役悪七兵衛景清にて牢破ぶりの場四代目五粒の再來かと  
諸人大評判なり阿古屋に常世盲目にて娘人林に祭三郎三曲の  
處古今無類の大出來にて次に故半四郎三回忌追善に娘道成寺  
を祭三郎勤るに付大詰に海老名源八て勝にて出る此時男女  
藏に衣裳を借りて五六日勤め跡は坂東八十助か替りて是を  
誠の仕納とし元の五百崎に閑居して農民に交り身には鹿服を  
着て一念の窓の前には念佛の歌を百首につらね壁に西の内の  
紙に彌陀佛の畫像を張り傍に一首のたわれ歌「一枚のかみの  
み國へ産れ來て終にはいたるにしの内かな」寛政十一未年市  
村座へ二代目珉獅大阪より下りしとき老父珉獅江戸下りの節

入門せし古例を云立て入門に來る白猿取敢ず其場に提灯に  
三升の紋を印し渡したり依て雖介江戸出勤中此紋を用ふ其の  
後雖介山姥の化身鬼女となる狂言にて其顔の隈どりを白猿に  
相談す白猿手紙に顔を書て隈取を教へける後ひな介向島武藏  
屋へ參り白猿を馳走せんぞ招くと雖も白猿元より珍美を好む  
事なれば平に辭退すと參らず依て雖介乘來りし船中に有  
りし重箱を取らせ煮染を出す白猿悦で「二の替りまたしめ升  
たにしめどて見ればよつばと嵐離助」と元より朝夕に鹿食を  
なし珍味をいとひ質素なる事是にて知るべし假にも殺生をせ  
ざ五十年の春秋を経て文化三寅年十月廿九日朝歿す還譽淨本  
臺遊法子行年六十六歳辭世に「風雨も雲の行衛哉」畫を善  
くし俳諧狂歌を善くし京傳馬琴馬蜀山飯盛眞顔京山等に交  
る「錦衣て疊の上の乞食哉」の句入口に喰炙す白猿人となり  
鼻極て高し馬琴の狂歌に「江戸見ては外に名所もなかりけり  
團十郎のはなの三月」

イチカハ ダムジフラウ 市川團十郎<sup>五代</sup>は五代目の實  
子にして俳名を三升と稱す幼名德藏といふ天明二寅年中村座  
へ五歳にて尾上松助朝日奈役にて懐にいだき中村仲藏口上に  
て團十郎の子なりといふ同年冬海老藏と改め栢廷と號す同七  
年桐座にて伊達の鶴喜代丸を勤む翌年中村座にて講釋の力  
彌を勤む寛政三亥年市村座にて六世團十郎と改め俳名三升と  
號す時に十四歳なり眞田與市よし眞役にて家の三本太刀を佩  
き三升の縫の陣羽織にて花やかなる出立ち谷へ落し行く器を  
争ひ相手は伊東九郎祐清を二代目門之介にて大紋立烏帽子に  
て馬上の出立兩人大さつまの淨瑠璃にてせり出し大評判也同  
七卯年都座にて熊井太郎にて初て暫くの出端同十年中村座  
にて千本櫻の銀平權太覺範の三役大出來なり同十一未年同座  
にて花三升吉の新深雪にて篠塚伊賀守定勝にて暫くの出端長  
崎の二郎にて小山田太郎に賛助兩人卒都婆の大立廻にて同年  
の春同座にて大三浦伊達根引に荒獅子男之助役にて大名題看



大日本人名辭書

板に壹人書かく是昔より名人上手にてなき事なり此時二十  
 二歳にて座頭なる二番目に四代目團十郎廿三回忌追善に助  
 六郎花見時に則助六の初役意久は高麗藏揚巻は衆三郎白酒賣  
 はみの助勤む古今種成大當りにて芳原より譽詞あり次の替り  
 忠臣藏に若狭之助平右衛門の處十日ほど勤ると風邪の心持に  
 て引籠りこれが舞臺の名残となり寛政十一年五月十三日歿  
 す啓譽自利信士行年二十二歳

**イチカハ ダムジラウ** **市川團十郎** 七代は俳名を三升  
 又は白猿と號す巷は夜雨菴狂名は壽海老人亭號は二九亭實は  
 替屋町芝居茶屋丸屋三右衛門の倅にて五代目白猿の孫なり寛  
 政三亥年誕生にて幼名新之助と云ふ同六寅年に市村座にて矢  
 口渡に新田德壽丸役初舞臺此時四歳也同九巳年海老藏と改名  
 して同十二年申年つれの錦にて高市庄之助の子役を勤め同年  
 市村座見世に七代目相續して團十郎と改め俳名三升と號す  
 時に十歳なり同年六月市村座にて六代目團十郎一周忌追善う  
 らう賣初て勤む享和三年同座にて顔見世に初雪物見松と云  
 ふ狂言御殿の喜三太役に九びたひの靈にて上下鶴ひしの衣  
 裝御幣を擔で暫くの出時に十三歳也文化元年四月市村座元  
 勘三郎歌舞伎芝居初り寛永元年より當子年まで百八十一  
 の壽として相傳の系圖の品舞臺に於て披露す此口上を前々よ  
 り市川團十郎勤し事なり然るに白猿は隱居の身ゆゑ今七代目  
 團十郎少年十四歳市村座の勤なれども勘三郎頼に依て口上を  
 述る其辨舌瀧の如し其家の名譽顯れたり諸人之を稱す文化  
 四年十七歳にて素袍きて初て暫の出端同八年六代目團十  
 郎十三回忌四代五代と年回重り中村座にて追善として花川戸  
 助六の初役幕積物山の如く吉原よりは蛇目傘を積む傾城の提  
 灯長柄傘毎日變る同十一歳年春同座にて座頭となる文政五年  
 春市村座御楠曾我閏正月に五郎時宗役朝日奈は男女藏也兩人  
 草摺引き大當り同九年市村座顔見世にて鬼若根元臺にて武藏  
 坊辨慶役に大詰には七ツ道具を五光にして手に珠數と長刀

の身を遊手に持て成田山不動の靈像と成てお染久松の心中を  
 助ける處大評判なり同十一年三月河原崎座にて四代目五代目  
 の追善お家の助六を勤む以前に變らざ芝居制積物山の如く殊  
 に花やかなる事に於て見事也同十二年に紀州高野山へ先祖の石  
 碑を建て大阪中の座へ初て上り平假名の松右衛門平次切に團  
 七九郎兵衛後に戻り駕次郎作古今の大出来大入り次益替り  
 に伊達の七役幡隨院長兵衛九月には御名殘と云ふ看板を上げ  
 左枝大學之介立場の太平次切に鬼若所作事安宅松水賣秋の七  
 種矢の根五郎又切に近江源氏の和田兵衛と高綱何れも評判よ  
 く是れより京芝居顔見世則ち東にて梅玉瑠寬一座にて三人だ  
 んまり幕切大評判なり此の時發句を詠む「ふとんきて寝たる  
 寒さや東もの」(上方は寝る時袋の代りにふとんを用ふ)文政  
 十三年春大阪中の座へ江戸役者一座の看板出る尾上菊五郎  
 松本幸四郎岩井三郎坂東彦三郎澤村四郎五郎市川壽美藏市  
 川高麗藏坂東玉三郎大谷門藏成田屋宗兵衛なり大阪役者は淺  
 尾額十郎藤川友吉計りなり狂言任組中に衆三郎江戸表より引  
 戻しに相成後少々め合にて興行ならず依て自分と幸四郎こ  
 ま藏の三人は角の座へ飛入り梅玉瑠寬と一座す又三人のだん  
 まり大評判なり次に忠臣藏にて石堂若狭之助寺岡の三役大當  
 り切に彌お名殘狂言に花川戸助六を出す意久に幸四郎揚まき  
 に松江白濁うりに歌右衛門團三郎に團藏しし玉にあら富仙平  
 に舍九門平に歌七壽美屋の勝に瀧十郎廣大の役者揃ひにて前  
 忠臣藏とも斯程の大座を覺えず是より直に京芝居にて暇乞  
 狂言にひらかなど不破名古屋を出す此時加茂の季鷹翁と贈答  
 の狂歌あり「白猿を見ざる聞ざる人だにもいよ親玉といはざ  
 るはなし」(加茂季鷹)かへしつがもない親玉なぞと呼子鳥さ  
 るに於ておけく(七代目白猿)夫より伊勢古市芝居を勤め  
 江戸木挽町河原崎座へ下る後天保五年三月大阪角の座へ下り  
 此時も大座にて秋津島と切に鳴神上人を出す次に三代記の三  
 浦之助一寸徳兵衛は無類の大出来なり是切にて夫よりす々に

大日本人名辭書

大阪を立退き肥前長崎へ下り彼地を遊覽しよく未の年江戸へ  
 返る同九戌年悴新之助へ八代目を譲り自分には海老藏と改名  
 して俳名白猿と號す隱居の身の上成居る所平民の所有すべ  
 からざる珍品を藏せるを以て江戸退放を蒙り下總國成田山へ  
 引籠り所弘化二卯年冬大阪角の座へ出管原にて松玉丸と覺壽  
 の二役に非人茶の湯の景清を勤む久々の上阪にて評判宜敷  
 翠春同座にて石川五右衛門和藤内市川流の荒事に於て何れも評  
 判よく其頃より大阪に住居し都て上方流の時代狂言を吞込み  
 一の谷六彌太物語春藤次郎右衛門齋藤太郎左衛門由兵衛庫之  
 助渡し守頼兵衛梶原の石切山田幸兵衛杯至極の評なり嘉永元  
 年中の座にて曾我狂言を初て自ず是近來の大はづみ古今大  
 入大當り今時々大阪の二の替りに曾我の狂言を勤るは此人よ  
 り初るなり翌二百年悴團十郎兩親孝心によつて江戸表にて御  
 褒美頂戴の上父白猿の罪赦免せられ取ものも取あへずす々に  
 江戸へ下り河原崎座へ出る大名題有難御江戸の景清にて即ち  
 景清役に天の磐戸籠り道具萬端大かざりにて先年五代目白  
 猿の年破りの如く同評也同五年江戸にて一世一代名殘狂言  
 に剃髪して壽勸進帳を勤る富樫は八代目義經は猿藏勤る也自  
 分はかつらを用ひず坊主天窓の儘にて目出度江戸の舞たいを  
 まひ納むよく丑年春大阪角の座へ上り曾我を出す同年の冬京  
 東芝居にて一世一代名殘狂言に大星由良之助切に關原の黒主  
 を勤む此時の看板に辭世の發句「見てはらへあこころかるふの  
 唐からし」(壽海老人子福者白猿)此繪馬今清水觀世昔に奉納  
 して有り是に依て京にて出勤の時には松本幸四郎にて出る也  
 此人常に不動尊を信仰して若盛りの時より初日の朝には供の  
 ものまで湯をつかひ江戸にては芝増上寺の山内あかん堂先祖  
 の菩提所と成田の不動のかけ所京にては竹田海道の不動尊大  
 阪にては天王寺一心寺は自分の檀那寺日繩坂の不動尊へ參詣  
 する事忘る事なく其儘宅へ戻らざ樂屋入をすと云安ふ政六  
 年三月中村勘三郎座春狂言伊賀越道中双六に澤井又五郎同母

鳴海煙草屋幸兵衛の三役に扮し出勤中老病發して其月廿三日  
 遂に猿若町自宅に歿す年七十辭世の句に「嗚呼夢た花の泊り  
 も七めぐり」芝三縁山あかん堂に葬むる法名徳譽依藤子儀善  
 法子と云ふ藝道には身をこらし色々勤し其中にも裏表の忠臣  
 藏仙代萩の七役に大賀悦善之助赤堀水右衛門北條時政毛刺九  
 右衛門桃井若狭之助寺岡平右衛門幡隨院長兵衛蓮生坊物語大  
 父母孫右衛門の類は外になし當時三都の隨一にて大極上上大  
 吉と位す(俳世の接木)

**イチカハ ダムジラウ** **市川團十郎** 八代は七代目の實  
 子にして俳名を三升と云ふ幼名新之助と云ふ文政六未年の誕  
 生なり其の後海老藏と改同十二年河原崎座にて伊勢海老の  
 あかん平にて吉例の柿の素袍を着て初て暫くの役を勤む時に  
 七歳なり六立目に大杜若楠正成の妻にて三升多門丸の役を勤  
 む兩人せり出し櫻井宿にて三畧の巻を譲り受る處父白猿上方  
 へ上り留守中に依て半四郎後見すると口上あり夫より段々成  
 人して天保九戌年顔見世より元服して八代目團十郎を相續し  
 て俳名三升と云ふ同翌年春五郎時宗役初て勤む大詰に父白猿  
 山姥の山巡りを勤む其時金時役を勤め大出来なり同外部賣初  
 て勤む近世希代の稀者にて家の荒事時事兼ね江戸隨一  
 の花形なり嘉永元年父の大坂に放れ住む事をなつかしく思  
 ひ一度對面せんと上方へ上り父に巡り逢ふ亦大阪にて出勤も  
 なく既に紀州高野山へ參詣して京都名所を遊覽して江戸へ歸  
 る此の時父より六彌太物語の狂言の傳授を受け持かへり相勤  
 む翌酉年三升父母に孝心深きを以て官の稱美を受け御褒美を  
 頂戴する事實に役者道の稀者一奇人とも云ふべし此孝心によ  
 りて父白猿事江戸表御擲ひ赦免となる同七寅年の尾州名古屋  
 へ上り大坂より使ありて無理に呼迎ひ閏七月廿八日夜櫻の宮より  
 時大阪より乗込む其人氣いはん方なく川筋迎ひ舟籠り提灯萬  
 燈の如く實に天神祭り同様なり當日儀式相濟み取急ぎ看板を

イチカハ ベイアム

出し前は見雷也豪傑物語切に與話情浮名横橋と云ふ江戸狂言にて則ち尾形の三郎と切に向ふ疵の與三郎の役に八月六日初日と定り前日より附込み機敷の書付山の如く張るかくて五日に惣替古もすんで其夜宅へ戻り夜中に俄の變死なれ共翌朝まで家内の者は知らず跡の騒動大方ならず父白猿を始家内は勿論芝居掛りの者一統まで途方にくれ道頓堀川竹も闇夜に火の消たる如くなり時に嘉永七寅年八月五日なり法名淨延信士行年三十二歳宿坊四天王寺一心寺

イチカハ ベイアム 市河米菴は江戸の書家なり名は三亥亦通稱に用ふ字は孔陽、米菴は其の號小左衛門と稱す安永八年亥月亥日を以て生る因て三亥と曰ふ又た小山林堂、金羽山人、百筆齋、樂齋、亦頗道人の號あり寛齋の男書跡米元草を學て別一家の風をなす尤も楷隸に巧なり我邦享保の比より書に名ある人多しと雖も未だ和臭を脱する能はず近世に至りて墨池の技殊に聞けしは此の人の鼓動振作に出でしもの多しと云ふ嘗て加州侯に客事す安政四年七月十八日江戸に歿す年八十著はす所米家書譯、米菴墨談、皇國州名歌、西遊小草、毛信遊草等あり(續諸家人物志、江戸名家墓所一覽)

イチカハ モムノスゲ 市川門之助初代は二代目團十郎の門弟なり享保元文中の俳名新車初長之助又辨次郎と曰ふ享保四年門之助と改め十四年正月廿九日歿す年四十八、能く少年を扮して名あり

イチカハ ヤヨザウ 市川八百藏元は江戸の俳優なり家名を賣來屋(又曰立花屋)と云ひ定花と號す實は松島茂平次の悻にて幼名吉太郎といふ延享三年二代目柏庭門に入り松島八百藏と改む寛延二巳年より苗氏を市川と改む通世上に名を上げて吉例の普春の曾我には五郎時宗工藤祐經は度々當りはづさず譽れの名を顯し其後中村傳藏方へ妹を娘にして縁付二代目傳藏へ譲る寶曆九卯年十月十九日歿す年三十

イチガム イチク

イチカハ ヤヨザウ 市川八百藏三代實は二代目澤村宗十郎悻にて幼名金平といふ又澤村四郎五郎と改め娘形にて出で後元服して瀨川雄次郎と改む明和四年より又元の四郎五郎と成る八年三代目八百藏を相續し後二世助高屋高助と改む

イチカハ ヤヨザウ 市川八百藏四代は俳名を中車と稱す實は江戸振付藤間勘十郎の悻にて初岩井喜代太郎といふ六代目半四郎門人なり文化四年大阪中の座へ上り始終大里冠と一座して扱もよい男と評判よく同巳年より暫く濱芝居へ出て忠臣藏にて勘平定九郎と改む彦彦山のおそ藤屋伊左衛門其外色々江戸狂言の玉屋新兵衛糸屋佐七杯にては評判よく其後江戸へ歸る弘化二年七月三日没す年七十三

イチカハ ヤヨザウ 市川八百藏五代は初の名は市川團吉後五代目八百藏の名を嗣ぎ又關三十郎と改む安政中没す

イチカハ ベイアム

イチカハ ヨメザウ 市川男女藏初代は白猿門弟にして家名瀧野屋と云ひ俳名新車又は海丸藏は二代目門之介の悻にて幼年弁之介といふて退々立身して寛政九巳年桐夏芝居不座にて講釋の由良之介重太郎の二役切に積懸雪關扉最初なり關兵衛役を勤宗貞に中村傳九郎小町姫に岩井喜代太郎後に四代目八百藏の事なり古今の大出来大入にて是より名をこる同十二年松本米三同座にて伊勢古市芝居を勤む夫より京北川芝居へ上り講釋の勘平と切に小町櫻を出しすに江戸へ歸る文化元子年春市村座にて四紅葉想戀深川に相撲取白藤源太役藝者おしゆんに松本米三兩人とも古今の出来にて一代の大手柄なり文政二卯年大阪若夫芝居へ上り座頭を勤む信仰記の大膳を勤めたれ共上方の人氣にはまらず直に江戸へ歸る器用なる人にて自分悻の用ふる衣裳は皆自分が仕上臺付の縫まで我が手に致せしとの事天保四年没す年五十三(俳優世々の接木)

イチカハ ヨメザウ 市川男女藏二代は家名を瀧野屋と稱す元大阪出生にて中山金藏と云ひ中山久吉の弟子なり寛政七卯年より子供にて初て出其後柳山門に入り柳山金藏と改め又四郎三郎と云て京大阪宮地芝居にて修行し文政三辰年江戸へ下り中山桶藏といふ七代目白猿弟子と爲り市川雪藏と改め七申年市村座にて二代目男女藏を相續して同九戌年大阪筑後芝居へ上り夫より永く濱芝居を勤居たりしか又江戸へ下りて死す(俳優世々の接木)

イチカハ ヨメザウ 市川男女藏三代は二代目の實子初柳山金藏といふて父と俱に京大阪の濱芝居に出勤して其後父に付て江戸に來り尾上新七といふ嘉永七寅年十月大阪中の座へ上り二十四孝の慈悲藏切に春日屋時次郎の二役の處上方の人氣に合はずすに尾州名古屋へ下り翌卯年秋又江戸へ下り三代目相續して男女藏と改む

イチガム イチク

イチカハ ヨメザウ 市寸島比賣命又サヨリヒメノミトと號く嚴島辨財天是なり安藝の一の宮なり

イチカハ ベイアム

イチカハ ベイアム

イチゲム
す是歳癸丑年十月十二日芭蕉忌其徒と夜坐寒を冒し枕に伏す
數日十一月十七日に至り日課已に畢り友生芦月の家に入り沐
浴快を取る主人精饌を調して供す一具之を食し其好意を謝す
芦月の家人炭火爐を添へ或は衾を進む一具衾に寄り語て曰貧
道子に別る、近きに在り然りと雖も吾病を以て人を煩はすを
欲せず死せば則ち速かに死せん耳と歎語數刻家人等相笑て千
秋を祝す俄にして一具嘔氣を催し唾壺を請ひ忽ち其食ふ所の
物を吐き盡して死す醫藥及ばず辱愛太甚と云者周章飛で到り
涕泣事を執る太眼亦舊を叙して云昔日一具自ら經を寫し業を
卒るに及び告て曰吾明日珉を閉るや葬必す薄きに従へ喪を送
る者汝等三四人に過る勿れ骸は則ち之を流がせ吾生前自ら回
向す死後何ぞ他力を假らん鬼と爲り佛と成る誰か能く之を知
らん香花を供する勿れ退善を營む勿れ是を遺言と爲す歿する
に先たつ數日仙臺の末月尼書を寄せて其句集の序文を乞ふ一
具喜て數言を題す遂に筆を此に絶つと云其餘一石一字の三部
經を書し墨田川に流すこと十度あまり在京の頃も嵐山の下流
にて同じ行ひをなし且つ年を重ねて一切經を讀終りしと云ふ

イチゲム
イチジヤウウツムノミヤ 一乘院宮「ソムエイホウシムワ
ウ」
イチジヤウウツムノミヤ 一乘院宮「ソムセウホウシムワ
ウ」
イチジヤウウツムノミヤ シムケイ 一乘院宮眞敬は後水
尾天皇第二十六の皇子にして二品親王なり狩野常信に學びて
書を能くし筆力殊勝延寶三年七月六日薨す年五十八
イチジヤウウツムノミヤ 一樹庵「シミヅダウカム」
イチジヤウウツムノミヤ 一壽齋「オホモリエイシウ」
イチジヤウウツムノミヤ 一壽齋「ウタガハクニマサ」
イチジヤウウツムノミヤ 一壽齋國政「ウタガハクニ
マサ」
イチヂイウ 市太夫は時繪師なり加州金澤桶町に住す清
水源四郎の門人なり世に加賀印籠と稱し一風の印籠あり市太
夫之を作りて殊に優等にして其の名高し世人の賞玩する加賀
時繪の香合多くは市太夫の作りなり性茶事を好みて自然雅致を
有つと云ふ(美濃奇賞)

イチヂイウ
イチヂイウ マサハル 伊地知正治は宮中顧問官たり明治
十九年五月初旬より腦神經病に罹り同廿三日死す明治元年二
月東山道先鋒總督參謀となる同十月三十日春來久々の軍旅書
策其機宜に中り速に東北平定の功を奏し今般凱旋せしに於り
取あへず御太刀料金三百兩を賜はる同二年六月東北平定の賞
として永世祿千石を賜はる同四年十月議官同五年二月大議
官同七年四月議長に任じ同八年六月一等侍講に任じまた修史
局副總裁同十年修史館總裁を命ぜられ同十二年四月宮内省御
用掛を仰付られ一等官を以て年俸四千圓を賜ふ同十四年七月
勳一等に叙し同十七年七月特旨を以て華族に列せられ勳功に
依て伯爵を授けらる同十九年宮中顧問官に任ず五月廿三日特
旨を以て正三位に叙せらる此日遂に卒す

イチヂイウ
イチヂイウ カササダ 一條兼定は從三位侍從右近衛中將
房基の子にして母は大友義繼の女なり姓は藤原父の後を繼て
土佐國司たり天文二十年十一月正五位下に叙し禁色昇殿を聽
され左近衛少將に任じ從三位に陞り中將に轉じ權中納言に進
む兼定德非く才拙く且放縱荒政にして威臣を斥け民庶を暴亂
し部下を制する能はず部下の士長曾我部元親兼定の威を藉り
て郡邑を蠶食し兵武頗る張る永祿の季年に方り部下の士安政
元種と云へるもの援兵を兼定に請て元親を攻めしが却て元親
の爲めに破られ遂に退て安岐城に拠りて自殺す是時に當りて
元親は東五郡を領し兼定唯た幡多、高岡の二郡を有するのみ
是に於て吉良親貞、佐竹信濃守等相謀りて元親に歸し其勢益
々盛にして兼定の威權日に減し臣庶月に離散す天正元年國人
胥議し稻吉新藏人を遣はし元親に請ひて曰く君若し兼定を逐
ひ幼君を立て、主と爲さば國人の幸是れより大なるなからん
かと元親大に悦び乃ち廢立を謀り衆に謂て曰く我祖は一條殿
の爲に家業を復せしものなり故に敬重せざる可らず我の安岐
津野と戦ふや兼定竊に兵を出だして之を援く我れ憾なしと爲
さず然れども之に報いさるは祖君の徳を思ふのみ然るに兼定

イチゲム

イチヂイウ カササダ

今ま凶暴にして益々民を苦しむ願くは衆と與に其の子を立てて之を奉戴せんと是に於て衆皆な盟書を送る既にして族人兼定の子吉房子を擁して幡多を逃がれ浦戸に走る時に吉房子歳甫めて十歳なり九月兼定薨して外戚の親に依り豊後に奔り曰杵に到りて大友義統に因る大友氏近年島津、毛利と戦を構へて勝敗未だ決せず因りて其の或は敵の間諜ならんを恐れて納れず... 兼定は伊豫の御坐郡に至るに及び從兵稍々來り屬す遂に土州に入りて元親の子城三を抜き伊豫の戸島に屯す時に播磨守則延善く之を遇す西御坐郡の國人亦た竊かに兼定の歸國を謀し船艦を購して將に發せんとす會々元親の兵來り侵し火を津浦に放つ國人栗木壘を構へて之を拒ぐ吉良親貞と云へるもの來り攻めて之を陥る大江兵庫大夫... 終に兼定を弑す兼定時に歳三十一子あり内政と曰ふ(野史)

イチデウ カチフユ 一條兼冬「フヂハラカチフユ」の第二子なり姓藤原氏、兄經輔を以て薨髮するに及び兼冬代て父の後を繼ぎ叙爵せられて左大臣從一位に累遷す永享四年六月關白氏長者と爲る初め三條持基の關白たるや兼冬及び左大臣近衛房嗣等皆其の職を得んとを望む而して持基薨するに及び房嗣之に代る兼冬怒り禁ずる能はず爲に屢々將軍足利義勝の母勝智藤夫人に就きて之を請ひ終に房嗣をして其の職を辭せしめ自ら之に代る享徳二年兼冬職を解く詔して三宮に准し食邑三千戸隨身兵仗及年官年爵を賜ふ長祿二年之を辭す應仁元年復た關白に補せらるる二年八月亂細川勝元を避けて九條に寓居す其の戰鬪の盛なるに及び九條を去て南都に到り僧房に寓居して時の靜寧に至るを待つ兼冬初め聯歌を編して其基薨波集に續ぎ以て勅撰に擬せんと欲し二十卷を纂輯し名けて新玉集と曰ふ未だ奏覽を経ずして兵革に遇

イチデウ カチフユ

イチデウ フユヨシ

藤原氏、權大納言經基にして嗣なし經嗣其の後を嗣く經嗣初め從五位下に叙し元服を加へて禁色を聽され左大臣從一位に累遷し關白に補せられ後三宮に准す應仁二十五年十一月薨す時に歳六十一諡して成恩寺と號す經嗣和漢の學に富み頗る世の尊崇を受く七子あり經輔、兼良、祐嚴、良什、真濟、義玄、一慶と曰ふ兼良嗣ぎ餘皆曾と爲る(野史)

イチデウ テムワウ 一條天皇は第六十七代の帝なり名は懷仁、圓融帝の太子、母は東三條院詮子と曰ふ位に在ること二十五年改元するもの六、病を以て太子居貞に譲り一條院に崩す壽三十二火葬して骨を圓城寺に葬る(大日本史)

イチデウ サダイジム 一條左大臣「ミナモトアサノア」  
イチデウ ダイジヤウダイシム 一條太政大臣「フヂハラサチイヘ」  
イチデウ ダイジヤウダイジム 一條太政大臣「フヂハラキムツチ」  
イチデウ ノリフサ 一條教房は太政大臣兼良の長子なり姓藤原氏、左大臣に累進し長祿二年關白と爲る尋で從一位に陞る後左大臣を辭す寛正四年關白を辭して許されず一座宣大外記中原藤經奏して前左大臣實量の次に列せしむ後父兼良奏執して實量の座に進めしむ應仁二年九月教房亂を細川兼良土佐に避けて足利家譜に兵庫 文明十二年十月土佐畑に於て薨す時に歳五十八、諡して妙華寺と號す一子あり政房、房宗と云ふ(野史)

イチデウ カチフユ

イチデウ フユヨシ

イチデウ フサイヘ 一條房家は左大臣教房の第二子なり姓藤原氏、元明元年父に從て亂細川勝元を兵庫に避け遂ひに土佐に徙る是時に當りて守護細川氏漸く衰へて國郡亦た靖からず房家遷りて中村の故壘に居り衆推して之を御所と稱

イチデウ フサモト 一條房基は正二位權大納言房家の第一子なり姓藤原氏、父の後を嗣ぎ土佐の國司たり永正七年十二月從五位上に叙し侍從に任せられ權中納言、左近衛大將正二位に累進す天文十年を以て薨す時に歳四十四、諡して圓明院と號す子あり房基と曰ふ(野史)

イチデウ フユヨシ 一條冬良は太政大臣兼良の第二子也姓藤原氏、父の後を繼ぎ叙爵せられて太政大臣從一位關白